
魔法人形フォーマ！ ～ 4 番目の人形劇 ～

ossann

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法人形フォーま！ ～4番目の人形劇～

【Nコード】

N9001P

【作者名】

Ossann

【あらすじ】

至って普通、どう見ても普通？なヲタクがいつの間にかネギま！の世界へ。

しかもあるキャラに憑依してしまった。

彼はそのチートボディを使って何をするのか!？

この話は、アンチ要素はあまりないと思ってください。といいますが、基本原作キャラには普通に接します、人としてどうかと思われるキャラ以外のアンチは皆無だと思ってください。ネギが大がつく

ほど嫌いな人は、見るべきではありません。
ついでに原作とは乖離する部分もあります。
ではどうぞ。

ネタバレ有り、単行本しか読んでない方気を付けててください
題名変更しました。 わかる人はわかるはず。(読めばわかる)

プロローグ（前書き）

Diesの原作を消してしまったので、新しいネタをいくつか
放り込みます。どうぞ見ていってください。
前の作品を期待していた方すみませんでした。

プロローグ

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

「あり？」

素っ頓狂な声をあげ俺は起きた。なぜならベットで寝ていたからだ、ん？驚くことではない？

・コノヤロー！！俺はホテルで泊まった時位しかベットで寝たこととはないんだよ、

自分の部屋が狭いんだよ！！文句あつか！！

「というか、ここどこやねん？」

自分がいるのは至って普通の部屋、テレビ等の電子機器はないが、本などはあるみたいだ、

まあ壁や床の材質が石なのはビックリだが。

「むっ、ひとまずおき・・・、ん!？」

今確認できたのは2つ、見える景色が今までと違うこと・・・なに？

知らない部屋にいるのだから当たり前？

んなこたあわかつとるわい！！見える景色が低いんだよ！！背が縮んだみたいに、

それと声だ、何とも素敵な保〇さんボイス、しかもキ〇さんっぽいソプラノ(?)、
つていろいろな意味で怖いわ!!!...嬉しいけど。

「いやいや、ひとまず昨日起こったことを思い出そう、いろいろあつて、昨日の夜は大学卒業して、
今日高校時代の友達とバカなことしようって約束して準備して寝て、ここにいるつと」

ん、余計にわからんorz
いや、まだだ!!!

「名前は、秋月 未来、女っぽい名前つて言つたやつは地獄行、ウルトラマンやつつていったやつとは意気投合したな〜、年齢26歳〃彼女いない歴、
まあその分男友達とバカやれたからよかったけどな、んで.....
.....ん?なんだ、この知識?」

自分に関すること意外に、雑学に関して思い出していたら湧いた知識、その名も『魔法』!!!
.....イヤイヤいやいや、まだドーターですけど、not三十路でつせ、俺!!!

「いやいや、なにこれ? あれ本物? 呪文、始動キー、魔法の射手.....」

OK、OK落ち着け俺、そんなことはあつてはならない、そうだろ、窓の外が一面空しか見えないなんて、
始動キーなんてものがあるなんて.....オオウ、考えれば考えるほどドツボにはまっていく。

「嘘~~~~~!!!!!!」

ガチャ

「なに!! なぜ調整前のアーウェルンクスシリーズが動いているんだ!？」

………やっべー(汗)

一話 仕方ない、楽しんでますか（前書き）

せいやー――

一話 仕方ない、楽しみますか

どうもこんにちわ未来です、只今黒フードのデュナミスさんにいるいろ、解説してもらっているところですよ。

「なるほど、この体は、デュナミスさんが作った、アーウェルンクスシリーズの4号機で

デュナミスさんは強い悪魔で『完全なる世界』の残党で、いろいろ準備をしている

というわけですね」

一応原作知識あるから知ってたけど、ばれないようにしなきゃね。漫画32巻分の穴抜け知識だけどね。

「そういうわけだ、にしても元の人格・・・いや魂か？まああやふやなものはこの際おいておくとして、

一般人だというのに順応が早いな」

「ヲタクはそういうの好物ですから、けど死亡フラグのにおいはプンプンしてますけどね

「・・・よく分からんがそういうことにしておこう、さて、お前の処遇だが・・・」

やべ、呑気に話してけど結構やばい状況じゃないか！！俺ピーンチー！！このまま消されてもおかしくなかったじゃないか。

「お前の好きに生きてみるがいい」

はい？ 好きにしる？ いいのかそれで？ 裏切るかもしれんのだぞ？

「何、少し興味がわいただけさ、人形に人間の魂が宿る、ありえないことが起こった、面白いじゃないか、人間とも人形ともいえない存在がどこへ進むのか楽しみにしよう、我らと一緒に来る気はないのだろうか？」

「……なんか、完全に俺が裏切ること期待してないか？この悪魔、いいのかそれで？」

「問題ないさ、さすがにこの場所など、機密事項は記憶から消させてもらうがな」

「大丈夫なんですか、記憶とか操作して？」

「私がつつたのだ、後から手を加えることなど造作もない、お前にどんな影響が出るかはわからんがな」

ニヒルに笑ってくれやがって、この悪魔、仮面の下イケメンでしたオチが見えるぜ。

「さて、記憶操作は後にするとして、何か質問はあるか？」

意外と優しい、何やねんほんと。

「質問というより、頼みごとがあるんですけど」

「ほう、なんだ言ってみろ」

「自分の身を守る術を教えてください、悪の親玉と同じ顔って時点でOUIですよ」

「それもそうだな、では付いて来い」

~~~~~移動中~~~~~

なんか、広場みたいなとこに出ましたが、何をするのでしょうか？

「さて、貴様には最低限の身を守る術を教えよう、その辺の龍なら楽にひねれるぐらいのな」

おお、それはすごい・・・のか？ 龍と聞くと強そうなイメージはあるのだが、

そこんとこ、どうなのでしょう？ てかそう簡単に強くなるのですかねえ？

「なに、貴様の体は私が作ったのだぞ、全力を出せば私を超えるぐらいの能力は持っている、

それに知識も頭の中に叩き込んであるあとは使い方次第だ」

おお！！ 忘れてた、この体はあの、フェイト・アーウェルンクスと同じチートボディだった、確かに強いに決まってる。

「使い方というのは、実戦で学ぶものだ・・・フン！！」

・・・脱いだーーーーー！ 確か！！ じゃなくて、やべえ、

鋼の肉体といっても過言じゃねえぞ、

「こりゃ・・・じゃなくて、

「なぜ、脱ぐ!!!」

「着替えるためだ!!!」

・・・真面目に返されたorz

「大幹部戦闘形態!!! では行くぞ」

え、いつのまに?てか、何じゃそりゃー!!! スタンドかよ!!!  
腕でか!!!

て、やばいパンチきたー!!! こういう時は・・・これだ

「障壁!!!」

又グお!!! 衝撃が尋常じゃねえぞ、畜生!!!

「ほう、多少手加減はしたが今のを受け止めるとはな、センスはあるようだ」

「障壁はってなかったら死んでたわ畜生!!!」

「そこまで軽口が叩けたら充分だろ、次は魔力による身体強化を試みる」

身体強化つと・・・なるほど、こつや・・・って目の前に拳があ!!!  
!!!!!!

「ふん、ぬおあ!!!」

間一髪、ぎりぎりだったああ。あ、鼻かすって血が出た。

「ふむ、これもちゃんとできてるな」

ひでえよこの人、いや悪魔かあ。

「この調子なら瞬動術もちゃんと使えるだろうから、次からは容赦なくいくぞ」

「え、ちょ、まって・・・ぎゃーーーーー」

この後二時間以上にわたるリアル鬼ごっこはとても怖かったと言っておきます。

反撃しても、「効かん!!」ってなんやねん。

~~~~~  
~~~~~

「防御と逃げることに關しては天才的だな、お前」

ピクピク

「ふむ、さすがにやりすぎたか、しかたない部屋まで運んでおこつ」

ああ、なんだか意識が薄れてきた・・・畜生この悪魔め〜

「デユナミスよ、何じゃそいつは？」

これが、意識を断つ前に聞いた最後の言葉だった。

一話 仕方ない、楽しんでますか（後書き）

ここまで、次は設定でも。

二話 一応チートボディのようだ(前書き)

書き直してみた・・・、マガジンスゲーなオイ!!!



## 二話 一応チートボディのようだ

「おおっ

最悪の目覚めである、体中が筋肉痛、頭も痛い、何やねんチートボディじゃないのか？

まあ、素体は人間だし、俺という魂？も入っているせいかもしれんが。

「あゝ、仕方ないデユナミスさん探しに行くか」

ひとまず、歩き回ることに・・・

~~~~~人形移動中~~~~~

「いねえ・・・」

ひとまず昨日案内されたところは確認したのだが、どこにもいない、自室にでもこもっているのか？

「まあ、しゃーない、自主練でもしますかね」

昨日のリアル鬼ごっこの途中で見つけた、空が見える広場へ移動することに、魔法も使ってみたいので
ちようどいい場所である。

~~~~~またまた人形移動中~~~~~

戦いの歌で身体能力を上げると、体の痛みが少し和らいだ、うむ魔

法バンザイである。

「さてさて、まずは昨日の反復練習として、魔力で身体強化、瞬動術・・・etc、やることが多いけど

仕方ないか」

目印つけてー、瞬動瞬動つと・・・うむ、行き過ぎたか、目印より2mも先に来てしまったか、次つと、えくと、上にとんでからの虚空瞬動！！・・・ぶべら！

！ 壁に激突した・・・

次々、たしか浮遊術つと・・・靴を媒介にしてつと、・・・おお！ 飛んでますね〜こりゃ（成功）よし、次・・・

・・・  
・・・  
・・・

ん、一通り終わったから、空手の型を〜と、拳法じゃないのか？ですか、まあ知識にはありますけど  
憑依前に習っていたからやっぱ使いたいものなのです、わがままみたいなものです、はい。

「ふう、ストレッチをして終了と、うむさすがチートボディ結構修行したが軽く汗をかく程度

とは、デユナミス印はすごいですね」

「ほう、そうかそれは嬉しいことだな」

「おや〜〜！〜！」

後ろからいきなり黒フードが湧いてきた!!

「そこまで驚くか？」

「後ろからいきなり声をかけられたら誰でもビックリするわ!!」

「それはすまなかった、・・・鍛錬でもしてたのか？」

「そうですね？ 何か問題でも？」

「本当なら、その体は鍛錬など必要ないのだが・・・、やはり貴様という魂のせいだろうな」

なんてチート、修行しなくていい体とかずる以外の何物でもないです  
ね、まあ原作でもフェイトが

修行なんて必要ないと言ってた気がするが、マジだったか。

「さて、今日は魔法をお前に教えてやる、まあ、呪文はすべて頭の中  
だろうから、

魔力の効率的な運用だけだな」

「おねがいします」

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「ヴィシユ・タル　リ・シユタル・ヴァンゲイト　契約により我に従え　炎の精霊　集い来りて  
敵を穿て　アベス・イグニラエラエ　紅蓮蜂！！！」

ズン！！！！！！！！！！

くはくは、魔力もあんま使わないし、一発一発が小さいからこりゃ凶悪な呪文だね、  
威力も申し分ないな。

「ふむ、詠唱も早い、威力も十分、魔法に関しては問題ないな」

おお、デユナミスのお墨付きだ、これにて魔法の修行はお終いか？

「そうだな、後は自分でなんとかしてみせろ」

「ふう、ところで、この体って炎属性以外の魔法って絶対使えないのか？」

「うむ、そうっいうふうに作ったからな」

「でも転移魔法は水属性っぽいですけど？」

「それは一番初めのアーウェルンクスの名残だ、ほかのアーウェルンクスシリーズも

似たようなものだ我慢して炎属性に特化するしかないな、といったも地・炎・風・氷といった

主な精霊の中で炎の精霊しか呼びかけに答えないだけだから・・・

「基本魔法や治癒魔法は使えると？」

「その通りだ、その手の魔法も頭に入っているはずだが？」

「……あ、ありましたわ」

「うむ、ならこれで魔法の訓練は終わりだ、明日から魔法も使った  
実戦形式の修行をするぞ」

「了解です」

「～翌日～」

「つかぬことをお聞きしますが、この体って、人間の3大欲求って  
存在するんですか？」

「……いきなりどうした」

「只今デュナミスさんと白フードさんと一緒に昼ごはんを食べていた  
ところだが、」

「昨日、一昨日と何も食べてなかったのに腹が減らず今になって少し  
腹が減った」

「気がしたの聞いてみたのだが……」

「なんじゃデュナミス、人形にそんな機能までつけたのか？」

この白フードさんはこの宮殿の主さんというらしい、それ以外は全く話してくれない不思議な方だ、

「そんな機能はつけた覚えはない、が肉体が魂に引っ張られたのだらう、よく言われる

『魂は肉体に引っ張られる』の逆といったところか」

「なるほどです」

こんな感じで、ときたま飯を作らされたり、デュナミスさんと模擬戦をしたり、主にさんに吹き飛ばされたり、

ほのぼの(?)した生活を1年ほど送りましたとさ……

二話 一応チートボディのようだ（後書き）

一応呪文は、原作で・・・の部分は勝手に補って書きますので  
ご了承を。

ひとまず白フードとの出会いですが、彼が創造主なのかどうか  
分からなかったので

4番「えつと、どなたでしょうか？」

??「わしか？ ここの主じゃが？」

4番「お名前とかは？」

??「ネタバレ禁止じゃ」

4番「メタ発言やめて！！」

こんな感じで会話終了しました。

三話 いい日旅立ち(前書き)

短めですすみません



### 三話 いい日旅立ち

あれから一年、長かった……

最初、二か月間は戦い慣れていなかったから手やら足やら斬り飛ばされました、

文字通り斬り飛ばされました、おかげで刃物突き付けられたら、あまりの恐怖で

弾き飛ばすことが条件反射になってしまいました。 刃物怖い刃物怖い……、

あ、包丁は平気ですよ。

それからあとは、戦いというものに慣れたのか体がよく動くようになりまして、体術も通用してましたし  
嬉しいのやら、悲しいのやらわからんとです。

最後の一か月では、もう殺し合い一歩手前まで来てしまい、こっちも『殺したるわ』位の

勢いだつたせいか、眼つきが完全に悪くなっていました、ストレスも溜まつていたせいですね、

鏡を見た瞬間、自分の顔に恐怖したのはいい思い出です（涙）

そして今日、私はこの浮遊城ラピユ・ゲフンゲフン、墓守人の宮殿から旅立つことになったのだ！！  
なんでも……

「今の貴様は、テルティウム3番目と同じレベルまで達した、そしてお前との約束も

果たされた、どこえでも行くがよい」byデュナミス

とのこと、なので只今荷造り中です、持っていくもの？サバイバルグッズです（キリッ）

スミマセン、調子のりました、それと一か月は何とかなるであろうお金である、

なんと、デュナミスさんが用意してくれたのです！！ 悪魔つても好きなのか？

それとも赤松ワールド補正？ とりあえず魔法世界でお金を稼いでから、旧世界で観光でもしようかと思つてます。

え？ 原作キャラはどうするかだつて？ まあ、今は原作より約8、9年前つばいからですな、

あれですよ、ナギが行方不明になったあの事件から少し経ったくらいです、

そんなときに魔法学園サイドのキャラと会ったらどうなるか・・・、ガタガタガタガタ

それに、主要キャラはみんなガキですよ、会う必要を感じません。犯罪者になりたくないだけです。

ひつひとまず、フェイトがいま現在進行形で戦災孤児たちを助けているらしい（デュナミスさん情報）、

その手伝いにも行こうかな？ どうしようかな？ といったところだ。

「行くのか？」

「あ、デュナミスさんお世話になりました、次に会うときは敵かもしれないませんが」

「別にかまわんよ、それにお前のおかげで面白いものが作れそうだ」

「なんですか、新しいアーウェルンクスでも作るんですか？」

「さあな、まあその時はお前で出来のよさを確かめさせてもらうがな」

うむ、俺のライバルフラグですなわかります。

「さて、旅立つ前にお前の記憶をいじらせてもらうぞ、そして近く  
の大陸の森の中にでも

転移させてもらう」

「ここの場所をしられたくないからですか？」

「その通りだ、まあお前ならそうやすやすと喋るとは思えんが一応  
はな、それと機密事項もだ

このあたりの情報がばれると、死んだふりをしてまで生き残り準備  
をしてきたことが無に変えるからな」

死んだふり……、あれなんか目から汗が。

「……ズツ、『完全なる世界』のこと、魔法世界を無に帰すこ  
とに関しては？」

「それに関しては消すつもりはない、一応お前は我々を裏切るのだ  
からな」

いいのかね、それで？

「俺があんたらのこと、ばらさない保証はないんだぜ」

「ほう、お前は我々のことをばらすつもりなのか？」

「・・・あー、負け負け、この悪魔には、簡単には勝てないや、

「するわけないですよ、命の恩人ですから」

「ククク、そうかでは記憶の調整するから、しばし眠ってもら・・・」

魔法を発動させるのか、デユナミスの手が光ってる、っておおい！！

「ちよい待ち！！」

いきなりかよ、全く。

「なんだ？」

「最後に、2つ言いたいことがあってな」

「・・・」

「まず一つ、今日から俺は秋月未来の名前を捨てて、フラム・アー  
ウェルンクスと名乗る」

「・・・爆弾いや、爆炎から取ったか？」

「正解、アグニとかスルトとか考えたけど、名前もファミリーネー  
ムも神様だとちよっと

恥ずかしくてね」

「中二病という奴か」

・・・いらんこと教えてしまった気がする。

「ん〜、まあそういうことで、んで2つ・・・一年間ありがとう  
ございました」

この時の俺の体は直角だったと自負している。最後はきれいにまとめたかったしね。

「フッフ、そうか感謝するがいい、ではさらばだ秋月未来、いや、  
フラム・アーウェルンクスよ」

その言葉を聞いた直後俺の意識は深く沈んでいった。

~~~~~とある森の中~~~~~

「しるさいな〜、ってどーだにっ」

三話 いい日旅立ち（後書き）

修行編クリアー、さてどうしたものか、

このままフェイトに合流するか、

それともアリアドーンにお世話になるか（フェイトつながり）。

それともぶらりと旅でもするか

どれがいいでしょ？

4話 ビバ！！スローライフ・・・（前書き）

特別進展はないです、少し女の子の視点というものを練習したくて書いてみました。

4話 ビバ！！スローライフ・・・

「料理完成、3番テーブルに持ってって！！」

「はい」

「オーダー入りました！！」

「了解！！」

「きゃー！！ 喧嘩はやめてください！！」

「ゴオウラ！！ 出入り禁止にするぞ、その獣人ども！！」

「すみません」

どうも、フラムです只今飛ばされた森の近くの村、ユクレス村で働いてます、とばされてひと月、まさか、コックになるとは思いませんでしたけどね、いきなり苦悩する毎日を送りましたよ。

本当ならまだ皿洗い兼ウェイターだったんだけどね・・・、クレアおばさん・・・、働いてる店のコックさんなんだけど、いきなり過労で倒れちゃったんだよね、

年には勝てないってやつですよ、んでそれなりに料理の作れる俺が代わりにコックを
することに。時間との闘いが始まりました、おばさんの料理を楽しむにしている

人たちのためにも何とかせねば！！　と思っただけど、ところがどっこい時間がないorz
だがしかし、そこはご都合主義発動！！　実は荷物の中にダイオラマ魔法球がありまして・・・
実際は修行中に買い出しに行った町で安く買ったものを、デュナミスさんに頼んで
改造したもののなんだけどね、一時間を一日に設定し修行を積んだのさ！！

では、働きはじめるまでのなれ初めをと・・・

・
・
・
・
・
・
・

～～～転送された森の中～～～

???? side

「今日も大量だ」

さすが、おばあちゃんが教えてくれた場所、木の実もキノコ大量に採れました、
さて、最後に湖の水を採りに行こう・・・。

「あれ？　誰かいるみたい」

湖のそばで男の子が眠っているみたい、でもこんなところで寝てたら風邪を引いちゃうよ。

「あの、起きてくださいーい」

起きない……、

「起きてくださいーい、風邪引いちゃいますよ」

「むう……」

あ！ 起きました。

「うるさいな、ってどこだ……」

うわー！ 眼が怖いー！

「あっあっ、あの、えと……」

「ん？」

えと、なんて話しかけたらいいんだろ……。あ、なんだか落ち込んじゃってる、どうしよう。

「えつとえつと……。どうしてこんなところで寝てたんですか!？」

はう！ 何聞いているの、私……!!

「ん、知り合いに魔法で眠らされて、とばされた、ってところかな
ちゃんと話してくれました、見た目は怖いけど、いい人なのかな？」

「えと・・・とばされた？」

「ああ、転移魔法つてやつさ、だからとばされたってわけ、おしゃべりついでに聞きたいんだけど

ここはどこかわかるかい？」

「えっと、シルチス亜大陸のパーティアのユクレス村近くの森ですね」

「そうか、シルチスカ・・・」

あ、考え込んだじゃった、悪い人じゃなさそうだし・・・そうだ！！

「あの！ お腹すいてません？」

「ん？ そういえば少し・・・」

「なら、家に来ませんか？ 小さいけど料理屋なので・・・」

「そうなのか・・・、ならお邪魔させてもらっつよ」

やった、断られなかった、これでお客さん一人Getだ！！

「じゃあ、付いてきてください、お兄さん」

「・・・フラム」

「へ？」

「僕の名前だよ、君は？」

「アイリスです、じゃあ一緒に行きましょう、フラムさん」

アイリス side END

フラム side

「起き……い、風邪……ますよ」

ん？誰だ安眠妨害だぞ、ったく

「うるさいな、ってどこだここ？」

どう見ても森の中だなこりゃ、デユナミスさんまじで森の中に転送したのか……

「あつあつ、あの、えと……」

ん？なんかしどろもどろになってる小動物みたいな丸いケモノ耳少女が……、あつ獣人か、

……てか怖がつてるのか？……まあ、眼つき悪いから仕方ないか。

「えつとえつと……、どうしてこんなところで寝てたんですか？」

まあ、こんなところで寝てたらそりゃ気になるわな。

「ん〜、知り合いに魔法で眠らされて、とばされた、ってところかな」

「とばされた？」

「ああ、転移魔法つてやつさ、だからとばされたってわけ、おしゃべりついでに聞きたいんだけど

ここはどこかわかるかい？」

「えっと、シルチス亜大陸のパーティアのユクレス村近くの森ですね」

「そうか、シルチスか・・・」

「・・・ん〜これからどうすっかな、金はあるけどももう少し増やしたいし・・・」

「あの！ お腹すいてません？」

「ん？ そういえば少し・・・」

「なら、家に来ませんか？ 小さいけど料理屋なので・・・」

ふむ、料理屋ね・・・、古今東西、情報を集めるのも、仲間を探すのも料理屋は適してるはず、

・・・なんか違う気もするが、ここはお世話になるか。

「そうなのか・・・、ならお邪魔させてもらおうよ」

「じゃあ、付いてきてください、お兄さん」

お兄さん……、こんなかわいい娘に兄といわれるとは、素晴らしい！！

じゃなくって、イカンイカン、平常心平常心。

「……フラム」

「へ？」

「僕の名前だよ、君は？」

「アイリスです、じゃあ一緒に行きましょう、フラムさん」

うむ、ナイスな笑顔だ！　って、いかんいかんまた変なことを考えていた、煩惱退散っと、

さて記憶の方だけど……うむデュナミスさんが言ってた通り、記憶が穴だらけになってるな、

ついでに原作知識の方にも影響が出ているなこりゃ、学園祭編より後が穴抜けになってる。

まあ、問題ないだろ。ネギが闇の魔法使えるようになった程度なら覚えてるし。

フェイトの従者のことも覚えている。うむ、モーマントイ。

「着いたよ、フラムさん」

おっと、少し考え事が過ぎたようだ、反省反省と……。

「おばーちゃん、材料集め終わったよ」

「おお、おかえり・・・、おや？ その人はどなたかの？」

「お客さんだよ！！ 湖の近くで寝ているのを見つけたんだ」

「そうかい、お客さんなら大歓迎さ、適当に座っとくれ」

「あ、はい・・・、えとメニューは？」

「その壁をみとくれ」

おお、壁に掛けられている板にメニューが、何かお店の雰囲気に合わせてるな。

「ん〜、どれもおいしそうだね・・・おすすめってありますか？」

「えっとね、おばあちゃんのシチューは全部、とってもおいしいんだよー！！」

ほうほう、ならばそれと・・・、うむ、パンでもいただくか。

「じゃあ、ビーフシチューとサラダとパンで」

「はいはい」

「おー、健康的だね」

「そう？」

「うん、私の知り合いのフラムさん位の男の子って野菜が嫌いな子

多いもん」

「・・・それが普通だと思うよ」

俺は転生者ですから、すでに前世と今、両方あわせてだけでも成人しましたからね。

見た目は九歳児中身は二十歳、違和感バリバリだね。

「はい、できたよ」

「おお、いい匂いです、ではいただきます」

~~~~~

とまあ、この後なんやかんやで料理屋で働くことになったんですけどね、

へ？なんやかんやが大切？・・・まあ些細なことです、あの味を盗みたかった！！！！

それだけです、飯食った後土下座して頼み込んだじゃいましたよ、ここで働かせてくださいって、

まあ、デュナミスさん達のために料理作っていたから料理人魂が根付いちゃったのでしょうか。

~~~~~

~~~~~なんやかんやで店仕舞い後~~~~~



「回想終了!!」

「誰もいないところに話しかけてどうしたの？」

「言わなきゃいけないって電波を受信しまして・・・」

「・・・・・・・・・・」

「ゴメンナサイ、白い目で見ないで」

俺はMじゃないから、そんな目でみないで!!

「まあフラムが変なことを言わない方が珍しいけどね」

うむ、俺のせいで一人の小さい女の子が毒吐きになってしまったとは、反省反省。

いくらおばさんが倒れて落ち込んでいるアイリスを何とかしようと思っ、クールキャラ

ぶっ壊してまでアホなことをし続けたら、こうなりますわな。

「うむ、わかってるではないか、ははは」

「褒めてないわよ、全く」

「うむ、さて本題はこれからなんだが、明日と明後日のお店の定休日なんだがパルティアまで

食材を仕入れてくるからクリアおばさんの看病頼んだよ」

「え……」

あゝ、休みの話をしたら明るくなったのに、買い出しに行くって言ったら元気なくなっちゃったか、

まあ、今まで店のことばかり考えてたからな、休みの日も魔法球の中で、面白食材開発したり、料理の練習、後は体がなまらないように本格的な修行もしてたからな……、なんか思考が子持ちのオッサンっぽくなってきたな〜。

「ごめんな、次の休みはゆっくり休むつもりだから、その時は一緒にいてやるよ」

「ほんと！」

うむ、かわいい女の子は笑顔が一番ですね、この後おばさんを交えて三人で軽く談笑して寝ることに……。

~~~~~

「幸せだな……、まあおばさんが元気になったら少し旅に出てみるか、ここを離れるのは

気が引けるけど、魔法世界も地球も見てみたいしね、ふあ〜、眠い、早く寝るか」

明日もいい日になりますように。

4話 ビバ！！スローライフ・・・（後書き）

少しだけ長くなりましたが、そろそろフェイト御一行と会えると思
った方

すみません、会うのはもう少しだけ先になります。

正直、フェイト御一行とのイベントのとき

焰に関して、火繋がりで・・・というのを考えさせられています。

あまりにも絡ませたら、ネギsideへ行けなくなるので
どうしようか悩んでいます。

- 1 ・何か魔法具をあげる
- 2 ・軽く修行を見てあげる
- 3 ・特別何もなし
- 4 ・その他

候補はこんなもんですよね。

意見があればどうぞ。

誤字脱字、気付いたこと、こんな設定、こんな話あたらしいな
などの感想お待ちしています。

設定 ちよつちプラスしました(前書き)

いらないうことを長々と書いてしまいすみません。

設定 ちよつちプラスしました

真名 秋月 あきつき 未来 みらい

名前 フラム・アーウェルンクス（CV 総一郎） ちよつと
フェイトを意識しました。

年齢 前世26才

身長 9歳児ver フェイトと同じ（魔法世界編でのネギとほぼ
同じ）

ここからは勝手な判断、魔法世界編で、アスナの隣に立ったネギの身長は、アスナの肩ぐらゐまでの高さだった、人の頭の大きさを、20cmちよいプラス位の大きさと推定（作者が自分の頭部を測量）なので約140cm位と推定。

漫画の始めの方で、エヴァとそれほど変わらない身長の描写があり（座高でしたが）

その時は130cm位と推定。

ここで、ネギは8か月ほどエヴァの別荘で修行をし、魔法世界で数か月波乱万丈生活をおくった、

（魔法先生方の話によると、新学期の準備が・・・と言っている方がいたので8月の終りの時、

ネギ御一行は8月の始めに出発したとすると20日位は経っている、魔法世界は地球の約5倍

の時間の進み方をしているから100日は経過）

つまり1年以上適度な食事、過酷な運動、微妙な睡眠をとっているので、10cmぐらゐ伸びても問題なし

より結果、ネギ＝フェイト（フラム）の身長は143cm前後ということに

大人Ver ラカンより小さい位だから、180cmは余裕そう。

さらに、魔法で身長を変えることも造作ない。

魔法 基本魔法？（無属性魔法？）と炎属性の魔法しか使えない（けれど、水を使ったゲートは使える） 転移魔法は基本魔法

回復、防御魔法に関してはフェイトよりうまい、回復に至っては圧倒的だろう。

デュナミスに凹られてたから
他は同じぐらい。

性格 基本明るい、ヲタク臭がするのはご愛嬌。目上の人へは敬語が当たり前。

特技 家事は一般人並みにできる（前世で一人暮らしスキルを磨くのが趣味っぽくなったから）

料理は、ものっそい上手くなった。

容姿 フェイトとつり二つ、髪の毛が炎のように後頭部の方へ逆立っているのが特徴。

服装 フェイトと同じ服だが、軽く着崩している（学ランでいうと第二ボタンまであけている状態）

とある毛皮で出来たマントを着ている。

その他 チートボディに人の魂が宿ったので、人形でありながら、
三大欲求が性欲以外ある。

子作りができるかどうかは、デユナミスさんに期待!!!
腹が減る速度が遅く、満腹になれば、3日間は何も食べ
なくたって平気。

人口的な体なので、病気?何それ、おいしいの? 状態
です。

????? 後に出します。

名前 アイリス

年齢 8歳

容姿 肩甲骨までの長さの、ふわふわした感じ髪をもった女の子、
上の下位のかわいさ

耳としっぽは某ネズミ王国のリーダーと同じ形

特徴 フラムと話すときだけ軽い毒舌家に(フラムのツッコミ役と
も言っ)

名前 クレアおばさん

容姿 優しそうな雰囲気をした、ドアノブカバーの形をした帽子をかぶっているおばさん

おばさんと呼ばれているが見た目白髪のおばあちゃんである。

フラムの前世の苗字やおばさんの名前とアレの関係、

など微妙なネタを入れたのだがわかるだろうか？ え？簡単すぎる？すみません。

設定 ちよつちプラスしました(後書き)

アンケートっぽいのでできれば協力してください、貴重な意見待っています。

焰に関して、火繋がりで・・・というのを考えさせられています。あまりにも絡ませたら、ネギsideへ行けなくなるのでどうしようか悩んでいます。

- 1 ・何か魔法具をあげる
- 2 ・軽く修行を見てあげる
- 3 ・特別何もなし
- 4 ・その他

が候補です。

5話 ありきたりな話、けど・・・(前書き)

はいどうも、遅くなりました、センター試験がありましたので、はい。

これから本試験もありますので、しばらく休憩します。
自分、勉強あんまない奴なんで、少し頑張らんとやばいんです。

・・・センターの結果？ 察してください・・・

5話 ありきたりな話、けど・・・

袋、よし！！ 材料費 よし！！ 魔法球 よし！！ 小遣い よし！！ 地図 よし！！

気合十分、準備完了！！ 魔法球の使い方は後で教えよう！！

「おばあちゃんの看病は任せといてね」

「ああ、任せた、それじゃあ、明日の夕暮れ時位には帰れるようにするよ」

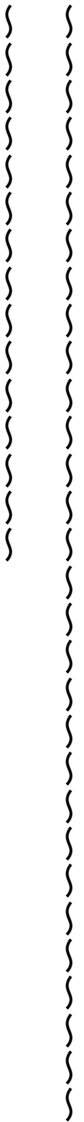
「行ってらっしゃい、さっさと帰ってきてよね」

「了解了解、それじゃあ行ってくるわ」

早朝、買い出しに出発である、まだ日が昇っていないのに起きてきて見送ってくれるアイリスは、

本当に優しい娘だと思う、うむうむ。

さて、体力作りの一環として走っていきますか。



太陽が真上に来たぐらいで到着、毎度お世話になっている宿で部屋を確保、さあ、町へ出発！！
掘り出し物がないか散策だい！！ ん？買い出し？それは明日の朝だね、必要なものは事前に予約済み、
新鮮な物を買うために朝に行く、完璧である。

「ひとまず、腹ごしらえ兼情報収集のためにいつもの店に行きますか」

何時も賑わっている食事処へ、初めて来たとき店の中で暴れている奴らをどうにかして欲しそうにしてたので、
暴れているやつらを凹ったら、気に入られましたぜい。それから買い出しに来るたびに、最近何かあったか、
など教えてもらっている、ユクレス村はあまりにも小さい村なので、
外との交流が疎く、情報が、
なかなか入ってこないので重宝しています。

・・・
・・・
・・・

「マスター、調子はどう？」

「どうも、フラム君、おかげ様で今日も繁盛しておりますよ」

この物腰が柔らかかそうな人がマスターさん、へ？ 名前？ 細かいことあ気にスナ。

「そりゃあ、よかった、じゃあ最近変わったことってある？」

「そうですね、この辺りも物騒になりそう、という話を聞きましたね」

「????」

「戦争の残り火つてやつです、いまだに対立している地方の争いに巻き込まれた村も少なくないですからね、

夜いきなり攻め込まれた、なんて話もありますよ、せつかく世界が一つにまとまったというのに、

ほんと嘆かわしいことですよ、戦争で亡くなった人たちが報われませんよ」

「嫌ですなほんとに」

「フラム君が住んでいる村も気を付けておいた方がいいよ、この地域もいつ内戦に巻き込まれるか

わかったもんじゃないからね」

「そうですね、ありがとございます、まあ、俺の目が黒いうちは自分の村に手出しはさせませんよ」

「ははは、頼もしいね」

そんな感じで、後は飯を食べ、たわいもない話をして店を後にした。

~~~~~  
~~~~~

「仕立て屋さんに頼んでおいた服もマントも受け取ったしどうしようかな？」

さてはて、面白い魔法具は見つからず、ぶらぶらする羽目に、こうなったら店ではなく、

露店商か、旅商人の店でも覗くか。

「そついえば、なぜかアイリスが髪をいじり始めてきたからな、お土産代わりに髪留めでも買ってやるうかね？」

善は急げ、いろいろ回るか……

「『都合主義乙』」

「?????」

「あ、すみません何でもありませんから」

いきなり露店で、髪を束ねるのにちょうどよさそうな細いリボンを発見、しかも俺のマントと同じ

材質ので出来ているとは、ちなみに俺のマント、大型の火ネズミの

毛で出来てます。

・・・よく見ると他の商品も、なかなかいいものがそろってる、杖の代わりになるナイフね、
材質がグリフオンの角っぽい、龍の鱗をあしらったマントもあるし、
あ、この革靴、暴れイノシシの皮
使ってるっぽい、・・・結構希少価値のある宝石で出来てないか、
この指輪？

「すごいっすね、ここの商品」

「お！！ 君、若いのにこの品の良さがわかるの？」

「0の数が一つ二つ足りない気がしますが・・・」

「へ、わかってるじゃない、こいつらはねあたしの相棒が材料を
調達して、あたしが

加工して売ってるってわけよ、だから、私は今の値段に0を五つ
ぐらいくっつけた値段

で売りたいわけだけど、そいつがとてつもなくお馬鹿な奴で、自
分の趣味の一環で見つけた

ものだし、別にいらないや、とか言ってそのまま、材料をただ同
然の値段で売ろうとしたのがったのよ」

「すごい人ですね、その人」

「あつはつは、腕つぶししか能がない奴だし、何より他人に優し
ざるからね仕方ないさ、だから

ほんとはしたくなかったんですけど、そいつたらお世辞にも上手
とは言えないけど、使えるレベル

になら、自分で調達した材料を加工できちゃうわけ、しかもこれ

も趣味の一環だから・・・」

「ただ同然で売られる前に、自分も手伝って値段を決める権利を貰ってるわけですね、でもその様子」

だと二人で決めているみたいですね」

「そうなのよ、そんな値段で売れるか！！　　つてうるさくてね、生活費やらなんやらと、言いくるめて

この値段に落ち着いたわけよ、それでも破格だと思うんだけどね」

「苦労してますね」

「ははは、まあね、けど君、気に入ったよ、久しぶりに価値の分かる客が来たんだ、愚痴も聞いてくれたし

ちょっと位ならまけてやらんこともないよ」

「おお、ありがたいです、じゃあまずそのリボンを・・・」

「なんだい、彼女にでもプレゼントするのかい、ませてるね」

「ん〜、どっちかっていうと妹みたいなものですけど、最近さみしい思いさせてばかりでしたからね

罪滅ぼしみたいなものです」

「見た目よりも大人だねあんだ・・・」

・・・苦笑いされてしまった、普通なら紅くなってわたわたするところだからね〜。

忘れてはいないでしょうが、俺、いまだに9歳児の姿のままなんですよね。

「なははは、あとそのオレンジ色の羽の付いた帽子とその赤いマントをお願いします」

見た目、FFの赤魔道士っぽいデザインがなんかカッコイイのである、羽もオレンジだし。

マントはふつうの材質みただけど、逆にいろいろいじくれそうである。

「はいよつと、それじゃあ、軽くまけて、このぐらいだな」

「はいはい、ありがとうございます」

なかなかいい買い物である、へ？なんで帽子とマント？・・・かつこいいからさ、この前に尖っているツバとか、模様とか目を見張るものがありますよ。

「さて、ありがとうございます、またどこかで会えるといいですね」

「ああ、今後ともごひいきにな」

ふいふ、買い物も済んだし、宿に帰ろっかね。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

アイリス side

「大丈夫？ おばあちゃん」

「ふう、すまないねアイリス、本当ならフラムちゃんと一緒に行けたのに、私の看病のせいで・・・」

「ななな、何言ってるのよ、おばあちゃん!!」

「わかりやすい子だね、けどあの子は最良物件じゃろって、じゃが、私の病気が治ったら

また旅に出かけちまうみたいだけどね」

「うん・・・」

そうだった、少し料理を覚えたら、出発するってはじめに言ってたんだよね・・・、

働きながらだったからなかなか教えてもらえる機会がなかったみたいだけど、・・・今思うと、

それもおばあちゃんがフラムを引き留めるためにしたことかもしれないな・・・、

そんな矢先、いきなりおばあちゃんが倒れたから、フラムがここに来てもう半年ぐらいいは経つのかな？

一緒については行けなさそうだし、どうも妹みたいにしから見られてないみたいだし、

片思いのままなのかな？

「いっそのこと、好きだって言っちゃったらどうだい？」

「!!!!!!!!!!!!!!」

あれ!!! 声に出ってた!? でもそれもありなのかな? そうしたらフラムも少しは私を見る目も

変わるかもって、何を考えてるのよ私~~~~、って

「はっ!」

「(ニヤニヤ)」

「もう、からかわないでよ、おばあちゃん」

「ほっほっほっ、。。。ん？ そっいえばさっきから外が騒がしいね？」

「あ! 私見てくる」

うっ、恥ずかしいよ、けど外でなにかあったのかな？  
。。。え？

Side out

フラム side

朝だ~~~~~~~~!!

さて、予約入れてた、お得意のところに行きますかね!!

「ども〜ミケおばちゃん」

「おや、フラムじゃないか久しぶり、頼まれていた野菜そろってる

「よ

「ありがとうございます」

ここで登場するのが特別性魔法球、これ今設定を変えて、直接食糧庫に転送させることができます、さらに魔法球の食糧庫は時間を止めてあるから腐る心配なし!! 苦労したかいがありました。ほい、転送つと。

「ほんとに便利だね〜その道具」

「お金と時間と労力の結晶ですよ」

「そうかい、それじゃあ、毎度あり〜」

次の店へ・・・

ドン!

「きゅあ

「おつとじゅめんよ」

「あ、こちらこそ

さて次の店・・・はて、いまのツインテール、どこかで見た? ような・・・ま、いつか・・・

・  
・  
・  
・  
・

「終了つと、ふいゝ昼前には終わったか、それじゃあマスターの店  
に行ってから帰りましようかね」

（人形移動中）

「おい、聞いたか、また別の村が襲われたらしいぞ」

「な！！ マジか！！」

ん？ 旅の人か？

「このあたりの村らしいけど、徹底的にやられたらしくて全滅らし  
いぞ」

「ちっ、ひでえことするよな、全く」

「……物騒だなほんとに、たく急いで帰るべきかね、とりあえず  
駆け足で……」

・  
・  
・  
・

「で、どの村なんだよ」

「ユクレスらしいぜ」

「マジかよ、あそこの料理屋昏かったのに」

「そんなこと言ってる場合か！　ここもやばいかもしれないんだよ」

「げ、そろそろ出発すべきか・・・」

~~~~~

「マスター、ど「フラム君！」　うわあ！！　なんですか、いきなり！！」

「急いで村に戻るんだ！！」

「へ？」

「っ、すまない、・・・けど落ち着いて聞いてほしい、ユクレス村が内乱に巻き込まれたらしい

んだ、超広範囲魔法の余波でやられたらしい」

・・・何をしてるんだ？　この人は・・・、村が、なんだって？
やられた？　そんなはず・・・

「フラム君！！　しっかりするんだ！！」

「っ！！　はい！　ありがとございました、それじゃあ」

畜生、畜生畜生！！　なにが俺の目が黒いうちは村に手を出させない、だ！！！！　くそおおおおおおおおおお！！！！

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

ーユクレス村ー  
三人称視点

「ウソだろ、こんな嘘だ!!!」

見渡す限り焼野原、家建ってたであろう所は、黒くすすけていないか、炭化した木の柱しか残っていない。

爆風でやられた家屋は見るも無残な形で倒壊していて、家の中にいたなら確実に助からないだろう。

現在進行形で燃えている建物もある。

そして、おびただし数の死体の山、完全な戦場跡である、そしてレストランも同様な有様で、

中にいた人は、もう亡くなっているだろう。

「くそっ……っ！ アイリス！」

そこには、腹に大きな木片が突き刺さっている、息絶え絶えのアイリスがいた。

「アイリス!!! 息は……微かだけどしている!!!」





~~~~~  
~~~~~

「……………」

なんでだろうな、悲しいはずなんだけどな、体が人形のせいなのか？もう気持ちが冷めちまったよ。

てか、こんな短時間で、冷静になれるもんか？ フツウ？

「残念だけど、ここの生き残りは、君だけみたい……、おや？」

「ははは、なんてタイミングだよ……」

こんなタイミングで顔合わせかよ

「君は……」

「フェ、フェイトさんと同じ顔……」

まだ、一人だけしか付いてきている奴がないんだな、テルティウム三番目、いや  
フェイト・アーウェルンクスさんよ、



## 5話 ありきたりな話、けど・・・（後書き）

なんだか、ありきたりな話になってしまいました。

フラムは原作の魔法世界編の内容はあやふやになってますが、完全なる世界のことは、結構覚えてます、といっても、フェイトとその従者のことぐらいですけどね。

ラカンが話してくれた紅き翼の話や、ネギの闇の魔法に関してはすっぱり抜けてますが。

そして、オリ主の特権！！フェイト魔改造計画を発動します！！ネギもするから、パワーバランスは大丈夫ですよ？

他のキャラも魔改造します、さあ、誰でしょう？

注）焔はあまり強くする予定はないです、

6話 むなしい人助け（二重の意味で）（前書き）

結構急いで書いたんで、みょうちくりんな内容になってしまったか  
もしれないです、申し訳ございません。

6話 むなししい人助け（二重の意味で）

我が一方的にやられるだと！！ ありえない、そんなはずは……

こんな人間の、たかが人間の餓鬼に圧倒されるなんて……、創造  
主の使徒たるこの我が、この我が！

がああああああああああああああああああああああああ  
ああああああ！！！！

「って感じで、一方的に凹られて、上半身と下半身を泣き別れにされた夢を見ました」

「怖い夢ですね、ムグムグ」

「いきなりだね全く、まあ君を一方的に攻撃できる生き物がこの世に存在するとは思えないけどね、

ング……、ふう、やっぱり君の入れるコーヒーはおいしいね」

朝食中に夢の話をしてみましたがいまいちな反応でした。

チクセウ……

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

どうもフラムです、アイリスが死に、おばあさんも死に、ユクレス村の皆さんを埋葬して、数日が経ちました、何とか立ち直れました、けれどいまいちテンションが上がリません、はい。

「「ごちそうさまでした」」

「はいはい、お粗末様」

相も変わらず、飯作ってます。

「では、この数日間まともに話すことができなかったので軽く自己紹介を、フラム・アーウェルンクス

です、一応4番目なのでそちらさんの弟のようなものですね」

「えっと、ルーナです、よろしく願います」

「僕の話はデュナミスから聞いてると思うから、自己紹介は省くけど・・・なるほど、

デュナミスの言うとおり、人間臭い人形だね」

「残念ながら、こっちは人間やめてるつもりはないんでね、体は人形でも、自分のことは人間だと

自負してるけど？」

「……僕らは創造主に仕える人形さ、余計な感情なんて必要ないね」

「そんな生き方つまらんだろ？ 自分勝手に楽しく生きようって思っただ方が人生バラ色だぜ？

楽しく生きようぜ兄さんよ」

「……」

「まあ、いきなりは無理だろうけど、考えてくれよ？ 別に人形であり続ける必要はないってな」

「????」

「あ、ルーナ嬢は気にしないでくれ」

ふいー、テンションが低いせいかわそうに説教たれちまったぜ、いつもは説教される側だったのにな、
ってイカンイカン、ネガティブになるのはいかな。

さて、軽く今の状況を説明すると、

村の人たちを埋葬した後、料理屋だった場所の瓦礫を撤去し調理場からまだ使えそうな調理器具、

燃えなかったおばさんのレシピ（形見となってしまったが）を見つけ、

裏にあつた物置（こつちも瓦礫と化してた）からサバイバル道具を引っ張り出し、

フェイト御一行に付いて行くことにしました。

最初、眼つきが悪いせいでルーナ嬢がビビってフェイトの陰に隠れてしまっていたので、

料理作ったり持っていた人形の補修をしたりと家庭的なところを見せたところ、

ようやく面と向かって話してくれるようになりました。

家事スキルがこんなところで役に立つとは思いませんでした。

と、そんなこんなで一応問題もなく兄さんの戦災孤児助けを手伝っています、

今のところ何人が助けたのですが全員アリアドネー行きが決定しました。

フェイトガールズが集結するのはまだまだ先のようです。

ではここで思い出話！！

一つ、兄さんとルーナ嬢はいつの間にか仮契約してました……、俺がルーナ嬢を後押ししたのが

効いたらしく、俺の持ってた簡易仮契約の符を使っただようです。

……ちなみに簡易仮契約の符なんですが、使うと仮契約用の魔法陣が展開される優れもので、

一枚俺の給料の三か月分はします、裏設定だった『魔法具を作ってた』がなければ

大破産でした。

二つ、移動手段はいたって単純！！　兄さんが場所を俺に教え、俺がダッシュ！！

ちなみに、俺が走ってる間二人は魔法球の中で軽く訓練をしたり、まったりしてたそうです。

……俺泣いていいよね？

フェイト談

フラムの魔法球の東の方の森に竜達がいたのは驚いた、しかも温厚な性格をしているみたいだけど、

黒竜を軽く超える戦闘能力を持っているみたいだね、しかもこの環境のせいとか妙な進化もしてるみたいだし。

注)ぶつちゃけ、リアルモンスターハンター状態です。

ルーナ談

フーちゃんの研究室みたいなところに動物さんの毛や、龍の鱗で出来た服や武器があったんだけど、なぜか完成品の中にふりふりな服や、かっこいいんだけど下がスカートな服があつてビックリしました、女装趣味なんでしょうか？

注) 違います、それは自分が考えたフェイトガールズの戦闘服です、原作をイメージして作ったから

スカートになってしまっただけです。調子に乗って高性能メイド服を作ったのは認めますが・・・。

その三……、自分も漫画でフェイトが曆にしていたように、アリアドネーへの入学願書を、戦災孤児に渡そうとしたんだけど……

「(ガタガタぶるぶるガタガタぶるぶる)」

「……えっと、これなんだけど……」

「ひい！ 私を奴隷としてどこかに売るつもりですか!？」

「え？ ちが……」

「違つんですか!?! じゃあばらばらにされて臓器売られちゃうんだ!？」

「まてまて、なぜその話を知っている!?! その辺は旧世界も魔法世

界も同じなのか？

「黙ってっるってことはそうなんだ！！ うえーん！！！！！！」

「ちょちょよ、まって…」

「ひっぐ、えぐ、……わーーーーんーーーーんーーーーん！！！！！！！！！！」

「……………シヨボーン」

「……僕が代わりに話すよ、フラム」

「……………ドウゾ」

「ちょっといいかい？」

「ふえ？」

「……………」

「……………！？……………！！」

アア、カイワガナリタツテイルヨ、スゴイネニイサン……………、メツ
キ、ナノカナ？

ソシナニコワイノダロウカ？ orz

「そのうちいい」とあるよ () () () () () () () ()
デナデ

その優しさがつらいです……………ルーナ嬢。

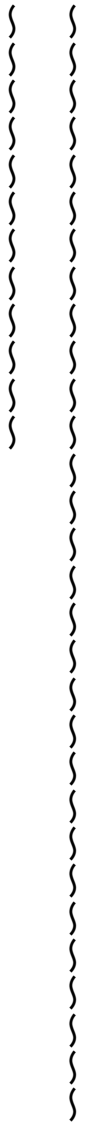
その四、ルーナ嬢が子供っぽいという理由で俺のことをフーちゃん、
兄さんと仮契約をしたので兄さんのことをフェイト様と
呼ぶようになり。

俺が、面白理由でルーナ嬢の偽名を考え（原作通り栞で
すよ？）

俺はデフォでフェイトのことを兄さんと呼ぶようになり
ました。

……………あれ、まともな記憶が少
ないな？

あれ？ おかしいな目から汗が……………。



「キングクリームゾン!!! ってな感じで戻ってきました、パルテ
イアに!!!」

「.....」

「あつ、ちょっと待ってください、おいてかないで〜」

2週間程度の付き合いでここまで俺の扱いになれるとは!!!

.....まあ、2週間もずっと一緒にいればこうなるわな〜。

「はあ、フーちゃんの奇行は今に始まったことではないですが、確
かにいきなり戻ることになりましたけど、

どうしてですか？ フェイトさま」

「いや、ただこっちの方で村が焼けたとデュナミスから連絡があっ
ただけさ」

「軽いな、おい!!! 焼けたってなんだよ!!!」

「.....まあ文字通り焼けてるけどね」

「兄さんが軽口叩けるようになって感動だけど、ひでえなこりゃ」

「.....」

「大丈夫か？ ルーナ嬢」

「……大丈夫」

……なんでこんなに小っちゃい子がこんな目に合わなきゃいけないんだろうな？

「……さて、生き残った人がいないか探そうか」

……正直この村を捜索する気にはなれなかった、この町はよく料理屋の材料を買いに来てた村だったから。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

捜索の結果、マスターさんなど知り合いはどこかへ移り住んだのか、死体で見つかることはなかった。

そしてこの村の生き残りは一人だけということが判明した。

「父……様……、……母様……」

「……なんだか、あまりいい気分になれないね、ほんとに」

「……………？」

「残念だけど、この村で生き残っているのは君だけのようだ、運が悪かつ……………いや、

運なんて言葉で片づけていいことではないね、すまない」

ずいぶんと人間臭くなってきたよな、兄さん。

「僕たちと一緒に来るかい？」

「……………」

「返事は両親を弔った後でかまわないよ、その前にフラム彼女の傷を治してあげて」

「了解だ、さて…………その血、まさか左目からか？」

「（コク）」

「ッ！！ 詳しく見せてもらおうぞ」

……………最悪だ、魔力を通して診てみたが、角膜だけじゃなく水晶体まで傷つけてる、失明の可能性大か、

……………クソッ、家族だけじゃなく視力もってか、ふざけんなよ！！

「治りそうにないのかい？」

「へっ、バカなこと言つなよ兄さん、なんとかするぞ」

無茶かもしれんが、できなくはないってとこか、

「いいか嬢ちゃん、よく聞け、その左目なんだが、傷は治せるが視力がかなり落ちることになる」

「だから、最初は戸惑うかもしれないが、代わりの眼を移植して完全に視力を取り戻せる方法をとりたい」

「……………わかった」

「あと、嬢ちゃんの種族聞いてもいいか？」

「火の妖精と人間のハーフ」

「そうかい、それなら100%成功だ、安心しろ」

「まず、結界を張り無菌状態にする、一応、今までの経験から覚えた医療魔法の一つである。」

「マスク着用、手から炎を出せばそれで自身の消毒完了、そして魔法球から即効性の全身麻酔薬を出してかがせる。」

「ちょっと刺激臭がするけど我慢してな」

「んぐ……………ん……………すう」

「うし、寝た、まず左目切除つと、魔力で固定して魔力のメスで切る。んで代わりの眼はというと、」

「兄さん、ルーナ嬢にはショッキングな映像だから、向こうに連れて行って」

「……………何をするのか大体わかるけど、むちゃくちゃだね、まあ了解したよ」

はい準備完了っと、一気に………自分の左目めがけて指を突き立てる!!!

眼球自体は傷つけないようにして、………摘出完了っと、後ははめて視神経とつなげるだけっと。

はい、完成。

こちらら、体の一部が破損しても再生可能なんで、回復魔法を全力で行使すると、元通りっと。

軽いノリっぽかったですが、こっちは真剣そのもの、さらに俺だからできる裏技です、

良いこのみんなは真似しないように。

「終わったみたいだね」

「おう、んじゃこの子が目覚ましたら両親叩って返事聞きますか」

考察

たぶんだけど、これでこの嬢ちゃんは原作同様に睨みただけで炎を出せるようになったはず。

もしかしたらもともとできたかもしれんが、威力は上がってるはず。なんとたつてアーウエンルクスシリーズの体の一部ですから、しかも火、まあ核から離れたから、

自己再生はできないでしょうが俺の魔力が詰まっていますんでね、もしかしたら

魔法発動体代わりにもなるかもしれん、はっはっはっ。

6話 むなしい人助け（二重の意味で）（後書き）

近々番外編と称してコラボ作品が登場するかもです。
まあ伏線を張るためですが。

テストが残ってますので、遅くなるか、内容が薄くなるか、みよんになる、
かもしれませんご了承ください。

ちなみに、焔のハーフってのは勝手な自己解釈です。

7話 二人目である。(前書き)

今回は3人称視点でお送りします。

人数も増えるでしょうし、誰が喋っているのかわかりやすいですし、戦闘描写も書きやすくなるので、練習がてら書いてみました。

どうでしょう？

7話 二人目である。

フラムが少女を助け一日が経過していた。
ちなみにその少女はフラムが持ち歩いてきた大人二人が横になっても大丈夫ほど大きいテントで寝かせており。

その隣ではルーナがフラムに頼まれて少女の看病をしている、しかも何もすることがないので体全体に魔力を均等に走らせ身体強化の効率化の修行をしている。

「ん……ここは？」

「あ、起きましたか」

「あ、えっと……」

「栞です、一応偽名ですけどフリーちゃんが『悪の秘密結社の一員になるならコードネームが必要だ』って

言ってたのでそう名乗らせていただきます」

「フリーちゃん？ 悪の秘密結社？」

「あ、フリーちゃんというのは昨日あなたの眼を治してくれた方です、悪の秘密結社に関しては

無視してください、フリーちゃんの頭の中はお花畑なので言うてること全部真に受けてると

疲れるだけなので」

「……………（ぽかーん）」

「気にしないでください、それと目の方は大丈夫ですか？」

「……………はい、大丈夫です」

「眼帯しているのに、わかるの？」

あうう、と恥ずかしながら少女が眼帯を外すと、驚いたような声を上げた。

「な、何ですかこれ！！ 何だか変なものが見えます！！」

「変な物？ 治療した本人に聞く必要がありますね、ひとまず眼帯を付け直してから

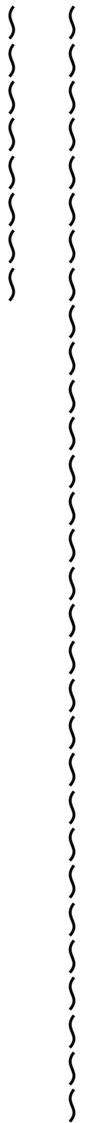
私に付いてきてください」

「はい、って眼帯したのにちゃんと見えますよ！！」

「……………（フーちゃんは一体何をしているのでしょうか、まったく）」

自分の敬愛する主の弟のくせに、やることなすことがおかしい男にあきれながら、

少女をフラムの魔法球の中へ案内するルーナであった。



・・・同時刻・・・

魔法球の中の中央スペース、別名フラムのアトリエの庭で、フェイトはフラムの修行に付き合っており、激しい殴り合いを繰り返していた。

「ふえつくし！！」

「戦闘の最中にくしゃみとは致命的なミスだよ」

「へ？ ぐふう！！」

しかし、激しい攻防を繰り返していた二人だがフラムがくしゃみをした瞬間その攻防のバランスが崩れ、フェイトの拳がフラムの腹をとらえた。

「おお、結構効いた〜」

「戦闘中に敵から目をそらすなんて、自殺行為としか思えないね」

やれやれと嘆息しながらも、フェイトが地面を軽く踏む動作をする
と足元の土が砂となって
フラムに襲い掛かった。

「よつと、さつと」

もともと、攻撃よりも防御と回避が得意なフラムは難なく自分を飲み込まんとする砂を回避していく。

「さすがに避けるのは様になってるけど、これはどうだい？」

すっとフェイトが跳んでいるフラムが足を付けるであろう地点に手をかざすと、フラムが着地した瞬間、足元の地面が砂と化した。

「のわぁ！」

着地した地面がいきなり柔らかくなってバランスをとられるが、すぐに迫ってくる砂塵を回避しようとする。

「って、あり？」

しかし足が砂から抜けなくなっていた、しかもよく砂を見ると手の形をしていてがちりとフラムの足をつかんでいた。

「あ、しまったって、のわーーーーー!!！」

そのまま今まで襲いかかってきた砂が上からフラムを押しつぶした。

「ただの人間がくれば文字通りぺしゃんこになるけど、大丈夫かな？」

何気にエグイ攻撃をしていたフェイトさんであった。だがしかし、砂を溶かしながらフラムが飛び出してきた。

「脱出ーーーーー!!！」

どうやら、砂が覆いかぶさる瞬間に、自分の周りに障壁を張り、高温の炎を体全体から放出したようである、
そしてそのままフェイトへ飛びかかっていった。

「フェイト様ー、フーちゃん、昨日助けた女の子がおきたよー」

激しい攻防が再開されたあと、ルーナ嬢が二人に呼びかけた。

「おう、今いくー」

「だから、目を離さない」

今度はさっきよりも力を込められた上段蹴りがフラムの顔にヒットした。

「ぶるああああー」

奇声をあげながらフラムは錐揉みしながら二人の前の地面に頭から突き刺さった、さながら犬神家である

「きゃー」

こんな光景に慣れていない少女は悲鳴を上げるが、ルーナ嬢はいつも通り冷ややかな目でフラムを見ていた。

「はあ、問題発生ですフーちゃん」

ズボツ、っと効果音が聞こえてきそうな勢いでフラムが自力で穴から飛び出した。

「何かあった？」

「彼女の左目がおかしいそうです」

「……マジで？」

「マジです？」

「まあ、症状を聞かないことには何も始まらないからな、えっと嬢ちゃん名前はなんていうんだ？」

「マリナです」

「じゃあ、マリナ嬢どんな状態なんだ？」

「えっと、眼帯しているのに景色がみえたり、眼帯を外したら変なものが見えたりするんです」

「変な物？」と、フラムが首をかしげるとマリナは慌てて説明した。

「えと、なんだか青白いもやもや？　した感じのものが見えるんです」

フラムは何か考える素振りを見せた後ピンと来たのか、マリナに眼帯を外すように指示し、

マリナの顔の前に人差し指だけ立てた形の手を持っていく。そして人差し指の先を見て、
と言った、すると。

「あ、指先からおんなじ物が出てきてます」

どうやら、フラムの予想通り青白い物体は魔力であった、要するにマリナの目は魔力などの、

普通では見えないものを見ることのできる魔眼になっていたようである。

ちなみに目を強化したフラムでも見えないほどの魔力にもかかわらず見えたのだから魔眼認定は当然である。

さらに、アーウェルンクスシリーズの目には、見えない魔力を見る能力など初めから存在しないので、

マリナの体の一部になった時、適合率が高かったのか、別のものに変質してしまったようである。

一応、昨日の手術のこと、左目が魔眼もどきになってしまったことを告げると、

魔眼もどきになったことに関してはビックリした程度だったが、目を移植したことに關しては、

ものすごく驚かれ、フラムの体のことを話すことで落ち着いてもらった。

そしてマリナが落ち着いたところで、フェイトを呼んで昨日の話の続きをすることにした。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

場所は変わりました、南側スペース、海となっております。あまり大型モンスターが生息しておらず、フラムの魔法球の中にくつろげる場所第二位となっている。第一位は言わずもがな中央スペースである。

砂浜に建てられた海の家（木製）で4人はテーブルを囲んでいた。

「まず初めに君に謝っておく、すまなかった」

「え！ なんで謝るんですか、こっちは助けてもらって誤られることなんて何一つ……」

「君が寝てる間に両親を勝手に埋葬して、墓を建ててしまった、謝るべきことだと僕は思うよ」

いつもと変わらない無表情な顔のフェイトだが、悪かったと感じているのか、少しだけ瞼が下がっており、目線も若干下を向いていた。

「いえ、お墓まで建ててもらってありがとうございます、後でお墓の場所教えてください、」

お別れを言いたいので」

「分かったよ、ついでに花も用意するよ、僕の弟が」

こんな時でもフラムをいじるのはやめないフェイトであった。しかし湿っぽくなってきた空気が、

フェイトの冗談で元に戻った、本人は認めていないが日に日に人間っぽくなっていくフェイトであった。

「俺が、かよ!!」

「研究所の近くに君に似合わない花畑があったじゃないか」

「あ、それなら場所を教えてくださいければ自分で摘みますので……」

「そうか、なら摘み終わったらフラムに包装してもらえばいいよ、材料なら余ってるだろうし」

「へいへい、任せましたよ」

「何から何まですみません」

「別にかまわないさ、じゃあ本題に入るけど、ここにアリアドネーへの入学願書が……」

「あの、迷惑じゃなければ、一緒に付いて行かせてください!!」  
「フェイトの言葉を遮るように力強くマリナは言葉を発した。」

「いいのかい？」

「はい、助けてもらったうえに、目まで治してもらったんです、何にか恩返しをさせてください!!」

「……わかった、なら一緒に付いてくれればいい」

「ありがとうございます!!」

「……そういえば自己紹介がまだだったね、フェイト・アーウェル  
ンクス、

できればフェイトって読んでほしいね」

「はい、フェイトさん」

「んで、俺が……」

「フラムさんですよな？」

「あり？ 俺のこと知ってるの？」

「はい、以前両親にフラムさんのお店に連れていかせてもらったこ  
とがありますし、私の村で

買い物をしているフラムさんを見かけたこともありました」

「そうかい、なら話が早い、フラム・アーウェルンクス、これの弟  
だ」

「はいよろしくお願いします」

何をよろしく願いされるのかよくわからないといった感じの顔を  
していたフラムだが、

思い出したように席を立った。

「ちょうど海まで来たし、夕飯の材料でも釣ってくるわ」

そう言うと、来ていたマントの裏側から釣り道具一式を取り出した、  
正確にはマントの裏に書いてあった

転送術式を発動させたただけだが、傍目からは何も無いところから物

を出したように見えてしまうのである。

「なら、その役目は僕が代わろう」

意外なことに、あまり何もしないフェイトが手伝うといって、フラムは口を開けて硬直してしまった。

「君はその子に両親の墓の場所を教えるのと、花束を作る役目があるだから代わろうと言ったまでだ、

まあ、久しぶりに釣りをしたくなったというのもあるけどね」

ちなみにフェイトは釣り経験者であり、フラムの研究所においてあったロッドに興味を持ったのが

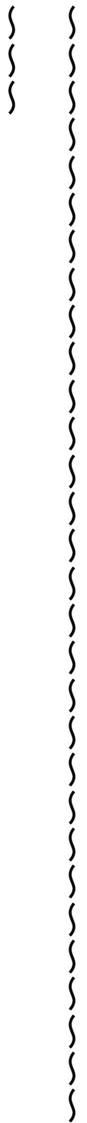
発端であった、そりゃ、プラスチックやらビーカーなどの科学実験用品や、竜の牙や鱗、鎧や剣、

そんな物がごちゃごちゃしている部屋にある釣り道具一式……、かなり浮いた存在である。

「まあ、そういつわけだからそっちは頼んだよ」

「あ、フェイト様私も手伝います、というわけでフーちゃん」

はいはいっとぼやきながらもう一本予備のロッドをルーナ嬢に渡すフラムであった。





花畑で摘んだ花を包装して二人は今マリナの両親の墓の前にいる。

「……………」

「……………」

二人とも墓の前で手を合わせているところだ、ちなみにフラムは正装となっているのか、いつものマントに紅いカウボーイハットをかぶっている。ちなみに以前買った羽根つき帽子とは別の物である。

「あの、えっと」

沈黙に耐えられなかったのか、マリナが何か話そうとするが何を話せばいいのかわからず、しどろもどろになってしまった。

「まあ、気にするなや、フェイトの趣味みたいなもんだからな、俺はそれに付き合ってるだけだし」

「趣味……………ですか？」

「悪の秘密結社の幹部が人助けが趣味つてもよくわからんがな」  
クククつと苦笑をするフラムにマリナは疑問をぶつけた。

「あの、女の子も言ってましたけど悪の秘密結社って何ですか？」

「まあ、あれだな価値観の違いってやつさ、詳しいことは兄さんから聞いてほしいんだが」

「兄さんたちがやるうとしてしていることは世間一般では悪いことに認識されちまうんだよ、」

「俺は悪いことではないって思ってるけど、実行はさせたくはないから裏切らせてもらうが」

「え？」

いきなり、自分は兄を裏切るといったフラムにマリナは驚きの表情を向ける。

「一応許可は貰ってるぞ、裏切るといふより別の方法を探すだけだからな」

「フラムは最初はただ漠然と、原作キャラに会ってみたいな」という考えから、

『完全なる世界』裏切ろう、許可も貰ったし、としか考えてなかったが、魔法世界の住人と触れ合って、

「フェイトと話をして、ただ裏切るのではなく、魔法世界の魔力枯渇による消滅を」

『完全なる世界』とは別の方法で、何とかしようと考え始めたのである。

「第二の人生楽しんで生きよう」という楽観的な考えから、「魔法世界を何とかして救いたい」

という目的意識ができたのである。

「あの！ 私にフラムさんのお手伝いをさせてください！」

「え？」

「恩返しをしたいんです、一番に感謝しているのはフラムさんなんです」

面と向かって感謝してると言われ、フラムはなんだかむずがゆくなつてしまいそつぽを向いたまま、

「なはは、申し出は嬉しいんだけどね、俺がしたいことって兄さんから言わせれば無意味

なことらしいからそれに付き合わせるのもね、ひとまず兄さんの話を聞いてからな」

そう困ったような顔でマリナを諭すと、フラムはぐりぐりとマリナの頭をなでた。

フラムを困らせたくないのか、マリナはそれ以上懇願しなかったがどこか寂しそうな顔をしていた。

「それじゃあ、マリナ嬢もこれから俺たちの悪の秘密結社のお仲間になることだし、

そうだね、”焰”って名乗るといいよ、秘密組織にはコードネームが必要だからね」

場の空気をどうにかしようと、フラムがそう言いながら“焰”に手を差し伸べると、

なぜか“焰”は少し嬉しそうな顔をしながらフラムの手を握り返し、二人はフェイトの下へ帰って行った。

フラムは気付いていなかったが、彼は「俺たち」と無意識に言ったのである。

それは、裏切ると分かっているにも、『完全なる世界』のメンバー、デュナミスやフェイトと

親密でいたい、という甘えの表れだったのかもしれない。

## 7話 二人目である。(後書き)

追伸

フラムの魔法球の中ですが、中央にアトリエ、結界が貼ってあるの  
で、

竜やらモンスターが近づくことはございません。

そこから歩いて行けるのが、東と南のエリアです。

東はジャングルで、温厚な性格の竜やらモンスターが住み着いてい  
ます、

生存競争等はありませんが竜種が幅を利かせてきたらフラムが狩り  
をすることにより生態系は守られています。

フラムは薬草やら木の実はこのエリアから調達します。

南は今回出てきたように海です、竜種はほんの少し住み着いていま  
すが

フラムが手を出さなくても生態系は守られています。

北と西はワープ装置を使って移動します。

北は雪山、西は火山である。

この二か所の龍は攻撃的なのでレベルの高い修行をするとき、  
もしくは鉱石を採掘するときに出向きます。

一応フラムは、火山の頂点に立つ竜とは引き分けているので、  
仲良しである。

どごごのジャックさんと帝都の守護竜と似たような関係である。

今回はここまでです。

栞と焰の話方は、まだ小さいという理由で原作と比べると違和感があるかもしれませんが、その辺はおいおい直していきたいと思えます。

さて、焰っちの抜けた穴、もとい戦力補充はどうしよう？  
といろいろ二、三案を考えている作者です。

## 8話 理由（前書き）

正直、今回の内容は批判を喰らっても仕方ない気がします。

しかし、あれぐらい言わないと煽がフェイト側に行ってしまうので、作者もめっちゃ頭抱えながら、ない頭ひねりながら書きました、

ひとまず温かい目でみてください。

## 8話 理由

あれから、焰はフェイトから魔法世界の運命について話を聞き悩み続けていた。

最初は自分が幻想だ、近い未来に消えると言われ、いろんな負の感情がごちゃ混ぜになり茫然としていたが、

今を全力で楽しみ、周りを巻き込んでバカなことをするフラム、それに突っ込むフェイトや朧を見て、

自分も今を楽しもうではないかと考え、この問題は解決した。

しかし本当の問題はこれからだった、近い未来魔法世界が滅ぶという問題が残っているのである。

『コスモ・エンテレケイア完全なる世界』全てが平等、理不尽のない「楽園」に移り住む、若くして両親や親しい者を奪われ、戦災孤児となってしまう、地獄の一端を味わった焰にとって、

これほど理想的で甘美に聞こえる話は他にはないだろう。

しかし今の焰には正史にはない『フラム』という存在がストップパーとなっているのである。

絶望的な状況から救ってくれたのがフェイトではなくフラムだった、これが一番の要因だろう。

フラムのために何かしたい、その思いがあと一步を踏み出せない状況を作っているのである。

•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•



～焔Side～

「はあ……」

これで今日、何回ため息をついてしまったのでしょうか、「スモ・エンテ『完全なる  
世界』、

フェイトさんからそのことを聞いたとき、素晴らしいと思いました、  
しかしフラムさんはそのことについては否定的、  
正直フラムさんのお手伝いをしたいと言ったのになんとか挫折そう  
です。

「はあ～～～」

「辛気臭いですね、全く」

「わひゃい！！」

あわわわわ、ビックリした、って、栞さんか。  
ビックリして変な声出しちゃいました、うう、恥ずかしい。

「なかなかかわいい声で鳴きますね」

「ええええええ！！」

何を言ってるんですか、この人は！！

「と、焔ちゃん遊ぶのはここまでにして、何か悩み事？」

あ、遊ぶって……、でもちよつどいいかな？ 相談にのってもらおう。

「はい、悩み事がありました……」

「ほづほづ」

「『コスモ・エンテレケイア完全なる世界』のことなのですが……」

「みんな仲良く暮らせる世界、素晴らしい話だよ、それがどうしたの？」

「はい、確かにすばらしいです、けど、その……」

「……フーちゃんのが気になるのですか？」

「へ！ そそそそんなことないですよ……」

「バレバレですよ、まあ、フーちゃんは別の方法を探すって言うってたね、でも、

それはこの腐った世界を存続させるってことだよ？ それでもいいの？」

「それは……、そうなんですけど、でもフラムさんの手伝いをしていなんて言っちゃったし……」

「は、ならフーちゃんと話をするべきだね、それで決めればいいよ、フェイト様に付いて行くか、

フーちゃんに付いて行くか」

やっぱり、それが一番なんだろうな、……よし、フラムさんと話してみようー！

「栞さん、ありがとう」

「年も近そうですし、呼び捨てでいいよ」

「うん、ありがとう、栞」

……

「……青春していますね〜」

——焰移動中——

えっと確かフラムさんは、午後はテントにいらることが多かったよう  
な……、あ、いたいた。  
珍しく読書中みたい。

「フラムさん」

「ん？ あ、焰嬢か、どうした？」

「あの、聞いたことがあるんです」

「ん、答えられる範囲なら何でも聞くがよい、はっはっはっ」

あはは、いつもと変わらないな（汗）

「フラムさんはなんで『「スモ・エンテレケイア完全なる世界』に否定的なんですか？  
よければ理由を聞きたくて」

「……なるほど、まあ座りなよ」

あれ？　なんかフラムさんの雰囲気が変わったような？  
あ、呆けてる場合じゃないや、座らないと。

「失礼します」

「さて、何から話したもんか……」

うわあ、こんな真剣なフラムさん初めて見た。

「まあ、否定的かどうかって言われたらそうなんだよな、まあぶつ  
ちやけみんな平等、  
理不尽のない世界つてのが気に入らないんだよ」

「何ですか！？　みんなが平等、理不尽がない、それなら争いも  
起こらず平和に過ごすことが  
できるじゃないですか！！」

「確かにそうさ、俺も紛争で家族の様な存在を殺されてね、戦争が  
なかったらって思ったさ」

え！！　フラムさんも大事な人が殺されたたなんて、知りませんでした。

「でもさ、思い出したんだよね、そんな世界を作ろうとした人のことを」

え？ 作ろうとした人？

「まあ、物語の登場人物のことなんだけどね、その人は自分に優しい世界を作ろうとしていたんだよ、

好きな人、親しい人、死んだ人、そんな人たちと一緒に暮らせる、何不自由のない

平和な世界つてやつをね、コスモ・エンテレケイア『完全なる世界』も、たぶんそれと変わらない世界だろうさ」

「それなら、フラムさんは死んでしまった人にもう一度会いたいて思わないのですか！

私は会いたいです、父様や母様、仲の良かった友達に！ それにそんな世界なら、

フェイトさんや琴、それにフラムさんとだって一緒に暮らせるんですよ！！

否定することなんて何も無いじゃないですか！？」

「そりゃあ、俺だってアイリスにもう一度会いたいて思ってたさ」

アイリス？ 死んでしまったフラムさんの大切な人でしょうか？

……名前からして女だよな、って私は何を考えているの！ 今はフラムさんの話を聞かなくちゃ！

「けど、アイリスは死んでしまった、暴論だけど死んだってことは生きていたってことでもある、

魔法世界の住民は幻想だっというけどそれは違う、魔法世界の住人は今もこの瞬間、

立派に生きているんだ、幻想なんかじゃない本物さ、だから、『  
コスモ・エンテレケイア  
完全なる世界』で、

アイリスに会えてしまったら俺が出会ったアイリスは幻想だって  
証明しちまう、

アイリスだけじゃない、フェイトや朧嬢、焰嬢だってそうさ、け  
ど、

こうやって触れ合えてぬくもりを感じることができ、これだっ  
て生きてるって、

本物だっという証拠じゃないか」

そう言ってフラムさんは私の手を握ってきた。

ううう、ちよっと恥ずかしくて顔が……。

「もし俺が『コスモ・エンテレケイア完全なる世界』に移り住んだら、そこにいるみんなは  
その世界が用意した偽物でしかない、それが許せないんだ、それ  
におれは誓ったんだ本物の

アイリスに『大切な人を守る男になる』ってな」

私の手を握っているフラムさんの手を、もう片方の手で握り返して  
考える。

「まあ、それが理由さ、結構長い間話したみたいだし、そろそろ夕  
食の支度をしてくるよ、

カップは後でかたすからそこに置いたままでいいよ」

そう言ってフラムさんは魔法球の方へ行こうとするのを私は呼び止  
めた。

「あの、ごめんなさい！ 私手伝うって言うっておきながらフラムさ  
んの話聞くまで

手伝うべきなのか悩んでいました」

「過去形ってことはもういいのかい？」

「はい、私はフラムさんのお手伝いをします、父様や母様が幻想だったなんて言わせません！ それに、

……ごによごによ（フラムさんだって）」

「そうか、わかったよ“焰”」

あ、今、焰嬢じゃなくて呼び捨てにしてくれた、  
なんだろう、なんだかとっても嬉しいです！！

～焰Side END～

~~~~~  
~~~~~

料理をしている途中、レストランでコックをすることになったあと、  
アイリスがプレゼントしてくれた

包丁を見ながらいつもは見せない暗い表情をしているフラムがいた。

「『大切な人を守る男になる』か、はは、……………」

さつきはあんなこと言ったけど、それでもやっぱり、もう一回ぐらい会いたいな……」

そんなつばやきが出汁が沸騰している音にかき消されていった。



## 8話 理由（後書き）

はい、フラムの思想の後付けの回でした~~~~~。

というわけではないのですが、まあやっちゃいました。

最後のつぶやきは、普通の人なら言うであろうと考えて書きました。批判でもなんでもかかってこいです。

今回はこれまで、ある意味この話が後々に効いてくるように努力します。

次回はフェイトガールズを集結させたいと思います。

そんなわけでアンケート!!

焰の抜けた穴をどうするか!? です

1、オリキャラでカバー!!

2、別にいいや、そのまま行っちゃへ!

1なら、こんな娘を、という案を募集します、参考にさせてください。

何もないなら、スタンダートにフェイトガールズにいない魔族っ娘辺りを出します、炎も使えそうだしね。

あとフェイトガールズにアーティファクト以外の武器を持たせるな

らどんなのがいいかも募集します、気軽に感想の方をお願いします。

それでは、さよーなら。

## 9話 成長（前書き）

今回、今までとは違い、会話文の行をそろえずに進めてみました、ほかの地の文も繰り下げず、途中で改行されてる状態、つまりは紙の本の書き方し使用となっております。

今までの方が読みやすいというなら感想に一言お願いします。

## 9話 成長

「我々は作られた存在である！　したがって最高のスペックをこの体に有しているわけなのだ！　つまり修行いらずなわけだ、だがしかし！！　それでいいのか？　これ以上強くなる必要はないのか？　答えは否だ！　確かに我々は高スペックな体、魔力、吸収力をもつてしても敵わない奴が存在する！　サウザンドマスター然り、千の刃の男然り、俗に言うバクキャラというやつだ。初代と二代目はサウザンドマスターに敗れてるなら我々も予防策を張るべきだ！！

　　そうだろ兄さん！！！！」

無駄に熱く語るフラムであるがそれに対してフェイトは、

「どうでもいい」

「ひでえ！！」

バツサリである。

「確かに先代達は敗れてしまったが、別に気にすることでもないだろう？　僕たちは造物主ライフメーカーの使徒だ、代えもきくし目的が果たされればそれでかまわ「シャラップ！！　……プロモ！！」

いきなりフラムに殴り飛ばされたフェイト、戦闘時以外は障壁を張ってないのもろである。殴られた頬をおさえ無感情な目ではなく、茫然とした目でフラムを見ているあたりそれなりに成長しているようである。

「私はそんな子に育てた覚えはありませんよ、なに卑屈なこと言っ

てるの！」

「いや、フラムにそだて「何やってんですか」「バルムンク！」……」

いきなり栞がシャイニングウエザードを仕掛け吹っ飛ばすフラムをポカーンとしながら見送ってしまったフェイト。いきなりすぎてこのギャグ空間に付いていけないようだ。

「まったく、この人は毎度毎度、それより話は聞いていました。卑屈なことを言わないでください、そのあたりはフーちゃんに同意です、フェイト様は一人しかいないのですから代えがきくなんて言わないでください」

「あつ、ああ、分かったよ」

妙なプレッシャーを感じたのか、フェイトは戸惑いながらもうなずいていた。

「さてと、フーちゃんに呼ばれたから来ましたが、何の用ですか？」

いきなり現れた栞はどうやらフラムに呼ばれていたから、あのタイミングで入ってきたようだ。

「うむ、兄さんもいるからちょうどいいな、栞の訓練メニューについてなんだが、栞の訓練状況を見て感じたことがあってな、兄さんと話し合っている結論に達した」

真剣な表情で話し始めたフラムを見て、栞は緊張した顔でフラムを

見た。

「結論、あまり素手の戦闘に関して才能があまりあるとは思えないので、何かしらの武器を持つことをお勧めします、というのが結論、体運びは悪くないのですが、何と言いますか、同じレベルの素手の相手が敵だとちとキツイものがね。」

フラムに駄目だしされたにもかかわらず栞は平然としてた。

「まあ、自分でもわかってたことですし、それほど気にはしませんよ、いきなり訓練メニューが変わったのはそのせいなんですな。」

最初は、体力づくり、魔力の効率的運用、組手を主軸にしていたのだが、いきなり組手の時間が減り、木の棒での素振りが訓練に加わったらそら不自然である。

「そんなわけで、手先が器用な栞嬢にはこれかな。」

そう言っつてフラムはあるものを栞に投げ渡した。

「木の棒ですね。」

栞はフラムに大丈夫かこいつ？　と言いたげな顔をしたむけた。

「おいおい、フェイトと話し合った結果だぞ？」

「その通り、まあ案を出したのはフラムだけど、栞君君には杖術を覚えてもらいたい、君にあつてると言える武術だからね。」

フェイトに言われ納得する栞、だがじつと投げ渡された木の棒を見

つめている。

「納得いかないかい？」

「いえ！　そういうわけではないのですが……その、木というのが少し安心できなくて、簡単に折れたりしちゃうじゃないですか」

そう心配そうに言う栞に対して、フラムは明るい声で、

「その辺に関しては問題なしだ！！　それは魔法球の中の東の森の最深部に生息する巨木の枝を削って作ったのだ！！　頑丈さ、しなやかさ、魔力伝導率どれをとってもトップクラスだ！　ちなみに……」

いきなり説明をやめてこそごととマントの中をあさりだしたフラム、ちなみに彼のマントの裏には、魔法球の武器庫、食糧庫とつながっている転送術式が書かれてあり、簡易倉庫として使われているのである。一応、武器庫の中の武器はほとんどがフラムが自分で作ったものである、最初のころはただの鉄くずと何ら変わりなかったが。

「じゃじゃーん」

効果音をわざわざ自分で言ったフラムが取り出したものは半分に折れた剣だった、しかも半分になった刀身の切っ先のほうは粉々になっている。

「それがどうしたのですか？」

「なんと、この剣を真つ二つにしたのも、粉々にしたのその棒なのだ！！　ちなみに魔力による強度上昇は最低レベルだけだね」

「その実験には僕も立ち会ってるよ、だからフラムは嘘は言っていないよ」

「それなら信用できますね」

「ひどいなあんたら！」

フラムが信用ならいのはいつものことである。

「あれ？」

栞が何か見つけたのか、木の棒をまじまじと見ている。

「ん？ おお、それに気付くとは、栞嬢もなかなか見どころがあるな！！」

「……なんて書いてるかわからないのですが？」

「うむ、それは旧世界の文字の一つでな“洞爺湖”と読むんだ、ちなみに湖の名前ね」

「なんで湖の名前が彫られているんですか？」

「ご利益だ！！」

冗談抜きでいい笑顔だったのと、サムズアップが癪に障ったのか、フェイトのアップパーからの、栞のきれいな洞爺湖による突きを食らったフラムであった。



「ふ、俺の目に狂いはなかったようだな……グフ」　パタリ

~~~~~

時間は進み4人は紛争の被害にあった次の村に向かっていった。
体力づくりの一環で走りだが。

「ほんとにこっちなんですか？」

「ちゃんと空飛んで確認しました！　信用してくださいお願いします
すから！」

相変わらずである。

「あの、重くないですか？」

ちなみに今は近道と称して森を突っ切っているのだが、枝から枝へ

飛び移るように進んでいる、その途中で焔が疲れて追いつけなくなったのでフラムがおぶっている状態である。

「はっはっはっ、問題ないさ、このくらい軽い軽い」

相変わらずのチートスペックである。

「……………」

同じくチートスペックを持つフェイトさんも涼しい顔で並走している
焔は多少疲れを見せているが何とか追いついている、何気にすごい
ことである。

「あ、見えてきませよ」

そう、フラムがいうと炎に包まれた村が見えてきた。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

「ゴトイ……………」

唇をかみしめながら焔が悲痛な声で言った。

「この辺りの対立は100年程度じゃ解消できないね」

「とにかく、人命救助だ」

一段と真剣になるフラムの声、それだけひどい光景なのである。

・
・
・
・
・
・

村全体を検索したが生きている人を見つけるのは絶望的だったが、一人だけ生きている女の子を発見できた。

「生存者発見と、治療に取り掛かる」

そう自分の意識を切り替えるかのように低い声でフラムはそう呟き、治療魔法による止血をし、集合場所へと向かおうとし、足を止めた。

「あなたとこの子の関係はわかりませんが、この子の安全は保障します」

そう、助けた女の子を庇うように倒れていた女性に黙とうをささげ、一方通行な約束をした。

アリガトウゴザイマス

そう、後ろから声が聞こえてきたような気がするの、幻聴だったのだろうか？

村はずれの森の集合場所に全員集まり、女の子の残りの手当てや着替えを栞と焰に頼み、フラムは料理の支度をしていた。

「助かったのは彼女ひとりというわけか」

そう、用意した椅子に座りフラムの入れたコーヒーを飲みながらフェイトはそうつぶやいた。

「ああ、全滅してないだけいってわけでもないし、複雑だな」

「そうだね、もう少し救えればいいのだけどね」

最近では、フェイトは人助けを趣味とは言わなくなり、どこかさみしそうな顔をするが多くなった。

「たださ、助けることのできた人がたいてい女の子なのはなんでなんだろうかな」

ちよつと場の雰囲気やを和らげるように言ったフラムの冗談なのだが、

「君が言う、ご都合主義ってやつかもしれないね、ククッ」

「……………」

まさかの切り替えしに、フラムのあいた口がふさがらなかったのは仕方がないはずである。

なんだか妙に成長してしまったフェイトである。

ちなみに、フラムが女の子に料理を持って行ったとき、

「起きたって聞いたから、簡単なスープ持ってきたぞー、ひとまず温まって落ち着くのが一番さ」

そう陽気にテントに入っていったのにもかかわらず、

「びーーーーーーーーーーーーーーーーー!!」

泣かれたのは、人相の悪さがなせる業である。

「大丈夫です、フラムさんは優しい人だって私知ってますよ!!」

テントの外で体育座りしているフラムを全力で慰めている焰の図が完成した。ちなみにこの後、フェイトガールズが増えるたびにこの光景が見られたのは余談である。

次の日、落ち着いたの女の子にアリアドネーに行くかどうかフェイトが女の子にきいたとき。

「フェイト様と一緒に行かせてください!! どこまでも付いていきます、最後まで!!」

そう言われたとき、フェイトが薄く笑っていたのを俺は見逃さなかった。

その笑顔は、俺がフェイトにコーヒーを入れてあげる時に、最近見せるようになった顔に似ている気がした。

9話 成長（後書き）

次回すっ飛ばして、全員集合させます、武器の件はまだ続いていますので、

フェイトガールズに使わせてみたい武器、似合いそうな武器を募集します、

感想にどしどし書いてください、感想に書きたくないのならメッセージでもいいです。

一応誰に何を使わせるかの案はそれなりに考えてあるので、それを変えたくないような奇抜な案をお願いします。

ちなみに、焔の抜けた穴は埋めない方向で行きますので、残ったフェイトガールズの戦力向上のための武器案でもあります。

絡操人形さん、武器案ありがとうございました。

三章突入記念設定（前書き）

完璧な自己解釈です、怪しいところ、おかしいところ、そんなところがあったら感想にどうぞ、三章が続く限り随時更新します。お忘れなく。

フラムがフェイトガールズの師匠にレベルアップした。

三章突入記念設定

真名 あきつき 秋月 みらい 未来

名前 フラム・アーウェルンクス

年齢 前世26才+現在約一歳半

身長 9?歳児ver フェイトと同じ

魔法 基本魔法? (無属性魔法?) と炎属性の魔法しか使えない
(炎のアーウェルンクスは伊達じゃない!!)

防御、治癒、が妙に得意 (最近は拍車がかかった)

オリ魔法 (笑) をいろいろ考えパワーアップを謀っている、しかし
大半がネタでありパクリでもある。だが強い!

性格 基本明るい、ヲタク臭がするのはご愛嬌。目上の人へは敬語
が当たり前。

特技 家事全般 工作 (おもに手芸、最近はモンハン風の武器防具
も作ってます)

容姿 フェイトとური二つ、髪の毛が炎のように後頭部の方へ逆立
っているのが特徴。

服装 フェイトと同じ服だが、軽く着崩している（学ランでいうと第二ボタンまであけている状態）最近では赤色Verも作ったとか。

とある毛皮で出来たマントを着ている、今はいろいろ手を加え、シールドの類にもなるし、裏に転送の術式を刻んだので魔法球の中の道具を出せるようになった。

カウボーイハットをたまにかぶる、何かの意思表示でもあるらしい。

その他 チートボディに人の魂が宿ったので、人形でありながら、三大欲求がある。

腹が減る速度が遅く、満腹になれば、3日間は何も食べなくたって平気。

人工的な体なので、病気？何それ、おいしいの？ 状態です。

ストレスにより目つきが結構悪く、子供は大抵ビビる。

名前 フェイト・アーウェルンクス

魔法 地のアーウェルンクスに恥じない、石や砂を使った魔法を多数使う、石化はチート

オリ魔法（笑） フラムの影響、お願いなどにより、いろいろ開発。

この半年でなにがあった！！

性格 クール 根は優しい

特技 意外と釣りが得意、（以前魔法球の中の南の海の主を釣り上げた経験あり、ちなみに水龍である、シビルドンでもイメージしてください）

服装 原作通り（フラムからもらった灰色Verもあり）

名前 栞^{ルナ}

魔法 特別使えません、回復魔法を少々、身体強化

武術 杖術（知られてはいませんが、身体能力アップ禁止で、武器のみの戦いならフェイトガールズで一番強いと思われる） 意外と洞爺湖を気に入っている

性格 お嬢様口調が似合ってきた フラムに突っ込むときは半目になり、いささか口調が昔に戻る。

武術 杖術

名前 焰^{マユナ}

魔法 魔眼に魔力を吸われるため放出系の魔法は使えない（別に相手魔法も吸収できるわけではない）、つまり身体能力強化しか満足

に使えない、その分特殊技能、にらんだ箇所を発火させる能力がある、フラムも一回丸焼きにされたことあり。

フェイトガールズ一番の火力（二重の意味で）の持ち主。

武術 剣術（西洋剣）

性格 オシャレ眼帯時 優しい いい意味で女の子

軍人風眼帯時 厳格（天然度が高まることもしばしば）

特技 料理（フラムと一緒にいるうちに覚えた）

忘れがちだが、彼女の左目は基本眼帯で隠している。

眼帯の種類は数種類あり、すべてフラムのお手製（朝、眼帯装着時、眼帯を見つめ顔を赤くすることもしばしば）

チエンジ・ファイヤースピリット
炎の精霊化ができフラムと一緒に火山の探索の経験あり。（何気に便利な技だとフラム談）

フラムが、精霊化しても脱げない服を考案中。

名前 曆

性格 明るい フラムの冗談を真に受ける傾向有（焰とは違うベクトルでフラムの癒しの対象）

特徴 猫娘

獣化すると身体能力がかなりUP フェイトガールズの中で最速

武術 我流武術

名前 環

性格 だんまりさん ネットのノリはフェイトガールズで一番である
(ボケ要因)

特徴 龍族(火だつて吐けます!)

フェイトガールズで一番高い防御力がある

原作では穿いていない娘だったが(尻尾が邪魔だったのだと作者予測)、フラムが彼女でも穿ける下着を作成、ローライズである(作った後、焰と環以外からリンチにあった)

フラムが、彼女が竜化した後の服をどうしようか考え中。(脱げたまんまはかわいそうである)

武術 剣術(大剣)

???

名前 調

性格 しつかり者

特徴 木精と仲の良い人間（独自解釈）

器用貧乏とは言わせない実力がある、オールラウンダー

武術 剣術（両手剣、二刀流）

???

三章突入記念設定（後書き）

三章は、大体、フラムがフェイトと出会って半年が経ちました、と
いった感じで始まります。

お楽しみに。

4 番目の番外編 (ZERO) とのコラボ作品 (前書き)

ぶっちゃけ俺の趣味、そして遅くなったけど宣伝です。

伏線張りに使おうと思っていたのですが、後編がなかなかまとまらず、

ひとまず、仮面ライダーネタを披露したいと思います。

4 番目の番外編

(ZERO

とのコラボ作品)

これは俺がデユナミスさんのもとで一年間修行していた時の話であり、俺のパトス・・・、いや仮面ライダー大好き人間としての欲望があふれた時の話だ。

大体修行を初めて4か月ごろか、戦闘にも慣れその辺の賞金稼ぎや魔物程度なら勝てるほどの強さを

手に入れた時の話だ、体がチートボディだったこともあったんだろう、あの時の俺は精神的には青二才だったみたいだ。

「リアルサバイバル生活もこれで2週間ぐらいかな？」

どもフラムです、只今デユナミスさんの修行中級編に入りました、とある森？

正直ジャングルレベルな森ですが、そこで修行してます。デユナミスさんの話によると、

「常に襲われる状況下に身を置き、敵が来るのを察知し、逆に倒す修行だ、ちなみに、

その森には、上位の龍種がごろごろいるから気を付けるんだな、それと依頼していた

ダイオラマ魔法球の修理改築に必要な材料を持ってる生物もいるからついでに狩ってこい」

とのことです、サバイバル兼リアルモンスターハンター来た~~~~
~~~~~!!!!!!  
.....

たーすけてー~~~~~!

冗談抜きで死んじゃうよ~~~~~!!

なんて叫んでた最初の一週間目が懐かしいです。今ではこうやってダチヨウっぽい鳥からはぎ取った生肉を焼きまして~~~~と、.....上手に焼きました~~~~  
はっはっは、慣れて怖いわ.....。

もぐもぐもぐ

~~~~人形食事中~~~~

ゲップ、さてこれで三日は持つとしてと、何匹か龍を倒して鱗やら角やら手に入れたけど、本命がゲットできていないし明日になったら探しに行こうかな？

ドカアアアアアアン!!!!!!

ん？ 遠くで爆発が起きたような？ それほど遠くはないし行ってみよっかな？

~~~~~

数分前

～三人称視点～

爆発音がした場所の数分前のことである。

そこには体の色が灰色の怪人、虎のような顔を持つ怪人、虫の成虫のような特徴を持っていたりと

多種多様な怪人が20体ほどいた。

そして、その怪人と戦っている仮面をかぶった戦士が4人いた。

「うりゃあ！ おりゃあ！」

『イメージソード』をふるい敵をばっさばっさと切り倒していく竜王を象った頭の仮面の戦士、

その名は、能力だろうが、魔術だろうが、神の奇跡システムさえも打ち消せる力、幻想殺しを

右手に宿している少年「上条当麻」が変身する、『仮面ライダーマジンブレイカー』

「弱いんだよ、この三下どもが！！！」

『アクセラロッド』を振り回し、反射を使い敵を弾き飛ばしていく  
白い狼を象った仮面の戦士、

その名は、学園都市にたった七人しか存在しない超能力者（レベル  
5）の中でも頂点に立ち、

「向き（ベクトル）変換」というあらゆる向きを変更することので  
きるの能力を持つ、

白い少年「一方通行」アクセラレータが変身する、『仮面ライダーアクセラレータ』

「この！！ だりやあ！！」

『オフェンスアーマー  
窒素装甲』の防御力にものを言わせ暴れ回っている黄色い鎧に銀  
色の仮面の戦士、

その名は、無能力者（レベル0）の不良少年の集団スキルアウトの  
元リーダーでもあり、

わずかな勇気と判断力で超能力者（レベル5）の一人を倒したこと  
もある実力の持ち主、

禁書の第3の主人公格の少年「浜面仕上」はまじょう しあげが変身する『仮面ライダ  
ーアイテム』

「くらいなさい！！」

砂鉄の剣となった『レルガンクリップ』で敵を切り飛ばしている  
明るい黄色とオレンジを基調とした

鎧の仮面の戦士、その名は超能力者（レベル5）の第三位「超電磁  
砲」ガンと呼ばれている、

ビリビリ女子中学生「御坂」みさか 美琴「みこと」が変身する『仮面ライダーレ  
ルガン』

四人の戦士たちは自分たちよりもたくさん敵に囲まれながらも難

なく戦っている。

「そろそろと止めだ！」

そうイメージブレイカーが叫ぶと『イメージキー』を取り出し、それを右手首に差し込んだ。

「アン ロック イメージブレイク！！」

電子音が叫んだ後、右腕に竜王の顎がまわりつく。

そして、イメージブレイカーが大きく横に腕を振り払い、拳を叩きこむようにその右腕を前に突き出して『竜王の顎』の敵達に叩きとばす。

アクセラレータがベルトのボタンを規則的に押す。

「Acceleration！！」

するとアクセラレータの背中から白い翼が飛び出す。

「終わりだ、雑魚どもが！」

そしてその白い羽を敵たちに向けて叩きつける。

アイテムが片手で『アイテムフォン』を構え、もう片方の手でベル

トについてるタッチパネルを操作し、必殺技のアプリを起動させる。

「Meltdown er Open up!!」

そして『アイテムフォン』を両手で構え直し、引き金を引いた。

「吹っ飛びやがれ!!」

巨大な光線が敵を蹂躪していく。

「ねえ、レールガンって知ってる?」

そう決め台詞をつぶやき、レールガンはベルトに妹達シスターズが描かかれている『スペックカード』を取り出し、すばやくスキャンする。

「ラスト レールッガン!!」

と、電子音が流れ、虚空から『レールガングリップ』の上に特別製のコインが装填される。

「これでお終いよ!!」

そう叫ぶと、コインが音速の速さで射出され怪人たちに風穴を開けていく。

四人同時に必殺技を放ち、敵が全員爆発する。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「おかしいな？ 敵は全員倒したんだから帰れるはずなのに、オー  
ロラが出ないぞ？」

学ランにツンツンヘア、そして中折れ帽をかぶっている上条当麻  
がそう疑問を口にする。

「つまり、まだどこかに敵がいるってことかよ、糞が！」

中世的な体つきで、髪も肌も白い風貌の一方通行が答え、機嫌を悪  
くする。

「マジかよ、さっさと帰って滝壺に会いたいぜ」

金髪の、少し情けない雰囲気漂わす、不良っぽい浜面仕上が泣き  
言をいう。

「なに惚気てんのよ！」

浜面の言葉が癪に障ったのか、茶髪の少女の御坂美琴がけりを入れ  
ている。

「てか、ここどこの世界だ？ いきなり森の中しかも敵さんまで出  
てきたから気にしなかつたけどさ」

「そんなのわかるわけないでしょ！ 全く……誰！」

いつも体から微弱な電磁波を流したからか、美琴が何者かの接近に気付く。

「あん？ 敵か、ならサクと殺っちゃいますかア！」

一方通行の物騒な発言により、四人は戦闘態勢をとる、すると

「わーわー！ 待ってください、敵じゃありませんから、敵意丸出しにしないで！」

近くの茂みから現れたのは白い髪の少年、フラムだった。

「なんだよ、子供か、驚かせやがって」

「ちょうどいいじゃねえか、あの子供にいろいろ聞いてみようぜ」

「そうね、その方が賢明ね」

「別に異論はねエ」

これが、フラムと、仮面ライダーに変身する力を持つ禁書メンバーの顔合わせだった。



4 番目の番外編 (ZERO) とのコラボ作品 (後書き)

後編頑張って書きます！

## 突然なアンケート（前書き）

アンケートです、票が集まったらポコポコ投降します。

## 突然なアンケート

簡単なアンケートです、ご協力お願いします。

大学受験が只今火車状態になってしまい、かなり不定期になってしまっています。

そこで、簡単なアンケート、只今修行編を書こうとしていますが、これはフェイトガールズ全員がそろってから半年間のほのほの話です、主にギャグしかやりません。

そこで、三章と並行して、四章も書こうではないかと思いましたが。ちなみに四章は原作で言うネギの村襲撃事件より半年〜一年前にネギの村へ行きネギと過ごしていく話です。

ここでアンケート、

- 1 三章だけすすめなさい！
- 2 三章？ 別にいらんわ！！ 原作に入れ！
- 3 四章より三章の話を進めてくれ、
- 4 三章より四章の話を進めてくれ

といった感じです、こっちもせっぱつまっている状態が終わったら

バランスよく投稿できるはずですが、難しいそうです、ご迷惑をかけてすみません。

## 訓練メニュー（前書き）

短めです、適当に流し読みしちゃってください、一応フェイトガールズの戦い方をちょこっと？ 説明したただけなので。

一応些細な伏線は張りました。

訂正入りましたー！ー！ー！ー！！！！！！

## 訓練メニュー

「整列！」

「……………はい(！)……………」

「番号！」

「いち」「2！」「3！」「ヨン」「5！」

「よし、全員そろったな！ これより基礎訓練を始める！ 初めに準備運動、終わったら3キロマラソンだ！」

「……………はい(！)……………」

はいはい、久しぶりの一人称です、フラム・アーウェルンクス、師匠になりました〜！

ぶつちやけ、フェイトがまじめに教えようとしなから俺が代わりに教導しているんですけどね、もともと修行する必要のない体だからフェイトがうまく教えられないのも仕方ないのかもしれないけどね〜。

「…走り終わりました(デス)！」

お？ 暦と環が先に到着か、種族の特性なのか体力の伸びが半端ないね〜。

「……………ハア…ハア……………、終わり…ました…」

続いて焔ゴール、向上心が強いから基礎体力はなかなかのものになってきたね。

「ゼイ…………ゼイ…………」

調は最後に一緒に来ることになったからまだまだ発展途上だね。

「やっと走り終えましたか」

…………最古参だからと言って、5歳児ぐらいなのにチートやるこいつ、体力バカ二人を500m突き放してゴールって何よ？ エルフだからなのかい？原作ではそれほど強くないでしょあんだ。

「さて、体も温まってきたことだし組手に入る！ まずは無手での訓練だ！ 一人ずつかかってこい！ まずは曆！」

「はい！」

うむ、教えたとおり速さを生かしたヒット&アウェイ戦法である、まだまだ甘いところがたくさんあるがだんだん強くなっていくだろうさ。

「うむ、ちゃんと持前の速さと俊敏さを生かした戦い方をしているな、これからも心がけるように、手数を増やすことが課題だな」

「はい！ ありがとうございます！」

「次！ 環」

「はいデス」

龍族って身体能力結構高いのよね、だから一撃が重いので、カウンター狙いを主軸に一撃必殺の攻撃を放てるよう訓練中、いまは防御ばかり教えているが、いつかガードごと持っていけるような攻撃をしてもらいたいものです。

「終了つと、防御の仕方もうまくなってきた、あとは握力を鍛えること、まだ攻撃する訓練は早いがかいつか役に立つぞ」

「ありがとうございましたデス」

「次、焰」

「はい！」

焰に関しては、俺が使ってるから空手を教えてほしいって言ったんだろうけど、十分使えてる気がしますね、習い始めだからまだまだ拙いかな！ はっはっはっはっはっ。

「うっし、いいぞ空手の基本は？」

「守ることです！」

「OKOK、その調子で頑張っていきたまえ、もう少ししたら新しい技教えてやるからな」

「ありがとうございました！」

「んじゃ次、調、少し休めたか？」



「はい、大丈夫です」

「ならよし、かかってこーい」

調は……………、普通！　これが当てはまる、なんでもそつなくこなせるからね、攻撃もそこそこ、防御もそこそこ、躲すのもそこそこ、うむむ。

「おーし、いいぞ、……………まあ、最近訓練に参加したばかりだしね、訓練を怠らなければちゃんと伸びるよ」

「はい、頑張ります」

とまあ、ここまではいいんだけど……

「栞、いくぞ〜」

「はい」

まあ、最古参だけど無手に関してはこちらきしなのよねこの子、今でも調よりかは上だけど、ほかの三人より下だしね、けどそう簡単に負けない戦いかたをしてるから問題はないかな、さすが最古参。

「ふい、お疲れさん、まあ無手に関してはシャーないさ」

「はい」

「んじゃ次それぞれの得物をもって素振り開始！　暦は瞬動の練習  
！」

「……はい（！）」

一応曆以外には俺特性の武器の形をした木剣（身長に合わせて短め）を渡してある。

曆に関しては速さが武器であるということでも無手メインで育てている。籠手でも作ってやるべきか？

ちなみに、

焰は片手もちの西洋剣をモチーフにした木剣

環には大剣をモチーフにした木刀（鉄砕牙でも思いうかべてくださいな）

調には両手剣なみの大きさの木剣、両手剣の半分の重さの木刀を二本、（テイルズに出てくるマテリアルブレードのように連結式なので持ち運び楽々）

これらを使って訓練してもらっている。

前の二人はそれなりに考えて渡したが、調は半分ネタである、どんなネタが飛び出すのはお楽しみってことで。

とまあ、今はこんな感じでふつーの基礎訓練をしている。

もう少ししたらまともな訓練に入れるかもしれないが、今は魔法球があるけど、そのうち俺がいなくなるので、魔法球なしの訓練になっってしまうから、短時間しか訓練することができなくなるの、つまり、達人への道のりは長くなるだろうね。

それに俺とフェイトの意見（若いうちからこんな殺伐としたことばかりするんじゃないやありません！！）で訓練だけでなく座学やら、趣味やらその他もろもろのにも手を付けさせる予定なので、さらに訓練時間は減ること間違いなし。

それでもがんばって欲しいが、さてはて、原作よりどれだけ強くなるのか楽しみである。

## 訓練メニュー（後書き）

次回から、ほのぼのな話を進めていきます、四章に関してはゆっくり亀更新で行かせてもらいます。

木刀というのは日本刀をイメージしたものの、木剣は木で出来た剣という意味で使っております。

設定が更新されました！ピロリロリーン

実際にやってみた（トリビア風）（前書き）

特別ギャグはありません、ただフラムが、たくさん、ネタ技を開発しました！！ パクリ武器を作ったんだぜ！！ という事実をを認識してもらったために書きました。

まんま作者の暇つぶしです、内容は普通です。

伏線はりました。

それと脈略がないのが、三章です。（伏線張りもね！）

実際にやってみた(トリビア風)

それは何気ない一言で始まった。

「フェイト様と師匠どっちが強いの？」

物は試した、新しい魔法も試してみたい、そういえば武器の性能試してみようかね、などの思惑の中、名指しされた二人は、着々と準備を始めるのであった。



フラム、s別荘中心部

「ヴィシユ・タルリ・シユタル・ヴァンゲイト 集え精霊わが右手に 俺のこの手が真つ赤に燃える！ 敵を倒せとどろき叫ぶ！ はああああああああああああああ 『必殺！！ バーニング・フィンガアアアアアアア！！！！』」

「ヴィシユ・タルリ・シユタル・ヴァンゲイト 砂の壁 堅固なる城壁 絶対守護の盾 形を変えて我を守れ 出でよ 『堅牢の守り手』」

フラムの燃え盛る右腕と、フェイトの召喚したかなりの強度を誇る  
鉱石を砕いてできた砂を魔力で圧縮した砂の球体がぶつかる。

「ぬおおおおおおおおおお」

「はああああああああああ」

ズドーーーーン！

そして二人を中心として大爆発が起きる。

「くくくきゃああー」

あまりの余波に観戦していたフェイトガールズが驚いて大きな声を  
出していた。

「っ！ 二人はどこへ！」

「あそこでス！」

すぐに体制を立て直して二人を探そうとする調、音がする方で二人  
の場所を察する環、二人はフェイトガールズの中でも最近仲間にな  
った二人だが種族の特性もあるだろうが、めきめきと精神的要素の  
レベルを上げている。

「であああああああ」

「……………」

猛烈なラッシュを仕掛けるフラム、それを捌くフェイトその速度は普通なら目でとらえることは困難な速度であるが、

「師匠とフェイト様の速度は拮抗しているみたいですが……」

「よく見えないです」

「ほとんど互角みただけで、シシヨーの拳が何発かはいつていまず」

「む、今腹部に入ったな」

猫の俊敏性の副産物としてとても高い動体視力を持つ曆と魔眼によって強化された左目を駆使して見ている焰フラムとフェイトの攻防を解説する。

「それじゃあ、フェイト様が劣勢ってことですか？」

「師匠もなかなかやりますネ」

「シシヨーもやるときはやる人ですね」

「いや、そうでもないみたいだ」

制御できるようになった魔眼を使い二人の攻防を見ていた焰はフラムの優勢なのを否定した。

「え？ シシヨーの攻撃が入ってるのは焰も見たじゃにやいですか」

「残念だけどフェイトさんの体の周りに魔力が停滞しているのが視



えるから、砂の鎧を展開しているはず、それなら決定打も無効化される」

魔眼と化した左目を青白く光らせながらそう解説する焰、彼女は前と比べ少しばかり魔眼の制御ができるようになっていたのである、ただ完璧ではないので戦闘時ぐらいしか眼帯を外さないが。

「あ、フェイト様が攻勢に入りました」

「砂の鎧を外したみたいですね、さっきより早くなった気がします」

「あ！ シシヨーが防御の構えに変更しました」

「カウンターを狙いに行くのか」

しかし、フラムのカウンターは躲され、フェイトの踵落としがさく裂しフラムは地面に突っ込んだ。それに続くようにフェイトも地上に降り立つ。

「ッ！ 全員ここから離れる！！ フェイトさんが大技を使うぞ！！」

「え！？ 大技ですか！」

「フェイトさんの足元に魔力が溜まっていつてる、おそらく『砂塵大瀑布』だ！」

「まじですか！ 飲み込まれちゃうでスヨ！」

「私が木で足場を作りますから全員飛び乗ってください」

調が高さ十メートルの木の幹を召喚し全員それに飛び乗る。

その時、フェイトが足元の地面を踵でこすり砂煙を巻き上げた瞬間、砂の大津波がフラムの着弾点を襲った。

そして大量の砂が下の方向へと圧力を加え地震と変わらない揺れが起きた。

「シシヨーが潰ちゃった！」

「さ、さすがにやりすぎな気もしますが……」

「いえ、フラムさんも少し本気出したみたいですよ」

焰はフラムの魔力が砂の中でダダ漏れになってるのを見てフラムが何かしたのを感じていた、そしてフラムがいた地点から巨大な火柱が上がった。

そして火柱が収まるとそこには髪が赤くなり体から炎を吹き出しているフラムの姿があった。

「あれって、焰の精霊化かな？」

「いや、フラムさんから聞いた話だと、ただの自身炎化らしい」

「何が違うのですか？」

「私の精霊化は文字通り精霊になることだが、フラムさんの自身炎化は体を構成している魔力を得意の炎と化す技だ、つまり今のフラムさんは人でも精霊でもなくただの炎になっているというわけだ」

「じゃあほむ」

「でも体が炎になるってことは触ることができないんじゃないですか？」

「そういうわけでもないでしょう、炎化だとしても体を構成しているのはあくまでも魔力でできた炎、魔力付加をすれば触れないこともないかと」

「その通りだ、私も完全に精霊化できるわけじゃないが、精霊化した私を素手で捕えたフラムさんには驚愕したな」

「「ふむふむ」」

「……はあ」

周りがフラムの技の考察をしている中、ずっとフラムとフェイトの戦いを見ていた栞が突然ため息をついた。

「どうした栞」

「いえ、フェイト様も変わったな、と思ひまして」

「そうなのですか？」

新入りの調が加入した時すでにフェイトはフラムに毒され、クールさは残っていたが、少しばかりネタに走る傾向があった。

「……………」

「確かにいろいろ面白くになった気はするけどあまり変わったよう

には見えにゃいんだけど……」

「デス」

「そうか二人は既に毒されたフェイト様の時にであったのか……」

焰が少し苦笑する、自分は敬愛する人の存在でフェイトの変貌をあまり気にはしていなかったが、フェイトの変わりようにビックリしたのも事実である。

「それもこれも全部フーちゃんのせいですわ、まったくあの人はいつもいつも……ブツブツ……」

「まあ、フラムさんが考えた『ネタ技』というやつを普通に使っている時点でアウトなのは確かだな」

「『ネタ技』ですか？」

「ああ、ちょうど今出した技も『ネタ技』らしいぞ」

焰が指をさした先には、砂でできた刃が地面を伝ってフラムに襲い掛かっているところだった。

「それほど悪くない技だと思つのですが？」

「まあ、もともとは金属の刃を出現させ敵に飛ばすのがフェイト様の技だったのだが、ホーミング性能を付けるべきだという意見からあの技を使い始めたとか……」

「まあ、フーちゃんの考えた、ふざけた技にもまともなものがあっ

たのが救いですわ」

「あ！ いつの間にか二人とも剣を使ってるにゃ！」

フェイトは左手に石斧、右手に砂を纏わせて刃物のようにしている。フラムはどこから取り出したのか、柄は青、刀身の中心線も青、刃は白色の西洋剣らしきもので応戦している。

そして何十合と打ち合った後二人は距離をとる。

その瞬間、とてつもない危険信号を感じ取ったのはフェイトガールズ最古参である栞だった。

「障壁全力展開！」

あまり魔法の使えない栞のためにフラムが作った、簡易魔法障壁精製装置、形は腕輪だが、魔力を流すことで障壁を張ることができる。少し遅れたものの、この後おこることが予想できたのか、焰も自分のマントをで身を隠し呪文を唱える。

「Awakening！」

すると、マントが赤色になり、うっすらと魔力を帯び始めた。

残りの三人もいきなり二人が防御態勢にはいり驚いていたが、二人に倣い、自分たちも防御態勢に入った。

「エクスカリバー……」

デザート  
「砂漠の……」

「ガラテイイイイイン！！」  
ラスバード  
「金剛宝刀！！」

フェイトが生み出した巨大な砂の針が4つそれぞれが弧を描きながらフラムを突き刺すように襲い掛かり、フラムの剣から強大な魔力が放出され、炎と化しながらフェイトに襲い掛かる。

そして二人の攻撃がぶつかり、そして超弩級の爆発が生まれる。

チユドオオオオオオオオオオおおおん！！！！

「……………！！」

その爆発音は、小女たちの絶叫すらいとたやすく飲み込んだ。

そして、爆発の余波が収まり、戦場だった場所を見るとそこには、真っ黒こげになったフェイトと、砂が体半分覆っている、左腕が曲がってはいけない方向に曲がり、右足が体から離れているフラムがいた。

そんな惨状を見てフェイトガールズたちは、二人を介抱するのであった。

結論、二人が戦うと、引き分けになるが事後処理が面倒。



**実際にやってみた(トリビア風) (後書き)**

まだまだ、パクリ技は存在します。

ちなみに、フェイトのオリ魔法『堅牢の守り手』は攻防一体の技で、めっちゃめっちゃ硬いです、なので大半の打撃攻撃は防げます、そして防いだ瞬間、攻撃を防いだ砂で敵を捕まえる、というコンセプトで作りました。(発案者はフラムである)

あとは、赤毛の砂使いさんや砂ワニさんのパクリです。使い勝手はいいのでつかっちゃいました。

質問や、こんな技をフェイトやフラムその他の人々に使わせたい、等ございましたら、感想、メッセージなどをお願いします。(作者はヲタクですが、それほど技などの知識がありませんので)

使わせたい技はできればメッセージでお願いします。



## 修行 竜編 のよーなもの(前書き)

別に、フラムはフラグを建てることはそうそうありません。  
忘れていたかもしれないませんが今のフェイトガールズは5歳ぐらいな  
のを忘れなく。

今回はMH3をやっている思いついたネタです。

特別笑えませんが、伏線張りど、せっかく魔法球の中に龍がいるの  
に登場させないのどうかと思ひまして書きました。

## 修行 竜編 のよーなもの

ここは、フラムの魔法球の中に存在する密林、通称東の森である、そこに二人の人影があつた。

「てなわけで、ここは見て覚える、それをモットーに修行をしたい  
と思います」

「わかりました！！ シシヨー」

「わかつたデス」

何だか大きな袋を持ってきたフラムと元気に返答する猫娘こと暦、  
龍娘の環の三人がいた。

「ぶつちやけた話、自分がお主らに教えられることはあまりにも少  
ないのが現状である、そこで先輩達の力を借りることにしました」

「シシヨー！ 質問があります！」

フラムの癒し要因 part2である暦が元氣よく手を挙げる。

「何かね？ 暦君」

「先輩とは誰のことなのですか？」

「私も気になります」

その二人の質問を聞いてフラムは近くに置いておいた大きな袋を肩

に担ぎ、ついてきたらわかるさ、と含みのある返答をしてそのまま森の中へ入って行ってしまった。二人は首をかしげていたが、フラムがどんどん先へ進むので急いでフラムの後を追いかけて行った。

~~~~~

「ひとまず到着」

そう言っただけフラムは大きな入口の洞窟の前で一息ついた。

「ここに私達の先輩さんがいるのですか？」

「こそ、この奥に俺の友達さんがいるのだよ」

ふふん、と胸を張ってフラムは自慢げに言った。

「なるほどデス、師匠は人や亜人の友達がいらないのですね、だから龍を友達と言ってるのでデスね？」

「たっ環！ 言すぎだよ、フラムさんはいい人なんだから友達だつてたくさんいるに決まってるま…す…よね？」

フラムの奇行を思い出していったのか、だんだん言葉が尻すぼみになっていく唇であった。

そんな中フラムはというと、

「……………」

その場に倒れ伏しており、反応がないただの屍のようだ、という状

態だった。

が、そんなやり取りをしていたら洞窟の中から龍とは思えない、どちらかというと言った雄叫びが響いた。

「……！！」

突然のことに暦と環は驚いて腰を抜かし、お互いの体を支えながら小さくプルプルと震えていた。

「あ、入ってもいいみたいだな、二人とも行くぞ」

今の雄叫びから、この洞窟の中にいるのは、十分なぐらい大きな个体だというのが予想できるのに、いつの間にか復活したフラムはまるでピクニックに行くかのごとく、軽い足取りで洞窟の中に入った。いった。

二人も怖いのかフラムの後ろについたりとくつついて進んでいった。

~~~~~

「おう、久しぶり」

「グルルルル」

低いうなり声をあげるのは、珍しく羽の生えていない龍だった。

「あの、師匠この方は本当に龍なのですか？　なんだか同族意識はあるのですが、なんだか違うような気もするのデスか？」

そう、環の龍の姿はどちらかという背中から翼の生えた龍なので、

自分の目の前の存在が龍なのか判別しきれないでいた、実際のところ魔法世界の龍はたいていワイバーン型か背中から羽の生えている龍の2パターンが主流なのだから仕方のないことなのかもしれない。

「何を言うか、二人ともこっちに来なさい」

いつの間にか寝そべっている龍？らしき存在の前足あたりにいたフラムは二人に手招きした。

「これを見なさい、立派な鱗があるじゃないか」

恐る恐る龍？日被いて言った二人が見たものは、関節部に毛が生えているものの皮膚にあたる部分にどう見ても鱗があった。

「あ、こうしてみると龍って感じがしますね、少し信じられません  
が」

「見たことのない種なのデス」

「確かに龍なのかといたくなるかもしてないが、彼は立派な龍だぞ？ぶっちゃけた話オオカミの類、その辺が進化したと俺は睨んでる」

「いやいや、進化って……」

「環、ここは師匠の魔法球の中だよ、なんでもありな不思議空間にやんだよ？別段不思議なことじゃにやいよ？」

「言いたい放題だな貴様ら、それと暦、猫語が顕著に出てるぞ？動揺してんのモロ分かりだ、コノヤロー」

いそいそと袋の中身を取り出しながらフラムは弟子たちをジト目でにらんでいた。

「ガウ（で、要件はなんだ？）」

「ん、ちょっと手伝ってほしいんだよね、昔みたいに軽く戦うだけでいいからさ」

「グルウ（報酬は？）」

「雪山にしか生息しないマンモスもどきの霜降り肉、子供の肉だからやわらかいぞ？」

「グウ、グルウ（のった、これからもよろしく頼む）」

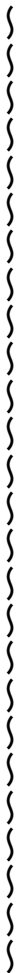
いつの間にか、龍と話ができる（魔法球の中の龍ぐらいだが）ようになっっていたフラムであった、しかし、はたから見れば、

「ヒソヒソ（シショー大丈夫かな？）」

「ヒソヒソ（見なかったことにしてあげるのが優しさというやつデス）」

となるわけである。

「ゴルア！ 手前らしばくぞコノヤロー！」



そして場所は変わって森の中にある、少し広い草原。  
そこに白い髪の少年と青い羽根のないの龍が対峙している。

「うっし、ひとまず環に関してはいつか龍の姿に完璧になれた時の参考、曆に関しては野生の動物の動きというやつ勉強、とでも思っ  
て今からの戦闘を見ていてくれ」

「「はい（デス）！」」

そして、人間と龍の戦いが始まった。

「っしやああ！！」

先手必勝と言わんばかりに飛び出して龍の顔めがけてパンチを繰り  
出すフラム、それを龍は頭の角で迎撃する。

ガキーン！！

と、人体構造上ありえないような鈍い音が響く、龍も巨体でありな  
がらフラムのパンチに反応して迎撃したのである、十分すごい話で  
ある。

「グルア！！！」

お返しと言わんばかりに、龍のパンチがフラムを押しつぶすように  
襲い掛かる。

「何の！」





「グオオオオオオ」

そして距離をとった龍が雄叫びを上げたかと思うと角に電気が溜まりだしフラムに向かって放たれた。

チユドオオオオオン！！

「きゃあー！！」

電撃が地面を吹き飛ばし、地面を黒く焦げさせ、さらに黒の中に赤色まで混じったクレーターを作り出した、そしてクレーターの中にはフラムはいなかった。

「シ……シシヨー？」

「ま……まさか吹き飛んだんじゃ……」

二人は完全に今の攻撃でフラムが跡形もなく消し飛んだと思ったみたいだが、龍はちがった、即座に攻撃を察知しその場から飛びのいた。

ディアブルジャンプ  
「悪魔風脚一級挽き肉！！」

ちょうど龍の真上から足が燃えているフラムの連続蹴りが放たれる。躲かされてしまったが、攻撃を受けた地面が吹き飛んでいるのを見ることがかなりの威力であると分かる。

「へ、やるな、コンチクシヨー」

「グルルルル（おまえもな）」

そして両者は睨みに入るが……

「ジジョー！ いぎでだんですぞねー よがっただぞー」

「ひっぐ……ひっぐ……」

「ぬおう！ こらお前ら、危ないから離れてなさいって！」

弟子二人に抱き着かれて、なんだか一気にグダグダになってしまったのでした。

「ググウ（やれやれ）」

~~~~~

「参考になったか貴様ら」

「はい！ もちろんです！ ……たぶん」

「はいデス！！」

「まあ、一回見ただけで何か掴めるわけじゃないからな、また別の機会があったら今回のような修行もするぞ」

「「はい！」」

こうして、フラムの指導はこれからも続くのであった。

数年後再開したフラムにキツイ尻尾の一撃を決める環がいたそうなの……

修行 竜編 のよーなもの（後書き）

今回のようにフェイトガールズの戦力アップになるきっかけ話が3話の主な内容になるかもしれませんが。もしかして今回だけかもしれません。

絶対に見たい娘がいるのならその気持ちを感想版に！！

質問疑問何でもござれ。

こんなつこつといいな、できたらいいな　なんてネタもあつたらなら募集します。よーするにだれだれにこんな技を！　といったものです、気軽に言ってみてください。ただし魔法使いに当てても耐えられそうな技をお願いします。

今回のネタは適当感あふれていますが見捨てないでください。

そろそろ原作の方に入りたくなってきました。

原作突入への話 ー (まさかのオリキャラ情報!?)

マガジンネタあり

これで原作に入れる準備はできました、けどそれまでにまだまだイ
ベントがあるんですよ、ひとまず投稿。

場所、帝都ヘラスの中心都市 某所にて。

「うむ、今までいた場所が田舎の方だと思い知らされるな、まった
く」

そう、ぼやきながら赤マントを羽織り、トレードマークの赤色中折
れ帽子をかぶったフラムが、愚痴ってた。

「まあ、都会だから色々期待もできるし、なんか興奮してきたぜい
！」

「は、ここが帝都の中心都市……いつ見てもおつきいですよね」
フラムはフェイトガールズに修行を休ませ、帝都ヘラスに遊びに來
ていたのである、そして今はフラム班とフェイト班で別行動といっ
た形になってる。
ぶつちやけ、フラム班はフラムと焰しかないのだが。

「ふふふ、都会ならば俺が作った作品もそれなりの値段で売れるは
ず、一攫千金とは言わないが稼がせてもらいますよ、ククク」

やはり、材料は魔法球の中で調達できてもそれ以外、工具や工房の
点検道具、実験器具その他もろもろにはお金がかかり、フェイトガ
ールズも増え、食費もUP。

困ったときの、デユナえもん、という方法(金恵んでと床に頭こす
り付けて懇願する)もあるが、さすがに精神的にキツイものがあり、
今ではこうして月に4回ぐらいはこうして帝都に赴き、お金を稼い

でいる。

「うし、久しぶりに服でも買うか？ それとも掘り出し物でも探しに？ うむむ、悩むね、焰は何か買いたいものとかないの？」

「私ですか？ 正直服や装飾品はフラムさんが作ってくれますし、やっぱり本とか暇つぶしの道具ぐらいしか思いつきませんよ、でも本を読む暇があったら修行しますけど」

そう、フェイトガールズの服は大抵フラムが作ることが多い、どんな服を作ってほしいか聞いて、魔法球の設定時間を馬鹿みたいにあげる、そして作成開始、そしたら数時間後には出来上がり、布と裁縫道具ぐらいしか買わなくて済むから、結構節約もできていたりする。

「……そうっさね、ひとまず売るもの売ってぶらぶらしながら考えるか」

「はい」

そうして二人は手ごろな武器防具やに入っていく。

~~~~~

「うむ、行きたくなかった凍土の奥深くに行ったかいたがあれ」

いつものことながら、趣味で作った武器やら防具がこんな風に役立つと嬉しいらしくフラムはルンルン気分です店から出てきた。

「火山の方で見つけた宝石も結構な値段で売れましたよね」

ガツポガツポである。

なかなかの大金を手にし二人はフェイトに連絡を取り集合場所へと行くこととする。

「この辺りはまだ平和ですよ」

ぼつりと親と戯れている子供を見ながら焰がそう呟いた。

「……」

「あ、すみません余計な気を遣わせてしまって」

「いやいや、気にすんなって」

そう言ってフラムは焰の手を握る。

「あっ」

「んじゃ、行くのか？」

「はい！」

焰の笑顔に癒されつつ、先を急ごうとしたとき、何人かの男の子たちが遊んでるのをが目に入り、そして男の子たちが手に持って遊ん



でいるものを見てフラムは驚愕した。

「はあああああ！……！」

「わひゃい！いきなりどうしたんですか？」

「あ、すまん焔、……ちょっと時間とらせてもらっよ」

「え？え？え？」

困惑している焔を置いてフラムは遊んでいる亜人の男の子達の方に早足で近づいていく。

「ちよつといいかい？」

「ん？兄ちゃん誰？」

まだフラムよりも小さい子供たちが遊んでいるのを邪魔されたのか、少し不機嫌にそうになる。

「いや、その手に持っている人形なんだけど……」

「兄ちゃん、これ知らないの？遅れてるよ」

「そつだそつだ、男ならみんな知ってるぞ！」

「おう、俺たちのヒーロー、そしてロマンなんだからな！」

自慢するように男の子たちが人形を掲げる。

別に、フラムはその人形を名前を知らないわけじゃない、ただしそ

れは前世の記憶のおかげである、そして、こつちの世界（ネギまの世界）にはないものである、旧世界にこの存在がないことを知つてもものすごく悲しんだこともある。

フラムが話しかけた男の子が持っていたのは風の魔装機神、別の子は古鉄、白騎士などなど、男のロマンが詰まった人形ばかりである。

しかし、一人の男の子が持つてる人形は見覚えがなつかた。ロボットというより全身装甲フル・スキンの人間っぽいのだが。

「えと、そつちの人形なんだけど……」

見覚えのない姿の人形を指さすと、男の子たちは驚愕した。

「……えー……！ 兄ちゃん『イグニス』を知らないの……！

……」

「え、ああ、うん、何というか、すみません」

あまりの驚かれようにシユンとなるフラムだった。

「あの『紅き翼の人形使い』を知らないってよっぽど遅れてるよ？

」

「おんなじようになかつこしてるくせに……」

「は？」

フラムは聞いたことのない存在のせいで、あまりのも間抜けな声が出てしまった、一応紅き翼のことは知ってる、原作知識はちゃんと

あるためメンバーのことも覚えてる、しかしその記憶には『人形使い』など聞いたことがなかった。

前々から、フラムは町に来てから妙に視線を感じるとから思ってたのだが、こういうことだったのである。

そして運が良かったのか今の間抜けな声のおかげで、別の情報も得られた。

「あれ、もしかして、『イグニス』のことじゃなくて、こっちの限定版の人形のことを聞いてたの？」

「へ？ あ、ああそうなんだよ、自分もイグニスのファンなんだけど、その人形は見たことなくて」

「あゝ、兄ちゃんメガロの方に住んでるでしょ？ この人形が売ってるのは、オステイアとここぐらいだからね」

「そうそう、人形自体も『イグニス』本人が作った分しか存在しないから、今ではそう簡単には手に入らないしね」

「でも『イグニス』のファンならこれぐらい知ってなきゃ駄目だぜ？ 俺なんかヘラスver、オステイアver、メガロver、全部そろえたぜ！！」

「ははは、そうなんだすごいね、うん、いいこと聞けたよありがとう」

「ところで兄ちゃんさ、その帽子とマントどこで売ってたんだよ」

「おお、それは気になる、結構似てるよなー、教えて教えて！！」

「ん？ これか？ 帽子は売ってたのを改造しただけだけど、マントは作った」

「すげー、一応『イグニス』のファンなだけはあるな」

「ははは、ありがとう、帽子はないけどマントは予備の奴があるからあげるよ」

「うおおお！ まじかよ兄ちゃん、やる〜」

「ありがとうございませすー！」

フラムは、まだ術式が施されていない予備の作りかけのマントを子供たちへあげ、焔の所へ帰って行った。

~~~~~

（過去に関してすでに原作知識と違う展開になっているのか、これは参った、もしかしたらネギの近くにその『イグニス』ってやつがいるかもしれない、いなくても麻帆帆良に来る可能性つてもある、やばいな〜）

「……………」

（しかも、『イグニス』以外の人形の姿からそいつも転生者だつて決定してるしな〜、こりゃ厄介だぞ、ただのハーレムを作りたいうんて考えてるやからだったら俺殺されるかもなあ、でも俺と似たような恰好つてのも引つかかるな、しかもあれどう見ても仮ライダー ーっぽいんだが、なんか三色ライダーなんていたか？）

「…ん！…ん！！」

（もう、フェイトたちに土下座して『完全なる世界』の一員として働こうかな？ でもそれだと俺についていきたくて言った焰に悪いし……）

「フラムさん！！！！」

「ひゃい！！」

「呼んでるんですから、返事ぐらいしてくださいよ〜」

「ああ、すまんすまん」

「考え事ですか」

焰が心配そうにフラムの顔を覗き込んでくる。

「あはは、そんな感じ……、なあ焰、ちょっと聞いてもいいか？」

「はい？」

「紅き翼の『イグニス』って知ってるか？」

「はい、それはもちろん、『イグニス』さんは私たちみたいな亜人のヒーローなんですよ！」

「へ〜」

「知らないのですか？」

「……あー、今知った」

「????」

「あれだ、デユナミスさんがくれた知識にあつたわ、今まで興味なかったからその項目を読まなかったんだが、失敗だったな」

「そうなんですか、そういうえば、栞や調達と話したことがあつたんですけど、フラムさんのその恰好をみて、『フラムさんはイグニスさんなんじゃないか？』なんて話もしたことがあつたんですよ、一応フラムさんが趣味で着ているって聞いてから違うんだなって思っただんです」

「ふーん、で亜人のヒーローってのは？」

「それはですね、『イグニス』さんは紅き翼解散後、人知れず私たち亜人のためにいろいろ尽力してくれたんです、戦争の傷跡が残る土地を元に戻したりそれぞれの部族に適した環境を考え作りだしたり、部族間対立を沈めてくれたり、それはもう大活躍です！！」

「へ〜」

「ただ、いきなり、いなくなってしまうたんです」

「はい？」

「行方不明になってしまったんです」

「それはまた」

「そのせいか、『イグニス』さんが北の主要都市に配備させた人形軍団も動かなくなってしまい、今では平和の象徴として村や町の中心に飾られているはずです」

「ということ、ここにも？」

「いえ、首都にはなぜか一体も存在していないんですよ。噂ではこの地下に安置されてるとか……」

(なんだか男のロマンス的な話だな)

「ふーん、でもそれって奪われたりしないの？」

「……実際何体かは盗まれています。けど次の日には元の場所に戻っているんです」

「……ホラーだなそりゃ、動かないはずなのに動くとは」

「はい、でもみんなは人形が自分で帰ってきたって信じてるみたいですよ」

不思議な話を聞きながら、フラムはふと思考する。

(ふむ、悪い人間？ ではなさそうだな、アフターケアも甘いところはあるが自分がいなくなってもどうにかなるようにしている、けどおかしいな？ 今まで回ってきた場所には北の方もまじってるのに見かけていない、謎すぎる)

「俺、今まで見たことないんだが？ というかそんな便利なやつらがいれば調や環の故郷は襲われなかったと思うんだが？」

「壊されたんです、今まで見たこともないような人形に、私が生まれる前のことですので詳しくは知りませんが、……そのせいでもと部族間の関係が悪かったところは、たびたび争うようになり、調や環など狙われやすいの部族は襲われました」

「もしかして今でもその正体不明の人形は存在するのか？」

「それはわからないんです、……帝国のニュースでは行方不明になっていた『イグニス』さんがやつつけてくれたと言ってます、けどそれと同時に『イグニス』さんが死んでしまったとも……」

(へビーだな、おい)

「そういえば、『イグニス』さんが死んでしまった後それを追うようにナギィスプリングフィールドも行方不明になったらしいですよ？」

(……それなら、デユナミスさんは何か知ってるかもしれないな、フェイトに頼んで会いに行ってみるか？)

「フムフム、勉強になったわ、ありがとな焰」

フラムがわしゃわしゃと焔の頭をなでる。

「えへへへ」

そして頬を赤らめてかわいく笑う焔、これがフラムの癒しのひと時である。

「よし、みんなのところへ出発！」

「おー！」

やはり癒される。

~~~~~

そしてその後、フラムが作ることがほとんどない、フェイトガールの下着等を買ひ、お小遣いをあげ各自自由行動、栞達はフェイトと仮契約しているので念話や召喚があり、焔は仮契約はしてないが、フラム特性髪留めのおかげでどこにいるのか察知できるので迷子の心配なし、魔法様様である。

そしてフェイトとフラムは二人でお茶をしていた。

「ふう、これならフラムが入れたコーヒーのほうがずっとおいしいね」

「嬉しいこと言ってくれるねえ、けどそうするのは店の中で言うものではないぜ、兄さん？ 店員さん苦笑してるぞ？」

そんな感じでたわいもないことを話していく。そしてお互いに話すこともなくなり、フェイトが三杯目のおかわりを頼んだときフラムが口を開いた。

「兄さん、少し頼みがあるんだがいいか？」

「ふむ、内容によるけどわが弟の頼みなら喜んできくよ」

久しぶりに頼ってもらえたのがうれしいのか若干笑顔になっているあたり、フラムの頑張りがかがえる。

「あはは、実はデュナミスさんに会いたいんだ、だから、本拠地に連れて行ってほしい」

「ふむ、別にかまわないけど、いきなりだね、何かあったのかい？」

「ああ、ちょっと気になることがあってな、ナギィスプリングフィールドのこと、あと『紅き翼の人形使い』のことを詳しく知りたいんだ」

「それはまた突然だね、何か理由でも？」

「ああ、もしかしたら魔法世界の問題をどうにかする一歩になるはずなんだ」

魔法世界の問題をどうにかする、フラムがそう言ったとき、フェイトの顔に一瞬影が差す。

「へえ、まだそんなこと言うのかい？ この魔法世界の問題を解決する手段なんてあるはずがないのに、いい加減目を覚ましてほしいね」

不貞腐れた態度でフェイトはそう吐き捨てる、ばかばかしいと言わんばかりに。

「悪いね兄さん、俺は自分のやりたいようやって決めたから」

実はフラムはフェイトに自分の気持ち、魔法世界の問題をどうにかしたい理由をまだ話していないのである、そのせいでこの話になるとギスギスした空気を作ってしまうのだ。

「はあ、分かったよ、弟のためだ、それぐらいはしてあげるよ」

「ははは、ありがとう兄さん、帰ったらおいしいコーヒー入れてあげるよ」

「……………／／／」

ぷい、と視線をそらしコーヒー飲み始めるフェイト。

最後はこんな感じで話が終わるのである、妙にブラコンっぽくなってしまったフェイトが折れておしまい、案外仲はいいのである。

そしてこのフラムの行動が原作介入への一歩となるのであった。

簡単な解説『イグニス』は自分も戦いますが戦力差や広域殲滅を手伝ってもらったために自分で作った口ポットを操って戦います、糸を使って操ってるわけじゃありませんよ？ この辺も伏線かな？

やりたかったネタ

波打際のフェイト君

場所は飛んで日本の某港、今日も趣味の釣りをしに来たフェイト君、しかし今日に関して、いつもなら考えられないぐらい狼狽していた、その理由は、

「いや、たつくんが続いてごきやん子供に釣り上げられるとはね」

(……人魚か？ 人魚なのだろうか？ 魔法世界ならまだわかるのだが、ここは旧世界だぞ、いやここは日本昔は妖怪の類がいたと聞く、それなら問題……ない……のか？)

「君どーしたと？ 汗えらいでとるよ？」

「いえ、人魚さん……ですよね？」

「そっさね、けどあたしにはむろみって名前があるんよ？ できれば人魚じゃなくてむろみと呼んでほしかと」

「ああ、わかったよむるみさん、自分はフェイト・アーウェルンクスと言います」

「ほー、うち人やなかのにうちらん言葉が達者やね、まあここで会ったのもなんかの縁、仲良くしようやなかか」

この小説のフェイトだからできるネタでした。

なんか、楽しくなっちゃった。博多弁が性格じゃないのは目をつむってほしいです。続編やるかも？

それではみなさんまたいつか。質問感想まってるよ。

## 原作突入への話 その二（前書き）

前回、前編として乗せたのですが、分ける必要性を感じなくなってしまうので、書き直しました。

前編と後編を混ぜただけなんですけどね。  
本当にごめんなさい。

フェイトの独白が少し自分的に文才が欲しかった部分です、変だなとか感じてでもできるだけスルーでお願いします。

## 原作突入への話 その二

ズドン！！ と着弾した地面が抉るほどの質量をもつ石柱が何本も降り注ぐ。

「くそ！　なんでこうなっちゃったんだよ！」

フラムは愚痴りながらも自分に襲い掛かる猛威から逃げ続ける、そして隙さえあれば小技、体勢を崩し大技、これの繰り返しだった。

「ぬお！　あぶねえ！　くそつ、当たり所が悪かったら普通に死ぬぞこれ！　まあ、本当にに死ぬかどうかなんてわからんが……、うお！　かつすつた！」

あつちには殺す気で攻撃をしているのにこっちは手加減しながらの戦い、正直スペックが同じ者同士、この状況はまずいとフラムはかなり焦っていた。

「どうしてこうなっちゃったかねえ！　畜生！」

今度は、遠距離からの攻撃が止み、相手が一気に距離を詰めてきた。

「あああああああつああああ！！！！」

「死にたくないんでな、腕の一本や二本覚悟してもらうぞ、フェイトオオオオオ！！」

ゴギン！！　と、フラムとフェイト二人の拳がお互いの顔に突き刺さった。

~~~~~

〈数時間前〉

「勝ったどー！！」

そこには少し服がボロボロになったフラムが、それ以上にボッコボコになったデユナミス足を蹴にしている光景だった。

「ぬう、こつも簡単に我を下すことができるようになってるとはな、我が設計したアーウェルンクスシリーズの上に行く強さを身に着けたか？」

「その辺の実感はないけど、まあ日々の修行が実っただけさ、けど今ならフェイト以外の兄弟なら簡単に倒せるだろうけどな」

珍しく、意地の悪い笑みを見せるフラム、実際の所この戦いはデユナミスが確かめたいことがあると言って、フラムに戦いを申し込んだのだが、フラムは、以前の修行の恨みを晴らすチャンスだと考え、本気スタイルでその戦いの申し出を受けたのである。

別に修行でばこぼこにされたことに関してフラムはデユナミスに恨みを抱いてないのである、デユナミスが修行で組手をしているとき、

時折「タカミチめー！」「ゲートルウウ！」と言っていたのを聞き、どうも八つ当たりが含まれていたことを察し、そのことに関して恨みを持っていたのである。

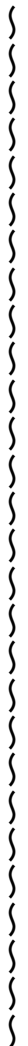
「ふっ、その通りのようだな」

どこか清々しさを含んだ声を出すデュナミス。

「そんなことよりも、今の戦いで納得がいった、貴様の聞きたいことをおしえてやる」

「んじゃ、いろいろ教えてもらっせ」

そしてフラムはイグニスについていろいろ聞くことができたのである。



「それで、貴様はこれからどうするのだ？　ここまで詳しく聞く理由もそこにあるのだから？」

「まあね、デュナミスさんのおかげでこれからの進むための道が完璧になった、あとは臨機応変ってやつさね」

「魔法世界の崩壊を防ぐための道か？ あの人形使いの情報がそこまで重要とは思えんな」

「たしかに魔法世界の崩壊に関しては役に立たない情報かもしれないけど、魔法世界の崩壊を防ぐ方法を探すのには役に立つのさ、これが」

「ほう、……具体的に何をするつもりだ」

「イグニスの人形だって、言ってサウザンドマスターの関係者と接触しようと思ってる、恰好も似てるらしいからどうにかなるかな、って思ってたわ」

「……くはははは、なるほどなそれはいい、一度人形使いと戦った私が保障しよう、その策は上手くいくだろうさ、証拠にその帽子でも見せればいい」

「まじで！ そこまで似てるのかこの帽子」

へへ、と感心しながら、自分の帽子をまじまじ見るフラム、何か思うところがあるのかいまだにくつくつと笑うデュナミスが気になる様子だが、無視しといた、どうせろくでもないことだろうとフラムの第六感が告げていた。

「さてと、やることやったら出発するわ」

「そうか、ところでお前の従者はどうするのだ？ 連れて行くのか？」

どこか、フラムを試しているような声色である。

「焔はまだ従者じゃないのだが……、いや、連れては行かないさ、俺の手伝いをしたい人物だろうと、わざわざ『完全なる世界』の関係者を連れて行く気はないさ、まあ、問題が片付いたら一緒に連れて行ってやるさ」

お人よしにしては意外な答えであるがこれが一番正しいのである。フラムが行こうとしている場所はあのサウザンドマスターの息子の所である、完全に敵陣に孤立する状況でお荷物がいるのは正直いただけない。

いくらフラムがチート級の力を持っていても、まだ子供である焔を連れてはいけないのだ、組織を裏切ったといっても自称正義の魔法使いさんたちにとってフラムは組織の仲間以外の何者でもない、そんなとき情報が洩れて『完全なる世界』の一員だとばれ、焔を人質にとられればそこでお終いなのだ。

「ほう、意外な答えだな貴様なら仕方ないから一緒に連れて行くな」とどう思うと思っただが……」

「こつちの世界に来て、初めて人ぶっ殺して、初めて大切な人ぶっ殺されれば、そんな甘え考えは極力考えないようになるさ、魔法の世界はメルヘンぶっこけるような優しい世界じゃないって嫌でも理解できちまう」

「そうか、そこまで理解しているのならもう何も言わん」

「おう、あとさ、もう一つ頼まれてくんない？」

「ふん、別にかまいはせん」

「なら、じゃじゃじゃーゆーじやで……………」

・
・
・
・
・
・
・

「ほう、なるほど了解した」

「なら頼むよ、俺は荷造りしてみんなにあいさつして回ったら出発するは」

「……………なかなか面白い人間だったよ、お前は」

「ありがとうさん、じゃあな」

「ああ、おらばだ」

~~~~~  
~~~~~

「ふう、荷造りは終わったと、……………なんかデジヤヴを感じるな」

荷造りを終えたフラムは自分が初めて目覚めた部屋のベットに腰かけて少しボーっとしていた。

「あの〜、フラムさんいます？」

するとノックが聞こえ焔の音が聞こえてきた。

「うん、いるよー、はいりなよ」

「あ、はい」

おずおずと部屋に入ってきた焔だが、きよろきよろと部屋を見回し始めた。

「あれ、あまり何もないですね？　って、なんなんですか！　その荷物はなんなんですか！？」

「あ、これね、前から言っていた魔法世界の崩壊を防ぐ方法を探しにいこと思ってたね、こっちにもでっってから、いろいろ当てができたし本格的に動き出そうと思って」

「そ、それなら私も「駄目だ」「

拒絶されるはずがないと、そう思っていたのに拒絶され焔は一瞬頭の中が真っ白になった。

「えと、あの、今なんて？」

自分の聞き間違いだと、そう祈りながらもう一度フラムの返答を聞く、しかしそれは聞き間違いではなかった。

「残念だけど、場所が場所なんだ、自分一人でも手一杯なのに君を連れて行くことはできない、悪いとおも……何ですか！！あの時一緒に行くって私言いましたよね！ フラムさんは許してくれませんでしたよね！なのに駄目なんですか？ あの時言ったことは嘘だったんですか！？」「……………」

こうなることは予想はしていた、しかしフラムは焰を連れて行く気はないものである、説得できるかわからないが、少し強行手段にでた。

「え？」

フラムは焰をいきなり抱きしめた。

「ごめん、本当に悪いって思ってる、けど今から行くところは『完全なる世界』にとって、敵の本拠地といっても過言じゃないところなんだ、そんなところに君を連れて行きたくない、それに君をちゃんと守れるかもわからないんだ、それが一番怖いんだ」

(……………そうだ、フラムさんは好きだった人を殺されたんだ、だからこんなにも私を危険から遠ざけてくれようとしてくれているんだ)

「ずるいです、そんな言い方」

「……………ごめん」

「許しません」

「それでもごめん」

「なら条件があります」

「自分のできることなら何でもする」

そしたら、焔はそつとフラムから離れて上目使いでいった。

「あの、……私を……私をいちばんにしてください！」

言い切った焔は顔を真っ赤にしてうつむいた。

しかし、言われたフラムはかなり混乱していた。

(一番？ どういうことだ？ 女として？ 従者として？ いやいや従者はない、となると女として？ いつの間にフラグ立てた！？ いやそりゃ俺と一緒にいきたいっていうぐらいだから覚悟はしていたけど、今まで好感度上がるようなことしたか？ まったくわからん、好意みたいなのはわからなくはないけど、女心ってのはまったくわからないぞ！！)

色々、頭を振り絞って答えを導き出した結果、当たり障りのないであろう(……)方法を思いついた。

「えと、ちょっと待っとれ」

「え！ あ、はい！！」

焔は自分なりの告白(子供の背伸び)をしてかなりテンパっていたが、フラムも焔を傷つけない(……)ようとするためにテンパっていた。

一応大人の余裕というものを見せるために顔には出してないが。

(ん？ 大人？)

ここで、フラムは恐ろしことに気が付いた。

(自分見た目子供、けど中身もうすぐ三十路の中年男、相手まだ五歳ほどの女の子、半ば告白を受け入れた自分……………)

「うあああああああああつあああああつあああああつあああ
……………」

(俺はロリコンではない！！ 断じて違うぞ！ ちょっと上目使い
がかわいいなんて思っちゃったけど、それは正しい思考なんだああ
あああ！！)

「フラムさん！ どうしたんですか！ いきなり頭おさえて、って
駄目です壁に頭を打ち付けちゃ！ なんか血出てますよ！！」

……………もう台無しである

・
・
・
・
・
・
・
・

「すまん、なんか取り乱した」

「ごめんなさい、私に変なこと言ったせいで……………」

「いやいや、そうじゃないぞ全部俺が悪いんだ、だから気にするんじゃないぞ!」

「……………」

ついに黙りこくってしまった焔、何とかこの状況をどうにかしよう
とフラムは考えていたことを実行に移す。

「うし、焔、これ見て」

「え? ってそれは……………」

焔はフラムが手に持っていたものを見て息をのんだ。

「ご察しの通り、約束を見える形にするために仮契約でもと……、
どうかな?」

自身なさげにフラムは焔に了解を得る。

「はい!」

それに焔はひまわりのような笑顔を見せる。

少し現金すぎてもあまりよくない作戦だとフラムは思っていたが作戦
成功である。

「ほいっと、準備完了、それじゃあ……………」

「はー」

おずおずと魔法陣の中に焰は入っていく。

「あの、初めてですので、優しくお願いします……」

視線をそらしながら口元に軽く握った手を添えて、いうものだからかなり破壊力抜群だった、さらに眼帯という怖そうなイメージを持つアイテムがそのしぐさのギャップを引出、さらに破壊力が増す。

(ぐふううううう!!!)

内心では、かなりのダメージを負ってるが、悟られないように精一杯努力するフラム、もう失敗は許されないのである。

「優しくと言われても、自分も初めてだからうまくいくかわからないけど……」

(初めて！ フラムさんも初めて！ やりました！ 私やりましたよ天国のお父様、お母様！！ 焰は好きな人のファーストキスを手に入れました！！)

こっちもこっちでいい具合に壊れていた。

「それじゃあ……」

「はい……」

ここで大人の自分がリードしなければと思いフラムはそつと両手で焰の顔を挟みすつと自分の方へ引き寄せる。

そして……二人の唇が重なり、魔法陣から光が漏れる。

「お、でたか」

ここでも大人の余裕を見せるため声が若干震えてるが何とか強がって出てきたカードを確認する。

「……………」

焰は若干自分の世界に浸っていた。

「……………焰？」

「あ、はい！ なんでもありません幸せな子供は二人とか考えていません！！」

なんだかものすごいことを想像していたようで、フラムもそれを察し若干冷や汗をかいていた。

「えっと、はいコピーカード、それとマスターカードも」

「え？」

「いつか、迎えに行くからその時マスターカードを返してほしい、約束する」

「はい！ ご主人様！」

「ご主人様！」

「はい、フラムさん、じゃなくて、フラム様は私のご主人様になっ

たんですから、おかしくはないと思いますけど？」

「できれば、ご主人様はやめてほしいかな？ その恥ずかしくて」

ぶつちやけ目の前にいるのは幼いが美少女なのである、そんな子にご主人様と呼ばれるのはいろいろと問題があるとフラムは思った。

「なら、フラム様ってよばせてください」

「……マスターじゃダメ？」

「ダメです！！ 名前も呼べるのでフラム様の方がいいです！ それに私を連れて行かない罰です！」

「う……」

そこを付かれると何も言い返せなくなるフラムであった。

「それじゃあ、フラム様、出発する前にアーティファクトも性能を確かめたいので魔法球を用意してください！」

「はいはい」

出発する前に少しでも長く一緒にいたいのであろう、フラムはその意図に気付き苦笑いしながらもそれに付き合っただけであった。



「ふう、そろそろ出発かな？」

焰のアーティファクトも確認し終えあいさつ回りも大体終え最後にフェイトの所へ行く途中である。

「しかし、師匠としてあいつらに付き合ったけど、まじで泣かれるとは思わなかったな、一応裏切るようなものなんだけど？」

焰以外のフェイトガールズの所にも行ったのだが事情を説明するたびに、泣きながら行かないでくれと言われ、かなりびびくりした、あの栞でさえうつすらと涙を目に貯めていたのは驚きであったのだ。

「まあ、全員戦災孤児だからなく、仕方ないっちゃ仕方ないよな」

実際の所フェイトガールズの中で好意を持つてるのは焰だけなのでその考えは正しいのである、実際フラムは皆のお母さんポジにいたからなおのことである。

「料理は、調と焰ができるし、コーヒーの淹れ方は栞がうまくなつたし、暦と環は家事全般できるようになっていたし、大丈夫かな？ デュナミスさんとフェイトにみんなの修行を頼んどいておいたし……」

ブツブツ、と自分がいなくなっても大丈夫だなと確認しながらフェイトの部屋へと向かう。

「おーい、兄さんいるか？」

「ああ、いるよ」

「お邪魔するよ」

「どうぞ、って何なんだいその荷物？ どこか出かけるのかい？」

「おう、そろそろ魔法世界崩壊を止めるための方法を探しに行こう
と思っただけ、あいさつ回りをしていただけだよ」

「……もう出発するのかい？」

どこか冷めた声で返すフェイト。

「ああ、いきなりでホント悪いって思ってるけどさ、いろいろ面倒
事が起きそうだからさ、今のうちに「コネでも作りに行こう」って

「……そうかい、なら出発する前に少し話してもいいかい？」

「ん？ ああ、構わないぞ、なんなら魔法球使うか？」

フラムからの申し出に少し考えるそぶりを見せ、

「そうだね、そうさせてもらおうよ」

そうして二人は魔法球の中へと入っていった。

今二人は、魔法球中央エリアの庭でテーブルを挟んで一服しているところだった、しかしどこか、空気がピリピリしていて二人はお互いにまだ一言も話していない。

「さて、何か言いたいことでもあるのか？」

先に口を開いたのはフラムだった、重苦しい空気を散らすため、そしてフェイトが言いたいことを言うチャンスが無理やり作るという思い切った行動であった。

しかし、ピリピリした空気は霧散したが、今度はチリチリと息をするのもつらく、冷たい雰囲気となってしまった。

フラムは失敗したと思い、内心ものすごく焦ってた、フェイトがどこか不機嫌なのはわかっていた、だからいつもと変わらない、雰囲気ブレイカーとして振る舞おうとしたのだが、なぜかフェイトからにじみ出ていた不機嫌オーラが、フラムにピンポイントに向けられ、終いには殺気に似たものを感じていたのである。

「最後の確認だけど、本当に魔法世界の崩壊を防ぐすべを探しに行くつもりかい？」

フェイトが話しかけてくれて、少し安堵してフラムだが、フェイトから発せられている殺気がいまだに止まらず、それにあてられてか、フラムはいつもの場を和ます雰囲気ではなく真剣な態度で口を開いた。

「……ああ、行ってくつて決めたんだけ」

「行く場所は聞いたよ？ あのサウザンドマスターの息子に会いに行くんだろ？ 僕たちと敵対していた正義の妄信者たちの巣窟だ、そんな危険なところに大事な弟を行かせるなんて、兄として見過ごせないよ」

「気持ちは嬉しいよ、兄さんが俺のことを大切に思ってるのもわかる、けどさ、俺の探しているものが見つかる可能性が一番高いのも事実なんだ、それ相応のリスクを背負わないと世界なんてでっかいもの救えはしないさ」

フラムの告白を聞いたフェイトは何かに耐えるようにギリイと歯ぎしりを立てる。

「君がそこまでする必要があるのかい？ デユナミスから聞いたけど、もともとは一般人、戦いの『た』の字も知らなかったような人間が世界を救う？ 強すぎる力でも手に入れて物事を建設的に考えられなくなっただんじやないのかい？」

「そんなことはない、もう殺し殺されは経験した、だから今の俺がいるんだ、いくら兄さんでも俺の考えを馬鹿にするのは許さないよ」
少し低い声で言い返すフラム、フェイトは少し後悔した顔をしたが、すぐに元の顔に戻す。

「そうかい、君は冷静な判断でその方法をとると決めたわけだ、けどなぜなんだい？ なぜ君はそこまでする？ 普通に危険のない生活をこのまま送たっていいだろう？ わざわざ危険な場所に赴く君

の行動は理解しがたいよ」

どこか、いつもと変わらない声色、しかしフラムにはそのフェイトのとげのある言葉に込められた思いを見抜いていた、フェイトガールズと同じ『行かないで欲しい』そんな気持ちである。

「自分がしたいって、そう決めたか…嘘だ！ …！」

突然の、しかも今まで聞いたことのないフェイトの大声にフラムは驚いた。

「君はいつもそうだ、自分のため、自分がしたいから、自分が嬉しいから、そんな言葉を並べた時の君の行動は全部僕や、栞君たちのためになることだ！ 君は自分を大事にしない節がある、いつもは家事のことばかりだったから、何も言わなかったけど今回は違う、もしかしたら死ぬかもしれないんだ！ そんなの僕は許さない」

「兄さん、ちよ…！」

「君は大事な家族なんだ、栞君達と違って君は僕についていく義理なんてなかった、必要だつてなかった、なのに僕についてきてくれた、そして僕を『フェイト』として見てくれた、『兄』と呼んでくれた、そんな大切な家族を危険な場所に僕らのせいで行かせるといふのなら、僕は君の四肢を千切つても止める！」

「落ち着けて！ にいs…！！！」

いきなり嫌な予感がして回避行動を行ったフラム、椅子に座っていた体勢から無理やり横っ飛びをしたせいで地面を転がることになったが、自分のいた所を確認して絶句した、机と椅子は真っ二つ、そ

の後ろの地面もえぐれていた。

「……………」

すでにフェイトの瞳には光はなく、ただ「フラムを止める」という行動を実行するだけの人形と化していた。

「おい！ 兄さん！」

フラムの声が届いた様子もなく、フェイトは次々と魔法を放つてくる。

「くそっ！」

フェイトのことを傷つけないフラムは、魔法の射手程度の初級魔法で目くらましをしながら、逃げの一手に走った。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

フェイトの中級呪文、上級呪文を相殺するときしか、強い魔法を使わず逃げ続けたフラム、そのせいで、いまだにフェイトは健在、疲れた様子も見せず淡々とフラムを追いかけてくる、それに対しフラムは逃げの一边倒、しかもフェイトを傷つけないように注意を払っているせいか、疲れが見え始めてきた。

少し冷静になったフラムは今の状況を整理し始めていた、このまま続けたってジリ貧、最悪殺されてしまうパターンがある、そんなのはいけない、『死ぬ』ことが、ではない『殺される』ことがいけないのだ、もし殺されたらフェイトはその罪の意識のせいで自分で自分の命を絶ちかねない、フェイトガールズだって同じことが言える、自分とフェイトが死ねばきつとフェイトガールズだって後を追いかねない、そんな未来が予想できた。

「……………覚悟決めるか」

フラムはそれだけは防がねばと決意した、ならばやることはひとつ。

そこし愚痴ったが、そんな暇もないようだ、遠距離からの攻撃が止み、フェイトが一気に距離を詰めてきた。

「あああああああつああああ！！！！」

「死にたくないんでな、腕の一本や二本覚悟してもらうぞ、フェイトオオオオオ！！」

ゴギン！！ と、フラムとフェイト二人の拳がお互いの顔に突き刺ささり、お互いに吹き飛んだ。

そしてまた二人は激しい攻防を始める、いつも通りのスタイルで戦

うフラムだったが、正直きつかった、組手の時とは圧倒的に速さも重さも違う拳がフラムに襲い掛かるのである、いくら防御主体のスタイルで戦っていても何発か貰ってしまう。

「ぐっ！」

ついに捌ききれなかった一発が見事に顔に入り一瞬体制を崩してしまふ、その一瞬が仇となり、そこからはフェイトの一方的な蹂躞劇だった。

「があああああああつあああああ！！！」

「……」

本気の拳が、顔に、胸に、腕に、腹に、足にと突き刺さり地面に吹き飛ばされる。

ズドン！ と、大きい音を立てて地面に着弾するフラム。

「っおお！ がはっ！」

息をするのも辛く、うまく立ち上がることも儘ならない。そんな状態でもフェイトの攻撃は続いた。

「『ばんしょうつちぢめ万象貫くえんかん黒杭の円環』」

抑揚のない、冷たい声で呪文が紡がれる。

「！……」

うまく動けないフラムに幾百もの黒杭をよける術はない、そして黒杭はフラムに襲い掛かった。

~~~~~

～フェイトSide～

最初にフラムから、魔法世界を救う方法を探すと聞いたときそれは不可能だと、そう思った、いきなり「地球温暖化により上がってしまった地球上の平均気温を戻す」そんなことを言われたって信じられないのおなじだ。

仮にそんな夢物語な方法が見つかったとしても、その方法は確実に多くの血が流れたくさんの人を不幸にする、そうに決まってる……と、けどフラムと一緒に過ごすにつれてそんな考えがなぜだか薄れていった、『フラムならできるのでは？』『フラムならいい方法を見つけれられる』、そう考えるようになっていった。

最初は戸惑い、自分はどうなってしまったのだろうと、そう感じていた、しかしその疑問はフラムによって氷塊した、『人間っぽくなつたよな、兄さん』、その言葉は僕の胸にストンと収まった、けど自分は未だに魔法世界を『完全なる世界』へと、書き換えることが使命だと思ってる僕がいる。

きつと、そんな二つの人格が僕の中に存在するようになったせいで、

同じ存在なのに人間といつてもさし違いのないフラムに冷たく当たっていたのかもしれない。

けど、それでもフラムは僕のそばにいてくれた、『家族』として、『弟』として、それが何よりうれしかった、僕が人間でいられたのは彼がそばにいてくれたからだ。

そんなときだった、いきなりフラムが英雄の息子に会いに行くなんて言い出したのは、正気の沙汰とわ見えなかった、わざわざ敵の本拠地のご真ん中に行こうと言っているのだ、そんなの許せるはずがない、そんな危険な場所に『家族』を生かせるだなんて。

でも、彼は止まらなかった、そして僕に行ったのだ、「自分が行きたいと決めたから」、このセリフを行った時のフラムの行動は決まってる誰かのため、そして僕たちのための行動だった、きっと危険なところに行くのも僕たちのためなんだろう、そう結論付けるには十分だ。

だから僕は彼を止めてみせる、どんなことをしてでも。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

そして、正気に戻った僕は自分が何をしたのか、理解してしまった。僕はこの手でフラムを……

ゴシヤア！！

～フェイト Side END～

~~~~~

ゴシヤア!! と、嫌な音を立てながらフェイトが吹っ飛んだ。

「な! !」

「よう、相手の生死を確認しないなんて、兄さんらしくないじゃないか」

そこには右腕を振りぬいた形でフェイトに話しかけているフラムの姿があった。

「たくつ、炎化しなかったらまじで死んでたぞ」

炎化したフラムには純粋な物理攻撃は一切通用しない、その特性を利用してフラムは幾百もの黒杭から逃れられたようだ。

「どうした兄さん、もうお終いか？」

フェイトは、もう戦えないでいた、フラムのことを殺そうとまでした自分はもうフラムの傍にはいられない、『家族』ですらない、そんな存在がフラムを止める権利があるだろうか? そんな思考におぼれていた。

「僕は……僕は……」

言葉を紡ごうとしても上手くしゃべれない、そして自分の両手を見つめガタガタと何かにおびえるフェイトにフラムは……………

「ふん！」

「ブツ!!!」

思いつきり、顔を殴った、しかもさっき殴った方とは逆の方である。

「これで、チャラだ」

「え？」

フェイトはフラムが何を言いたいのか理解できなかった。

「だから、これで許すって言ってるんだよ」

分からなかった、フラムが何を言ってるのかフェイトにはわからなかった。

「僕は、君を殺そうとしたんだ、なのになんで君はそんな奴を許せる？ 僕にはわからないよ」

「『家族』だからだ」

「!!!」

「確かに兄さんは俺を殺そうとした、けど俺は生きている、それに家族が間違った方向に進んだらそれを正すのは家族なんだ、だから気にするな」

「そんなの詭弁だ！ 死ななかったのは結果論じゃないか！ 本当に死んでしまっていたらどうするんだ！」

「じゃあ、なんで石化の魔法を使わなかったんだ？」

そう、フェイトが使った魔法は中級、上級の威力の高い魔法だが防御が上手いフラムから見ればそれは普通に対処できるものだった、しかし石化の呪文など使われたら、ひとたまりもなかったのである。『石の息吹』は魔法障壁をすり抜けてくるし、近接戦闘中に『石化の邪眼』なんて撃たれたら、避けるに避けられないのである。

「それは……」

「きつと、我を失っても俺のことを考えてくれていたからだろ？
ならやることは一つ、大切な『家族』をしかるために鉄拳制裁さ」

「はは、本当に君ってやつは……」

「！」

フェイトは静かに涙を流していた。

「……そうだね、これは僕のみか」続けようや、兄さん「…何を言
ってるんだい？ このまま続けたって意味なんて……」

「意味ならあるさ、最初の本気の兄弟げんかだ、お互いの意見がぶ
つかり合ったなら、男なら拳でわからせる、白黒つけようや」

そして構えるフラム、しかしその構えは防御の構えではなく、攻め
るための構えだった。

「兄弟げんか……、なら遠慮はいらないね」

そして二人はなぐり合った、顔を殴られたら殴り返す、蹴られたら
蹴り返す、お互い武術を駆使しているが、魔法なんて一切使わない
ガチの殴り合いだった。

「自分の意思で俺は行く！ これだけは譲れない！」

「なら、僕を納得させてみる！」

髪を掴んだり、砂で目つぶし、本当に喧嘩だった。
しかし二人の顔はどこか嬉しそうに笑っていた。

・
・
・

「俺は…ぜい…絶対に…行く、そして…魔法世界を、救う…ぜい…方法を、見つけてやる」

「大事な…ハア…弟を…危険なところに…ハア…行かせる、なんて…できない」

「へっ」

「フツ」

そしてお互いが腕を振りかぶる。

「おおおおおおおおおおおおおおおお！！」

「ああああああああああああ！！」

ズドン！ と二人の顔にお互いの拳が突き刺さり、そして二人とも倒れた。

「……あゝ、動けねー」

「はは、こっちもさ」

「んで、この場合どうなるんだ？」

原作突入へのお話 その二（後書き）

そろそろ本編に入りたいと思ってるんですが、三章のほのぼの話で、フェイトパーティーなんでこうなった！？ などの解説話はおいおい更新します。

フェイトが猟奇的な行動に走ったのは、フェイトとしてフラムを止めたかった人格と創造主の使徒としての使命で、計画に仇なす者を消す人格が、ごちゃ混ぜになったからです。

フェイトの『石の息吹』等の設定は自己解釈なのであしからず。

さて前回の『イグニス』何ですが、わかる人にはもうわかっていると思います。

さてこれからもフラムを応援してください。

そして今回は初の一万文字突破の話です、読みやすいでしょうか？辛かったら、前編、後編、と次からの一万文字突破分は分けますので、一言お願いします。

おまけ

焰のパクティオカード情報

名前表記 Audiard Marina
（マリナ・オーディアール）

称号 ????

色調 朱色

徳性 知恵 (sapientia)

方位 南 (auster)

星辰性 土星 (Saturnus)

ローマ数字 XCVI (96)

アーティファクト ????

????の部分はおいおい、ぶっちやけ伏線のネタバレになるんで。
ちなみにすべて作者の自己解釈とオリ設定(名前)で成り立ってます、原作で名前が出たらしいのですが、(勝手に作者が考えた名前なので、本編で出たら、変更します)。

原作突入への話 その三（前書き）

短めですが許してください。

最後の方のフラムが、今回やりたかったことだったので、それ以降は次回に。

原作突入への話 その三

「迷った……」

一難去つてまた一難、ゲートポートでひと悶着、イギリスの空港に行くまでにひと悶着、そしてウェールズへ行く途中でまたもやひと悶着、不幸の神がほほ笑んだのだろうか？ と疑いたくなるほどフラムは災難にあっていた。

そして今フラムはなぜか森の中を、いつもの帽子は後々にとっておきたいため被つておらず黒い髪と羽織つている朱色マントを雪で真っ白にしながら歩いていた。

いつもと変わらない学ランのような服装、魔法球を入れるリュック、財布や地図など頻繁に使うものをしまつたための手提げ鞆と、後ろ姿マントを来ているのでリュックが見えないのでリーマンを連想させてしまう格好だった。

フェイトガールズの服を作つてやつたり、フェイトに色違いの普段着を作つてやつたりとしていくせに自分の服はほとんど作らず、今だに原作フェイトとなんら変わらない服装のままである、さすがに寒いのかボタンを全部占めているようだが。

一応色違い（赤色）を作つたのだが着るのに勇気が必要でお蔵入りしてしまつたらしい。

「寒いのは何とかなる、これでも炎のアーウェルンクス、自分の体を温めるぐらい何のことはない、けど、これだけはどーにもならんなら、しかも髪染めるための塗料が普通の物だったら今頃落ちてるな、これ」

はあ、とため息をこぼしながら、あまり意味のなさない地図を見な

がらトボトボと歩いていった。

バウ！ バウバウ！！

「あ？ 犬の鳴き声か？ てことは近くに家らしきものあるはず、ということとは近くに村と呼べるほどの集落があるかも知れないぞつと、これは行幸、にしし」

犬の鳴き声の方向を目指していくとそこには大きな湖があった。

「……あり？ えつと、こついつ時の地図かな？ 湖なんてそうあるもんじゃないし……ん？ 子供？ はあくこんな寒い中外で遊びまわるとは感心感心……つて、おおい！！ 寒中水泳ですか！ やばいつて、こんな時に泳いだら最悪心臓麻痺起こすぞ！！ つて溺れてるう！！」

急いで湖でおぼれている子供を助けるべく走り出したフラム、しかも魔法関係者かどうかもわからないせいで、フラムも寒中水泳する羽目になったのである。

上半身だけ服を脱ぎ、すぐさま自分も湖に飛び込む。

「あぶ、あぶ、あつぷ」

「くつ、掴まれ少年！」

「へ？ ……ち……う……お………」

少年が何か小さい声でつぶやいたが、フラムには聞こえなかつたようである。

「さぶさぶさぶさぶ、って震えべる場ワイじゃわなあいぞぞぞぞ
おおお」

すでに呂律も回らない状態のフラム、だが、

「ガチガチガチガチ」

子供の方は、すでになんり体温が失われ危険な状態である。

「くそ、…えらいびどはごういっだ…“ばれなきやいい”ど」

がたがた震えながら、アホなことを言いつつ、魔力を練りはじめる。脱ぎ捨てていた服をマントを通して魔法球の倉庫に転送、子供の服もひっぺはがし転送、さすがに魔法球の入った鞆はどうしようもないので、片手に持つ。

そして体を密着させるように抱き寄せ自分と子供をマントで包んだ。そして、自身の体温の上昇、マントの熱遮断能力を使い子供を温めながら、走り出す。

「くそ、村の方向を確認するのが先決か!？」

すぐさま上え強化した脚力でジャンプし辺りを見回す、抱えている子供に余計な負担をかけないように細心の注意を払いつつ、確認、着地すると同時にオリンピックの短距離走選手顔負けの速度で走り出した。

.....

・
・
・

村が見えてきたら速度を落とし、村へ突入する、そして一番最初に目についたおじさんに助けを求めろ。

「すみません！！」

「ん？ 見かけない顔だがか」「この子の家を教えてください！！」
「な！ ネギじゃないか！」

フラムもこの少年がネギなのか、と内心ビククリしていたがまずはこの子を助けなければと思い、続きを促した。

「それで、この子の家はどこですか！ いつまでも外にさせるのはまずいです！！」

「そうだった、こっちだ付いて着てくれ！」

そしておじさんの案内のおかげでネギの家についたフラムはすぐさまネギの処置を始めた。

どうやらおじさんも魔法使いのようで、杖を出そうとしていたがフラムの方を見た瞬間、何か躊躇うそぶりを見せた。

(……このおっさんも魔法使いかなら遠慮はいらねえな！！)

魔力を使って冷たくなっていた部屋の空気の温度を一気に上昇させ、

ベットにネギを寝かせる、そして先ほど転送させたネギの服を、手元に戻し水気を吹き飛ばしてネギに着させる。

「なっ！ 君も魔法使いなのか！ それにしてもなかなかの魔力だ」

「そんなことは今はどうでもいいでしょう？」

「そうだったな、礼を言わせてほしい、ネギを助けてくれてありがとう」

「いえ、たいしたことではないですよ、それじゃあ俺は何か温かいものを作りたいのですが、キッチンを貸してくれませんか？」

「ああ、それは構わないのだが、材料はどうするんだ？」

「いえ、その辺の物は持っていますので」

マントの術式から、料理道具と鍋、そして材料を転送させる。

「む」

ぶっちゃけフラムが使ってる転送術式は結構難易度の高い術式なので一般の魔法使いから見れば、ビックリものなのである。

「さて、Cooking Start！」

そんなおじさんの反応など気にせず、慣れた包丁さばきで、料理を始めるフラムであった。

ただ、ネギが一向に起きず次の日まで食されることはなかったとき。

~~~~~

「ネ……ネギがおぼれたって本当ですか！ お父さま！」  
いきなり入ってきた女性がフラムをネギの家へと送ってくれたおじさんへ確認をとる。

「ああネカネ大丈夫だよ、高熱を出してぶっ倒れているが、あの子がネギを助けてくれただけじゃなく、看病までしてくれたから快方に向かっているよ」

そう優しく諭すおじさんの言葉を聞いてネカネは安堵し、ネギを見守っている見慣れない少年にお礼を言った。

「ネギを助けてくれてありがとうございます！ なんてお詫びを言えば……」

「いや、別に気にしないでください」

必死な態度をとるネカネに対してフラムの態度は冷たかった、それどころか貧乏ゆすりまでしている始末である。

「あ、はい……」

相手の機嫌が悪いのを察知したのか、ネカネは少し縮こまってしまった。

「ホントにあいつに似た悪ガキじゃわい、フツの人間なら死んどるぞい」

「他にも木から飛び降りたり、犬にイタズラしたりと、まったくあの英雄の息子らしいっちゃ、らしいですけどn【バキィ!!!】  
…！」

ネギが心配だったのかいろんな人がネギの家に集まってきたのだが、その人たち全員が聞こえるぐらいの音が部屋に響いた、まるで木をたたき折ったような音だった。

「てめえら、いい加減にしろよ」

音の発生源はフラムの足元のようだった、ついに我慢の限界だったのか床を踏み抜いている。

「なんなんだねその口のきき方は！ いくらネギを助けたからと言ってそういう態度が許されると思ってるのか！」

近くにいたおっさんがフラムに注意するが、それにフラムはおびえた様子もなく、さらに食って掛かった。

「おいおいおいおいおいおおおっ！ ずっと、ずっとつとつと英雄の息子、息子つてうるせえンだよ！ ンなこと簡単に喋る馬鹿はどいつだァ、おい！」

「な!？」

見た目通りの子供から発せられるとは思えないほどの殺気が部屋を埋め尽くした、たいていの者はそれに耐えることができたが、殺気など浴びたことのないであろうネカネは尻餅をついて涙を目に貯めていた。

「しかも、黙って聞いていればなんだア! 英雄の息子らしい? 英雄の息子だから? そんな理由で今までこんな危ないことするのを放任してたのかよ! ふざけてんのか、おい! こいつはただのガキだろうが!! 英雄の息子なんて色眼鏡で見てるんじゃないよ!! 何様のつもりだあ? ああ!!!」

この世界に来て初めてフラムがガチ切れした瞬間であった、もともと原作を読んだ時から、ネギの子供のころの奇行を止めない大人たちは何をやっているのだろうか? と憤りを感じていたのだが、実際この目で耳で確認すると、フラムの怒りは、憤怒を通り越した。

「しかもお前ら、こんな状態になっちまった、ただの子供<sup>ガキ</sup>見て、その反応つてのはいただけないぜ、運が悪けりゃ、死んでたかもしれないんだぜ? それを、英雄の息子らしいでかたずけるとわなあ? 恐れ入りましたよ、英雄の息子は人間じゃありません、てか? 脳みそ湧いてんのか、テメエらわよあ??」

終いには毒舌のオンパレード、タガが外れてしまったのだろう。そして、そのフラムの喝に何か思うところがあつたのか、数名を除いて全員黙りこくってしまふ。

「なるほどな」

「あ？」

一人明らかにほかの奴らと違い、にこにこしている爺さんのつぶやきに反応してしまったフラム、なんだこいつ？ と変なものを見る目でその爺さんを見ていたのだが、

「ありがとう、ネギを英雄の息子ではなく一人の少年として見てくれて」

まるで、孫をみてほほ笑んでいるようなおじいちゃんの顔をしてフラムを見る爺さんに対して、フラムは呆気にとられてしまった。

「あ、いえ、えーと、何と説明したらいいか、まあ、それが俺の使命といいますが、何と言いますか、まあ細かい説明は後日にい」

とつさに口から出てきた、あらかじめ作っておいた嘘設定を呆けた顔でペラペラと喋ってしまうフラム、いまいち理解できていまいスタンおじいさん、ポカーンとしているネカネ、いまだに寝込んでいるネギ、原作を始めるための役者はここに集った様である。

その後、完全回復したネギ少年はフラムによるありがたく、長い説教をいただくことになりました。



## 原作突入への話 その三（後書き）

ついにフラムは、フェイト達と別行動、そして次回はとある事件に  
介入します。

やりたかったネタ技披露します、お楽しみに。

ネギの所へ着いたフラムの今の状況（前書き）

小休憩、あ、嘘です、すみません。

さて、感想でフラムの格好を詳しくとこのことなので、ずるいですが先に設定としてここに載せちゃいます。

## ネギの所へ着いたフラムの今の状況

名前 リア

年齢 前世26才+現在約二歳半ぐらい

身長 9?歳児ver フェイトと同じ

魔法 基本魔法? (無属性魔法?) と炎属性の魔法しか使えない  
(炎のアーウエルンクスは伊達じゃない!!!)

防御、治癒、が妙に得意 (治癒はなかなか、防御の展開はもはや達人)

オリ魔法 (笑) 今の所

バーニング・フィンガー (言わずもがな、みんな知ってる熱血必殺技、ちゃんと爆発しますよ?)

エクスカリバー・ガラティーン

(武器装着時のみ発動 Fate Extra参照 剣からビームは男のロマン! ちなみに炎の波が後から押し寄せます)

ディアブルジャンプ  
悪魔風脚一級挽き肉 ブルミエール・アッシ

(某黒足のコックさんの必殺技、いろんなパターンがあり個人的に  
重宝してます)

性格 基本明るい、ヲタク臭がするのはご愛嬌。目上の人へは敬語が当たり前。

嫌いな奴には、人並みに皮肉や毒を吐きます（口が悪くありません）

特技 家事全般 工作（おもに手芸、最近はモンハン風の武器防具も作ってます）

容姿 フェイトとつり二つ、髪の毛が炎のように後頭部の方へ逆立っているのが特徴。

ただし、今は正体がばれない様に魔法で黒色にしている、魔法人形の体超便利！

服装 何を思ったのかネギの家に住みついてから基本的に燕尾服を着ている、

動きやすい使用になっています。手袋はつけてませんよ？

スーツじゃないのは、着てみたら、どこの組の人間だよと鏡の前で

orz状態になるほどだったから。

白スーツにグラサンでぎりぎりだったらしい。やはり目のせいだ。

ネギの所へ着いたフラムの今の状況（後書き）

今まで全く気にしてなかったのですが、  
PVが200、000アクセス ユニークが40、000越えして  
ました。

何か記念小説を書こうかと思うのですが、  
ギャグよりしょうか、恋愛よりしょうか、家族愛よりしょうか  
悩み中です。 どれがいい？

原作突入への話 その四（前書き）

少し頑張りました、初めての長めのバトルシーン、上手く表現でき  
たかわかりませんが、どうぞ。

## 原作突入への話 その四

リア（フラム）Side

あれから、メルディアナ魔法学校の校長先生と会話をし、その時校長が俺のことを「イグニス」と呼んだり、俺がもう少し孫のことに気にかけてやれよと説教したら泣いたり、てんやわんやになってしまったが、俺のネギを心配する態度が良かったのか、俺は、イグニスがナギに依頼されて作った人間に近い魔法人形、という認識をしてもらえた、なんかだかことがポンポン進みすぎて逆に怖いぐらいだったが、まあそれからネギの世話をしたいと申し出て、許可をもらいネギのお世話係となったわけです。

子育ての経験などないし、最初は少し警戒されていたのか（単に目つきが怖かっただけ）、なかなか喋ったりなどできなかったが、一週間ほどで結構仲良くなった、しかも「お兄ちゃん」と呼ばれているのだ！ 羨ましいだろ！

……何？ 幼女でもないのに興奮するか？ ……笑止！！ あまりにも浅はか！

性別など関係ない！ 可愛ければそれでいいのだ！ ネギはまだ3歳だぞ！ そんな小さい子が、天子みたいな笑顔を向けてくれるよ。うな子が「お兄ちゃん」だぞ！ 今まで弟扱いだったのも相合わず、威力は倍じゃ〜！

つと、話がそれたな、……ん？ 焰の「ご主人様」発言？ ……ぶっちゃけ二次元の中なら……あ、漫画の世界か、ここ……まあ、俺は今この世界で生きてるから現実ということにしてくれ、さて、二次元でなら幼女に「ご主人様」とか言われたらそれは興奮するだろう、しない奴もいると思うが、しかし、現実には、三次元で幼女に「ご主人様」発言されてみる、まず初めに、「社会的に抹殺される」

って考えて、もうそのあとは興奮などしませんよ、するにできませんよ。

さて、またしても話がそれたな、つまりだ、一緒に住んでいるわけだ。

そして今、現在進行形で厄介ことが起きてる、それは……

「……(ジ)

」

「お兄ちゃんのご飯、おいしいでしょ？　アーニヤ」

そう、ネギの朝ななじみのツインテールが俺のことをガン見しているのだ、居心地が悪いつたらありゃしない。

「ん、そうね確かにおいしいわね、………(ギロ……)」

うわーお、いま、「こつこつ手を使ってネギの気を引いたのね！」  
って幻聴が聞こえたぞ！



「なはは、初めまして御嬢さん、自分はネギ君の身辺警護兼お世話をする事になりました魔法人形、『リア』と申します」

「ふーん、人形ね、そうは思えないけど？」

「それが、コンセプトですから」

「そう、まあいいわネギのこと頼んだわよ」

「わかってますよ、それと安心してください」

「何のことよ？」

訝しげな表情のアーニヤに耳打ちをしておく。

「ボソボソ（大好きなネギ君をあなたから奪おうなんて考えていませんから）」

その瞬間アーニヤの顔が真っ赤になり、頭からボン！ と煙が出た。漫画独特の表現が見られるとは！

「なななに言ってるのよおおお！！」

「パーパス！！」

「お兄ちゃーん！！」

久しぶりにぶん殴られたな、おい。

〜リア(フラム)Side End〜

~~~~~

「ねえねえお兄ちゃん」

「ん？」

夜、寝る前、ネギに本を読んでいた時にリアはネギに突然話しかけられた。

「お兄ちゃんはお父さんの友達が作った魔法人形？　なんでしょう？」

「そうだけど、どうした？」

ネギはベッドの近くに置いてあったリアお手製の小さなクマのぬいぐるみを手を取った

「お人形さんとは思えないよ？　お人形さんは喋らないし、ご飯だつて食べないし、こつして本だつて読んでくれないよ？　本当はお兄ちゃん、人形じゃないんでしょう？」

ほー、っとリアは内心驚いてた、まだ小さな子供がここまで考える

ことができるのを、そして疑問にも感じていた、これは、前々から思っていたことだが、ネギは実際の所頭は良い、原作で天才魔法少年と呼ばれるのに相応しい頭脳を持っている、そしてそれ相応に考える力だつて持っている。

なのに何故原作ではあまりにも世間知らずのお子ちゃまになつてしまったのか？

まあ、考えるまでもない、ネギのいる環境が悪かつたのだ、子供のころはほとんど一人暮らし、魔法学校に通つていた頃も魔法の勉強ばかり、それを止める大人もあまりいなかったのだらう、となるとおのずと結果は見えてくる

(は、前途多難や)

内心リアは大きなため息をついた。

「お兄ちゃん！」

「うお！ つとすまん考え事していたは、なはは」

「もう！ お兄ちゃんはお人形さんじゃないんでしょ？」

「そうだね、体は人形！ 心は人間！ つてどこかな？」

「心？ それつて人間つてこと言いの？」

「そうだね、そう思つてくれたらうれしいわ」

リアは膝の上にいるネギの頭をなでる、頭をなでられて嬉しがるネギ、なんだかんだで、リアは子育てスキルがあつたようだ。

「そうだな、今気分がいいから少しだけサウザンド・マスターについて話してやる」

「ホント！」

あまり詳しいことは話せないので、何を話そうか悩むリア。

「……なんというか、こう話していい区切りがあってな、その辺までなら少しだけ話してあげるよ」

「うん！」

パッと輝いて見える笑顔をするネギ、かなりお父さんナギにご執心である。

「ぶっちゃけ、チートな存在だ」

「チート？」

「簡単に言うとな、天才の上に行く存在だ、というよりたいていの人間はできないことを平然とできてしまうやつのことだ」

「へ〜！ すごい人なんだね！ やっぱり！」

ネギの笑顔に引きつった笑みしか返せないリアであった。

「すごいって言うか……、まあそうだな、あとは、正義の味方だけど英雄ではなかった、ってことかな？」

「？ 英雄と正義の味方は違うの？」

「ああ、英雄つてのは押し付けられるもの、正義の味方は自分であるものってことさ、まあ最後まで自分のやりたいことをしたんだろ
うな……」

原作を思い出したのか、ナギの人生にも同情する所が多いな、と改めて思うリア。

「????」

「ん、分かりずらかったか？ まあネギにはまだ早かったかな？」

「む、子ども扱いしないでよ！」

「はいはい、けど大人も子供も寝る時間ですよ」

「む、分かった」

「うむ、一緒に寝てやるから、お話はまた明日な？」

「うん、お休み……」

「お休み………お前は俺が全うな方向に導いてやる、けどそこからお前がどの道へ進むかはお前次第だ、………はあ、フェイトたちには悪いけど今は『フラム』じゃなく、『リア』として、ネギの傍にしているとするか」

そう、ネギが眠った後に、子を心配する親のような目でネギを見つめるリアだった。

~~~~~

ネギと暮らしてしてから早一か月、フラムがリアとなつてから、彼はネギのためにいろいろ尽力してきた、村の周りに夜な夜な結界術式を刻みこんで襲撃に備えつつそれを周りに悟られないように日常生活を送ってきたのだ。

村がいつ襲われるのか分からないので、前もって準備するしかないのである。

そしてある日のこと、ネギとリアは森の中の湖で釣りをしていた。

「ふんふーん、ふふふーん、ふふふふーん、ふんふん」

「ご機嫌だなネギ？」

「うん、毎日が楽しいからね」

あれからネギはリアにナギについていろいろ聞いてきたのである、ただし原作でネギに両親のことを話すのはもう少したってからということになっていたので、リアもいろいろ話すのを自重していた、話した内容はたぶんお父さんは生きてるだろう、いつか必ずネギを迎えに来るだろう、と曖昧さが残る生存報告だった、生きてる理由は、知っている情報から考えてそう簡単に死ぬ奴ではないといったところである。

そのおかげが無茶はしなくなったし、「お父さんはピンチになつたら表れる」という口癖もあまり聞かなくなった、ただナギに対する憧れは変わってない様に見えるが。

「しかし今日は魚釣れないな」

「うん……」

そしてお互い釣りに集中し始めた時

「あ、今日お姉ちゃんが帰ってくる日だ！」

突然ネギが立ち上がり、今日の予定を思い出したのである。

「お、そうだったな、んじゃ帰って出迎える準備をしなきゃな？」

「うん！」

そうして釣り道具をたまたま外に遊びに行くためにリアが着てきたマントに放り込み、出発した。

「……！！！」

ネギと二人で走りながら帰ってる途中、自分の張った結界が破られるのを感じた。

（おい、結構強力な結界張ったつもりだぞこっちは！ どんな手を使ったかわからんがヤバイ臭いがするな、こりゃ）

そう胸の内で毒づきながら、ネギに話しかけた。

「ネギ！ 急いで帰るぞ！！ 背中に乗れ！」

「へ？」

「いいから早く！」

「う、うん」

（間に合ってくれよ……！）

~~~~~

「クソッ」

リアの目の前に映る光景は原作と何ら変わらない燃え盛る村だった。

（ちくしょう、チクショウチクショウチクショウ！！ またかよ！
どうして俺はこうも守れないものだらけなんだ！！）

昔のことを思い出したのか、しばらく自己嫌悪に走ってしまつリア、
だが今回はそれはまずかった。

「……はっ、ネギ！ おい、ネギーー！！」

いつの間にか背中から降ろしてやったネギがいなくなってしまうていたのだ。

「くそ、もうたくさんだ、大切な人が死ぬなんて！」

そう独白して、村を駆け回るリア、そしてやっとネギを見つけることができたのだが、神は残酷だった。

「ネギイイイイイイ！！！！」

すでにネギはたくさんの魔物と対面していて、そのうちの一族がネギに拳を振り下ろしている瞬間だった。

ドン！！

しかしネギは悪魔につぶされることはなかった、赤毛の長身の男がネギと悪魔の間に割って入ったのである。

そして次の瞬間、男が唱えた『雷の斧』により悪魔は真っ二つにされた。

「ネギ！！」

男が悪魔と戦っている間にネギの元へと急ぐリア。

「大丈夫か、ネギ！」

「……………」

しかしネギは反応せず男の戦いを見ている。

（そうだよな、俺はまた守れなかったんだ、ネギの傍にいる資格なんてもう……）

赤毛の男が『雷の暴風』で敵を吹き飛ばした後、リアはあることに気付いた。

（敵が多い！）

そう、原作ではこの時点であらかたこの辺りの悪魔は男が駆逐できたのである、しかしまだうようよと湧いて出るかのように襲い掛かっている悪魔、心なしか男の顔も焦っているように見える。

それを見かねたリアは心苦しかったが、ネギの頭から自分のマントを被せてやった。

「！！！」

はっと、やっとリアの存在に気付いたのか、リアを見つめるネギ。

「ネギ、隙を付いて逃げろそのマントがあれば大抵の魔法はレジストできる」

「お兄ちゃん？」

「大丈夫だ、すぐに助けが来る、しかもとびつきり最強の助けが」

自分がいながら不甲斐ないと、唇をかみしめながら、戦いの場を見るリア、そして

男がもう一度呪文を唱えようとした瞬間、

「ボソボソ（ヴィシュ・タル リ・シユタル ヴァンゲイト）九
つの鍵を開きて レーギャルンの筐より出て来たれ グラディウス・ディフュラヌ 燃え盛る炎の
エーアルデン 神剣！」

男と悪魔の間に躍り出て、悪魔を巨大な炎剣で薙ぎ払うリア、しかも始動キーを小さい声で発音しているあたり冷静な判断ができていると見える。

「な！」

男が驚きの声を上げるが、リアは敵を薙ぎ払いながら、

「イグニスにより作られた魔法人形、リアだ！ 援護する！ それにさっさと倒さないとネギに被害が及ぶんでね、さっさと片付けるぞ！」

相手に有無を言わせない声での自己紹介、聞きなれた名前が拳がったのか、男もそれに答える。

「お前が、イグニスの言ってた……、はっ、あいつも律儀な奴だぜまったく」

どこか嬉しそうに毒づく男。

「自己紹介は必要か？ えっとリア、だったか？」

「別に必要ない、サウザンド・マスター、いやナギ・スプリングフ

「イールド、俺は左半分担当する、あんたは右半分、分かりやすいだろ？」

「!!! ……ああ、とつてもな！」

そして、二人は敵に突っ込んでいく、突っ込む瞬間ネギの方へ視線を向けたリアだがそこにネギの姿はなかった。

（……急がねえと、ネギがほかの悪魔にやられちまう！ くそお！）

そして、右半分はまたしても大出力の『雷の暴風』、左半分は小型大量破壊兵器の『アベス・イケニフエエ紅蓮蜂』で吹き飛んだ、実質数秒でふつとんだのである。

「ナギ・スプリングフィールド、この辺の悪魔は俺が引き受ける、あんたはネギを助けに行つて来てくれ」

「な、いくらお前が強くても敵が多すぎるだろ、ここは……」

「お前は、あいつの親父だろ!!! お前が行かなくてどうするんだ!!!」

「!!! ……ああ分かった、すまない」

そう言い残して、ナギはネギの元へと向かった。

「ふう、しかしまだワラワラ出てきやがる、ジョニー君かつーの」

まあそんなのは関係ないと、詠唱を開始する。

「来い！ 炎帝召喚！！」

リアの後ろに巨大な炎の悪魔が現れ敵を押しつぶし、薙ぎ払いと、
どンドン駆逐していく、そしてリアも炎帝が撃ち漏らした分を、炎
の槍で突き刺し、燃え散らしていく。

「おおおおおおおおおおおおおお」

一気にあとから湧いてきた悪魔も一人と一体の圧倒的な力の嵐に飲
み込まれていった。

~~~~~

「せいせい、あらかた終わったか」

炎帝も還り一人で悪魔を屠っていたリアは、あらかた狩りつくした  
のか、一息入っていた。

（これで終わりだとは到底思えない……しかもこの首の後ろ辺りが  
ピリピリする感覚、こいつは……）

「ほう、サウザンド・マスター以外にもなかなか腕の立つ輩がいよ  
うとはな」

「はっ、本命登場ってわけか」

空から一人の男がゆっくりと降りてきた。

それを予想していたのか驚きもせずすぐに臨戦態勢になるリア。

「だが、私の狙いはサウザンド・マスターただ一人邪魔をしないでいただきたい」

「どこぞの悪魔さんかは知りませんが、“どけ”と言われて、“はいどうぞ”なんて言えるほど愉快な頭してないんでね、邪魔させてもらう、てか感動の親子の再開を邪魔するなんてKYの極みだぜ？」

「そうか、それは残念だ、久しぶりに人間界に呼ばれたのに頼まれごととはある村の襲撃と、大変つまらないものだったが、サウザンド・マスターという素晴らしい敵が現れ心躍らせていたというのにそれを邪魔する？」

「気持ちは分からなくもないが、今の俺の使命は“ネギを守ること”なんでね、ここを通したらあんた、ネギもナギも生き残った他の村人も全員殺すつもりだろ？」

「無論だとも、召喚士との契約だからね、それなりの対価を払ってくれたんだ、こちらとしてもそれを無下にはできんよ」

人間の姿をとっている悪魔はすつと拳を構えた。

「そうだな、それなりに力を持っているようだしね、サウザンド・マスターと戦う前の前哨戦とさせてもらうよ」

「残念だがあんたはここで消えてもらうぜ？」

「そうか、なら存分にあげk…《ゴシヤア！！》ぬぐう！！」  
悪魔がしゃべり終える前にその顔に一発貫ってしまった。

「言ったはずだ、絶対ここは通さないと、絶対にだ！」

「グハア！ ヌグウ！」

さらに追撃するリア、殴る殴る殴る、そして相手の頭を掴み地面に擦り付けながら走り投げ飛ばす。

「ガハ！ ……つく、少々油断したよ、けどあまり調子に乗らないでもらいたい！」

「な…！」

リアの渾身の右ストレートが、悪魔にあっさりと掴まれてしまう、そしてさっきのお返しと言わんばかりの勢いで地面に叩きつけられた。

「ガア！」

「やれやれ、不本意だが、少し本気を出さないと不味いかもしれないね」

「な……！！！！」

すぐさま体制を立て直したリアに襲い掛かる悪魔の連続パンチ、とつさに多重魔法障壁を展開するが次々と破壊されていく。

「ほう、なかなかの硬さの障壁だね、この私の攻撃を耐えきるとは正直驚いたよ」

「はっ、てめえのパンチなんかよりも重い一撃をよく食らってたんでな」

「なるほどなるほど、君は強い、それは認めなくてはならないね」

「そうかい、こっちはまったく嬉しくないけどな」

「ふふ、ならここからは公爵の位に恥じない戦いをしようじゃないか」

「な！」

公爵の位は国によって違ってくるが、ヨーロッパを例にとってみると、原作で出てきたヘルマン伯爵の『伯爵』は大雑把に言うときよつと真ん中あたりの位に当たり、『公爵』ぶっちゃけ、上から数えたほうが早い、それぐらい高い位なのである、この世界の悪魔の強さは爵位の高さに比例すると言っても過言ではない、つまり……

ドゴオ……！

「ぐお……！！」

メキメキ、と嫌な音を立てながら悪魔の拳がリアの脇腹に決まった。

「おや、たった一撃でお終いかい？」



そこには、人間の姿ではあるが、肌が浅黒くなり、側頭部から一本ずつ、額から二本、計四本の角を生やした悪魔の姿があった。

「がはあ！ ……んなわけあるか！」

瞬動で死角に回り込み上段蹴りを放つリア、しかしその蹴りをやすやすと止める悪魔。

「遅い」

無慈悲な言葉とともにリアは何度も振り回され、何度も地面に叩きつけられる。

「ガ！ グハツ！ グウ！ オゴオ！」

障壁がすべて割れた後も何度もたたきつけられ、地面を削り、そして地面がリアの血で染まっていく。

「拍子抜けだな、この程度で終わりとは」

つまらん、と一言だけ残し、リアを投げ捨てる悪魔。

「そこで寝ていた前まえ、無力な君はそこで何も守れず地面に這いつくばっている方がお似合いだよ」

そのまま、リアに背を向けてその場を去ろうと歩を進める悪魔、しかし数歩歩いたところで、立ち止まる。

「まだ、立ち上がれるとはね、しかし無意味な行為だよそれは」

気怠そうにもう一度リアと向き合う悪魔、だが悪魔はあることに気付いた。

「ほう、この状況を打開する方法でもあるのかね？」

そこには、いつの間にか黒の皮手袋を着けていたリアが立っていた。

「ああ、もちろん」

何か策ありという雰囲気のリア、しかしその姿は既に満身創痍、服は所々破れ、全身から血を流している。立っていられるのが不思議なぐらいだ。

「ここから、てめえを進ませなければいい、そして消す、玉砕覚悟でなー！」

バツ、っとリアが両腕を横に突き出した瞬間、両方の手の前に火の玉ができそれがどんどん平たくなっていく、そして、その平たくなった火の玉を掴むとそこには、外円部分には刃が等間隔に並んでおり、その中に上下左右真ん中に円が十字に並んでいて、中心部の円に持ち手があるまがましいチャクラムが現れた。

「今更武器を持ったところで何か変わるとでも？」

「あいにく強い武器は今手元にないんでね、コイツを使うつもりなんてなかったんだが、……コイツを振るうには最ツ高のシチュエーションだぜ！！」

「何？」

「さあ！ テメエは俺が消してやる！！ 燃え尽きる！！」

そしてチャクラムから発生した炎を地面に叩きつけた瞬間、地面にリアと悪魔を囲うように魔法陣が現れ、魔法陣の一番外の円から火柱が上がる。

「何！！」

「炎の牢獄ってやつさ、これでお前はここから俺を殺すまで出られない」

悪魔が周りの炎に気を取られている間に炎化し、真っ赤に染まった髪をなびかせたリアがチャクラムを構えていた。

「いくぜ！！」

いきなりリアは片方のチャクラムだけ悪魔に投げつけ、コンマ数秒差で自分も突撃した。

「ふん、こんなもの……ぬお！！」

投げつけられたチャクラムを簡単にはじいた悪魔だったが、そのあとに続いたリアの連撃に押される。

（ぬう！ さっきよりも早いだと！ 手を抜いていたのは奴の方だったというのか！）

拳が、蹴りが、チャクラムの外円に付いている刃が、先ほどとは比べものにならないほどの速度で悪魔に襲い掛かる。

（だが、反応できない速度ではない！！）

「くく、残念だったな？」

「なんだぞ、ぬう！ ……しま……ぐああ！」

突然の背中からの痛みに硬直してしまい思いっきり蹴り飛ばされた悪魔、そして悪魔が背中を確認すると、

「な！ これはまさか！」

「はっ、チャクラムってのは投げたら帰ってくるもんなんだよ！」

いきなりリアが悪魔へ投げた片方のチャクラムが背中に突き刺さっていた。

「だが、この程度で……」

「まだ終わりじゃないさ、燃え散れ！！」

「な…グアアアアアアアアアアアアッアあああああ」

リアの呪文とともに、悪魔の背中に突き刺さっていたチャクラムから炎があふれだし、悪魔を焼き尽くす。

「ちっ、しぶといな」

全身くまなく焼いたというのに所々しか火傷を負っていない悪魔を見て、リアは毒づいた。

「くう、今のはかなり効いたよ」

「そうか、なら……」

リアは後ろに跳び炎の中へと姿をくらました。

「待て！」

リアが消えた場所に拳を撃つ悪魔しかし。

「ぐあああ！」

炎の壁が悪魔に襲い掛かりダメージを負ってしまっ、そこへ、

「隙ありだよ！！ はっはああ！」

悪魔の右斜め後ろからリアが突っ込み悪魔を吹き飛ばした。

「ぐうう！」

「これで終いだ、はあああああ」

両手に持っている炎を纏ったチャクラムをカーブを描くように悪魔に投げつけ、切り裂き、戻ってきたチャクラムをすかさず、キャッチし正面から投げつける。

「がはあ！！」

「その身に刻みやがれええっえええ！！！！」

そしてチャクラムを中心部に投げ、地面に魔力を通し最後の仕掛けを発動させる。

ゴオオオオオおお！！

魔法陣が光炎の牢獄全体から火柱が上がりリアと悪魔を飲み込んだ。

「私を道連れにするだ！！　ぐああああああああああ！！！！！！」

あまりの熱に悪魔は消し炭と化した。

「……………何やってんだろな、俺？　……………すまねえな、兄さん、焰、……………ネギ」

リアのつぶやきは炎へと消え、リアの姿をも飲み込んでいった。

## 原作突入への話 その四（後書き）

めだか194さん、ネタ提供ありがとうございました。

さあ、迫ってまいりました原作突入！！

リア（フラム）は果たして生きているのか！？

リア（フラム）が混じったネギの学園生活はどうなってしまっ  
！？

お楽しみに。

## リア（フラム）の日記（前書き）

実際に日記を書いていたわけではありませんが、こういう形にした方がいいと感じたので、日記風にしてみました。

前回に話で、あまりネギと仲良くなった描写がなかったので、それを補いつつ、日常の話を書いてみました。

短めです、故了承ください。



## リア（フラム）の日記

月×日

やっとネギの熱が引き満足に動けるようになった、お礼を言われたが、心なしか声が震えていた気がする、やはり目つきなのだろうか？

月 日

どうやらネギの食事は、スタンおじさんの奥さんがアーニヤの両親が面倒を見ているようだ、ネギと仲良くなるチャンスだ、明日から俺が料理を作ることしよう。

ついでに、服も新調しようと思う、今の恰好ではネギがフェイトと出会ったとき疑問を持たれてしまうからな、早めに服を変えておけば、原作開始ごろには忘れているだろう。さてどんな服を作ろうかな？

月 日

料理作戦は成功だった、おかげでネギの俺を見る目が変わったと感じられた。

明日から、色々と遊んでやろう、長い付き合いになるのだから仲良くなりたいたいものである。

そうそう、隠れて魔法球に入り新しい服を作成した、いい案が浮かばなかったから、執事服でも作るうかと思った、どうせならふだん着ないものでも着ようという願望もあったのでちょうどいいと判明、もちろん上は燕尾タイプである。

しかし、魔法球を使うと何日間か時差ボケしてしまうのが難点だな。

月 日

新しく作った燕尾服で、今日もネギの身の回りのお世話である、まあ俺とネギの二人だけの生活スペースの家事は今まで大所帯の家事を経験していた俺にとっては結構簡単な大きさである。

熱を出したネギが心配だったのか、ネギの幼馴染がやってきた、すでに脈ありと思ってたが、まだそうではないようだ、殴られたのは一種の照れ隠しなのだろうが、恋する乙女臭？ともいえばいいのだろうか？ それがなかったたのである、だが俺の発言からネギを意識しただすであろう、俺の予想では、あと3〜4年でアーニヤは落ちると見た。

そういえば原作でアーニヤの得意な魔法は炎だったな、少し修行でもつけてやろうと画策中、いくつか俺のオリ魔法を受け継いでくれそうな予感である。

焰？ 残念ながらあいつは魔法はほとんど使えないからな、残念

である。一応とある武器を置いて行つたから使つてくれるはずだが、ほかに何を受けつがせようか？

月 日

ネギの魔法の練習に付き合つてやつた、なかなか『火よ灯れ』が上手くいかないようだったので、体に魔力を流してやり、自分の体の中で動いている魔力を認識させたらうまくいったのだが、調子に乗つて大きな炎を作りだし火事を起こしそうになつたので、またもや素敵な説教タイムに突入した、それ以来俺との魔法の練習は魔力の制御と、『光よ照らせ』や『風よ吹け』といった人畜無害な魔法の発動となつた。まあ光は目に悪いのだが……。

原作であつた、『ネギは常に風の身体強化魔法をかけている』というのがもやしっ子になつた原因だと思つたから、今から刷り込みをしておこうと思つ、『体は苛め抜いてこそ真価を発揮する』と、まあ一応覚えておいて損はない程度にとどめておいてやろう。

月 日

今日はスタン爺さんの愚痴に付き合つた、主にナギがどうやらこうやらと、ナギの悪行の数々を教えられ最後になんで死んだのかといった感じである、そして途中から俺がネギのそばにいてくれてありがたいう話になつた、やはり誰かから感謝されるのはいいもの

である。

なぜか、子供の恰好をしているのに酒を勧められた、「子供にお酒進めるとは何事！！」と言ったわけだが、どうやら振る舞いが子供とは思えない、やら人形なら問題ない、ほんとは成人しているんだろ？ と、飲まなきゃいけない雰囲気になってしまい飲むことに、余談だが、チートボディのおかげかまったく酔わなかった。

それなりの常識人だと思ってたのだがいい意味で裏切られた、けどいつも強がりを言ってるけどやっぱり悪ガキがいなくなつて寂しいんだろうな、また一緒に飲んであげよと思う。

月 日

久しぶりに、武器作成をしようと思いついた、魔法球の時間設定をかなりいじくれば現実では数分でいいものが出来上がるだろう、実質何百時間とかかるわけだが。

さて、火山で集めた鉱石と竜の鱗を組み合わせてネタ武器、チャクラムが完成した、この武器を使うキャラの髪の色と髪型が似ているので少しテンションが上がってしまったものである。さっそくネタ技術式と転送術式を刻む物も作ることに、なかなか充実した一日？ になつたと思う。

どうせなら黒ローブ、いや黒コートも作ってしまおうか？

月 日

かなりネギと仲良くなりお兄ちゃんと呼ばれることに、なかなかうれいものである。

実際に萌えてしまったのは秘密だ、しかし男なのにあのかわいさは異常である、恐ろしい。

しかし、自分で魔法世界の崩壊を防ぐ術を見つけれないからこつやってネギのところに行くことにし、フェイトや焰にさびしい思いをさせ申し訳ないと思っている、やはり自分は蝙蝠なのであろう、原作の最後のほうできつと痛い目を見るに決まっている、覚悟はできてるがやるせないものがある。修学旅行編で会えるはずだから秘密裏に、ばれないように話でもしよう。

月 日

ネギのもとに来て少しばかり立ったと思う、けどもつそろそつで、襲撃事件が始まってしまふのだらう、それを回避することはできないからせめて村に結界をはって時間稼ぎぐらいはすべきだな、明日以降で何とか作り上げようとするか。

「ネギの安全を一番に考えて行動をする」これを念頭に入れて襲撃事件を乗り切ろう。

• • • •  
• • • •  
• • • •  
• • • •  
• • • •  
• • • •  
• • • •  
• • • •  
• • • •  
• • • •

## リア(フラム)の日記(後書き)

次回、感動できる話は難かしいですが、頑張って書き上げたいと思います。

原作突入への話 その五 (前書き)

うとうとう、短い、作者の文才ではやはりこの程度か……、  
まあ感動していただけたら、少し切ない気持ちになったのならうれ  
しいです。



## 原作突入への話 その五

とある森の中の湖の畔に、身の丈に合っていない紅いマントを羽織った赤毛の子供がいた。

初めて、赤毛の少年と人形が会ったときと同じく、雪が降っている。

少年は、あの恐怖の夜を味わってから四年が経ち、いくらか身長も伸び、目が悪くなったのか鼻眼鏡を着用している。

「ここに来るのも、久しぶりだな……、昔はここで兄さんに魔法の練習を見てもらっていたなあ」

懐かしそうに、どこか寂しげに成長したネギ少年は呟く。

「兄さんが死んじゃってもう四年も経っちゃったよ、その間兄さんに笑われないように僕頑張ってきたよ？」

この四年間ネギの生活は原作と変わったところは少ないだろう、一番異なっていること、といえば勉強に打ち込んだ理由ぐらいだろうか？

もともとネギは襲撃された夜のこと怖くなって勉強に打ち込んだと言っている。

つまり、襲撃は自分のせいだと思っている節があり、何かできることはないのだろうか？ という思考の結果、勉強に行きついたのではないのだろうか？

だが、この世界のネギにはそれ以上に、リアみたいになりたい、リアに笑われないようにしたい、そんな思いがあったのだ。

子供だったネギはどうすればリアみたいになれるのか分からなかった、そこで行き着いた答えは“魔法使い”だった。

「僕、兄さんみたいなすごい魔法使いになるために頑張ったよ？  
まだまだ兄さんには追いつかないけど僕の頑張り見て欲しいな？」

この四年間確かにネギは魔法の勉強、その他もろもろと頑張ってきた、図書室の立ち入り禁止区域に入ってまで呪文を調べるぐらいの熱心さである、しかし原作と違い得意の風、雷の呪文より炎の呪文を調べ、練習時間も炎系の呪文につき込んできた。

そしてネギが詠唱を始める。

「ラス・テル マ・スキル マギステル オムネ ものみな フランマンズ 焼き尽くす  
フランマ 浄北の炎 ドミネー 破壊の王に タイオーニス して エト 再生の レゲネラティオン 徴よ オズマヌーエンス 我が手に宿りて イ 敵  
ニミークム を喰らえ フラグランティア・ルピカンス 紅き焰！！」

湖の上に爆炎が放たれた。

いつもなら、隣にリアがいて、失敗したら励ましたり叱ったりしたりし、成功したら全力で褒めてくれた

この時、ネギはもしかしたら魔法が上手に発動してくれたら褒めてくれるのでは？ なんて淡い気持ちを抱いてしまっていた、知識として人が死ぬとどうなるか理解していてもそこか割り切れない気持ちがあったのだろう。

「……」

そして、無情にも、誰もネギを褒めることはなかった。

~~~~~  
~~~~~

「襲撃事件から数日後」

襲撃事件からそれなりに時間も経ちネカネの足も治り、一緒に住むこととなった二人だった。

ネギ少年だが、事件後ネギとネカネ、様子を見に来たネギの祖父の3人が談笑していた。

「この杖、お父さんがくれたんだ」

「!!!」

「何と！ 本当かネギ!?」

「うん、僕のことネギだって言ってくれたもん」

「そう、よかったわね」

「うん」

「あいつの杖に似ていると思ったが……そうじゃったか」

二人は嬉しそうにしているが、ネギはあまりうれしそうではなかつ

た。

「どうしたの、ネギ？」

心配になってネカネが声をかける。

「あのね、お父さんが杖をくれた後、おっきな炎を見たんだ、あれはお兄ちゃんの炎だった……」

お兄ちゃんというのがリアだと分かっている二人は少し暗い顔になる。

「お父さんも言ってたけど、お兄ちゃんも僕を助けてくれたんだ、ただどこにもいないんだ」

話さなければならぬと分かっている話すことが躊躇われる、そんな葛藤が二人の胸の内に渦巻いていた。

「村の人たち石にされちゃったのは知っているよ？」

「！！！」

ネギの年に似合わないあまりの冷静さに二人は驚愕した、それと同時に彼らの脳内に警告アラームが鳴りだす、これ以上はまずいと、そう警告している。

だが遅かった。

「でもお兄ちゃんは石になんかされなかった、けどいない、僕に会いに来てくれない………ねえ、お兄ちゃんは“死んじゃったの？”

”

ネカネは涙を堪え、祖父は唇を噛みしめた。

実際の所まだネギは“死ぬ”ということを理解していない、けどネカネの「もう会えない」という言葉を思い出し本能的にそう思ったのである、「リアは死んでしまった」と。

二人はネギにここまでひどい仕打ちを受けさせた神を恨んだ、そしてネギは二人の態度から悟ってしまった、「リアは死んだ、もう会えない」と。

ネギは泣きながら家を飛び出していった、お気に入りフラムのマントを胸に抱えながら。

「ネギ！！」

ネカネがネギを追おうとするが、なんて言葉をかければいいのか分からず、ネギへと伸ばした手が止まってしまう。

「校長……」

「……なんじゃ？」

二人の声は既に覇気がなかった

「どうしてネギがこんな目に合わなくちゃいけないんですか？ あの子はナギさん達が危険な目に合わないために私たちに託したというのに……」

「その通りじゃ、儂も悔しい、あいつとの約束さえ守れん自分の非力さが恨めしいわい」

「あんな子供が“死”を理解してしまうなんて早すぎですよ……ウツ、ウツ……」

ネカネは声を押し殺しながら、校長は静かに泣いた。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

ネギがリアが死んだと思ったあとの、一か月間、ネギはまるで幽霊のようだった。

昼間はあつちをふらふら、こつちをふらふら、行くあてもなく、目的地もなく、朝と夜家に帰ったあとは部屋にこもりつきり、ご飯もほとんど食べずすぐに部屋に逆戻り、にそれが彼の生活のサイクルだった

そんな彼を立ち直らせたのはやはりリアであり、身近な存在であるアーニヤだった。

「……」

「探したわよ!!」  
ネギ!!」

「アーニヤ？ 何か用？」

「クツ！ 何か用？ じゃないわよ！！ ぶらぶらぶらぶらして！  
しかも何よその顔！ ごはんしっかり食べてるの！？」

「別に……アーニヤには関係ないだろ」

そっけなく、まるで興味などないと言いたげな声色でネギは返事をした。

「関係ないですって！！ あんたねえ、どれだけうるさい！！  
……な！？」

「今僕はお兄ちゃんを待っているんだ！ じやまないですよ！！  
お兄ちゃんが死ぬわけがない、きつとどこかで生きてるんだ！！  
きつとどこかで生きてるんだ！！ だから一番初めに会うためにこ  
うやって毎日村の外を歩き回ってるんだ！！」

「何よそれ！ バカじゃないの！！」

「バカ何かじゃない！ なんでそんなこと言うの？ アーニヤはお  
兄ちゃんが死んでいた方がうれしいの！？ おかしいよそんなの！  
！ 僕は信じない、絶対にお兄ちゃんが見つかるまで僕は「いいか  
げんにしろ！！」……ぶっ！！」

アーニヤが思いっきりネギのことを殴った。

「そんなわけないでしょ！ 私だって悲しいわよ！ お父さんも、  
お母さんも石にされて、ものすごく悲しかった、リアに慰めてもら

いたかった！ けどそのリアだつていない、なら現実を見るしかないでしょ！！ リアは死んだつて！！」

目に涙をためながらアーニヤは叫ぶ。

「ウツ……ウツ……」

「それに、今のあんた見てリアが喜ぶと思ってるの！！ あのお人よしバカがあんたのそんな姿見たら泣くわよ！！ だからバカだつていうのよ！！」

「お兄ちゃん……お兄ちゃん……ウツ……ウツ……うわあああああああ  
ああん……」

次の日から、ネギはふらふらとどこかに行くことはなくなった、やはり死んだとしてもリアを悲しませなくなかったのだろう。そしてネギはリアから教わったことを思い出し前を向いて生きていくのだった。

### 《リアとネギとの約束》

その一

家族、もしくは親しい人を大切に。

その二

健康が一番

その三

魔法を使うときはよく考えて、魔法は危険なものでもあるのだから。それと魔力の制御もちゃんとしよう。



その四  
若いうちから身体強化の魔法に頼るな、肉体はいじめてこそ真価を  
発揮する。

その五  
何事も真剣に取り組むのはいいが体を壊したら本末転倒、気を付け  
よう。

その六  
流されてばかりはいけない、特にネギは自分の考えを持たないと危  
ない。

(原作云々、人として云々、ではなく英雄の子供としての注意事項)

その七  
清く、正しく、射命m……じゃない、礼儀正しく。

その八  
人生楽しく生きよう!!

e t c

...



サウザンド・マスターの故郷に襲撃をかけることに成功、保険としてサウザンド・マスターに恨みを持つ大量の人間を生贄とし上級悪魔、大量の下級悪魔を召喚。  
村には強力な結界が張られており保険が役に立った。

そして被害状況は、その村に生きている者はほぼすべて石となった模様、途中サウザンド・マスターらしき人物と謎の少年の介入によりサウザンド・マスターの子供とその親戚のみ生き残った模様。

サウザンド・マスターは依然行方不明、謎の少年は悪魔を道連れにした模様。

ただし、謎の少年が悪魔を道連れにした現場から何か引きずった跡が発見された、大きさからみて、謎の少年が自分で這った後と予想される、しかし周辺で死体は見つからずこちらも実質的には行方不明だが生存は困難だと思われる。

## M 諜報部員報告書

M

「……………ふむ、なるほどな」

とある紙束を片手に黒いローブを着た男がいる。

「ふむ、これはまずいな、あいつらに見せたらMMという組織が文字通り壊滅してしまう、これは私だけの秘密としよう、それにあいつがそう簡単に死ぬわけがないだろうしな」

ぼっ、男の手の中で紙束が燃え始め灰となった。

~~~~~

（現在、森の中の湖の畔）

ネギは泣いていた、大声でワンワンと。

「うっ、もう泣かないって決めたんだ、決着つけるって決めたんだ」

涙を拭きながらネギは来ていたマントを脱ぎ手に取る。

「これ返すよ兄さん、いつまでも兄さんに甘えてちゃいけないって気付いたから、僕頑張るから、だから見ててね、兄さん」

そして持っていたマントを湖へと投げた。

原作突入への話 その五 (後書き)

リアとネギの約束はネギと過ごしてリアが思ったこと、リアが心配したことについて書かれています。

さて次回、ついに麻帆良に降り立つネギ、リア(フラム)はどうなってしまうのでしょうか？

原作突入への話 その五 の続き……（前書き）

駆除も、批判も、けなしも、肯定も、全て受け付けます。

しかし、自分は極力ハッピーエンドへと進めていきたいのです、バットエンドも考えていますけどね？

原作突入への話 その五 の続き……

前の話はもう読みましたか？読んでないのならぜひ読んでください。

そのあなた、前の話読んですぐ来たのかい？ ならいったん休憩や、また明日、もしくは別の作品読んで感想書いて落ち着いたらまた来なさい。

知ったことではない？ なら無理強いはしない、先に進みたまえ。

どうなっても知らんよ？

それではどうぞ。

ほんとにいいのですね？

「ぶくぶくぶく」

いきなりカオスな状況になってしまった。

~~~~~

「ちびちびちびちびちび」

「……………」

リアが震えている隣でネギはポカーンとしていた。

「自身炎化！！ & 消沈」

ひとまず炎化し体と服についた水気をとばし、すぐに元に戻る。

ぺたぺたぺたぺたぺたぺたぺたぺたぺたぺたぺた

ネギがリアの顔をぺたぺた、何かを確認しながら触っている。

「ん？ どうした、ネギ？」

「お兄ちゃん？」

「おう！ 帰ってきたぞ、ネギ」

「うわああん！！ おにいちゃーん！！！！」

泣きながらリアに抱き着くネギ、少し幼児後退してしまったがすぐ治るだろう。

~~~~~

リアが生きていた、と聞きつけ校長、ネカネ、アーニヤがすぐに飛んできた。

リアが校長に「業務ほっぽてきたな、貴様！！」と冗談で言ったらアーニヤから一発いいのをもらった後抱き着かれた、「まあ妹みたいな存在だったしそりゃあなつかれてるわな」程度の認識のリアだったが、まあ間違っではない。

そしてまじめな話が始まった。

「……………それでお主どこで何をしとったんじゃ？」

校長の質問にリアは少しうろたえた。

他の三人も知りたいようで真剣にリアの方を見ている。

「……………はあ、他言無用にしてくださいよ？ ……よっと、これで

す

魔法球の入った鞆を机の上へ置き中身を確認させるフラム、校長は何か気付いたのか、納得顔だったが、他の三人は頭の上に？マークを浮かばせていた。

「魔法球とはのお、なかなか高価なもの持っておるのお？」

「あの、校長、魔法球って？」

三人を代表するかのようになり、ネカネが校長に質問をする。

「ふむ、こいつはの、中に入ること、現実の時間を何倍にも引き伸ばしてくれる魔法具じゃ、現実の時間が一日になるといった感じでの」

「え？ じゃあもしかしてこの中にいたから今まで会えなかったの？」

アーニヤがもつともらしい答えを出す。ガリアは首を横に振った。

「それは正しい答えじゃないんだよね」

「じゃあなんだっていうのよ？」

「まずな、俺は上級の悪魔を倒すため道連れ攻撃をしたわけだ、けど自身炎化って言ってな、体を炎と化する魔法技術があつてな、それを使ってたから重度のやけど……まあ一部炭化したけど、あと除骨の粉碎骨折、その他もろもろで済んだわけだ、公爵級にその程度で済んで御の字だったさ」

「公爵級（じゃと）！！」

ネカネと校長の叫びが部屋に木霊した。

「びっくりした〜、いきなりどうしたの、お姉ちゃん？」

「あ、ごめんねネギ、少し驚いてしまって、実はね公爵級の悪魔っていうのはね、あなたのお父さん位強くないと簡単には倒せないの」
ネギは襲撃事件の自分の父の無双っぷりを思い出す、そしてあることに気付いた。

「お兄ちゃんも、お父さんと同じぐらい強いつてこと？」

「そこも、他言無用で……って言いたいけどバラしますが、ぶつちやけサウザンド・マスターには勝てね〜だろうな、今回の戦いを振り返ってもあまり芳しくなかったし、経験も足りてないし」

「そうなんだ？」

「いまいち理解できてないが、秘密にしてくれというリアの頼みから、それ以上の追及はしないネギ。」

「さて、話を元に戻しますが、ポロポロだった体を引きずって魔法球を取りに帰り、そこから簡単な医療道具で魔力を回復させたわけなんです、少し問題があった、というか気づきまして……」

「問題とな？」

「はい、自分、魔法人形なんで動くための核がありまして、……まあ人間でいうと心臓みたいなものです、それが魔力の使い過ぎが原因だと思うんですけど、少し傷ついてたんですよね……」

「ちょ、ちよつと！！ それ大丈夫なの！？」

衝撃な話にアーニヤが大声を上げてしまう。

「大丈夫、大丈夫、傷が小さかったからもう治った」

「なら、安心ね」

四人とも心配そうな顔をしていたが全員リアの報告にほつとする。

「で、ですね、自分には自己修復機能つてのがあるんですが、その発動条件が、『核がちゃんと作動している』、『治すためのエネルギー分の魔力がある』の二つ何ですが、核が傷ついてたせいで魔力が回復しない、自己修復機能もうまく作動しないの二重苦に陥りまして、魔法球の中でちゃっちゃと治そうとしたんですが、さらに問題がありまして」

「はぁ、問題だらけじゃのう、お主……」

校長からものすごく同情されてしまうリア、なんだか他の三人からも可哀想な物を見る目を向けられてしまう。

「なははは、その問題がですね、この魔法球と俺の存在を知られたくない所属の奴らに見つからないようにするためなんですよね、今回の襲撃事件の犯人が確認のためにあの村に偵察に来たらこの魔法球が見つかるかも知れないんでね、それだけは避けたかったんで

すよね、なので体はぼろぼろでしたが何とかあの湖まで行くことができました、湖にジャポン！ というわけです」

「なるほどの、つまりその魔法球の中身はイグニスに残したものである、ということか？」

「いえいえ、そこまで大層なものは入ってませんよ、けど俺自身に関するものが沢山入ってまして、その辺の技術を流したくなかったわけなんですよ」

内心リアはビクビクしていた、魔法球の中身に関しては完全に大嘘である、入った瞬間自分の研究所があり、魔法世界で見つけた材料や、魔法球の中で特別な進化をした環境で取れた材料で作った魔法具等がごろごろ、南に行けばおかしな水生生物がいっぱい、東に行けば森林環境に適した龍たちがごろごろ、北に行けばなぜか凍土が広がっており、西に行けば火山地帯が存在している、ぶっちゃけ見方によれば宝の山である。

つまり、見つければいろいろまずいのである、面倒事は避けられませんが。

「つまり、お主の体はそこまで消耗してたのか……悪いことをしたのぉ」

今までの情報から整理したのが、『リアは重傷を負い魔法球で時間をいじっても現実世界で4年もかけて療養しなければならなかった』という結論にたどり付いてた。

他の三人、特にネギは自分が原因だと思っているのか特にすまなさそうな顔をしていた。

しかし、リアは全員にいつも通りふざけた物言いをし場を和ませる

かと思つたら、冷や汗をだらだら流して、心の中で頭を抱えていた。

(言いくい！ 実は魔法球の時間設定を変えようとして、魔法球の中と現実の時間を一緒にしたあと、力尽きて設定せずに魔法球に入ったなんて……)

台無しであった、もう、何もかも台無しであった。

だが、それでも、話した後にどんな仕打ちが待っているのか分かっていても、先に進むのがリア(フラム)の生き様である。そしてリアはそのことを打ち明けた。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

「ぶっつっつっつびっけんじやないわよおおおおおおおお
！……！」

「モンタ……！」

暴熱少女の鉄拳によってリアは星になった。

~~~~~

〜リアSide〜

「卒業証書授与」

時間は飛んで、ただ今ネギとアーニヤの卒業式、立派になったネギの姿がまぶしいものである、しかも俺が作ったローブを着て卒業式に出てくれるとは……作者冥利に尽きるってやつですね、あつ、アーニヤもか、こりゃ嬉しさに倍さね。

「ネギ・スプリングフィールド君」

おつ、ネギの番か……、ついに原作開始ってか？ こりゃ気合い入れなきゃなあ？

ん？ 俺の立ち位置？ そりゃあ、ネギのお手伝いさんって感じかね？ 校長と話し合った結果、俺はネギに付いて行くことに、まあ卒業後の修行地に関しては聞かないでおいてやったけどな？

だって、原作見た時から思ったけど、絶対あれ校長が細工したとか思えないじゃん？　もしかしたら魔法世界で働くななんてことだってあり得るわけだし？

しかも日本で先生って課題なのに麻帆良行って最初っから決まってたんだぜ？

まあ、校長の頑張りに答えなければネギの兄としてどうよ？　ってことで一つ、

「すでに、原作ブレイクしているけど突っ走るとしますかね！」

あ、ちなみにアーニヤには俺のネタ魔法をすでに教えてやりました、しかも呪文をまとめた魔法書付である、ネギが羨ましがっていましたが、得意な雷と光と風の系統を練習させておきました、やっぱり得意な方を伸ばした方が効率いいからね。

しかし、原作のアーニヤの師匠っていたのかな？　独学であのレベルならまあまあ才能ある気がしてきたぞ？

原作突入への話 その五 の続き……（後書き）

次回、ついに原作一巻へと進みます。

子供だけど、それなりに大人になつたネギ君、周りを騒がせてばかりのリア、この二人は麻帆良でどんな物語を紡ぐのか！？

ふと思つたんだが、A組の生徒さんはたいていネギの従者になりましたが、リアはどうしよう？ ぶっちゃけ焰がいるから従者を増やす必要がないのだが、それ以前にリアと相性のいいキャラなんていたか？

基本原作沿いですが、オリジナル話も交えて、まあ頑張ります。

原作一話 いざ麻帆良……（前書き）

あとがきに、アンケートあり、ちゃんと答えないと作者が自重という言葉を忘れ妄想をぶち込んできますよ？

作者の独自解釈

原作のネギは風魔法で身体能力を向上させている癖がある、常時展開といっても過言ではない。

なので、くしゃみをしたら突風が起きるなどの現象はそのまとうっている風がくしゃみと同時に周りに吹き飛ばすからなのではないか？  
といった感じですか。

原作一話 いざ麻帆良……

（ふー、飛行機を使って海外へ行くなんて何年ぶりだ？ 高校の時の学校行事で行ったつきりだったな〜、と言っても行先は日本なんだけどね）

日本行の飛行機の中、二人はのんびりと過ごしていた。

「もうすぐ日本か、僕に先生なんてできるのかなあ？」

「さあな〜、でも修行なんだしやるしかないさ、最低限のサポートはしてやるぞ」

「うん、なら安心かな？」

すかさず、リアはネギにチョップを落とす。

「いたっ！」

「最低限だからな？ あまり過度な期待はしない様にしろよ？ これはお前の修行なんだからな？」

「ごめんなさい」

シユンとなるネギの頭をリアはぐりぐりとなでる。

「相談には乗ってやる、けど如何するかを決めるのはお前だ、それが守ればよし、まあそんなことはなかなか起こらないだろうけど、お前が一人じゃどうしたって解決できないことに出くわしたら手伝

つてやるぞ」

「うん、僕頑張るよ！」

「うしうし、いい子だ」

もう一回ネギの頭をぐりぐり撫でるリア、気持ちがいいのか嬉しそうにしているネギ、そんな二人を見て鼻血を流している金髪のバリバリキャリアウーマンがいたそうなの……。

「ところで、なんで兄さんは眼鏡なんか掛けてるの？」

「眼つきを、如何にかしたかったのと、知的に見せる為さ……」

影を纏いながらのリアの告白。

今、リアはスクエアフレームで、耳かけ部分とフレームの接合部分と同じ大きさ、俗に言う知的眼鏡をかけている。

「あははは、でも似合ってるよ兄さん」

「ありがとう、ネギよ」

この予防策は上手くいくのだろうか？

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

電車に揺られ二人は麻帆良へと進んでいく。

「うわー、日本ってホントに人が多いな、それに女の人がたくさんいるね」

「まあ、場所が場所だからな、この電車は女子高エリア行きみたいだからそりゃ女子も多いわな」

「そっか、なるほどなるほど」

そのとき電車が揺れて、ネギとリアは周りの女子の波にのまれる。

「あついつ」

( 煩惱退散！ 煩惱退散！ 煩惱退散！ )

周り女子中学生、二人小学生、比べると身長は頭一つ分違います、つまり小学生の頭の高さは大体女子中学生の胸辺りになってしまいます。

「僕たちどこ行くの？　ここから先は中学高校だよ」

二人の周りにいた女子たちがこの場に似合わない、外人コンビのリアとネギを見つめ興味ありげに質問してくる。

「いえ、あの、その……」

突然の質問に上手く答えられないネギ、そこへリアが助け舟を出そうとしたとき……

「ハ……ハ……、ハクシユン！　あつう」

突然くしゃみをしてしまうネギ、しかし、突風が起ることはなかった。

「あはは、いきなり質問してごめんね」

ビックリしてくしゃみをしてしまったネギが可愛かったのか、気をよくし、さっきの質問が有耶無耶になった。

麻帆良学園中央駅、麻帆良学園中央駅、お忘れ物のないようにご注意ください

アナウンスがなり、電車が駅へ到着、そしてどんどん下車していく。

「じゃあね坊やたち？」

「気を付けてね」



思い思いの言葉を二人に投げかけ、周りにいた女子達も下車していく。

「……なんだか、つむじ風みたいな人たちだったね」

「そうだな……さて俺たちも行くか」

「うん！」

こうして二人は、麻帆良学園へと歩を進めた。

~~~~~

二人が駅から出るとそこは人間ラッシュ、見渡す限り人人人人である。

「迎えの人はいないみたいだね」

「電車一本乗り逃がしたからな……っ！」

「？ どうしたの？」

「いや、なんでもないさ、それじゃあ俺はもしかしたらだけど、待ち人がいないか少しこの辺りを探してから行くは、お前は先に行っ

てる」

「え！でも……」

「大丈夫だつて、すぐに追いつく、俺の足の速さは知ってるだろ？
まあ急がないと遅刻しちゃうから、風を使うのを許可するから」

「うん、えとそれじゃあちよつと先行ってるね？」

そして、ネギは子供が走るのより速いスピードで走って行った。

「さてと……」

そしてリアはおもむろに上を見た。

（上に監視用の偵察機、あの木の陰に一人、機械はわかるが、木の影は……って、人間じゃない感じがする……もともと俺たちを迎えに来る予定だったのは近衛木乃香だったはず……ということは新しく来た人物を確認するために、わざわざ身を隠して相手を確認しなければならぬ奴って言えば、桜咲刹那か？……あ、いなくなつた、ふむ『もう確認できた』ということか？）

「まあ、原作通りなら、もう近衛木乃香は神楽坂明日菜と学校へ向かっていたはず……なら……」

《兄さん！助けて〜！！》

いきなり念話が入り顔をしかめてしまふリア。

ちなみにネギには携帯用の念話用術式が書き込まれた札を持たせてある、まありア（フラム）が作った携帯電話の魔法版なのだが、そ

れからの念話のようだ。

《何があつた？》

《えと、親切心で、女の人に、失恋の相が出てるって教えたら、ものすごく怒られちゃって……》

《……あゝ、ネギよ年頃の女子に失恋発言は、男の夢を否定されるのと同じぐらいダメージが大きい話題なんだよ……》

《えええ!!! そうだったの! あわわわ、謝らなきゃ!》

《はあゝ、いいかネギ、俺が言うことを言ってくれ、そうすれば少しは機嫌を治すはずだから》

《うんわかった、やってみる》

~~~~~

場所は変わってネギSideへ、……ただ今怒らせてしまった相手からアイアンクローをいただいているのだが。

(よし、兄さんの言われたとおりに……)

「あの！ 実はまだ続きがありました……」

「続きい！ まだ何かあるって言うの……！」

ネギへアイアンクローをしているツインテールの少女がさらに睨みを利かせる。

「えと、アドバイスなのですが“まだ、告白するべきではありませんせん”」

「む？」

なんだか、占いの後の助言のような話が出てきて少し落ち着く少女。

「“告白するなら、ベストな時期があるはずですが、ラッキーアイテムは可愛い服”というわけなんです……」

「ふ、ふん！ まあ、参考程度にしといてあげるわよ！」

「ごめんなさいでした」

何とか少女のご機嫌をとれたらしくアイアンクローから解放されたネギ、よかれと思ってやったことが相手の機嫌を損ねてしまい、反省してるのかうつむいてしまっている。  
そんな時、

「ネギやい、どこだ？」

「兄さん！！ あれ？ 帽子かぶったの？」

「げ！ またガキ！ ……え？」

そこには、久しぶりに、オレンジ色の羽根が付いている赤色の中折れ帽を被ったリアが走ってきた。

「大丈夫だったか？」

「うん、兄さんのおかげで……ひぶ！」

容赦なくネギへとチョップを繰り出すリア。

《こらこら、俺とお前は念話で話していたの、なのに俺のおかげって言ったら不審がられるでしょうが》

《あ！ そうだった……ごめんなさい》

ふと、リアは自分に向けられている視線に気づいた。

「この帽子が気になるんですか？」

視線を向けている少女へと声をかける。

「へ！ いや、別に……」

「そうですか……被ります？」

何か察したのかリアは普通では考えられない行動に出た、それに対しツインテールの少女はなぜかどうしようか悩んでいる素振りを見せている。

「ところで君たちなんでここにいるん？ 初等部なら前の駅やで？」

「そ、そうよ！！ ここは麻帆良学園の女子高エリアなのよ！ あんたたちみたいなガキが入ってきていい場所じゃないのよ！」

悩んでいたことがおかしいと気付き、恥ずかしくなったのか真っ赤になって吠えてしまうツインテール少女。

それに対して、説明してやれ、と肘でネギを突っつき合図を出すリア。

「え〜と、それは……」

「いや、いいんだよアスナ君！！」

いきなり第三者の声が掛けられ全員そっちへと向く。

「久しぶりだねー、ネギ君！」

「あ、高畑先生、おはようござ……久しぶり！ タカミチー！  
……！！？ 知り合い！」

おはよーございまーす、とマイペースな黒髪ロングの子のあいさつを聞きながらリアは、内心この後の話し合いについて考えていた。

(さて、校長の話によると俺のことは既に学園長に伝わっている……、ならそれほど警戒する必要だっ……いや記憶を見られるようなことはないだろうが念には念をと)

「きゃー……っ！！ 何よこれー！！」

（は？ って、ちょおおおおお！ ネギの奴風のブースト魔法切り忘れやがったな！！）

女性特有の甲高い悲鳴により現実に戻されたリアが最初に見たものはツインテール少女の下着姿だった。

（なんだよー！ 酷い言われようだな！ 確かに失恋話は僕が悪かったかもしれないけど、ここまで暴言吐かれるなん……あれ？ 兄さん怒ってる？ あれ、この人なんで下着……あわわわわわわわ！！）

謝ったのにかなりの暴言を吐かれ少し怒っていたネギだが、リアの雰囲気と自分がしでかした惨状を理解しものすごく慌てていた。

そして、制服の修繕をリアが提案し、ネギとリアは二人そろってツインテール少女に土下座しましたとさ。

~~~~~

場所は変わって学園長室、リアの学園長へのぬらりひょん発言騒動が落ち着き、ネギのA組の担任になることにツインテール少女、名前を神楽坂明日菜というが、猛反発しているところだ。

《兄さん、なんであの人は僕が先生になることに反対してるの？
さすがに理不尽さを感じるんだけど……》

《確かに理不尽な怒りかもしれないが、我慢してやれ、あいつは担任
の高畑先生が好きなんだよ、きっと、なのにネギがそのポジション
に入り込んでカッカしてるんだ、簡単に言うなら俺がいなくなつて
代わりに赤の他人がお前の兄になるようなもんだ》

《それは絶対嫌だ！ …… っつてそれってかなりあの人に悪いんじゃない
……》

《いや、悪いたとえが極端すぎた、けど残念がっているのは確かだ
からここは我慢してやれ》

《うん、気持ちは嫌ってほどわかるから我慢する》

「さて、そちらの話も済んだみたいだし」

(このぬらりひょんが！ 念話傍受してやがったな！！)

「さて、ネギ君やこの修業はかなり大変じゃぞ？ 失敗すれば故郷
へ帰らなければならんし、二度とチャンスはない、その覚悟はある
か？」

「はい、やらせてください！」

学園長の心にもない脅し文句に臆することなく返事をするネギ、そ
の姿が嬉しいのかリアの顔がほころんでいた。

「なあなあ、おじいちゃんネギ君のことは分かったけどこの子はど

「なるん？」

黒髪ロングの少女、近衛木乃香が隣にいたリアの頭をなでながら学園長に質問する。

「おお！ そうじゃったの、リア君にはネギ君のサポートとして副担任になってほしいのじゃが、頼めるかの？」

「任せてください、となると自分も何か教えるべきでしょうか？」

「ほっほっほっ、それは助かるの、得意な科目などあるかの？」

「教え易さで言ったら数学ですかね」

「あい分かった、ならリア君は2 Aの副担任そしてネギ君の授業のサポート並びに数学の教師を担当してもらおうかの」

了解しましたー、と元気よく返すリアだが、内心「ネギの授業のサポート」英語の担当も頼むね」という状況に気付き仕事が増えたと、忙しさに頭を抱えていた。

「では、今日から早速働いてもらおうかの、それでは指導教員のしずな先生を紹介しよう」

学園長の呼びかけに答えるようにすっと、学園長室に美人巨乳が入ってきた。

「おう」

しかし扉のすぐそばに立っていたリアとぶつかってしまい、そのた

わわな胸にリアの後頭部がのみ込まれた。

「あら？ ごめんなさいね」

「イエイエ、コチラコソスミマセン」

（ラッキースケベはネギの専売特許でしょうが〜！ やめて〜）

そんなリアの心の内など気にせず、学園長は話を進める。

「それと、このか 明日菜ちゃんや、ネギ君を部屋に泊めてくれんかね？ まだ彼は住む所決まってないのじゃよ」

「そ、そんな！ なにから…」兄さんはどうなるんですか！ 「…ちよっとー」

「むう、そうじゃのう、さすがに二人は泊められんじやろうし……」

そこに、待つてましたと言わんばかりにリアが飛びつく。

「ネギが住むのは女子寮ということですよ？ なら女子寮の中で一人住めて、なおかつスペースがある部屋が欲しいのですが、何とかなりませんか？ 」

「ふむ、なるほど……それなら寮長室があいてたの、今は誰も使つておらんし問題ないじゃろ」

（待て待て待て、寮長がいないってどんだけだよ！ ）

「ふおっふおっふお、いやなに、まだ寮長が決まってないだけじゃよ？ それに寮長なんて言っても飾りみたいなものじゃしの、寮内

の仕事と言ったらたいい生活指導委員が受け持つておるからの」

（まさかの、本編裏設定！ しかも心読まれた！）

「えと、では寮長室に住まわさせてもらいます」

「さて、話がそれてしまったが、ネギ君を頼むぞ、木乃香、明日菜君」

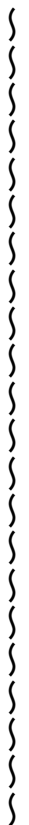
「うづうづ、分かりました」

しびしびながらも肯定の態度をとる明日菜だが、本心はいかほどに。

兄と一緒に居れなくなりぐずるネギだったが、やはりリアに説教されてしまいましたとさ。

「そうじゃった、リア君は放課後色々と話があるからまた来てもらえんかの？」

「はい、わかりました」



場所はさらに飛んで2 A教室前

またもや明日菜に色々言われ、今日泊る所どうしようと思えばやくネギを励ましながらリア、そんなこんなで教室の前まで来てしまった。

そしてネギはクラスの様子を見て緊張度が増してきていた。

「それじゃあ、これがクラス名簿よ、リア君の分は今はないけど明日には渡すからね」

「ありがとうございます」

「わかりました」

そしてクラス名簿を見て改めてたくさん年上の女性に教える立場になったと理解しさらに緊張してしまう。

「大丈夫だって、誰だって最初は上手いかないものさ、それでもぶつかって行って、先生らしくなっていけばいいだろ？」

リアの励ましと、故郷の姉、別の場所で自分と同じく修行している幼馴染を思い出し、覚悟を決めネギ。

「うん！ じゃあ僕が先に行くね！」

そして、ネギは2 Aのいたずら好きの生徒が作ったトラップにこごとく引つかかり、その後生徒たちから心配されていた。

「やんちゃやの〜」

「ふふ、そうね驚いちゃったかしら？」

リアの爺くさい言葉にくすくす笑ってるしずな先生、しかしすぐに先生として行動していた。

「ほら、あなた達席に付きなさい、新しい担任の先生と副担任の先生を紹介するからね」

しずな先生の鶴の一声で生徒たちはすぐに席に付き、ネギが壇上に登った。

「えと、今日からこの学校で英語を教えることになりました、ネギ・スプリングフィールドです、二学期の間だけです。がよろしくお願いします」

すると、最初は静寂に包まれていたクラスだが、すぐにカワイイコールが飛び交いネギは女子達に揉みくちやにされてしまう。

「騒がしいの〜」

「あ、はは、そうね、ごめんなさいね？」

またしてもリアの爺発言に乾いた笑みしかできないしずな先生だった。

「ということとは、そっちの少年が副担任ってことかな？」

パイナップル頭の少女がボイスレコーダーを持ってリアに近づいてきた。

あらかたネギへの質問が終わったのか、今度はクラスの子の視線がリアへと移されている。

「まあな、リアだ、ファミリーネームは無し、気軽にリアと呼べばいい、質問は後、数学を担当するからその時にだ」

すつと、少女どもに視線を向けると、何名かがウツ、っと恐縮してしまった。

（はい、O U T、もうダメいきなり怖がられちゃった、眼鏡かけたのにまったくやってらんないよ、もう）

眼つきに関してはやけにメンタルの弱いリアだった。

「ほら、ネギ授業始めろや、時間なくなるで」

「あ、分かったよ兄さん」

「え！ 二人は兄弟なの！」

ネギの兄さん発言にまたもやクラスがうるさくなるが、そこはリアがいさめた。

「はいはい、そのあたりは俺が説明してやるから今は静かにしろ」

途端にシーンとなる教室。少し睨み付けてしまったせいか、見た目が幼稚園児どもや髪で顔を隠している女の子辺りが、ひい！ と情けない声を上げていた。

その後すすす、と壁際に移動しネギの授業を見守るリア、懽然とし

た態度だったが、心の中ではものすごく泣いていた。

（はあ、仕方ないって思ってるんだけど、辛いよな〜まったく、…
…ふむネギも授業始められたししばらく見守ろうかな？）

と思っていたその矢先、ネギの頭に消しゴムの塊が飛んできてきた。

（ああ、やっぱり不審がられちゃったか……そりゃいきなり服が脱
げただもんな〜、そりゃ怪しむわな）

ちなみに明日菜の制服は学園長との会話している間にリアが超速で直しましたとさ。

しかしリアは気付いていない、近衛木乃香はすごいと香気に褒めていたが、明日菜はその光景をとんでもないものを見せられた時の顔で見っていたことを。

ネギの怪しさを助長させてしまった原因が自分にもあることを。

（ん、委員長が何かネギに耳打ちして……って神楽坂！ 筆箱はいかんよ！）

筆箱を委員長に投げようとしているのを見かねたリアは二人の間にすぐさま割って入った。

「よつと、神楽坂さん、物を投げるのは危ないですよ？」

「な、何よ陰口叩かれた私が悪いってのはどういことよ！」

「ありゃ、委員長さんたるものが陰口とは、いけませんよ？ 仲が
いいから遠慮がないのでしょうかが節度は守ってほしいものです」

「「そんなわけない（わよ）（ですわ）！！ ……」」

あまりのもり具合にクラスが笑に包まれた。

キーンコーンカーンコーン

そして、授業が終わってしまいその場はお開きになってしまった。

~~~~~

そして5時間目、数学の授業が始まった。

「はい、改めて、今日から皆さんに数学を教えることになりました  
リアです、よろしくお願いします」

ネギの時とは違い周りはシーンとなっている。

そんな中率先してリアに話しかけてきたのがパイナップル頭の少女  
の朝倉和美だった。

「あの、質問していいですか？」

パパラッチにしては元気がない、その原因が自分にあることを感じ  
下を向きながらもリアは指示を飛ばす。



「構わないが、色々聞きたいだろうから一人一回質問権を与える、なければパスしてくれ、それではえーと、明石さんからどうぞ」

「うええ、私！ えーと、じゃあネギ君とは兄弟なんですか？ あんまり似てないと思うのですが……」

「ああ、俺が養子みたいな形でネギの家に転がり込んできただけだから血は繋がってない、だが俺たちは正真正銘家族で、兄弟だと思ってる」

いきなりヘビーな話になり、質問した明石、その他何人かが空気に耐えられず涙目になっていた。

正直なところ一番泣きたいのはリアなのだが。

そこで、少し場の空気をどうにかしようとしてパパラッチが少しふざけた感じで発言した。

「じゃあ、リア先生って彼女とかいるんですか？」

「あゝ、俺のことたぶん好きだって言った奴がいるが……」

きた！ とクラスが同じ気持ちになった瞬間だった、が……

「あいつ今頃どうしてるかな」

いきなり遠い目をし始めたリア、周りには何かありその子と会えなくなったのでは？ と間違っではないないが勘違いをし、さらに空気が悪くなってしまう。

「先生は何か本を読むんですか？」

少し内心ビクつきながらも、間延びした声で綾瀬夕映発言する。  
質問の内容が、どう考えても地雷にはならないと感じクラスがよっ  
しやと内心ガッツポーズをするが、

「本ですか？ 字を読むのは嫌いじゃないのですがあまり読まない  
ですよね〜、恥ずかしながらラノベが読んだ本の中で一番多いで  
すね」

何事もなくてよかったー、と油断した瞬間。

「あ！ 料理の本も結構読みますね」

「…………えゝ！ ……」

容姿に似合わない、そんな気持ちを一言に凝縮叫びが出てしまった。

「…………悪いですか？」

「…………いえいえいえいえいえ！！ ……」

またもや部屋の空気が悪くなってしまった。

「はあ、そういう態度とられるの慣れてますから気にしないでくだ  
さい」

ついに、我慢の限界だったのか、泣き笑いのような顔をしてしまっ  
リア、その瞬間クラスの全員が悟った、「この子、目つき悪いけど  
いい子だ！」と。

しかし、時すでに遅し、リアは打ちひしがれたのか負のオーラを纏

っている、そのあとはさすがに不憫に思ったのか、この場で質問するとは思えない、桜咲刹那や龍宮真名も質問をしリアの調子を取り戻そうとしていましたとさ……。

そして、ある生徒の番となり、

「先生は、未来人っていると思う力？」

「え？ いないの？」

リアの速い切返しにクラスがポカーンとする。

「未来人って言ったなら、スーパーロボットに並ぶほどの男のロマンだと思えますけどね」

この瞬間、約一名この男はヲタクだとおもったそーな、あとは子供っぽいと笑っていたが。

「そうか、なかなか貴重な回答ありがとネ」

その少女はどこか納得顔、そして嬉しそうな顔をしていた。

・  
・  
・  
・  
・

その後つつがなく授業も進み、放課後となり、リアは一人学園長室へと向かった。



原作一話 いざ麻帆良……（後書き）

実を言いますと、リアと悪魔のバトルに感化され、ネギま！のキャラに十三機関の武器を持たせたくになりました。それで、持たせるとなると、少しフェイトガールズの武器案も変更されます。ぶちやけ作者の妄想です。

すでにNo？以外の武器を持たせるキャラは暫定してます。

やってもいいかどうか、もしやってもいいなら、？の武器を誰に持たせるか、ほかの団員の武器はコイツに持たせた方がいいなど、随時募集します。

作者の妄想に付き合わせて申し訳ありません。

ちなみに持たせるキャラ暫定案の中にネギパーティやフェイト達に関係のないキャラが一人だけいます、この二つの勢力以外で作者が好きなキャラです、なので今ままであまり出番のなかったキャラが少し日の光を浴びることになります、ご了承ください。

あと武器はリアみたいに、黒の皮手袋を着け、それに刻まれている術式から転送させるという方式をとりますので、手袋に団員番号を着けたいと思います。

これは手袋（武器）を渡された順番みたいなもので特に意味はありません。

なので『No？はイグニス』『No？はリア（フラム）』と決まっています。

ちなみに、No？の武器はエネルギーソードだったので、地味だから変更され、人形となっております。

ちなみにフェイトはNo？ではありませんすみません。



原作二話 やはりばれたか・・・（前書き）

今回は短いだけでなく、微妙なところで終わっています、申し訳ない。

前回あとがきで色々作者の妄想をぶちまけたのですが、この作品の前に書いていた小説を読み直し、自分の手に余るオリ設定は身を滅ぼすことを思い出し、出して二つ三つ位にとどめようと決心しました。

全部は作者の力不足で無理だと気づきました、そのあたりを指摘してください読者のみなさん、心からのお詫びと、感謝を。

ただ、名前の判明してるお気に入りの魔法先生の強化をやってみたかったな、なんてくすぶってる作者でした。

原作二話 やはりばれたか・・・

ひとまず、放課後ネギに学園長室言ってくる断りを入れ出発したリア。

そして、神楽坂に魔法がばれるんだっけなー、とこの後の予定も考えていた。

そしてついた学園長室。

「失礼します」

「おお、待つとつたぞ」

朝と変わらない学園長室、唯一変わっていることといえば、高畑・T・タカミチの存在だけだろう。

「それで、自分に何の用でしょうか？」

「ふむ、まずは伝えておくことがあつてな？ お主には夜の特別警備を手伝ってもらいたいのじゃ、もちろん毎日というわけではないし、他の魔法関係者とも組んでもらい一人一人の負担も減らそう」

「なるほど、さすがの学園結界も万能ではないということですね？ 了解ですできる限り協力しましょう、それとネギには内緒にするべき……でいいですよね？」

「うむ、理解が早くて助かるわい、ネギ君にはまだ早い話だからの、ほかの魔法使いについては正式に教師として働くことになったら話してもよいじゃろうて」



「了解しました」

「それと、そのことを他の魔法先生や生徒にも伝えたいので、夜の10時世界樹前の広場に来てほしいのじゃが？ そのついでにお主の実力も見ておきたいのどのう」

「了解です、それで相手は誰になるのでしょうか？ 実力的には高畑先生が適任かと思われれるのですが……」

「うむそうじゃの、さすがのワシもお主の実力を知ってるわけではないのじゃが、メルディアナの校長のお主に関する新しい報告書によれば、公爵級の悪魔を一人で倒したとか？」

「公爵級ですか！ それって僕より十分強いんじゃないかな？」

あの時の悪魔退治の一軒も学園長に報告されてたらしい、しかしあの高畑先生が知らなかったところを見ると校長は、それなりに地位のある人間にしか話していないようである。

「いやいや、倒してませんよ？ ぶつちやけ一歩間違つてたら死んでましたよ？ 公爵級なんて現世に簡単には呼び出せませんからね、本気でもなかったでしょうし、それに四年間も身動き取れなかったわけですし……あ、その節はネギがお世話になりました、遅れましたがお礼を言わせてください」

深々と、リアは高畑先生にお辞儀をし感謝の念を表す。

「いやいや、そんなお礼を言われるほどじゃないよ、僕はただ友達になつて欲しいって言っただけだからね」

リアと高畑先生が世間話を始めるが、それを学園長が一旦止めた。

「さて、実をいうところからが本題なのじゃが……まずイグニスのことなんじゃが、何か知らんかの？ アイツと仮契約を結んだ者がおらんのお、死んでるのか、生きているのかさえ分からんのじゃ、お主何か知らんかの？」

「残念ながら、自分にはイグニスに関することは何も……」

「そうか、それは残念じゃ、それとも一つ、あ奴がわしに残したもののなんじゃが、図書館島の地下に何か隠していったそうなのじゃ、そしてこれがその隠したものを保管しておる部屋の鍵らしいのじゃ、お主が持つておいたほうがいいじゃろ？」

そういつて学園長は特別変わった所のない鍵をリアに渡した。

「部屋にはとある人物が案内してくれるじゃろ、だがもしもイグニスについて何か手がかりが残されていたのなら教えてほしい、いいかね？」

「はい、それならお安いご用です、近日中に行かせてもらいます」

「うむ、よろしく頼むぞい」

「はい、では自分は今も行ってもよろしいでしょうか？ ネギが心配なので少し様子を見に行きたいのですよ、授業も失敗しちゃったみたいだし」

「あれ？ 明日菜君は成功したって言うってたんだけど？」

「あはは、高畑先生なら気付いていると思いますけど、神楽坂さんは高畑先生にいいところを見せたかっただけなんですよ」

「そうだったのか……」

何か思うところがあるのか、ふう、と軽くため息をはく高畑先生。

「報告ありがとうねリア君、それと僕のことはタカミチでいいからね？」

「了解です、タカミチさん、あ……タカミチさんもネギのこと励ましてやってください」

「そうだね、色々初めてで慣れないこともあっただろうし、それでは学園長、僕も行きます」

そして、リアとタカミチは二人そろってネギの元へと向かった。

~~~~~

リアが学園長室で話をしていた数分前、ネギは魔法を使って階段から落ちそうになった生徒の宮崎のどかを助けたのだが、そこに偶然居合わせた神楽坂に魔法を使った場面を見られてしまい、ただ今神楽坂が詰問中。

「朝の件も全部あんたの仕業だったのね！」

「あう、ホントにごめんなさい、でもこのことは他の人には言わないでください、そうなると大変なことに」

「知らないわよ！ そんなこと！」

「兄さんにも迷惑がかかっちゃうんです、だからそこを何とか！」

「うっ……」

さすがの神楽坂も、家族に迷惑がかかる、という言葉聞き、ネギが魔法使いであることを周りに話すことを躊躇ってしまふ。

「ふん！ ダメな弟のお世話をするのも兄の仕事でしょうが！ それにこっちだって恥ずかしい思いさせられたんだからね、簡単に許せる訳ないじゃない！」

少し酷いと感じるかもしれないが、彼女も年頃の女の子、公衆の面前で脱がされ、好きな人に醜態をさらしてしまふ、思考が暴走してしまふのも仕方のない仕打を受けたのである。

「それなら仕方ありません、こんなことはしたくありませんでしたが、兄さんに迷惑をかけるぐらいなら僕は……」

「な、何よ……」

嫌な予感に神楽坂は冷や汗を流してしまふ。

「残念ですが、魔法に関して記憶を消させていただきました！ 少し頭がパーになるかもしれませんが、許せとは言いません、ですが兄さんに迷惑かけたくないから！」

「え？ え？ ちょっと！ パーって！」

「記憶よ消えろーっ！」

「え！ ちょ、まつ！」

無情にも放たれる魔法、しかし記憶ではなく、神楽坂の服が消し飛んでしまった、しかもブレザーだけ残ってしまうという、マニアックすぎて悲惨な状態である。

「いやー！ー！」

さらに神楽坂に追い打ちがかかる。

「おい、その二人何をやっ……」

「ネギイ、お前ってやつは」

「見るなー！ー！」

「何で俺だ……又ペロ！」

今日も吹き飛びリア君であった。

取り合えず神楽坂に代えの制服を用意し、タカミチには先に退散してもらった。

そして、リアの土下座の甲斐あつてか、ネギが神楽坂の頼みを聞くという形で手を打ってもらったのである。

そして神楽坂の帰り支度をするために教室へと戻った三人。

神楽坂が、二人にそこで待つてると言い聞かせ教室に入った瞬間、破裂音が響き渡った。

「……………ようこそ？　ネギ先生、リア先生！！……………」

どうやら、3 - A全員？　が二人のために歓迎会の用意をしていたそうだ。

そして二人は主役だということとで教室の真ん中の方へと座ることに。この時、宮崎のどかがネギにお礼をしていたり、委員長がいつ作ったのか、大きなネギの像を作っていたりと騒がしかった。

（はあ、短時間でここまで用意できるとはさすが3 - Aだな、つて早速ネギが神楽坂の言われた通りに行動してるな）

リアの視線の先にはタカミチと神楽坂の間を行ったり来たりしているネギの姿があった。

ネギが神楽坂に報告をするたびに神楽坂がオーバーリアクションをとるのが面白かったが、なんて言われたか原作を思い出すと同情してしまうリアだった。

（さて、夜は実力見せなアカンのやね、相手はタカミチなのは確
実……結界でも張ってガチバトル一步手前にまで持つて行った方が
いい……よな、公爵級を倒したつてばれちゃってるんだし、まっ
たく難儀やな）

と、リアがふと周りを見るとほとんどの生徒がいなくなっていた。

（あり？ 最近こんなばっかだな俺）

考え込んで周りが見えなくなる癖を直そうと決めたリア、その時リ
アの向かいの席に座ってくる生徒がいた。

「すこしいかな？ リア先生」

「ん？ 超さんですか、どうしました？」

「おお、私の名前覚えてくれた力、嬉しいね、まあそれは置いと
いて、先生ロボットに興味あったりする力？」

「大好物です」

即答するリア、その態度に満足したのか笑顔でうなづく超。

「そうか、先生はどこか見込みがあるネ、もしよかったら麻帆良の
ロボット工学研究会の見学をしに来ないかね？ 先生なら大歓迎よ」

「え？ いいんですか？ 会って間もない自分をそんな関係者以外
立ち入り禁止のような場所に連れて行って」

「大丈夫ネ、私はロボ研に顔がきく立場にいるからね、それぐらいお安い御用よ……………それに会って間もない関係でもないネ」

「？」

リアは超が最後に何か言った気がしたのだが、上手く聞き取れなかった。

「えと、じゃあ今度見学させてもらいます、日程とかは？」

「別にいつでもいいネ、ただ私はいくつか部活をかけ持っているからいつもロボ研にいるわけではないネだから一声かけてくれるとうれしいヨ」

「わかりました、楽しみにしてますので、今度声をかけますね」

そして二人は二言、三言喋って別れた。

その後歓迎会もお開きとなり、ネギは神楽坂と木乃香の部屋、リアは一階の寮長室へと帰って行った。

原作二話 やはりばれたか・・・（後書き）

やはり、前書きにもあったように二つ三つぐらいは十三機関の武器を出す予定なので、案は今だに募集します、一応、一つ誰に何を持たせ、それに関するオリ物語も作者の頭の中で決定しました、これはぶれることはないでしょう。

しかし、名前のわかってる一般の魔法先生を強化する話、好きな人はいるのだろうか？ 原作にはあまり絡まないだろうが、次回のリアの実力試し辺りや、学際イベントで少しかっこよくなるだけですか・・・

チャオの話方は違和感なかったでしょうか？ 漫画も見ながら書いたから問題ないと思います。

そして、やけにチャオと絡むリア、これで今迄に出たいくつかの疑問は解消したのではないのでしょうか？

原作三話 タカミチは努力の天才だと思っ(前書き)

リア(フラム)は家族や親しい人にはものすごくフランクに話しますが、見知らぬ人、嫌いな人、尊敬する人にはものすごく丁寧な言葉になります。

これからもリア(フラム)の口調がそろわないこともありますが、勘弁してください。

ちなみに自分はエセ関西弁が好きです。

原作三話 タカミチは努力の天才だと思う

そんなこんなで夜になり、寮長室には三人の人影があった。寮長室に備え付けでおいてあった丸ちゃぶ台を挟んで二人と一人は対峙していた。

「ネギ、あの時は有耶無耶になったが、経緯だけは話してもらおうぞ」

「うん、簡単に説明すると、階段から落ちそうになった宮崎さんを助けるために魔法を使ったら明日菜さんに見られちゃって……」

二人が真剣な態度をとっている中、明日菜は空気に耐えられなくなりリアが淹れたコーヒートを紛らわすために飲んだのだが、あまりの美味しさに舌鼓を打っていた。

「そうか、それで神楽坂の服がすつとんでたのは？」

「その、記憶を消そうとしたらなぜか服が消えちゃって」

「……」

ぶっちゃけた話、リアは転生者であり原作知識もちなので、そのあたりは予測できたのだが、やはり解せないところがあった。

（原作のネギはどうか知らんが、俺が育てた（ギャグではなく文字通り）ネギはそんな基本魔法で失敗するような奴じゃない、まあ使わないことにしたのはないスタンスだったからあまり練習はさせなかったけど、でもやっぱり失敗するような奴ではない、て

ことはだ、服が吹っ飛んだのは明日菜の体質のせい、でいいんだろ
うな)

「ネギ、記憶消去の魔法失敗した感触だったか？」

「え？ えと、あれは成功してたと思うんだけど……たぶん」

「不思議だな、まあその件はどうでもいいとして……いきなりば
れちまったな、この野郎……」

「ごめんなさい」

兄にかっこ悪い所を見せてしまいうなだれるネギ。

「はあ、それでお前はどっ思ってるんだ？」

「え？ 何のこと？」

「だからさ、宮崎さんを助けたから魔法がばれたんじゃない？ 言い
方は悪いけどさ、宮崎さんを助けてなかったら魔法はばれなかった
……どうよ？」

「……僕は宮崎さんを助けたことに悔いはなかったよ、むしろ良か
ったって思ってる、だからこれで僕がオコジョにされても悔いは……
なくはないけど、目の前で助けられる人を見捨てるよりはましだ
よ」

「なら、それでいいじゃん？ ぶっちゃけ、立派な魔法使いになる
以前に立派な人間になれなきゃいけないわけよ、そこんとこ理解し
ているみたいなので合格」

いいこ、いいこ、とリアはネギの頭を撫でてやった。

「さて、神楽坂さん、ネギが魔法を使えることを黙っているだけではなく、ネギを泊めていただきありがとうございます」

そしてリアは深々と神楽坂に土下座をする。

「べ、別にそこまで感謝されることでもないわよ、私がしたかっただけなんだから、気にしなくてもいいわよ、それにあんたも私のことは明日菜でいいわよ」

「そうですね、では明日菜さんありがとうございます、もしネギでもどうにもならないこと、悩み事などございましたらいつでも来てください、ネギを助けてくれたあなたなら大歓迎です」

「まあ、期待しておくわよ、あとその堅苦しい敬語どうにかならないの？　なんか落ち着かないんだけど……」

ふむう、とリアは顎に手を当てて少し考えるそぶりを見せた後

「了解、ならフランクに話させてもらうぜい、これでいいんだろ？　まあ学校にいるときは敬語になっちまうがよろしくな」

「切り替え早いわね、まあ何かあったらよろしく」

「よろしくされた、が、ところがぎつちゃん、残念なことに明日菜さんは魔法が存在する裏側の世界に足を突っ込んでしまい、なおかつネギと俺に関わってしまったので、俺のことを少し話させていただけますしう」

すると、明日菜はまだ何かあるのか？ と若干嫌そうな顔をしていた、ぶつちゃけ彼女も面倒事は御免こうむりたいのである。

「まずは改めて自己紹介、魔法人形のリアです、一応ネギのサポートとしてこの麻帆良に来ました」

「魔法人形？」

「読んで字のごとく、魔力で動く人形です」

その説明を聞いた明日菜はおもむろにリアの頬をムニムニと抓ると、より揉むといった表現の方が適切な強さで触ってきた。

「ホントに人形なの？ 手触りとか人と変わらないじゃない」

「人形ですよ？ 身長位は簡単に変えられるし、まあ一番手っ取り場やい方法をで証拠を見せましょうかね」

すると、リアはどこから取り出したのか分からないが、ナイフを自分の親指に押し当て軽く切った。

「え！ 血が……白い？」

明日菜が驚いている間にリアはその切れた個所を軽く舐め血を落とし、もう一度明日菜に見せた。

「傷がない！」

「これで分かっただろ？ 俺は人形やねんで、けど心は人間と変

わりはないがな、はっはっはっ」

さすがにあんなものを見せられては明日菜も信じるしかない。

「そうね、信じるわよ」

その後、軽く雑談をし集会もお開きとなった。

「ネギ、言い忘れたが魔法がいきなりばれた罰として俺がお前に飯作るのは日曜だけね、そんなときには明日菜さんも、木乃香さんも一緒にどうぞ」

「え……」

「ん、その時になっただらごちそうになるわよ」

シヨックで白くなったネギは明日菜に抱えられて部屋に戻っていき
ましたとぞ。

~~~~~

そして夜の9時半ごろ寮長室の扉をノックする音がした。

リアが扉を開けるとそこには一人の女子生徒がいた、彼女はネギの  
受け持ったクラスの生徒である。

「おや、龍宮さんですか？ どういったご用件で？」

「なに、学園長から君を世界樹前の広場まで案内するよう頼まれて  
ね、さすがに学園長の依頼となると断れないからね」

龍宮がフランクにリアに話しかけてきた。

「それはありがとございませす、では行きましょつか」

リアは、スーツにいつもの赤マント姿で出発した。



途中、龍宮がリアのことを人間ではないと、見破ったり、リアが「  
そういうあなたはハーフですか？」と聞き驚かれたりと、早速お  
互いにネタバレしていた。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

リアが龍宮に連れられて世界樹前の広場に到着すると、そこには学  
園長を筆頭に高畑先生など原作でも名前の出ていた先生がほとんど  
おりちらほらと中学高校生の魔法生徒もいる。  
中には顔を逸らしているシスターも混じっている。

「うむ時間ぴつたりとは、なかなかやるのう、さてどうせなら自己  
紹介を頼むぞい、この中には君のことをまだ知らない者もあるで  
お」

「はい、では……紅き翼所属のイグニスが作った最高傑作の魔法人  
形、リアですネギ・スプリングフィールドの補佐兼護衛で付いて着  
ました、ネギと会うまでは魔法世界でいろんな場所を旅しながら過  
ごしていました、どうぞよろしく願います」

詳しいことを聞かされていなかった、学生魔法使いの集団が少しうるさくなるが、魔法先生たちはリアを見定めるような目で見ていた。

「うむ、ではリア君の実力を見てみたいので、高畑君相手をしてくれんかの？」

「はい」

すつと高畑先生がリアの前へと歩を進める。

そして、学園長を除けば学園最強のタカミチが相手となり生徒陣に衝撃が走る。

「……」

「……」

お互い軽くにらみ合い、先に動いたのはタカミチだった。

最初からポケットに手をつ突っ込んでいたので、いきなり居合拳を撃つことができたのだ。

だがリアはその場所から一步も動かなかった、そして。

バシン！ と居合拳により放たれた空気の塊がリアの眼前で霧散した。

「な！」

周りのギャラリーは腕の立つ魔法先生や魔眼持ち以外は何が起きたのか分からなかったが、今の一連の出来事を見ることのできた人は全員が驚いた。

「魔法障壁を一瞬、しかも最低限のサイズで展開するなんて……」

そう、リアのしたことは空気の塊が自分に当たる直前に魔法障壁を最低限の大きさと張り居合拳をガードしたのである。

「その程度の速度は見慣れているんでね、しかも自分は防御と回避の方が得意なんでね、これぐらいの芸当はまあ簡単な方ですよ」

ぶつちやけ、今のタカミチは特別強い身体強化をしているわけではないので、手の動きから弾道の起動予測ができたのである。

ただ、見えない撃たれた拳銃の弾を掴むような芸当を簡単な方と言えるのも結構異常な話だが。

「これは参ったね、僕も出し惜しみせず本気を出した方がいいのかな？」

「ぶつちやけ、自分の力は紅き翼の超人軍団に近いと自負してますからね、それぐらいしないと俺の防御は貫けませんよ？ それと……」

リアは懐かしの、マントに刻まれた転送術式を使いナイフを四本転送させ自分と高畑先生を囲うように地面に投擲する。

「防音・耐衝撃結界作動」

そしてできたのは一辺が三十メートルほどの正方形の結界であった。

「これで心置きなく広域殲滅攻撃が打てますよ？ さっきも言いましたけど自分は紅き翼の超人集団並みの力を持っています、元紅き翼

に所属するあなたなら夢見たシチュエーションなのではないのですか？」

「……そうだね、もしかしたら師匠やナギさんという存在に追いつけたか実感できる絶好の機会だ、遠慮なくいかせてもらおうよ？」

「かかってきんしゃーい！ 防御には定評があるんでね、まあ俺の魔法障壁を十三枚中十枚割れたら十分超人集団ですよ」

「そうか、なら……左腕に魔力、右腕に気……合成！！」

究極技法の咸卦法による出力アップ、そして放たれる、強大な居合拳、その名も……

「七条大槍無音拳」！！」

ゴウウ！ と空気が揺れ強大な居合拳が放たれた。

「魔力障壁、最大防御！！」

ヴンと十三枚からなるリアの最強魔法障壁が現れる。

そして、巨大弓と盾がぶつかつた。<sup>バリスタ</sup>

巨大な爆発それに伴う砂煙により二人の姿は見えなくなる。

「どうなつたんだ！」

そこに居合わせた全員がリアが吹っ飛んでしまったのでは？ と考えたその時、

「はあ、……この程度ですか？ 高畑・T・タカミチ、残念ですよ

……」

そこには片手を前に突出し、はあとため息をつく無傷のリアの姿があった。

「これが全力ならまだまだですよ、障壁だって七枚しか割れませんでしたよ？」

その場にいた全員が驚愕した、そして信じるしかなかった、目の前にいるリアと言う存在が本当に紅き翼の英雄達に匹敵する力を持っていることを。

「……」

悔しいのか、タカミチは俯いたまま動かない。

「仕方ないですね、まああとは自分が防御だけじゃ……」「待ってくれ！」「……？」

「すまなかった！」

するとタカミチは行き成り頭を下げリアに謝った。

「僕は君の言ったことを信じていなかった、そのせいで全力で付き合ってくれた君に不快な思いをさせてしまい本当にすまないと思ってる」

「……さらに上があると？」

「ああ、だから頼む、あと一回だけ付き合っしてほしい」

体を90度曲げたきれいな謝罪の姿のまま懇願するタカミチ、それに対してリアは、

「わかりました、次は本気で来てくださいよ？」

「ああ、感謝する」

そしてもう一度構えをとるタカミチ、しかし彼が纏う雰囲気は先ほどの物とは全くと言っていいほど別物だった。

「これはイグニスさんが僕に教えてくれた教えを取り込んだ僕の最強技だ、君もイグニスが作った君にこの技を見せるなんて僕に僕は幸運だよ」

「ほう、それは楽しみです」

そしてお互いに構えあつた。

「いくぞ！ “螺旋大転槍・無音拳”！！」

「魔力障壁、最大防御！！」

回転を加え先端をドリル状にすることによる一点突破、それにより分散してしまっていた技の威力が集まり、“七条大槍無音拳”の何倍もの威力を発揮した。

そして現状は既にリアの魔法障壁を12枚叩き割り、最後の一枚を削っている。

(この技はただの一点突破を目指した技じゃない、イグニスさんの教えを受け継いだ僕の必殺技だ、そう簡単に防げるものなんかじゃない!!!)

「ぐぬづづづづづづづづづ」

「おおおおおおおおお」

だんだんとリアの最後の障壁に亀裂が走っていく。

(イグニスさん、あなたの口上借ります!)

「僕のドリルは、天を作るドリルだああああ!!!」

「おいおいおい、まじかよ……」

ズドオオオオオン!!!

あまりの衝撃に結界が吹き飛び突風が吹く。

そして煙が晴れ、そこにいたのは、

「ぜえ……ぜえ……」

肩で息をしているタカミチと、

「はは、これならきつと認めてくれますよ?」

突き出していた右腕部分の服が千切れ飛び、腕から少し血を流しているリアだった。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

少し休んだのち、リアの希望で「こつちも攻勢に出たい」ということなので、もう一回リアとタカミチが戦うことに。

「では、改めてよろしくお願いします」

「うん、いつでもどうぞ」

タカミチは既に咸卦法による出力アップをしており準備万全である。と、次の瞬間リアが瞬動でタカミチの懐に潜り込み、アッパー気味の右を放つ。

しかし、それは少しタカミチの頬を掠るだけで、タカミチのカウンターがリアの腹部に襲い掛かる。

「ちっ！」

それをリアは腕で受け止め殴られた反動で距離をとる。すると、タカミチがポケットに手をつ突っ込んでいた。



(さつきも原作で見たことない技使ってきてビビったが……あのタカミチの必殺技がさっきの技一つなわけがない、なら……)

「千条閃鏃無音拳”!!!」

(な！ 豪殺居合拳ちよい下程度の威力の居合拳が何十発も！！) まさか、連打ができるとは思わず、少し身構えてしまっリアだが。

「真つ向勝負だ！ 受けて立つ！」

リアも連続パンチで応戦する……が、スピード負けしてしまい何発か食らってしまう。

「つうく、やるね、タカミチさん」

「ふふ、君ほどの実力を持つてる人に褒められると純粹にうれしいよ、けど……」

「そうだな、少しかっこいいとこ見せないと示しがつかないな！……ならもう一回同じ技を使ってくれませんかねえく、こっちも“技”で対抗しますから」

「いいよ、どんなことをしてくれるのか僕も興味あるからね」

そしてタカミチが構える、それに対してリアは自身炎化……ではなく部分炎化した。手から肩を炎化させたのである。

「……不思議な技だね、自分の体を火に変えるなんて」

「簡単に言えば出力さらにアップといった感じですよ？ けどこの技は魔力を節約して全身炎化に追いつける連打を放てるブースト、をコンセプトに考えた新技法、結構試行錯誤したんで……」

「へえ、全身を火にすることもできるんだ、まるで火の上級妖精みたいだね、さてじゃあその新技法の力見せてもらおうよ……」千条閃  
「鏝無音拳」！！」

「……“時よ”！！」

タカミチの連打に対し、リアはそれを上回る超連打だった。

もともとリアは、スピードが遅いのである、自身炎化の大部分はスピードに費やされているため爆発などの効果を使いあまり出力アップができなかった筋力等を補っているのである。

そんな中、自身の拳速のみを特化させた技がこの部分炎化である。拳と肘を交互に爆破させその推進力を使って高速の拳を再現したのである。

ちなみに肩も炎化させたのは、一回肘までを炎化させ同じことをしたら肩が外れてしまったためである。

この技を開発したのはアーニャに自分のネタ魔法を教えているときで、彼女に外れた肩を元に戻してもらったという苦いおまけつきである。

「な！」

自分の連打をも上回る速度に驚き、そして嬉しいと思うタカミチ、そしてリアの連打の追加効果、爆発により煙幕でリアの姿を見失ってしまう。

（くっ、高速連打だけでなく、殴った瞬間爆発も起きるなんてなかなか凶悪な技だね……っ、後ろ！）

気配を感じ取りすぐさま後ろに居合拳を放ち牽制を試みるが、リアは既にいなかった。

「こっちですよ？」

そして後ろから聞こえる声、すぐさま振り返るタカミチだが彼が見たのは、手首から肩までを炎化させ、手の炎化を解除したリアが、タカミチに向かって親指と人差し指、中指だけを立て、手首同士をくっつけ両手の手のひらをこっちへと向けていたリアだった。

「な……避け……！！」

次に来る連打を避けられないと悟りながらも逃げようとしたタカミチ、だが自分の体が止まっているかのように動かないのである。

「時よ、止まれ！！」 てな

そして、リアがタカミチのことを軽く押すと彼はそのまま尻餅をついてしまう。

「どや……！」

「はは、すごいねさっきの超高速連打だけでもすごかったのに魔法も使わないで相手の動きを止めちゃうなんてね、あのまま戦ってても負けてたのは僕だね」

ギャラリーは、今までの起こった戦いに付いて行けずポカーンとす

る人ばかりだった。

「ほっほっほっ、ものすごいものを見たのー、では諸君彼はこれからわしが依頼したときだけじゃが、夜の警備に参加して貰うからの、そのつもりでな、では解散じゃ」

学園長の一言でそれぞれ帰宅していく面々、そしてそれまでの戦いを遠くからのぞいていた影が二つあった。

「ほう、あれがあの人形使いの最高傑作か……なかなかやるではないか」

「記録完了しましたマスター」

「うむ、英雄の息子だけではなく、人形使いの最高傑作までこの学園に来るとはな、ふっ……忌々しいあの二人の縁者が私の元へとやってくるか、これは僥倖、ネギ・スプリングフィールドの血をいだき完全に復活し、あの人形を屈服させ我が物にしてくれよう……ふっふっふ、はっはっはっはっはっはっ……ヘクチ！」

「マスター、夜風に当たりすぎました、これ以上ここには風邪をひいてしまいます」

「わわわわ、わかっとなるわー！ くそー、呪いなんぞなければこの私が病気になぞ…ハックション！！」

真祖の吸血鬼になれば彼女のカリスマはかなりの物なのである、ものであるのだが……やはり封印状態の彼女はランクが下がりカリスマ（笑）になっってしまったのだろうか？

「うるさいわー！！」



原作三話 タカミチは努力の天才だと思う（後書き）

いろいろネタを出しました、まあ気にしない方向で。

ちなみに、イグニスドリルを自分で使っていました、ロボットも使う奴はいましたが、さすがにグレラガは作ってません、あくまでOG作品しか作ってません。

そしてイグニスの設定ですが、

基本は全身鎧に帽子にマントというカッコをしています。

ネタとして使う予定だと公言した通り、彼の格好は常時仮面ライダーみたいだったというわけです、そのせいでだれも顔も見ただことない。

というわけです、昔焔がイグニスのことを説明した回もこのことを踏まえて設定を付け足しておきます。

ドリルを使う仮面ライダー…男のロマンも二倍です！！

原作四話 短編集風（前書き）

久しぶり？ の全力ほのぼの！ 笑えるかどうか微妙だがギャグパートです。

楽しんでいただけたら光栄です。





ヴァ、宮崎、四葉、レイニーデー、このメンバー以外が机の上に正座させられていた。  
ちなみにネギは自分が怒られているわけではないが床に自主的に正座していた。

こんな状況になった理由は簡単、英語の授業でネギが明日菜に英文の訳を頼んだがまったくできなかった、そしてネギが「なはは………」と苦笑いした後、みんなが明日菜を笑った。

まあ明日菜が脱がされたこと、ネギが明日菜をバカにしたこと以外は原作通りである。

「………」

リアは無言、終始無言だった。

その間クラスのほぼ全員が泣きが入っていた、正座しているわけではないが、宮崎などガタガタ震えながら漫画涙を流している。

「……あのさあ〜」

ビクッ！！ とクラスのほぼ全員がリアの一言に肩が震えた。

「人の揚げ足とって楽しい？ 笑いが絶えないこのクラスは素晴らしいと思うよ？ でもさ人の失敗を笑うのはどうよ？ そりゃ、日常生活で友達が軽い失敗して笑っちゃうのは分かるよ？ 俺もそういう経験あるし？ 逆に笑われた経験もある、でも悪い気はしなかった、最後はお互い笑い合ってた………」

別に怒鳴って威圧的に話しているわけでもない、いつも通りに話しているだけである。

だが、言葉が実体化してクラス全員の上のしかかってくるような

感じがするのである。

「けど今回は違うよね？ 明らかに馬鹿にした笑だよね？ まあ笑うだけなら簡単な注意で済ませたさ、けどさ態々、英語がダメ、他の教科もダメ、そんなことまで言う必要ないでしょ？」

キーンコーンカーンコーン

「あ、授業終了か……、まあそういうことだ、まあ反省してくれたら先生は嬉しいよ？ では、日直、挨拶はいいから休み時間突入しなさい、ネギ、時間とって悪か……なにお前まで正座してるんや？」

「え！ えと、別に……」

「そうか、なら職員室戻るぞ」

「う、うん」

そして退場していったリア、だが2 A全員その場から動く者はいず、正座をしている者は次の教科の先生が来るまでずっと正座をしていた。

(リア先生は怒らせない様にしよう……)

そう全員が思ったそうな。

ちなみに、春日が正座を免れたのは隣に座っている超の助言によるものである。

~~~~~  
リア怒りの炎編（赤い炎）

帰りのホームルームの後、リアは明日菜に捕まっていた。

「早速相談事ですか？ 先生頼りにされて嬉しいで〜」

「いや、そうじゃないんだけど」

「あ、そう、じゃあネギのこと？」

「どちらかというと、魔法のことなのよ」

「ほ、どんな魔法のことです？」

「……惚れぐす「犯罪です」……まじ？」

リアは明日菜が言い切る前にぴしゃりと言い放った。

「ネギが作るとか言ってたのですか？」

「まあ、それらしきことは言ってたのよ、時間はかかるけどって」

「あ~~~~、受け取っちゃだめですよ？」

「わかってるわよs「明日菜さん！ って、兄さん！！ ……わわわ、ヒデブー！！」あ、ちょ、よけ！」

「なんですか？」

（はー、ネギよ今日も説教か~~~~ってワプ……なんだ？ イチゴジユースか？）

リアの背後から走ってきたネギ、ネギは明日菜に惚れ薬を渡そうと走ってきたが、リアが明日菜と一緒に居たのが予想外でビックリしこけてしまったのである。

そしてネギが持っていた薬はというと、

「……リア先生？」

そういうことである。

のちにリアは泣きながら明日菜に語った、「女性という存在が純粹に怖いって思ったのはあの時が初めてだ」と。

・
・
・
・
・
・
・

そして夜、またしても三人は寮長室にいた。前回と違つのは、明日菜は離れたところからその光景を見ていることである。

「ばっかもーん!!」

「ごめんなさい」

「俺の手を借りず明日菜に何かお詫びをするのはいいことだ、だが犯罪に走ってどーする！」

「ごめんなさい」

この後、リアの大声を聞きつけてやってきた2 Aの面々に明日菜は語った、「リア先生の後ろに海鮮家族の大黒柱のスタンドがみえた」……と。

だから、それはネギの特権だろーがー！！
(久しぶりのリア視点)

カポーン

「いー湯だな」

「そうだねー兄さん」

ただ今、兄弟仲良く入浴中である、まあいきなり明日菜がネギを引っ提げて寮長室に突貫した時はマジツビビだったがね。

「しっかし、俺と一緒にじゃなきゃ風呂に入りたくないって子供かお前は」

「ううう、だって」

「だってもへチマをねーよ、ちょっとは成長しろ」

「ううう、は〜い」

まったく、いまだに頭洗うのが怖いなどは、ガキじゃあるまい…
…いや、まだガキだったよ、こいつ。

がやがや

あ？ 外が騒がし………やっべー、そーいや原作でこーいうイベントあつたな〜。

「隠れるぞ！ ネギ！」

「え？ え？ え？」

ぎりぎり近くの観葉植物の陰に隠れられたが、どうすっかね。
ん？ 明日菜はいないようだな、寝たのか？

「兄さんどうしよう？」

「隙を付いて逃げるそれしかないだろうな、さすがに子供とはいえお前は先生だ、生徒の裸見たとなると……社会的に抹殺されるな」

「あわわわ………って、兄さんもでしょ……！」

「ば、大声出すなよ！」

「そこにいるのは誰ですか！！」

見つかった　　！！！！　しかもシヨタ長じゃねえか！　くそ、龍宮か桜咲だったら逃がしてもらえたかもしれないのに。

「ネギ、俺が囷になる」

「そんな兄さん！」

「たぶんただでは済まないはず、だから上手く逃げたら明日菜を呼んできてくれ」

「明日菜さんを？」

「ああ、あいつは俺たちをここへと追いやった張本人だ、きつとみんなに事情を説明してくれるはずだ」

「そうか、分かったよ兄さん、僕必ず明日菜さんを連れて戻ってくるから！！」

「ああ、任せたぞネギ、武運を祈る！！　とおう！！」

「兄さああああああん！！！！」

派手にいくぜー！　にしてもすげえなネギ、最初の突っ込みの後は全部小声で話してたぞ、無駄にノリが良くなったというか、体が勝手に反応しているというか……って危な！！　桶が飛んできたぞ！

「今のをよけるとは手ごわいでござるな」

「誰だか知らんが、おとなしく捕まりなよ」

「覗きはよくないアルよ!!」

「お嬢様の入浴を除くとは、よほど死にたいらしいな……」

ぎゃあああああああああつああ!!!!

怖! しかも最後の特に怖!!

こうなりや、足の部分だけ炎化して、水蒸気で目くらましました!!

「む、霧隠れの術!」

「ふつ、その程度で私の魔眼から逃げられると思うなよ」

「む、何も見えないアル!」

「ぼそぼそ(魔力!? 西洋魔法使いにもお嬢様を狙うものがあるのか!?)」

うお! また飛んできた! くそ追いつかれ…ぶふう!

「む、壁にぶつかったでござるな」

「……」

「見えないアル」

「追い詰めたぞ侵入者！！　コノちゃんの素肌を見た大罪、その命で償え」

オワタ orz

俺の人生おわたよ。

あ？　桃源郷見れて満足だろ？　はっ、忘れてないかお前ら、俺は2　Aの奴らが入ってきたとき明日菜がいないか、見て探したんだぜ、その時俺は至って普通だったろ？

つまりはさ、俺さ、女性の裸見ても綺麗だとか、胸のサイズがすげえ！　とか思うけどさあ、その中に性的な気持ちが含まれてないのよ、てか見てもたたないのよ、息子が……

大人形態になって、昔そいう動画見たりしたけど、結果変わらず

……

魔法球の中に一週間ひきこもったね。

あ、ちなみにこの後明日菜が来て助けてもらいました、別に見た目が子供だし俺の視線が邪な物じゃないって気付いたのか普通に一緒に風呂入る羽目になりましたけどね！！

しっかしメインヒロインに三日連続で土下座した転生者って俺ぐらいなんじゃないかな？

なんて思ったりした夜でした。

ちなみに原作イベントの、ネギの部屋移動の話はネギの「明日菜さんの部屋がいい」の一言で決着がついた、はつきりと自分の意見が言えて兄さん嬉しいよ。

~~~~~  
~~~~~

リアにかっこつけは向いてない。

(またまた、リア視点)

はい、どうもリアです、教師としてそれな頑張ってる毎日です、そして今日も先生らしいことをやっています……

「で、言い訳はありますか？」

「くくくくくくくくぶんぶん……！！」「」「」「」「」「」

あはは、なんでみんな怖がってるのかな？ 少し O H A N A S I してるだけなのに。

「高校生にみなさん、全部そちらが悪いなんて言いません、けど高校生だってまだまだ子供ですよ？ しかも年齢が上の者の言うことを黙って聞け、なんて十分子供発言です、以後注意するよつに」

「「「「はい……「「「「」」」」」

「さて、委員長さん、明日菜さん、女性が取っ組み合いだなんては
したくないですよ？」

「「はい……」」

「それに委員長さん……あやかと呼んでください！ ……あっう
……」

伝家の宝刀、リアチョップさく裂！！ いやはや、この状況でそんな
冗談が言えるとは

「はいはい、委員長さんも同じ女性に年増とか言っちゃだめですよ
？ そんなこと言ったら俺から見たら委員長さんも年増になっちゃ
いますよ？」

「……」

ありゃ？ 白くなっちゃった？

「さて、説教はここまでです、では解散で」

「「「「「「「「「「「「めんなさ〜……「「「「「」」」」」」」

はい、よくできました。

・
・
・
・
・

「アタッカー、アタッカー、ナンバーワン！ てなあ！！」
よし、決まった。

「くっ、やるじゃない、リア先生！」

「兄さんすごい！」

ふっふっふっ、どや！ 見たか俺のアタックを！！

「あんたは、何高校生とバレーで熱血してんのよ！！」

うぼあ！ つく、やるな明日菜いいアタックじゃないかお前なら世界ねら……える……ぜ。

「兄さーん！！」

「リア先生！！」

おお、高校生さん達と、ネギが心配してくれた！ なんか嬉しい！
けど、起き上がるタイミングが……

「いつまで馬鹿やってるのよ！」

ぐふう！ ストンプングとは……いい仕事しますな、明日菜。

・
・
・
・
・

てなわけで、ネギの提案により、高校生VS2 Aのドツチ対決により屋上のコートを使う方を決めることになりました。

まあ、過程は原作と同じだから割愛しますが……
ちなみに俺は応援役でしたよ？

「へえ、珍しいね先生？ 先生なら嬉々として、あの中に入っていくと思ったのんだが？」

「タツミーや（チャキ）……真名さんよ今回はネギが頑張る番さね、厳しくも優しいのが俺なのよ？」

ちなみに、やけにタツミ（チャキ）…真名さんと仲がいいのはタカミチと模擬戦をした次の日、連れて行ってくれたお礼に夕飯にシチューを持って行ったのがきっかけでしたね。

ついでに刹那さんとも一緒に食べました、そのせいか、刹那さんは遠慮してるからタ…真名さんに無理やり連れてこれない限りは来ないが、真名さんは結構毎日のように押しかけてくるようになりました、フラグが立たないことを祈りたい。

「さて、ついに終盤戦も終わりに近づき………終了」

「誰に言ってるんだい？」

気にスンナや！

さて、みんなを称えに……む？ 後ろから攻撃とは卑怯なり！

「はっはっはっ！ その悪行、お天道様が許してもこのリアがゆるさんはー！！」

「兄さん！」

「リア！」

うし、間に割って入れたぜ！ さすがにネギに任すと原作通りになるかもしれんからそれは避けたいんだよね、弁償するの大変なんだもん！

「てなわけでキャッチ！ マーク、ブフ！！」

うおおおお、失敗したー！ いてー！ 両手で取るうとしたら手の間をすり抜けて顔面にボールが急襲してきたああ！！

「……………」

「……………ふ、さすがリア先生、私の投げたボールを止めることができるとは、やりますね！ ここはリア先生に免じて引いてあげは！ 覚えておきなさい！！ 全員撤収よ！」

……意外といい子やな、黒百合のリーダーさん orz

ちなみにこの後みんな俺をいない者として扱ってくれました、優し

さが妙にしみます。

夜、タツミからあんみつを分けてもらいました、なぜかしょっぱかったです。

その後、俺の元に、ドッチ部のコーチになってくれと、黒百合のリーダー、英子さんに頼まれました。もちろん丁重にお断りしました、まあ、たまくに遊びに行つてますけどね？

フラグは立ってませんよ？ ネタキャラ化フラグは立ったかもですが？

ふっふっふっふっふっふっふっふっふっ

原作四話 短編集風（後書き）

次回、期末テスト編！ まだまだほのぼのは続くよ！！

しかし、一巻のこのあたりは書く奴少ないんじゃないかな？

そして、疑問だった、フラム（リア）の三大欲求の性欲に付いてでした。彼は残念ながら子はなせないようです。

閑話（前書き）

イグニスの遺産を何時回収しようか迷ったので今回、リアが回収しに行ってくれました。

閑話

「うーん、さすが色物自動販売機、ヤシの実ソーダが実在するとは……お、『学生の頃の思い出』？ 気になる……ぱちつとな」

どうもリアです、ただ今図書館島の地下にやってまいりました、ご存じの通りイグニスが残したものを調査しに行くのです、ちゃんと魔法球も持ってきてますよ？

さてさて、今買ったジューズのお味はと……ブフォ！ おえ、なんかファミレスのドリンクバーの飲み物を全部混ぜたような味だわ……でも確かに懐かしい味や。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

さて、学園長の話だとこの辺りに案内してくれる人がいるらしいのだが……こんな地下に誰かいるのか？

「すみませーん、誰かいませんか？」

シーン

「おかしいな？　ここに行けばいいって学園長、言ってたよな？」

「おや、あなたが学園長がおっしゃっていた、イグニス最高傑作ですか……」

まあ、予想はしていましたよ？　図書館島の地下に住んでいる人って言ったらこの人しかいないジャン？

「初めまして、アルビレオ・イマさん」

「おやおや、まったく動じないとは、面白くありませんね？」

「まあ、予想はしていましたけどね？　それに学園長も言ってましたから、癖の強い人物だから気をつける……って」

「なるほど、そういうことでしたか、さて今日あなたがここに来た理由は学園長から聞いてます、ではこちらへ」

「どもども」

さて、イグニスの残したものが何か、気になるところだが……何か忘れてるような？

「それにしても、イグニスも何を考えているのでしょうか？」

ん？　なんの話だ？

「あの、アーウェルンクスと似た顔を持つ人形を作るなんて」

「！……！」

ああああ！！ 忘れてた！ アルさん、初代アーウェルンクスの顔
見てるじゃん！ やべやべやべ！

「まあ、彼はいつもそんな方でしたからね、私たちが想像もつかな
いことをやってのける方でしたから……」

お？ スルーしてくれそうな雰囲気？

「さて、付きましたよ、この扉の向こうにイグニスが残したものが
あります」

「了解さね」

さて、貰ったカギを使ってと……

「フッフ」

何やら、俺を見てアルさんが笑い出したんだが？ めっちゃ怖いん
だが？

「いえいえ、お気になさらずに、少しあなたとイグニスが似ていた
ものですから……」

何それ、怖い……、ちなみにどの辺が似ているのだろうか？

「そうですね、紅き翼の面々と話すときの雰囲気がどことなく似て
いるんですよ、今のあなたとね」

それはそれは、と言われても何とも言えないのですが？ イグニ

スなんて知らんし？

……さて扉を開けて先に進んだのだが、なんか機械でできた扉が…。

「えー、何このハイテク、わざわざこんなもんで作る必要あるんか？」

「さあ？ あの人が考えることはさすがにわかりませんからね」

まあいいや、とりあえず入りたいけど、たいていこつこつ扉ってパスワードが必要なんだよね。
ひとまず何かないか調べるか…

《ピー！ パスワードを入力してください》

案の定だね

ズン！！

《というのは冗談だ！ その剣を使い貴様の技を魅せてみる！
そしてこの扉をぶち破れ！ 魔装機神のように！》

……言いたいことは分かるんだが、……あほちゃうか？

「確かに、色々戦闘中にこんな魔法陣かけなかったから断念したが、まさか実演することができるとは……」

「何やらネタの臭いがプンプンしますが？」

まさにネタだよ。

さて距離をとり、剣を地面に突き刺し、浮かび上がる魔法陣、そして現れる炎でできた不死鳥…再現率高すぎたる、おい。

「いくぜ！」

不死鳥と一緒に飛び上がり炎化！合体！そして虚空瞬動で一気にトップギアまで持っていく！

「アカシック・バスタアアアアアアアアアアア！」

チユドーン！！！！

「なかなかすさまじいですね」

感想ありがとなつと、今ので完璧に扉も吹っ飛んだな、さて中に何があるのかなつと。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

「ふふふさすがわが友、私のことをよく理解してらっしゃる……」

「この変態が」

「ふふ、残念ですが私は紳士ヘンタイですから、節度は守ってますよ？」

「十分アウトだろうが!!!」

「しかし素晴らしいですね『mini mini』は、廃版したものの初回限定版、とレアものが勢ぞろいしてますよ、しかしイグニスはどうやってこんな貴重な書物を集めることができたのでしょうか？」

(注 mini miniとは魔法世界で発売されてた、いろんな種族のロリッ娘が載っているマニア向けの写真集である、一応コラムやロリの素晴らしさを語っているコーナーもあるのでどちらかというと雑誌である、しかし魔法大戦後出版社が倒産、もうどこにも売られていない伝説となった書物である)

知るか！ てかこつちがいろいろ聞きたいわ!!

もう仲は色物のオンパレードだった、使いどころに困るものばかりで、研究所で観賞用に置いておくしかできない物ばかりだった。

唯一使えそうなのは、なぜか俺が考えた転送兼収納の術式が刻まれた黒革手袋ぐらいだった、しかも武器付き。

そして、エヴァジェリンの封印術式に関する資料とマジックアイテムだった、まさかこんなところに絡んでくるとはビックリである。てかこれ俺も敵対フラグ立ったんちゃう？

そして極めつけは、部屋の奥の奥にあった段ボール箱である。しかも銘柄は一平ちゃんだった。

その中に積み込まれていた先ほどの雑誌の山、そして……

「さらには、ネコミミ、小さめのセーラー服、すく水に眼鏡、他にもメイド服、にナース服、さすがわが心友ココトモわかってますね」

である、ちなみにこれらと一緒に手紙も入っていて、『この部屋にあるものはすべてお前にやる、自分で使うなり誰かにあげるなり好きに使い、段ボールの中身はアルに渡しといてくれ、エヴァを頼む。それとフェイトに手紙ぐらい送ってやれや』と書かれていた、まじで何者だよ！ こいつ！

~~~~~

疲れた、めっちゃ疲れた、なぜただの調べものでこんなにも精神的に疲れなきゃならないんだよ。

はあ、自販機あるしなんか飲むか……

「カレーラムネ？ これって確か社長も不味いって言ったような？ まあ買うか……ん？ 元気ドリンク？ どうかで聞いたような……買いだな」

色々面白いジュースもあるみたいだしまた今度来るかね。

・  
・  
・

はあ、結構暗くなっちゃったな、早く帰らなきゃな。

「さて、帰って夕飯作るか『P i P i P i P i』…はい、もしもし

「？」

『先生、今どこにいるんだい？』

「タツミ？（ぴゅん）……真名さん、どこにいるかわかってるでしょ？」

『さて、何のことかな？』

「はあ、で、何ですか？」

『今日の夕飯は何かと思ってね』

今日もゴチになるつもりかよ、タ<sup>じゅ</sup>真名さんは……

「久しぶりに中華でまとめようと思ってる、炒飯に卵スープ、あと野菜炒めってとこかな」

『了解、今日は刹那も連れて行くからそのつもりで』

「金払えよ〜」

『ふっ、つけておいてくれ』《ピッ》

「切られた……」

はあ、材料買い足しに行かなくちゃな〜。



## 閑話（後書き）

次こそは、ちゃんと期末テスト編を書きたいと思います。

原作五話 あれ？ 期末試験終わってないぞ？（前書き）

え、浪人生活が始まり執筆時間があまり取れなくなってしまいました。

一週間に一本あげられたら御の字状態です、凍結はしませんのでご安心を、さすがにこの話は自分も思い入れがあるので完成させたいです。

それではどうぞ……

原作五話 あれ？ 期末試験終わってないぞ？

「ほい、授業を始めます、予習はしてきましたか？」

「教科書読むだけだからちゃんとやったよー！」

元氣よく反応する鳴滝姉、

「それじゃあ、プリント配りますよ」

左半分に公式、右半分、スペースが足らなかったときは裏にも問題の書いてあるプリントをリアは配る。

リアの授業は新しい単元に入ると、予習で公式を教科書で確認させ、前半は配ったプリントの問題を解かせ、どうやって解いたかを名指しし黒板を使って発表させ、その採点と解説、終わり次第宿題用の復習プリントを配りお終い、そして、たいてい時間が少し余るからその時間は自由時間に行っている。そして次の授業で始まる前に宿題をどうやったかを黒板に書かせる。これの繰り返しである。

前世の経験を使った数学は習うより慣れる作戦である。

公式覚えて問題解いてやり方に慣れれば数学は点を取れるを主軸にした授業である。

無駄な解説はキツパリ捨てて、生徒に問題を解かせる時間を増やす方法である。

「はい終了、綾瀬さん、明日菜さん、椎名さん、それと……さつき  
の返しが良かったので鳴滝姉さん、いつも通りをお願いします」

「うう」

「姉じゃなくて、名前で呼べー！」

「はいはい、それと明日菜さん、自信持ってくださいよ？ 最近正解率あがってるんですから」

そして解説に入り、終わったので自由時間となり宿題を配る、そしてチャームが鳴りヒントを求めに来るバカレンジャーの面々＋少数。バカレンジャー達が勉強をまじめにやるうとする態度が素晴らしいのである。

こんな感じでリアの授業は締めくくられた。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

なんとなくで買った野菜ジュースを飲みながら次の授業の準備をするリア、最近はネギー人でも何とかなるようになってきたので仕事が減ったのである、そのせいかストレスも心労も減った気がするリアであった。

「ちよつといいかしらリア先生？」

「あ、しずな先生どうしましたか？」



「学園長が君へ、だそうよ、あなたなら大丈夫だろうけど形式上あなたにもネギ君と同じで最終課題が出されたのよ」

ふと、そんなものがあつたな、ぐらいのノリで封筒を受け取りスーツの内ポケットに突っ込むリア。

「わかりました、それでは次の授業がありますのでこれで」

「ええ、がんばってね」

~~~~~

～リアSide～

リアです、職員室で授業用のプリントを作成していたらよからぬ空気を感じ2 Aに走ったら、英単語野球拳などという勉強法を始めようとしていたので、説教しました。

リアです、あまりの危機感に暴走して頭がよくなる魔法を使おうとしたネギを明日菜が止めていたのを見ていました。代わりに明日菜が説教してくれたようです、今度お礼をしに行こうと思いました。

リアです、ネギが放課後魔法を三日間封印した旨を報告しに来ました、ネギの成長を見れるのは嬉しい限りです。

リアです、バカレンジャー予備軍の刹那に勉強を教えている最中に早乙女からネギ達が行方不明になったことを知らされました、その連絡を聞かれたのか、刹那の目がレイプ目になりました。『木乃香お嬢様』と連呼、次第に『コノちゃん』と連呼し暴れ始めた刹那を取り押さえるのに苦労しました、おかげでボロボロです。真名さんにあんみつ一杯で取り押さえるのを手伝ってもらいました。

リアです、冷静に考えると普通にバカレンジャーも勉強すればいいのでは？ と、つつこみを入れたくてしかたがありません。なぜ魔法の本に頼るし、できのいい参考書程度ならぶつちやけあってもなくても、あいつらには意味のないものだと思う。まじめに勉強しない奴に参考書を持たしても意味ないのです、これ経験論。

リアです……リアです……リアです……

そんなこんなで朝になりました、ひとまず形だけでも学園長に報告しに行きました。

一応学園長自ら監視しているようなので安心、らしい。ただ、学園長の悪ふざけであいつらが地下に行くことになったと思うとなんかすべてが学園長の手のひらの上に感じられイライラします。

しかも、今日のネギが受け持っていた授業を全部俺がやることになりました、面白いぐらいに俺の授業とかぶってません、しかもネギの尻拭いのようなもので別にボーナスが入るわけではないらしい。

い、マジ狙ったとしか思えない！

「そんなわけで、朝のSHRから何から今日一日全部俺が担当になりました、初めて学園長に殺意がわきました」

「そんなことよりも、リア先生！ 私たちが学年最下位をとったらネギ先生がクビ、しかも行方不明、ということですよ！」

学園長に殺意がわいたことに関してはスルーかい。

「……クビの件は最終テストみたいなものですからね仕方ないですよ、行方不明に関しては環境を変えてバカレンジャーに勉強をさせるためだと学園長が言っていました」

「弟さんのことなのに何他人事みたいに話しているんですか！」

「いやいや、実際他人事よ？ ネギが失敗したら俺も課題にクリアしてようが、一緒に強制送還、しかもネギ自身がなんとかしなきゃいけないのに俺が首を突っ込む余地なんてありません。もともとネギともそういう約束だし？ 魔法封印したことを報告しに来たとき一人で頑張るって宣言してたし？」

「これはネギの試験だからね、しかも俺も一蓮托生、あいつが落ちれば俺もクビだし」

「それなら、なおさらネギ先生の力になるべきでしょう！」

「だから、これはネギの試験なの、俺介入する余地なし、しかも俺が頑張ったって意味ないし？ 頑張るのはどちらかというとあんだ

らだし？」

「うっ、それはそうですが……」

「先生質問！！」

「はい、朝倉さんなんでしょう？」

「ネギ先生に試験が出されたってことはリア先生も？」

あゝ、そういえばそうだったな、確か内ポケットに。

「あるよ、これ」

「中身見てもいい？」

「自由どうぞ」

どうせネギを助けるって言ったところだろ、学園長だってネギをクビにしたいわけじゃないだろうし、でもそれだと……あゝ、今日のネギの授業の肩代わりでクリアってことか、最悪だなあの爺……、こっちの意思は無視かよ、人形なめんなよ、糞が。

「リア先生、ちょうどいいんじゃない？ これ」

ん？ なになに、『2 Aの誰かの頼みを聞くこと、ネギ君でも可……もう確信犯だなこれ、終いには切れるぞ？

「何がちょうどいいか分からんが、今日ネギの代わりに授業をするんだ、それでじゅうぶんだろ？」

「え、でもそれには頼みを聞くって書いてあるよ？ 別にネギ君はリア先生に頼んだわけじゃないんだから、駄目なんじゃない？」

ブチっ！！

「ひっ！」

あつはつはつ、あの糞爺、俺に仕事異常なまでに与えておいてさらにネギのサポートだ？ ふざけてる、絶対ふざけてる、こっぴごうなつたら嫌がらせの一つや二つ実行しちゃってもいいよねえ？

「あつはつはつはつ、そのとおりだね、確かにネギは俺に一言も頼むなんて言っていないよな」

「じゃあ！」

黙れシヨタ長……

「だからって、ネギを助ける気は毛頭なし、前半部分を実行する」

「そ、そんな！」

「だーからー、そっちの理屈だとネギが俺に頼みごとしなきゃいけないでしょ？ だけどネギは確実に俺の手を借りる気はない、これ絶対、そう思うだろ？ 委員長？」

「そ、それは……」

「はいはい、納得したならこの話はお終い、授業を始めるぞ！」

さて、このクラスで俺に頼みごとをする奴は……誘導させればマクダウエル、ちよつと話すことができれば相坂あたりか……、ククク学園長、テメエの失敗は一つ、テメエは俺を怒らせた！ 人形である以前に俺は人間なんでね、胃に穴は開かないがストレスはたまるんだよ！！

~~~~~

昼休み頃からロリ吸血鬼さんがいなくなりました、どうやらブッチしたみたいです、まあ従者の方が話しやすいから楽なだけ……

「絡繰りさん、絡繰りさん少しよろしいですか？」

「なんででしょうか？ リア先生」

「ボソ（あなたのマスターに伝言です、今日の夜、会うことはできませんか？ と……）」

「了解しました……その通りにマスターに伝えておきます」

「ありがとうございます」

さて、学園長、どう料理してくれようか……

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

まさか、案内用の蝙蝠が来るとは……さすが真祖、魔力がガタ落ちしててもすげーな

「こんばんわー」

「いらっしやいませ、リア先生」

「何の用だ、人形風情が？ こっちはテスト勉強で忙しいんだがな？」

嘘つけ、そんなんしなくても十分いい点取れんだろ

「ははは、これは失礼しました……まああなたなら勉強などしなくても十分いい点を取れると思うのですがね？ 闇の福音」

「ふん、貴様の正体などこっちはとっくに知ってるのでな、下らん前口上など聞き飽きるだけだ。さっさと本題に入れ人形、まさか自分の主人がこの学園に残れるように自分の生徒の所を回って勉強でも促してるのか？ ご苦労なことだな」

「……こっちが下手に出たらいい気になったか？ 封印された吸血鬼、てか人形、人形うぜーんだよ、体は人形だが魂は人間なんだよ！ それに俺にとってネギは家族だ！ 主人じゃねえ、命令されなきゃ動けない能無しどもと一緒にすんなや！！」

「ほう？ 私の従者たちを愚弄するというのか？」

「はっ、アホか、てめえ？ 自分で自分の従者が能無しだって認めてるぞ？ このタコが」

静寂が辺りを包む。

「……くく」

「……ふふ」

「くくく、はーはっはっはっはっはっはっは」

「はははははっ、ははははははははははは」

「ふん、なかなか骨のあるやつだな、久しぶりに笑わしてもらったぞ」

「こっちは部屋入った瞬間から殺気ビンビンでおどろいたわ」

ふいー、イグニスが残した置手紙が役に立ったわ、高圧的な態度に同じ態度で返してやれ、気後れするなってな。

「それで、なんのようだ？」



「……協力してほしいことがあります」

「朝のあれか？」

「それも含めてもろもろ、交換条件として、サウザンド・マスターのことが聞きたくないですか？」

「サウザンド・マスター！　どういうことだ、あいつは死んだはずだ！」

「形はどうあれ生きてることは確かです、俺は面と向かって話し、ネギの持つてる杖が物的証拠になると思っています」

「……」

あれ？　黙りこくつたぞ？

「ククク、はははははははははははははははは！　そうか、そうか奴は生きてるか、簡単にくたばる奴ではないとは思っていたが、やはりそうか！　くっはははははははは……はは……はは……はあ」

あれ、今度は沈んだぞ？　喜怒哀楽激しいなあ、子の人……いや吸血鬼、そういえば魂は肉体に引つ張られる、ガキの姿のまま不死になったから他の化け物よりも若い、とかなんとか言ってたけど若すぎたんちゃう？　見た目子供だし、原作でも子供っぽい所いっぱいあったし

「貴様、何か変なこと考えてないだろうな？」

「いえっ、別に考えていませんよ？ あ、この情報の対価は保留で」

「ふん、食えない奴だ……まあいいさ、いつかまた会えるかもしれないと分かったんだ、それぐらい良しとしよう」

「ナギが生きているって分かったのに、あまり嬉しそうじゃありませんね？」

「うるさい、どうだっていいだろう」

「まるで、失恋した少女のよう……」

「（ビクン！）……プルプル」

うわっちゃっちゃっちゃ、地雷ふんだなこりゃ、話題チエンジだ！

「そういえばなんですけど、エヴァさん、イグニスのこと何か知ってます？」

「あ？ なぜ貴様があのバカのことを私に聞く？ 貴様の方が詳しいだろ？」

「いや、その辺の情報はまったく入ってないもんで、図書館島の地下にイグニスの秘密の部屋があるって知ったのもここに来たおかげですし」

「ふん、秘密の部屋か、あのバカなら確かに作りそうだ……まあ、いいだろっ少し話してやる、あいつとは、まあなんだ、その……友のようなものだった」

そこまで恥ずかしがることか？ 友って言うだけで顔真っ赤っかだぞ

「サウザンド・マスターと一緒に私に呪いをかけ、そのあと頼んでもないのに、私の世話をやいてそして勝手にいなくなった……」

「そうなんですか……」

「三年たってもサウザンド・マスターが帰ってこないからと言って探しに行ったつきりだ」

「……他には何かあったりとか？」

「そうだな、奴の料理は素直においしかったと今なら言えるよ、それとあいつのコーヒーもな……：そういうええばあいつがいなくなっただけから一度もコーヒーを口にしていなかったな」

重い、空気が重い、まさかここまでとは……

「ん〜湿っぽくなっちゃいましたし、このお話はこれまでにしません？ マクダウエルさんもあまり思い出したくないでしょうし」

「……エヴァでいい、それと敬語もなしでかまわん」

「そうですね、なら遠慮なく 最後に一つ頼みがある」

さてここからが本番、今の話でお互い知らない仲ではなくなったからならな

「報酬はこれで、依頼内容は学園長への嫌がらせの手伝い、んで言い方は悪いが、その後始末だ」

「……これは？」

「エヴァさんの登校呪いを緩和させるための魔法具……らしいです、秘密の部屋に魔法理論の解説付きで置いてあったりしました。効果としては、学業行事で学園を離れるのならこの腕輪を着けている間なら学園の外へいける、だそうですよ」

「それは本当か！」

「ええ、それで返答は？」

「ふっ、サウザンド・マスターの情報だけでも十分だったのだが、いいだろう私も学園長に一泡吹かせたかったからな、その話のつた」  
「おk。詳しい話はテスト明けに話す、では俺はこれで、帰って夕飯を作らないとつるさいやつがいるからな」

「ふ、実のある話だった、それではな」

「さようなら、リア先生」

茶々丸空気だったな……今度料理の話でもするか……あつ

「忘れてました、これエヴァさんへの手紙です後で読んでください」

・  
・  
・

ふう、今日は鳥のから揚げにでもするか？ ん、刹那が鳥食ったら共食いになるのか？ むむむ、まあ本来ならそんなこと知らないはずだから別にいつか

~~~~~

なるほどな、奴は未来に帰ったか、そしてこの時代を生きている奴か、もし見つけたら私好みに調教してやるのか？ ククク……いや未来の奴を考えると私が見つけたとしても調教は失敗しているというのか？ くそつ、本当に思い通りにならない奴だ……

〜手紙〜

エヴァへ

前に話したと思うが俺はたぶん未来人なわけだ、きつと。そしてもうすぐ俺のやるべきこともすべて終わる、つまりお別れだ。いきなりすぎて悪かったと思っっている、それに自分でかけておきながら、時間があまりなかったせいでお前の呪いを解呪させる術式を完成させることができなかった、途中までだが形にすることができた、嬉しくないだろうけど卒業祝い兼現状報告だ。

時間がなくて直接渡せないのは悔やまれるが、代わりにお前に渡してくれる存在現れるはずだ。

それと、たぶんだがこの時代を生きる俺がいるはずだからもしそいつに会ったらよろしく頼む、俺の最初で最後の頼みだ、まあ別にどつちでもいいけどな？

それじゃあ、いつか会えたなら未来でまた会おう

p . s .

前に言っていたが、俺はお前の下僕になる気はないぞ？ けど親友か、家族にならなってやる、まあ俺はそのつもりだったけどな？

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

「ふつ、家族か……長らく忘れていたよそんな存在、思い出させてくれたこと感謝するぞ、イグニス。よし茶々丸！ 今日の夕飯はいつもより豪華しろ！ 宴だ！」

「かしこまりました、マスター」

「ケケケケ、酒も用意しろよ？」



原作五話 あれ？ 期末試験終わってないぞ？（後書き）

次回、期末試験編は終了です、さて学園長への嫌がらせとは？

ちなみに、学園長はネギの代わりに授業をすれば合格させるつもりでした、それを変な風に解釈した2・Aの面々、そしてリア、やはり学園長は二次創作ではいじられるキャラになってしまいますね。



原作六話 さあ、春休みだ！（前書き）

更新速度が遅れ気味になりました、これからもこのペースもしくはこれより遅い位になります。すみません。

原作六話 さあ、春休みだ！

「まあ、今は説教は勘弁してやる、さつさと食って、勉強して寝てテストうけて、いい結果残せ、ほら俺特製スタミナシチューだ」

「……いただきます」「」「」

どうもリアです、バトルがないのでしばらく俺視点！ って何言ってるんだろ？

さて、気をとり直して、ただ今寮長室、探検隊の面々、そして宮崎と早乙女、そしてネギに飯を食わしているところだ。

「ん〜、おいしいアル」

「お、おいしいです……」

「にんにん」

「リア君料理上手なんやな〜、今度作り方教えてな？」

「いいですよ、近衛さん、おら、バカレンジャーは追加勉強が待ってるんだ、さつさと食って食休みしろ」

「え、すぐに勉強しなくていいの？」

「明日菜さんそれはだめ、食ってすぐ勉強したって胃に血液行ってるから集中できないし、眠くなるからアウト」

「おお、リア君さすがだね〜、先生してるね」

「無駄口叩いてないでさつさと食べ、佐々木」

たく、こいつらときたら……ほんとなら夜間の寮から抜け出し、一日授業をさぼり、中学生では入っちゃいけない図書館島の区域への無断侵入、かなりの罰則が下るっていうのに、その辺ふまえて絶対説教がまさないとな。

「ところで先生？」

「何ですか早乙女さん」

「んとね、木乃香とのどかと私は敬語なのになんでバカレンジャー達はタメ口なのかなって？」

「ああ、明日菜さんは別ですが、こいつらに敬語を使う意義を感じられなかっただけです、別に深い意味はありませんよ？」

「ヒドイよ！ リア君」

「だまらっしゃい、佐々木！ てか早く食わないとてめえの頭がち割って脳みそストローでチュウチュウするぞごらあ！」

「ひー！ ごめんなさいすぐ食べます！」

はあ、先生としてはまずいけど、ぶっちゃけ敬語で話す必要ないよね？ こいつらに？

「はあ、少し出かけてくるから食器はシンクに置いておいてくれ」

「む？ 鍋なんか持ってどこ行くアル？」

「先約のところ、余計な詮索はすんなよ？」

さてタツミーのどこに行くか……

「で、扉の前で何をやってる桜咲」

「え！ いや、その……」

「護衛つてのは近くにいて初めて最大限の仕事ができるんだよ、なんでそうしないかは詮索しないでおいてやるが、いざって時に守りたい奴を守れないぜ？ ……俺みたいにな」

「え？ 今なんて……」

「べつに、ほら饞別」

「手袋？」

「お守り代わりだ……あとお前を導く鍵になるはずさ」

「私を、導く？」

「たぶんな？ さてタツミ が腹を空かせてるはずだ、早く行くぞ、お前も食べるだろ？」

「はい」

やれやれ、余計なお世話か良かったかね

~~~~~

「テスト前のSHR始めるぞ」

「リア先生！ 何呑気に挨拶なんかしてるのですか！ バカレンジヤ！ 他数名とネギ先生がいませんではないですか！」

「カッカしなさんなって、あいつらにはネギを付けておいたから大丈夫、それよりも俺はお前らに言いたいことがあってここにいるわけだ、そういうわけだから着席してください」

「う、わかりました」

「さて、今回は全員、というわけではないでしょうがネギのためにテスト勉強を頑張ってくれたわけですが」

「リア先生のためでもあるですよ」

「ありがとうございます、鳴滝妹さん、ですが俺としては嬉しいですが、先生としてはあまり喜ぶことではありません、勉強というのは最終的には自分のために自分でするものなんですそのことを忘れないように、では解散」

・
・

「リア先生…今日も素敵ですわ」

「素敵かどうかは分からないけど結構先生っぽいよね」

「たまに私たちより大人っぽいゆうつこもみせるしな」

「でも結構子供っぽいときもあるですよ」

「不思議な子だよな」

どうやらリアの評価は結構できる不思議ちゃんのようなようである。

・
・

「なにしてるんだ、ネギ？」

「に、兄さん！」

案の定バカレンジャー+ は遅刻してきたので様子を見に来てみたら、魔法を使つてたネギがいました、まあ、今回は許してやるか……

「まあ、今の魔法は見なかったことにしてやるさ、それよりも今回はよく頑張つたなネギ、バカレンジャー達にちゃんと勉強を教えてやっていたんだろ？」

「うん、でもいきなりいなくなつたり、その間授業休んだりして兄さんに迷惑かけちゃつて……ごめんなさい」

「まあ、反省しているならいいさ、あとは結果を待つだけさね」

「うん！」

・
・
・

時間は流れ、ただ今成績発表当日昼休みでありんす、ギャンブラー椎名に当たり所を予想してもらつたため昼食をおごることに、ついでに他のチア二人にも捕まりおごらせられることになったが、ネギの頑張りをこの目で見れる晴れ舞台、少しぐらいの出費は痛くもない！

「で、先生は2 Aに一点張りしたの？」

俺のおごりだからか、トッピングがいろいろと乗つたうどんに卵を落として月見うどんにしてる柿崎、結構容赦ないねこの子……

「ちょっと無謀な気もするよ？ それ」

カレーにサラダと値段もおさえ、バランスを考えたメニューの釘宮、ただトッピングなしのカレーの中で一番高いビーフを選んだあたりこいつも抜け目ないと思う。

「まあ、私も同じところに賭けてる一蓮托生だね！」

ヒレカツ定食を注文した椎名、カロリー計算しているようで関心である。

「まあ、もともと2 Aに駆けるつもりでしたから悔いはありませんよ？ それに皆さん頑張っていましたからね、それを信じるのも先生ですよ」

「くは、かつこいいこと言っちゃって」

「あ、結果発表するみたいだよ」

さてさて、原作通りだといいいのですが……まあ、それなりに俺も数学を鍛えたつもりだから、原作よりも一点ぐらいは平均点が上がってほしいものだ。

にしてもここの学食結構旨いな、久しぶりのかつ井と味噌汁、ウマウマ

「………（ポカーン）」

「ん？ どうしました三人とも」

「え！ 先生見てなかったの！」

「うう、先生ごめん」

「結構手ごたえあったのに」

あゝ、なるほどね、一応バカレンジャー達の分が含まれてない点数か

「まあまあ、これで終わりなら仕方がなかった、ということですねに皆さん結構勉強頑張っていたみたいですし、気にする必要はありませんよ」

「で、でも……」

「それに、頑張った人には女神がほほ笑むものですよ？ ほら」

「……へ？」

『え、ただ今入った情報です、学園長のミスにより、2 Aの数名分の点数が合計されていなかった模様です、なのでその分を足し合わせ計算し直すと……なっなんと!』

「……おお！ これはまさか!」

『82・2点となり、1・2点差で2 - Aが一位です!』

いやはや嬉しいね、平均点も原作より上がってるし？ 生徒が頑張ったって結果が出るのもいいもんだね、そういえば、2 Aのネギが見ていた順位表の中間層の中で一番成績が良かったのって鳴滝姉妹なんだよね、バカにするつもりはないけどちょっと意外だ

よな、勉強嫌いだも〜んとか姉の方言いそうじゃん？

「きたー！ー！ 食券長者ー！ー！」

「え！ なにこれ！ 万馬券！？」

「え！ 椎名マジ！ 先生は！ 先生は2 - Aにどんだけ賭けてたの！」

「百枚」

「「「え」「」」

「さてさて、帰りのHRで発表しちゃいませうかね〜」

・
・
・

「というわけで、優勝パーティーだテーマーラ！」

「「「「イエーイ！」「」」」

「全部俺のおごりだ！ 嬉しいか！」

「「「「ヤッホーイ！」「」」」

「ちよ〜とど高級学食J〇J〇苑で焼肉食べ放題やってるぞ！ 行き

「たいか——!!」

「「「お——!!」」」

「いくぞ！ ネギ出陣だ！」

「うん！」

「こうして、期末試験も無事に終わり春休みが俺を待っていましたとさ、めでたしめでたし。」

~~~~~

その夜

「やあ、リア先生今日はゴチになったよ、それとは別件でね、今日から私と刹那と組んで春休みの終わりまではずっと夜の警備に参加してほしいって学園長から御達しだよ、ちなみに拒否権はなしだ、さあ付いていてもらおうか」

「えと……ご愁傷様です」

朝、昼は普通に先生の仕事、夜は警備……グッバイ、俺の春休み兼  
睡眠時間……orz



原作六話 さあ、春休みだ！（後書き）

最後にリアが嘆いています。数日間はずっとお休みがあります。なので次回から春休みリア暗躍？ 編はつまづきまっ！

最初の方のネタ、わかる人いたかな？

そして、刹那へのお守りに関する伏線も！

原作七話 春休み中にやるのがたくさんです(前書き)

短めになってしまいました、ただやりたかったことは書けました。

原作七話 春休み中にやるのがたくさんです

時は夜遅く、11時ごろ、暗い森のなかを移動する三人がいた。

「あ、そういうえば刹那さん、昨日渡した手袋今持ってます?」

「ええ、持ってますが、どうしたのですか?」

「ひとまず着けて、心の中で来いって念じてみてください。ついでに手を前に出しておくとう困気出ますよ?」

刹那が言われた通りにすると文字通り、大きな力ギが出てきた。

「鍵ですね……」

「鍵だね……」

刹那も、タツミーも困惑するしかない。

「その名も、キープレードですね。ただその形は何の変化もない初期形態ですね」

（それにしても、刀身? が銀色……初期装備⇨変化なしってことか）

「持つ人よって形が変わるということですか?」

「そういうこと」



「どれどれ」

興味深そうにタツミ がキープレードを受け取ると一瞬にしてその形を変えた。

その形はまるで、悪魔の羽を模した剣だった。

「ちなみに、取説によると使用者の心強さに比例し強力な武器になり、何かを乗り越えた時形を変えるらしいぜい」

「なるほど、確かに私にお似合いの形だな……取説？」

そしてひょいと刹那にキープレードを返すタツミ。

やはり刹那の手に渡った瞬間、キープレードは元の形に戻ってしまふ。

「あ、ちなみにそれイグニスが残した遺産だからなくさないですよ？」

「え！ そんな大事なものを私に？」

「取説に、心に迷いがある奴に渡せて書いてあったから問題ないっしょ？ もし自分が持つにはもったいないとか思ってるならキープレードを使いこなせるぐらい強くなりやいってことさ」

「……わかりました」

「それじゃあ、今日はそれを使ってパトロールと行きましようか？」

ちなみに、刹那が持っていたキープレード、鬼など魔族なら切るこ  
とができたが人間に対しては鈍器にしかならないことが判明した、

なかなか不思議である。

「魔を退けることができる鍵……いや剣か……ボソボソ（ハーフの私を持つていていいものなのか……）」

「……ところでなんだが、その鍵？は召喚魔なら切れたけど式神や人形は切れるのかい？」

ヒィ！？ タツミ がめっちゃこっち見てる！

「いやいやいや！ 俺も自分で試しましたよ！」

嘘だけど、そんなこと危なくてやらねえよ！

「いや、この目で確かめてみたいから試させてくれないか？」

なに刹那からキーブレード受け取っちゃってるんですかああ！  
てか刹那テメエ渡すなよ！ あれ？ 考え事して無意識？ あ、ちよ、  
やめて！ 刹那が持つてる時なら刃がないから大丈夫かもしれんけ  
ど、タツミ が持つと刃があるっぽいから！

ちよ！ なに振りかぶっちゃってるの！ やめ……にぎゃー……！  
――――！！

この後刹那に代わってもらい試し切りをしたところ、切れませんでした、かなり痛かったです。

~~~~~

終了式も無事に終わり、春休みになりました、え？ パーティー？

あ！ 原作で言う長谷川さんが脱げた事件か……いたって普通に
終わりましたぜい？ どうやったか知らないけどネギが普通に長谷
川を引っ張ってきましたちゃんと制服だったし

「時間って過ぎるのが早いですね〜」

「まったくしてないで要件をさっさとこなせ貴様」

「へいへい、一応学園長の嫌がらせの件なんですけどやはり、相坂さ
んを助けるのが一番手っ取り早いのかと、それに……ッ！」

部屋の空気が凍った、よくある脊髄に氷の棒を突っ込まれたような

なんて表現ってこういうことを言うんだろっ

「貴様、それを本気で言ってるのか？」

「本気かだつて？ ああ本気さ、死んだ奴はもう死ぬことはないってことだろ？ つまりまた得たものを失い絶望するってことだろ？ そんなことすでに理解しているだけどさ言つたら、あんたに後始末させるってな」

「……図々しいにもほどがあるな、不死である私を利用するか……だが約束は約束だ、それに貴様もその辺のことは理解してるようだしな。いいだろっ相坂は私が引き取るこれでいいんだろ？」

「ああ、一応契約ではその魔法具との等価交換の条件はここまで……だがそれだとあまりにもぼつた内容になる、最初から何をするかを提示せず話を進めたんだからな、だから俺も本気を見せる。エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル、俺はお前の登校呪いを今年中に解きお前を卒業させる、それが相坂を育てることへの俺からの礼であり報酬だ」

「……なるほど、それなら割にもあうか？ だが私の呪いを解くということがどういふことか理解してるのか？」

「否は全部学園側にある、それにサウザンド・マスターとイグニス は三年で呪いを解くって言うていたんだろ？ ならもう十分じゃないか」

「学園長辺りは納得するだろうな？ だがそれ以外はどうか？ 他の魔法先生は？ それに私の懸賞金はここに封印されているから取り下げられたようなもんだぞ？ つまり本国が黙っていないぞ？」

「潰す、俺の邪魔するならそれだけだ」

「ふん、貴様は自分の弟分のことしか頭にないと思ったのだがな」

「別にあんたのためじゃないさ、あんたを助けることはいずれネギの助けにもなる、だから助けるそれだけだ」

「ふっ、なら相坂のことはどう説明するんだ？ リア先生？」

「……(汗)」

「くはははは、どうやら貴様はなかなかのお人よしのようなな」

「う、うるせいやい、ならお人よしの最後の頼みもきいてくれや、サウザンド・マスターの情報の件で」

「ああ、そういえばそんなのもあったな。……で私は何をすればいいのだ？」

「ネギと戦ってほしい」

「弟に甘いやつだと思っていたが、そうでもないようだな？ まあやらんこともないが、それに対するメリットがもうないのだが？ もともとぼーやを襲うつもりは満々だったがそれは呪いを解くために必要な行為だった、だがそれらはすべて貴様が解決してくれるのだろうか？」

「確かにそうなんですけど、スプリングフィールドの血があった方が上手くいく可能性がありますよ」

「本音は？」

「あいつに戦いというものを体験してもらいたい、いつかは自分の身は自分で守れる位になってほしい、ついでにエヴァさんが鍛えてくれたら御の字」

「ふふふ、正直な奴の方がお姉さんは好きだぞ？」

「お婆ちゃんの間違いでは？」

「八つ裂きにするぞ！ 貴様！」

「マスター、落ち着いてください」

茶々丸う、今回も空気やな

「で、話は最初に戻りますが相坂さんの体はどうします？ さすがに物づくりが得意でも、ホームクルスは専門外ですよ？」

「その辺は私がかんとかしてやろう、だが材料がない、まあ正確には足りないがな」

「何とかしろ、ということですか？」

「それぐらい協力しろ！ 材料は……」

ぶつちやけ、魔法球の中の大自然にありそうなものばかりでした。明日仕事を手早く済ませ、急いで家に帰り魔法球を持ってエヴァさんの家に戻りました、案の定魔法球の中を見せたら殴られました。

色々とおかしらしい、特に竜の生態辺りが。
ついでに機材も持ち運んで俺の魔法球の中でホムンクルスを作成することに。

・
・
・

「休みの日の学校ってなんかさびしいよな、そう思うだろ相坂さん？」

『そうですね〜』

「で、さっきの話どうする？ 乗る？ 乗らない？」

『乗ります！ もう一度友達作りたいです！』

「契約完了、ついでにエヴァンジェリン一家が家族になってくれるさ。それと三学期から学校に通ってもらおうよ？」

『はい！』

さてさて、タヌキ爺に報告しに行かなきゃね〜、まあ原作？ で相坂は学園長の初恋の相手らしいし？ 相坂を入学させるのはうまくいくだろう。

~~~~~

刹那Side

ひゅん、ひゅんと木刀を振る音がする。

(私に何が足りないというのだ?)

素振りをやめ、周りに人がいないか確かめてから刹那はキープレードを呼び出す。

そして実践的な動きでキープレードを振る。

(心の強さか、きっと私の体に流れている妖の血が関係しているのだろうか……)

一通りの動きを終え息を整える、だが膝を付き自分の体を抱きしめ何かに恐れるかの用に震え始める。

「私だって、リア先生の言った通り木乃香お嬢様のお傍に居たい、だが私はハーフなんだ、人じゃないんだ、もしかしたらお嬢様がこのことを知ったら……あたしは嫌われるかもしれへん、それが怖い！……ねえ、あたしはどうすればええん？」

泣きそうな顔をしながら自分の手に収まる、剣に話しかけてしまっただが答えは返ってくることはなかった。





原作七話 春休み中にやるのがたくさんです（後書き）

今回は、エヴァ編導入部分、まあ始業式辺りです。

さて相坂の名前どうしよう？変えた方がいいのだろうか。

今回の刹那のキープレードのネタはめだか194さんのご協力していただきました。

実は作者はキープレードはネギに持たせる気だったので……

さらにめだかさんからアドバイスも貰い書き直しました。

ほんとに文才が欲しい……（泣）

原作八話 何かフラグが立ったか？（前書き）

いまいち学園長の心情がうまく書けませんでした。  
まだまだ未熟です。

## 原作八話 何かフラグが立ったか？

エヴァハウスに持ち込んだ俺の魔法球の中の研究所、その中でも一番清潔な研究室

「肉体と魂が同調すれば成功だな、ちゃんと起きることを祈ります」

「この私が手掛けたのだ、失敗などありえん」

さすが真祖、600年の年の功は伊達じゃないですね、自信が半端ない

「う……あれ？　ここは？」

「成功だな」

「そつつすね」

ひとまず相坂に了承を得た後移動開始、ちなみに地縛霊の相坂をエヴァハウスまでどうやって運んだかという点、原作の人形つながりで、俺の中に入れて運びました、魂的な意味だよ？

俺の体の核に霊的隙間を作りそこでじっとしててもらおう、俺の魂はこのアーウェルンクス人形の魂と溶け合ってるような状態だからできた感覚で何とかなっただけいぶつちやけ右腕が動かなくなりましたが、相坂を外に出したら体の不調はなくなっただけで問題なし！

それと、原作で相坂が普通にエヴァハウスまで行けたのは朝倉に取り憑いていたからだと思う、学校の近くなら移動できる、近くのコンビニにもよく行ってるって本人談だったけど、どう考えてもエヴァさんちは学校の近くにあるコンビニよりも遠い場所に住居を構えているからね。

……あれ？ 相坂って地縛霊だよな？

「あれ？ リア先生？ エヴァンジェリンさん？」

さて新たな命の誕生を祝って……

「ハッピーバースデー！ 相坂さよ！ 今日君は生まれ変わったの……ヒデブツ！」

エヴァの攻撃！ 渾身のローリングソバット！ リアは壁に突き刺さった！

「耳元で大声を出すな！ ったく、さて相坂、気分はどうだ？」

「え、えと問題ないですけど、リア先生は大丈夫なのですか？」

「ああ、あのバカは頑丈だからな、あの程度ではびくともしないさ」

「いてて、まあ確かに大丈夫ですけどね、そうだ相坂さんケーキ食べる？ 誕生日のお祝いのナドリで作ったんだけどなかなかの自信作よ？ ほれ」

切り分けて、一ピース分渡しておく

「えと、いただきます」

「私にもよこせ」

ふふふ、味は悪くはないと思うぜい……

「うっ、ひっぐ、ひっぐ」

ってなぜに相坂さんは泣いてんねん！ ケーキがまずかったか？

「違い……まず、おいしくって……味が、分かって……こうやってフオークが持てて……」

あゝ、生き返ったって実感できたんだもんな、そりゃうれしいわな

「ほら、ケーキおいて涙ふけや」

持ってたハンカチで相坂の涙を拭いてやったが、この行動は失敗だったと思う、なんせハンカチを渡すだけなら感謝される程度だが、直接涙を拭いてやると妙に好感度が上がったやっちゃんだよな、つまり何が言いたいかというと

ガバツ

「ふええええええええ」

「ちょ！相坂さん！ 抱き着くのは反則よ！ ……はあ、よしよし」

泣いてる子を突き放すなんてできるわけないじゃないですか、あゝ

あゝ俺ってホント甘いよな〜

「ふむ、甘すぎず、スポンジもしっかりしているし、クリームもなかなかだな」

頬にクリーム着けて何をしているのかなこのロリ吸血鬼は……

・  
・  
・

ひとまず、相坂を茶々丸に預けて俺とエヴァさんはいざ学園長室へ

「そういうわけで、相坂に体を与えちゃったぜ」

「何がそういうわけなんじゃ！ 説明を要求するぞい！」

「名簿見ておかしいと思った、調べてみたら地縛霊発見、不憫すぎるからエヴァさんと協同で相坂ボディを作成、ということですよ」

「いろいろ突っ込みたい部分もあるのじゃが……一ついいかの？ さよちゃんは笑っておったかの？」

「めっちゃ、うれし泣きした後笑ってましたよ」

「そうかそうか、それならいいのじゃ……儂からもお礼を言わせてくれ、二人とも感謝する」

「ふん、これで貸一つだからな」

「ちよつとエヴァさん、ところで学園長、相坂さんとは知り合いだったんですか？」

「恥ずかしながら儂の初恋の相手じゃった、じゃが思いを伝える前に……死んでしまったの」

「……そうですかお悔やみ申し上げます……さて、早速で悪いんですが、相坂さんの戸籍、入学手続きその他もろもろを頼みたいのですが？」

「ふお！」

「さすがに、こういう仕事は権力のある人じゃないとどうにもならないもので」

「え？ まじ？ 入学式まであと二日じゃぞ？」

「やりましたね！ 今日で戸籍を作って明日入学手続きすれば十分間に合いますね、と言っても、そろそろ夜ですから明日に持越しですかね？」

「え？ ちよ？」

「初恋の相手でもありこの学園の生徒のために奔走する学園長先生、かつこいいですね！」



「……分かったわい、何とかしよう」

「ありがとうございます、さすがに自分も受け持つてる生徒が学校にいけないなんて、心を痛めてしまいますから、それでは失礼します」

エヴァさんと一緒にひとまず退室……

「高畑君！ 至急頼まれてほしいことがあるのじゃ！ それと明石君にも話を……！！」

うわー、慌ただしくなりそうですね（笑）

「くくく、なかなか傑作だったなさっきのジジイの顔は、しかしお前も悪だな、好きだった女を引き合いに出すとは」

「まあ、学園長も好きだった女の子のために奔走するんだし、本望でしょ？」

「確かにな、くくくくっ」

「さて、相坂に報告、んで明日は日用品でも買いに行くのを手伝うとしましょうかね」

ちなみに、相坂の生活費は学園長が出してくるそうです、男だぜ！  
学園長、もうタヌキ爺とかぬらりひょんなんて呼ばないぜ

「お帰りなさい」

「食事の用意ができてます、リア先生もどうですか？」

「ゴチになります」

「おい！ 家主抜きで勝手に話を進めるな！」

相坂の作る和風料理はおいしかったです、なんてうか味付けがお婆ちゃんの料理のような感じで心があったかくなりました、肉じゃが和風料理の至高だと思う、異論は認めるが…

~~~~~

「さて、魔力の補給をしに行くでしょう」

「いつてら〜」

「おい、だれかが襲われるかもしれんというのに、なんだその態度？」

「知り合い程度なら別にかまわないね、他人ならなおさらだよ、それに殺しはしないでしょ？ まあできれば明日菜さん辺りは遠慮し

てほしいけど、まあネギが無事ならそれでよしだね」

「大事な者が無事なら他はどうなってもいいというのか？」

「俺が助けられるのはこのぐらいしかいないからね」

そう、無力で主人公属性がない俺が助けられるのはこの広げた両手程度の範囲だけ、家族とか友達とか関係なく、目につく範囲にいる人だけ、そう実感したからね、アイリスやその村のみんな、スタンおじさん、んでネギのことを助けたのもナギだし、それに気づいたんだよね、ネギの村が襲われたときネギだけを助けるって心に決めておけばネギを助けられたんじゃないか？ ってね

「貴様みたいなお人よしはすべて守るぐらいのことを言おうと思ったのだがな？」

「無理無理、おれ主人公属性ないし、そういうのはネギにでも任せるさ、あいつの方が主人公っぽいし、俺はそれを手伝うだけ」

「くくく、そうか貴様は自分の限界を知ってるのか、ならなぜ相坂のことを助けた？ 情が移った相手が多いのは貴様にとって不利なだけだろ？」

「確かにあまり増やしたくはないけど、まあエヴァさんに任せるつもりだったから心配はしてなかったし、それに……」

「それに？」

「エヴァさんとはもう友達だと思ってますからね、守りたい存在ってやつです、その家族になる存在ならついでに感じてですかね？」

「ツツツ、ふん！ こっちは貴様を友人だと思ったことはないわ！
馬鹿者！ じゃあ私はもう行くからな！」

ありやりや、飛んで行っちゃった？ 一緒にご飯食べたり、ホムン
クルス作ったりと結構仲良くなったと思うけどね？ さて俺も帰り
ますかね〜

~~~~~

「くそっ、あいつもその人形も勝手に人の心にズカズカと入ってき  
おって、本当に調子がくるっ！」

さっさと済ませて帰って寝てやる！

ん？ ちょうどいい獲物があるな、ちょうどいい貴様は私のストレ  
ス解消に付き合ってもらおう、ククククク

この夜、名も知らぬ少女は執拗に追い掛け回され、かなりの恐怖を  
味わったことをここに明記しておく、次の日エヴァの肌のつ  
やが良かったそうな……

学園長の過去

大体六十年前、儂が学生だった頃、儂は彼女に出会った。太陽のような笑顔、綺麗な黒い髪、誰に対しても優しく接するそんな彼女のことを儂は好きになっておった、一目惚れじゃったのう、だが彼女は死んでしまった、いや正確には殺された。

どうやら、犯人は西の呪術師だった様じゃ、世界樹の力を悪用しようとした典型的なクズじゃったわい、そしてさよちゃんは学校の帰りに偶然その呪術師に出会いそして殺された。

……呪いというおまけつきで、その呪いとは死後霊体となりその後誰からも気付かれず一人ですごしていかなくてはならないという、まさに地獄と言っても過言じゃない物だった。

そのことに気付いたのは儂がその学園を去り西のトップとなり、職権乱用してこの世界樹を監視することを儂の仕事にし、この麻帆良学園の学園長として現地に赴いたときじゃった。

と言っても、儂の全力をもってしてもさよちゃんをこの目でとらえることはほんの短時間だけじゃったが、陰陽道を片手間にしたのがまずかったのお。

髪の色が変わってしまったがそんなことは些細なことじゃった、しかし彼女の顔にはあの時の笑顔はなかった。

あの時程自分の無力さを呪ったことはない、リア君達のように体を与えることも、成仏させることもできんかった。

それに、娘と妻には僕のわがままによりさびしい思いをさせ悪いことをしたと思っておる。

東に世界樹の魔力を悪用するものが出ない様に監視してくると言うて出てい行くこうとしたとき、頑張れと声をかけてくれた二人には感謝してもしきれないじゃろう。

あと婿殿もかなり苦労しているようじゃしもう。

「エヴァと仲良くなっていたことも驚きじゃが、まさか僕でもどうにもならんかったさよちゃんを見つけて、助けてしまうとはのう、ふおっふおっふおっ」

む、このカラカラになったジジイにも流す涙がまだ残っておったか

……

原作八話 何かフラグが立ったか？（後書き）

もしかしたら相坂がサブヒロインになってしまいかもしれない、  
… どうしてこうなった？

ちなみに、フラムが後ろ向きな考えを持つようになったのは療養中の四年間のことです。ずっと一人だったからいらぬことも考えてしまったんでしょう。

エヴァさんとフラグが立ったんじゃない？ って思った人その考えはごみ箱へポイしてください、エヴァが好きなのはナギ、少なからず思っているのがイグニス、つまり今回はイグニスのことを思い出し調子が狂っただけです。

独自設定

ちなみに学園長は相坂を殺した陰陽道に苦手意識があつたので片手間状態です、代わりに西洋魔術はものすごいです、それでも陰陽道の上位に食い込むのだからこの爺も対外化け物である。

相坂は地縛霊なのか悩む、私的にはそう思い込んでいるだけな気がする、人形に入ったら自由に動けるってなんなんだろう？

自分はそういう知識は少ないのでやはり説得力に欠ける分にしかありませんがこれからも精進してみたいと思います。

小説好きさんよりネタを貰い使わせてもらいました、ありがとうございます  
ございました、そして駄目作者ですみません

原作九話 エヴァンジェリン戦準備期間（前書き）

だんだんと、執筆時間が減ってきたこの頃。

短くて済みません



## 原作九話 エヴァンジェリン戦準備期間

新学期、ひとまず、紗代のこともあるので少し遅れ気味に教室へ、一応ネギに転校生がくるってことを言っておくからその旨を話して間を持たしてくれているともう。

ん？紗代って誰かって？ 相坂 紗代<sup>ハヤ</sup> エヴァさんと一緒に考えてみました、字数がどうだとか、名前の陰陽、五行がどうだかと二人で熱くなってしまいましたね。

さて話を戻すと、転校生つてことにしたいから、名前に漢字を当てさせてもらいました、本人にも生まれ変わったんだしどう？ って話を持ちかけました、まあその話をした後に失礼なことを言っただけで思っただけを抱えたのだが、

「そうになると、リア先生が私の名付け親なんですね、なんか嬉しいです！」

と笑顔で言われた、キュンと来た俺は悪くないと思う、嫁もしくは娘に欲しいもんです。

そう言えば昨日、ネギと近衛が追いかけてたのを発見、ネギに関してでは3-A全員いたのでその場で誤解を解き、近衛に関しては紗代を連れて学園長室へ殴り込み、紗代が説教してくれました、何気にもものすごく落ち込んでた学園長が哀れでした。

その後少し遅くなったが紗代の服を買いに買い物へ、事前にチア三人組におすすめの店を聞いておいてよかったと思う、まあそのあといろいろ聞かれて煩わしかったから、何か奢ることでもその場は解散に、はあ

「さて、んじゃ俺が呼んだら教室に入ってきてくれ、それと」

「わかりました」

騒がしい教室へと入った瞬間質問攻めに

「はいはい、静かに、今呼びますから、相坂さん入ってきてください」

「失礼します」

かわいい、どこから来たの？ 彼氏とかはいるの、なんて転校生恒例の質問攻めに会っている紗代ものすごく嬉しそうである、ひとまず一番前の左端の席に座ってもらうことに、普通に座れたことが驚きなのかクラスのみんながビックリしていたのはまあ仕方ないだろう。

「ネギ先生、リア先生、今日は身体測定ですよ、3 - Aのみんなも準備してくださいね」

いや、新学期そうそう身体測定ってなんか違和感感じるんだよね？ 前世の俺の中学は春の終わり、秋の終わり位だった気がするのだが……

「……、では、えっとあの、今すぐ脱いで準備してください！」

ネギエ、思考がいきなり中断しちゃまったじゃねかばか野郎

ヘッドロックしながらそそくさと退散することに、後ろから聞こえるエッチ発言が何とも言えないぜい

「ギブギブギブ！ 兄さんギブギブ！」

「おお、すっかり忘れてた、ただネギよおさっきのはちよつとなあ  
？」

「うううう」

「次からは冷静になってってから話せや、さすがに今回は俺もビ  
びった」

「ごめんなさい」

やれやれ、このラッキースケベは、まあ俺の教育により頻度は下が  
ったがゼロじゃないのが玉にきずだな

「先生ー！ 大変やー！ まき絵がー！」

あ、嫌な予感

「何！ まき絵がどうしたって!？」

僕はなにもみてませへん

~~~~~

次の日、え？ 何も起こらなかったのかって？ 普通に飯作って、
タツミ にたかられて、次の日の準備をして普通に寝ました、ネギ

が俺のここに来るかもって思ってたのでビックリである、背伸びしたいお年頃？」

「あ、おはようございます、リア先生」

「おはようございます」

「む、リアじゃないか……そうだあのボーヤに私たちの関係をばらしたぞ、あとお前に助けを求めようとしたらまずはお前から襲うと脅しつけてやったぞ」

朝、エヴァさん一家と遭遇そしていきなりのカミングアウト

……は？ え、マジ？

ちよつとおおおおおおおお！！！！

「そう、世紀末がやってきたような顔をするな、ただの友達だと言っただけだ、魔法関連については何も話してないさ」

まあ、それぐらいなら大丈夫なのかな？ 嫌な予感がぬぐえないのだが……

「それじゃあ私はサボらせてもらっよ」

堂々と副担任の前でサボると言わないで欲しいです。

「私たちはちゃんと授業に出ますから」

「では行ってきます、リア先生」

紗代、茶々丸、ええ子やな

放課後……

「兄さん！ 最近物騒だから夜にあんまり出歩いちゃだめだよ！」

「そうよ、エヴァ…… 吸血鬼に襲われるかもしれないんだからね！」
心配してくれる二人の言葉に少し胸が痛くなりました、なんかごめんなさい

~~~~~

どうやら、俺のことを気遣った後、ネギは拉致られたようです

そして俺はというと……

「ちょっとあんた達！ リアから離れなさい！それにネギをどこに

やったの！」

エヴァさんと茶々丸さん、沙代さんと話し込んでる時に明日菜さんが登場、勘違いなのだが……どうしよう？

「む？ 神楽坂明日菜か、ボーヤに関しては私は知らんぞ？ それにリア先生とはただの世間話をしていただけだ」

「はい、リア先生の料理の話はなかなか興味深いので」

「私も洋食を作るときはアドバイスをもらっているんですよ？」

「え？ そうなの？ じゃなくて！」

「ふ、貴様らが約束を違えなかったら手出しはしないと云ったはずだぞ？」

おい、なに意味ありげな目線送ってるんだよ、合いの手か？ めんどくさい……

「……何の話ですか？」

はい、無理です、妙に睨みが入りました、怖いです、ようじよばねえとはこついうことだったのか……

「う！ なんでもないわよ……」

きゃーーーーー？

「……」

「む、事件の予感！　そしてネギが巻き込まれてる予感！」

ありがとうっ - Aの何名か、この空気から解放される！

「ねえ、リア、相坂さんとエヴァンジェリンって知り合いなの？」

「居候って間柄だがどうした？　なんかあったか？」

「べべ、別になんでもないわよ！（）ということは彼女もエヴァンジェリンの従者？　それとも仲間？」

「やべえ、なんかややこしくなりそう……」

~~~~~

おまけ

（相坂転入時）

「んじゃ、相坂さんの席はそこでおねがいします」

「はい」

「私、朝倉和美っていうんだ、これからよろしくね相坂さん」

「紗代でいいですよ？ 朝倉さん、あとできればお友達に」

「それくらいお安い御用だよ！ 紗代ちゃん！ ……けどさなんだか初めて会った気がしないんだよね。私たち、どこかで会ったことがあるかな？」

「……いえ、今日初めて会うと思いますけど」

「そうかな？ まあよろしくー！」

「はい！（けど、『さよ』としては既に会ってますけどね？ 一方的ですが）」

（お、沙代の奴もう友達できたか、よかったよかった）

~~~~~

（悩めるネギ君）

「はあ」



「どうしたのかな？ ネギ君」

「さあ？」

「もしかしてこの間のパートナーって話じゃ？」

「ああ！ ネギ先生王子説事件！」

「リア先生はその護衛って話もあったよね」

「眼つきとか十分あり得そうだけどね」

「パートナーか、どうしよう」

「……！」「」「」

「これはまさかだよ！」

「のどかチャンスです！ 名乗り出ます！」

「パートナー！ それなら私が……」

「やっぱり兄さんかな」

「……」「……」「……」「……」「……」

「来た来た来た来た！！ 極上のネタきたーーーー！！」

「ネギ先生とリア先生……ぶつうううううう！！」

「うわー!! 委員長が鼻血出しすぎて倒れた!」

「きゃー!! 亜子が血を見て倒れた!!」

「どっちが攻め、受け?」

「やっぱりネギ君が受けじゃ?」

「うんそれがしっくりくる気が」

「ちょっと! みなさん何をしてるんですかー!」

原因はお前だネギ

原作九話 エヴァンジェリン戦準備期間（後書き）

ひとまず、前回のキープレードについて。

簡単な解説を入れると、持つ人によって形が変わる。

属性の変化もするリアなら炎属性が付き、タツミ・なら闇ですね。変化したキープレードの形はその人のイメージですね、タツミ・が悪魔の羽だったように（ウェイトウザドーンをイメージしてください）

リアなら、持つところの枠はデフォルメされた炎、刀身は昔の日本の青銅の剣みたいな薄めの両刃剣といった感じでしょうか

あと、魔法の発動体にもなります

原作十話 原作のずれ 新たな仲間？（前書き）

ついにやってきたカモ、エヴァンジェリン編も中盤であります。

今回は主にネギの話になりそう？

原作十話 原作のずれ 新たな仲間？

アルベール・カモミール、通称カモくん、自称由緒正しいオコジヨ妖精なのだが……

「たすけてけれー！！ オレツチを食ったっておいしくねえよー！！！」

「ははは、さすがにオコジヨを食べるつもりはないぞ？」

前足と後ろ足を縛られ円状になった前足、後ろ足に縄を通し空中に吊るされている状態でブラブラしているカモ、もとい淫獣。その下で手を炎化させ、豚の丸焼きではなくオコジヨの丸焼きを作成中、どうだごらあ！ 反省したか！

「勝手に麻帆良に忍び込んだ罪、最初に来た場所が女子風呂と覗くつもりが満々だった魂胆、万死に値する！」

「ぎゃわああああああ！！ 兄貴iiiiiiii、助けてくれええええええええ！！」

「ごめんカモ君、僕は見てることしかできないよ」

「あははは、容赦ないわね」

くくく、じわじわといたぶってくれるわ……

・  
・  
・

場所は寮長室、ちょうど近衛がやってきてネギがペットを飼いたいと言ってきたのでピンときた、淫獣がきやがったと、なので近衛に伝言を頼みネギ達をこっちに来るように言ったのだ。

そう言えば手紙が届いてたような……

そして仕置き完了、白から焦げ白になったオコジヨをネギへと返してやることに。

「カモ君……」

「大丈夫だぜ兄貴、オレツチまだ頑張れるぜ……」

「……死ななくてよかったね」

「え!?!」

「兄さん、久しぶりに“いい”笑顔だったから次はないかもよ？  
もしくはストレス解消の捌け口にされちゃうかも……」

「ひいひいひいひい……え？ 兄さん？」

よく俺のことを理解してるなネギ、くふふふ、お前にも似たようなことしたもんな

「さて、カモとか言ったな？」

「ひい！ えええええと、カモミール・アルベールって言いやす。兄貴に助けら義理を果たすべくこの麻帆良にやってきました！ カモとお呼びください！ リアの兄貴！」

おお！ これが二次創作で有名な体の構造を無視したカモの土下座か！

「……麻帆良にやってきたのはネギを助けるためということだな？」

「そうなんすよ！ 実は兄貴の姉さんに頼まれて、兄貴のサポートをしにやってきたんです！」

「ほっ？」

「えと、僕のパートナー選びを手伝ってくれるみたいなんだ」

「……なるほどな、色々安上がりになるからな、悪くはないだろな……」

ははは、なんであいつら俺の財布の中に入れておいた簡易仮契約の護符見つけられたんだろ？ もう湯水のように金が消えたなあ？ 買った理由？ 知的好奇心だと言っておこつ。

「ど、どうしたの兄さん？」

「なんでもないぞ、ネギ。さてカモとやら」

「はいっす！」

「まあ、俺以外にもネギの大人の世界を知ってるアドバイザーが欲しかったから歓迎はするが、まあほどほどにな？」

「…………… (汗) 」

~~~~~

やばいやばい！ 何とかネギの兄貴に取り入れることはできたが更なる関門が！

しかもかなりできるぜ、あの白髪頭、くそう早く行動に移さないと

(あまりにもテンパっていたせいで、カモはあることをすっかりと忘れてしまっていた、それはネギがリアを兄と呼んだことである。もしウエールズにいた時から兄弟関係が続いていたのならネカネモリアのことを認知していることを、つまりリアにも手紙が届いている可能性があることを。残念ながらすでにリアは手紙を受け取り中

身を見てしまっていたのだが……)

~~~~~

次の日、放課後

「リア！ ちょっとこれを見て！」

ん？ そんなに慌ててどうした明日菜？ ……ああ手紙のことか

「下着泥二千枚ですか？」

「な！ 知ってたの！？」

「俺の方にも手紙が来てたからな、まあオコジヨ妖精の仮契約の魔法陣を書く能力は買っていたから放置したんだが……」

「そんなの知ったつこつちやないわよ！ 悪いことをして逃げてきたんだから、とっ捕まえなきゃダメでしょうが！」

「そりゃそうだけどね、はあ仕方ない探知魔法で淫獣の居場所探しますから少し待っててくれや」

みよーん、みよーん、みよーんつと、発見！ 近いな……

「寮の裏手だな」

「分かったわ！」

「つておーい……………まあいいや」

「ゴオオオオオオオオ」

「あちっ！ あちっ！ 助けてくれ〜！ もうしねえから〜！」

「どうやら宮崎をネギの従者にしようとしたカモ、無理やり、そして騙すようなまねはいかんよ？」

「しかも私利私欲で今回の騒動を行ったとか？」

「信用できんなあ？ まあ別に悪さをするならするで構わないが、それなりの罰があつて当然だということも理解しとけよ？」

「あ！ 手を近づけないで！ 燃えてる！ 俺ツチの尻尾がああああああ」

「カモ君（涙）」

「自業自得よ！」

~~~~~

次の日、場所は意外なことに麻帆良大学ロボット研究会

「やーやーやー、やっと来てくれた力。リア先生、すっかり忘れていたかと思ったヨ」

「やー、忙しかったと言いますが、振り回されていたと言いますが、まあとにかく大変だったと言いますか」

「そかそかそれなら仕方ないね」

「で、何か見せたいものでもあるんですか？」

「ふっふっふっ、他の生徒には秘密裏に作った人型ロボット！それが見せたいものネ」

「茶々丸さんの後継機……みたいなものですか？」

「いやいや、それとは別に私と茶々丸の姉妹機の手伝いによって作

っている、素晴らしい作品があるね」

あ、だから秘密の入口らしきところから入ったわけですね。という研究室を改造してもいいのだろうか？

「さて、着いたネ」

そして、扉の向こうには……全長三メートルほどの青いロボットがロボットアニメでよく見るハンガーに固定されていた、隣には黒と白もいるがまだつくり途中のようだ

「これは……」

「EG-X またの名前をアー・ゲ ンどうねビックリしたカ」

「伏字入りましたけど？」

「なんと！ 型式番号と名前が違うから問題ないと思たノニ！」

「何言ってるか分らんが、それ以外もアウトな気がするぞ？」

「なら先生がこの子の名前を考えるネ！」

「無茶ぶりですね、アクセルとか……ジャックも捨てがたい……意表をつけてマサトとか？」

「……画面の向こうの皆様にも知らんヨ？」

「なら、アークでいいんじゃない？ ほら伏字にならないし」

「メタ発言禁止ヨ」

「お前もな〜」

「ごほん、仕切り直しね！ ……この子の名前はアーク、どうねビツクリした力？」

「……え〜、はいはいわかりましたやればいいんでしょ？ やれば、……はあ、かなりびっくりしました、それでこいつを自分に見せてどうするつもりですか？」

「おお、話が早くて助かるネ、リア先生にはこのアークに戦闘経験を積ませてもらいたいネ」

「AIの進化？ みたいなものですか？ ただ戦闘経験って……」

「問題ないね、魔法使いならそういうった状況にだって出くわすはずネ」

「……関係者ですか？」

「まあ、麻帆良の魔法先生や生徒に関わることはしていないが、魔法を知っている者なのは事実ね」

「……別にかまいませんよ、生徒の頼みですしね、どこまでやれるかはわかりませんが」

「それで構わないよ、修理や整備が必要だと感じたら私か茶々丸に連絡して欲しいネ」

「わかりました、でこいつはもう動くんですか？」

「動作チェックも終了しているから問題ないね、ぼっちとな、それじゃあこの子を頼むよ」

超がコンソールのボタンを押したらアークのツインカメラに光が灯り動き出した

「……もしかしてこのまま連れて帰れと？」

「当然ね、リア先生の傍に置いておくのが一番よ」

「できれば魔法球の中で過ごしていて欲しいのですが？」

「学園長には話を付けてあるネ、警備ロボとして寮の前に待機させて構わないとネ、それにイグニス遺産も一緒に警備ロボにしてしまえばいいと思うけどネ？」

「ッ！ 何を知ってるかは知りませんが、深くは聞きませんが……
そうですね雨風に晒されたら？」

「そこまで軟な作りをしてないネ」

「わかりました女子寮の警備ロボとして預からせていただきます」

「よろしく頼むネ」

「……なんか締めまりませんか？」

「……そういうのは言わない約束ヨ」

・
・
・

そう言えば、なんで超は魔法球のことを疑問に思わなかったんだ？
すでにエヴァさんが見せてるとか？

ガシヨン、ガシヨン、ガシヨン

「……これからよろしくな？ アーク」

コクリ、とつなずいたような気がしたのは気のせいだろうか？

~~~~~

寮の入口の近くに『超作 警備ロボ 名前“アーク”』というプレートを持たせアークを待機させひとまず部屋へ戻ると

「何だこれ？」

部屋に戻ると、簀巻きにされたカモがプラプラと吊るされ、ネギと明日菜がいきなり土下座してきた

「何があつたの、まじで？」

話を聞いてみると、カモの話を聞いて茶々丸を襲撃しようとした、ただ、いざ襲撃しようするが茶々丸がいい口ボなので迷いが生まれる、そこにカモの『機械人形なんだし気に病む必要はない』という発言でネギブチ切れ、カモぼろ雑巾に。

魔法を使ったので茶々丸に気付かれるが、ネギが襲撃しようとした旨を正直に話し、その場は解散。

生徒を攻撃しようとしたことに罪悪感をネギは感じ、ネギとカモの暴走を止めきれなかったことへの罪悪感を明日菜は感じ、俺に説教をもらうためにここにいたそうなの。

あ、ネギには寮長室のスペアキーを渡してあるのでそれで入ったのだらう。

「言いたいことは分かったが、反省してるんだろ？」

「うん、でも……」

「お前が何を思って茶々丸の襲撃をやめたのかは知らない、けど間違いに気付けたんだ、今はそれで充分だろ？」

「でも、でも、もしカモ君の言う通りに行動を起こしていたら僕…

…僕…」



生徒を攻撃しようとした、もしかしたら機械といえど殺してしまっていたかもしれない、その罪の重さにネギは堪えているのだろう

「私も、そこまで深く考えてなくて、流されて、止めるどころか手伝っちゃって…」

うわ、原作より酷いことに……どんよどんよしちゃってるよ二人とも、まあこれが普通の反応なんだろうけどね？ 誰かを殺そうとした後の反応は

「茶々丸は無事だったそれでいいだろ？ 何があっただかしらんがそうする必要がなくなかったってことだろ？」

そう俺が言った瞬間、ネギと明日菜は、はっと何かに気付く顔を青くしていた

「兄さん、僕達が兄さんに相談したことはエヴァンジェリンさんに黙っていてね！」

「あ、ああ。分かった」

「絶対だからね！」

そう言って出ていく二人……

「忘れられたな、カモ」

「……………」

返事がないただの屍のようだ

原作十話 原作のずれ 新たな仲間？（後書き）

ネギが叩かれる場面と作者は思っている茶々丸襲撃事件！

ネギの株が下がらないような方法は？ と思ってふと思いついたのがこれでした！ これからも改造ねぎくんとフラム（リア）をよろしく願います。

ちなみに後一、二体ほどロボッツツツが出る予定です

原作十一話 そろそろ終盤戦です！（前書き）

あとがきに報告アリです！

原作十一話 そろそろ終盤戦です！

「作っちゃった……てか、怪しまれるだろ？ これ……」

ども、リアです、なんか原作がすごいことになって不安になってきた今日この頃……って何言ってた？ 電波か？

さて、気を取り直して。何がまずいかというと建てちゃいました……疑似格納庫……

ただ今深夜なんです、超のこの茶々丸さんの姉妹機や工学部さん達の手を借りて突貫であるが寮の近くにロボッツたちの家、つまり格納庫を作ってしまったわけですよ、数時間で……見た目は大きな物置小屋なんですけどね？ 超が言った通りロボたちを警備員にする話はちゃんと学園長が許可を出してくれました、超さんって本当になに者？

「何黄昏てるんだい？ リトルマスター？」

「そつよ、若いうちから悩んだらすぐに禿になっちゃうわよ？」

「うっさい、ゴースト、アーヴェエ。こつちはどう寮の皆様言い訳をしようか考えてるんだぞ……いきなり寮の隣に格納庫作るわ、お前たちみたいなオーバーテクノロジーがいきなり寮の警備をしだすとか……」

「なんだい、そんなことを悩んでいたのか？ リトルマスター」

「やれやれ、頭がかたいわね。この子は」

「んだとゴラア！ じゃあ言ってみろ！ てめーらみたいな頭のね

じが一本取れてるような奴らのいい訳ってやつを聞かせてみるや！」

「「麻帆良学園の技術力は世界一いいい！！！」」

「そんなこつたるうと思つたわああああ！！！」

このポケロボどもがあああ

一応紹介しておく、こつちの黒くてうさ耳頭のロボがゴースト、  
シュンストって名前があるらしいが、ゴーストの方が気に入って  
るらしい。しかもキザ男口調なのだ。

で、こつちの白いスリム鎧に赤ラインのまさに白騎士って感じのロ  
ボがアーヴェ、ヴァ ス ッターって名前があるらしいが、こいつ  
もアーヴェって名前が好きらしい。喋り方は年上のノリの軽いお姉  
さんな感じである。

二機とも俺が名付けたからゴースト、アーヴェという名前を気に入  
ってるらしいが……初対面のロボの名付け親になった覚えはないの  
だがな？

ちなみにあと一体いるのだが、そいつを合わせて図書館島の地下に  
あつた秘密の部屋で寝ていたのを俺が魔法球に置いておいたのだ。  
超に「動かしてみたらどうネ？」と言われて魔力を流し込んでみた  
らいきなり動き始めたのは正直びっくりしたな

「ただ今帰ってきたぞマスター」

「お帰り、古鉄警備こてつの方はどうだった？」

こいつが、イグニスが残し俺が回収した最後の機体、名を古鉄、本  
名をアトアゼン・ナト。ガッチガチの重装甲、とっつき、ツ  
ノ、肩のベアリング玉発射装置、何とも男のロマンを体現した姿で  
ある。そして、こいつも本名より古鉄の方が好きらしいもしくはア

ルト、そう呼んでほしいと呼ばれたわけである。性格は真面目で口数が少ない青年である。

「問題ない。瀬流彦という魔法先生と組んだのだが、なかなか見事なサポートだった。おかげで自分は苦勞することなく侵入者を捕まえることができた」

一応、起動初日から働くことになり三体がローテーションを組んで日替わりで警備をすることになり 本当はこの目の前にいるボケロボ二機が「面倒くさい」なんていったせいで古鉄が出勤したため急ぎよ俺がローテーションを組ませたのだが ちょうど今日は、どこぞの泥棒が図書館島へ魔法の本を求め侵入しようとしたので古鉄が捕まえたらしいというわけだ

「そうかいな。お疲れ、休んでいいよ」

「了解だマスター、これより本機はスリープモードに移行する……」  
プツン、という感じの音を立ててツインカメラの光が消える……

「じゃあ私も休ませてもらうわね」

「Good Night リトルマスター」

寝ることができるロボット……すげーな……

「お前も休んでおけよ？ アーク」

コクリ……プツン

こいつ、俺の命令がないと行動しないんだよね、年季の違いかね？ 魔法球使って経験積ませるか？

あと最後にこいつらを起動させた時のことを話すが、目覚めた瞬間俺をマスターと呼んできたのだ。

俺はお前たちのマスターじゃないぞって言ったらいきなり、

「やれやれ、冗談は恰好だけにしてくれマスター？ 今更子供の姿なんてそっちの方がどうかしてるぜ？」

とゴーストに言われ、無言で殴り耳をむしろうとした俺は悪くないと思う。

そのとき、

「やめてくれマスター！ 俺のチャームポイントをどうするつもりだ！」

とか言ってたが、人格A Iが男のくせにうさ耳がチャームポイントって……

まあそのあと古鉄が二人を呼び寄せ何やら内緒話をはじめ……

「マスターであるイグニス命令により、フラム・アーウェルンクス、お前が俺たちの新たなマスターとして登録されている、だから以後マスターと呼ばせてもらおうぞ？」

びびった、久しぶりにその名前を聞いた気がするよ……まあ、またとも言えるがマジで名に者なんだよ！ イグニスよ！



~~~~~

S i d e タ ツ 三

やれやれ、ホントに彼には驚かされてばかりだよ

「なあ、龍宮。私の目がおかしくなったのか？」

「いや、私にも見えるからお前の目は正常だよ」

あの麻帆良学園で学園長を除けば最強の高畑・T・タカミチより上の實力を持ち、あの紅き翼のイグニス of 魔法人形兼サウザンドマスターの息子の保護者、不思議な魔法具を刹那に与え今度は彼をマスターと呼ぶロボット……

「この短時間に寮の隣にロボットたちの家まで建てるとは……リア先生は何者なんだ？」

私が聞きたいぐらいなんだがね？

「あ、お二人さん夜の警備の仕事お疲れ様です」

噂をすれば何とやらだね……

「あの、リア先生？ あそこにできた小屋はいつたい？」

「えっと……あれは、ロボットたちの家替わりだね、あそこに全員

待機してもらっているわけ」

「なるほど、しかしあそこまで大きな小屋をこの短時間で作り上げるなんて、どうやったのですか？」

ふむ、それは私も聞きたかったな

「え〜と、超さんに手伝ってもらったというか、麻帆良の技術力は世界一いいい！ っと言いますか……」

「「ああ、なるほど」」

超の差し金でもあったわけか、それならあの荒唐無稽技術力ロボットの納得がいくな。

つて、なんで頭を抱えてるんだ先生？

「いやいやいやいや、まじか〜」

何かあったのだろうか？

タシム Side out

~~~~~

休みの日、どうやらネギは今回の事件に俺を関わらせたくないよ  
うなのでブラブラすることに、久しぶりに紅茶とか飲んでみようか  
な？　　と、あれは茶々丸か？

「おはよう、茶々丸」

「あ、おはようございますリア先生……あの少しよろしいでしょう  
か？」

「どうしたん？」

「ネギ先生のことなんですけど……」

「あ、なんかネギが迷惑かけたみたいですね、スミマセン深く反  
省してるようだし許してもらえないでしょうかね？」

「いえ、別に迷惑ではなかったのですが……なんと言いますか……  
その」

「????」

茶々丸がどもってる？　　ふむ……原作とはずれたが茶々丸がネギの  
ことを気にしだったのか？　　微妙に修正力でも働いたのかね？

「ここにいたのか茶々丸、ん？　　リアも一緒かちょうどいい」

「どうかしたんですかい？　　エヴァさん」

「なに、昨日学園長ガクに呼び出しをくらってな、桜通りの件でほどほ  
どにと言われたのさ、まあもともと必要のない行為でもあったし、

次の満月まで休むことにしたのさ」

「なるほど、では色々とお願ひしますね」

「二人とも何の話をしてるんですか？」

「ハカセには関係ない話さ……ところで茶々丸、昨日から様子がおかしい気がするのだが何か問題でもあったか？」

茶々丸さんからのアイコンタクト！

「いえ、何もありません」

了解、ネギの件は黙っておきますよ

ピリリリリリリ！！

ん？ 電話？

「ちよつと失礼」

明日菜から？

「リア先生なんだかいつもと雰囲気違いますね？」

「ああ、あいつはプライベートで関わりのあるやつと話すときはあなるんだよ」

その通りです

「はい、もしも……ネギがどこかへ飛んで行った？ 山の方？ 了解俺も探しに行きます」

ああ、裏山修行イベントですか、長瀬さんに何かお礼をしに行かなきゃですね。

~~~~~

ネギ Side

ううつ、僕のせいでアスナさんやみんなに迷惑をかけられないからってどこか遠くへ逃げようって思ったのに、肝心の兄さんのことを僕は忘れてるじゃないか……。兄さんに頼らずにこの先生って修業を頑張ってみようって決心したのに、いつもいつも兄さんに頼ってばかりだった……。なのに、兄さんが危ないって時に僕は兄さんを見捨てて一人で……

バシン！

「うわぁー！」

しまった！ 低く飛びすぎて木にぶつかっちゃった！ 落ちる……！

ザパーン！

「ゲホッ、ゲホッ……川？ あ！ 杖が！」

しまった！ 杖をなくしちゃった！ 杖がないとまともな魔法が使えないし、そうなるこんな山奥から一人で帰れない……

「……いや、これは神様が僕に与えた罰なんだ。自分のことしか考えずに一人で逃げようとした僕への……」

自分でなんとかしなきゃ……まずは杖を探さないと

がさがさ

「ひっ！」

「おや？ 誰かと思えば。ネギ坊主ではござらんか」

「な、長瀬さん！」

・
・
・

長瀬さんが沸かしてくれたお風呂に入りながら今日一日を回想してみる、お昼ご飯のために岩魚や山菜をとり、夕飯を集めようとしたらクマに追いかけられたり、崖の上のキノコを求めロッククライミングをしたり、思いっきり体を動かせて気持ち良かったと思う。

「いい気持ちです」

疲れた時こそ風呂に入れて言っただ兄さんの気持ちが分かる気がするな

「……よかった、元気になったでござるな」

「え……」

「ネギ坊主新学期に入ってからずっと落ち込んでたでござる？ 心配してたでござるよ」

うう、やっぱり僕は駄目先生だ……生徒に心配させてしまうなんて

……

「……ほいでは拙者も風呂に入らせてもらおうかな」

「え」

ちょっと待って！ 僕ですから！ まっ、あああああああ！！

・
・
・

「いー湯でござるなネギ坊主」

見ちゃだめだ見ちゃ駄目だ見ちゃ駄目だ

「……でもすごいです長瀬さんはまだ中3なのに……」

「胸が……でござるか？」

「ちちちがいますよ！ まだ14歳なのにそんなに落ち着いていて頼りがいもありますし……尊敬です」

「ハハハそれを言ったらネギ坊主だって10歳で先生を頑張っているではござらんか」

「いえ僕なんか全然ダメ先生ですよ……それ以前に人として最低です……」

「思ったより悩みは深刻のようではござるな？」

「え？」

「初めはネギ坊主は今まで何でもできていたせいで壁にぶつかり、どうしようか悩んでおるのかと思っていたが……」

「いえ、それもあるんですが……その荒唐無稽な話なんですが……笑いませんか？」

「うむ笑わないでござるよ、だから話してみるといいでござる」

「はい……実は兄さんと僕は危険な目に合っていて……けど僕は自分の保身のために一人で逃げようとしてしまったんです、そんな自分が嫌で、許せなくて……」

「なるほどござる、確かにネギ坊主の行った行動は許されるものではない」

「……ッ」

「だが、人間だれしも自分の身が一番かわいいのでござるよ……拙者だってそうでござる」

「長瀬さんも？」

「にんにん、リア先生もそうだと思うがさすがにこればかりは拙者も分からないでござる、しかし拙者が思うに、リア先生がそれぐらいでネギ坊主を嫌ったりするとは思えないでござる」

「そう……ですか？」

「ん、しかし命の危険とはいささか物騒でござるが、なおさらなぜリア先生を頼らないでござるか？ それとも頼ることができなくなってしまうたのでござるか？」

うっ、やっぱり忍者はすごいな〜なんでもわかつちやうんだもん

「その、兄さんが人質にとられていて、相手からも兄さんに頼ろうとしたら兄さんを先に襲うって……兄さんは強いけどその人となぜか仲がいいんです、だからそこを狙われてら……」

「ふむ？ 人質にしてはリア先生は普通に毎日をお過ごししてる気がするのだが？」

「へ？」

「命を狙うほどの相手が人質を取ったらふつうすぐに人質を使い相手の命を奪うでござる。なのにそれをしない。それどころか人質を自由にさせているその時点でおかしすぎるでござる。」

「えと、つまり?。」

「相手はネギ坊主の命など本当は狙っていないということござるうな。それどころかリア先生が人質というのも嘘である可能性が高いでござる。」

「え! そんな!。」

「じゃあ、今までエヴァンジェリンさんは嘘を言ってたってこと!。」

「……そういえば兄さんに茶々丸さんのことを話したのにエヴァンジェリンさんは襲ってこなかった。もし監視されていたらあの会話は十分約束を破るには十分な会話だったって言うのに……。」

「どつやら、いろいろ気付けたようでござるな?。」

「はい! ありがとうございます、長瀬さん!。」

「それでどつするでござるか? リア先生とともに敵に立ち向かうでござるか?。」

「……それは」

思い出すは、六年前のあの日。兄さんが居なくなってしまったあの雪の降る日。

ちゃんと帰ってきてくれたけど、僕のために大けがを負ってしまった

た兄さん、今回は酷く危険な戦いになるわけではないか……..
そこが怖い……

「いえ、これは僕一人の問題です。それに兄さんに無茶をしてほしくありませんから……だから僕一人で戦います」

「無謀ではござらんか？」

「それでもです」

長瀬さんの言う通り無謀かもしれない、けど兄さんにはもう傷ついてほしくないんだ！

「あいわかった、ネギ坊主の気持ちが揺るがないのも……ただ、危なくなったら拙者を頼るでござる」

「え？」

「知ってしまった以上見て見ぬフリをするのははばかれる、それに拙者それなりに腕には自信があるのでござるよ？」

「……いえ、お気遣いありがとうございます。でも生徒を危険な目に合わせるわけにはいきません」

「ふふ、男の子でござるな」

ギョッ

わわわ！ 胸がーっ

「頑張るでござるよ、ネギ先生」

「え…はー…」

ネギSide out

~~~~~

杖を呼び戻し帰宅するネギ……さて

「ふむ、魔法使いとは実在していたでござるか、まあ自分も人のことは言えんでござるな……リア先生？」

「ええ、どうもありがとうございまいした。お詫びとして自分が作った苦無と手裏剣をどうぞ」

「おお、その二つは消耗品でござるからありがたくいたただいておくでござる。……ただリア先生、お主のこと信じてもよいのでござるな？」

「おおさすが忍者、俺がネギの敵である可能性も考えていましたか。けど安心を俺はネギの保護者のようなものであり、成長を促す鬼師匠です」

「何の話でござるかな？……つまり弟子を千尋の谷に突き落とすと  
言ったところでござるか？」

忍者つてことは否定するんだね〜

「Exactly 正解ですあいつには強くなって貰わないといけ  
ないんですよ」

「……家庭の事情とかでござるか？」

勘がいいね〜、この忍者

「その辺はおいおい話しますよ……それではこの辺で」

「うむ、それと今度手合せをお願いしたいのでござるか？」

「……唐突ですね〜。まあいいですよ楓さん、今回はネギがかなり  
お世話になったからね〜」

「ふふふ、楽しみにしているでござるよ。それとそっちが素でござ  
るかな？」

「まね〜、色々お世話になったし、自分の友好名簿にあなたの名前  
を入れときますね〜」

「ふむ、それは嬉しいこととござるな。まあ何があったかは聞かな  
いでござるが、友好範囲を狭めるのは感心しないでござるな」

「守りたいものが増えすぎるとただの足枷にしかありませんから。

ではでは〜」

「拙者より忍者に向いているかもしれないでござるな〜リア先生は」

~~~~~

ぴりりり！

「はい、もしもし？」

『あ、リア！ ネギが見つかったわ、あんたは今どこにいるの？』

「山の中ですよ〜、けど見つかったのですか。なら自分は一足先に帰って食事の用意でもしときますわ」

『頼むはね、もう一晩中山の中を歩き回ったからもつへとへとよ』

「ネギが迷惑をかけます」

『はあ、もう慣れたわよ』

あきらめが肝心というのが「うつうつ」ことを言うのだからね

「スミマセン」

『だから気にしないでってば、代わりに飛び切りおいしいご飯作ってよね！』

「了解です」

さて、今日は何を作ろうかな？

原作十一話 そろそろ終盤戦です！（後書き）

さてさて、吸血鬼編も終わりに近づいてきましたが報告です！

このたびマガジンでフェイトの過去話をしているのを読んで思ったことがあります。

自分は何を書きたくてこの小説を書いたのだろうか？ と
そして思い出したのデス！ 俺が一番書きたかったのはロボットでも、ネタ武器でもネタ魔法でもない！ ブラコンフェイト君なんだと！ 初心に帰りこの小説を読みかえす、だがブラコンフェイト君の描写がまったくないではないか！

とまあ、なんか作者の気の迷いを書きましたが、結論から言うと最初の原作前の話をまるまる書き直そうかと思いましたが、けどそうなると本編にもずれが出てくるんですよ？

というわけで、提案です！

ひとまず吸血鬼編は終わらせる方向ですが、そこでこの小説は打ち切って、リメイク版四番目の人形劇を書こうかと思えます、と言っても原作前を総入れ替えして、本編を矛盾のないように書き直すだけなんですけどね？ 私的にはフェイトの達の絡みに深みができてやってみたいと思うのですが……どうでしょう？

感想待ってます！

式様可愛いよ！ ののしられたい！

吸血鬼編 最終決戦 P V 風（前書き）

最近小説書く時間が取れず涙目な作者です。

今回は、この作品を打ち切り、代わりにリメイク版を作る意思表示と、吸血鬼編の見せ場をもう一度書くことへの忌避感から生まれました。

見せ場を似たような内容で二回流されても面白くないでしょ？ ということです。

吸血鬼編は終わらせると言っておきながらこの様な形でまとめてしまいました。

一応この文にはエヴァとネギの戦いしか書かれていませんが、裏ではリアもがんばっています。

P V 風なので色々端折ってます。すみません

吸血鬼編 最終決戦 P V 風

（吸血鬼編）

麻帆良都市の大停電、年間の恒例イベント。

都市一帯が闇に包まれた中、一つの戦いが行われようとしていた……

操られた佐々木の宣戦布告を受け大浴場へと向かったネギ、そこには幻術により大人の姿となったエヴァの姿、従者の茶々丸、操られた佐々木、大河内、明石、和泉が待ち受けていた。

しかし、ネギには大人状態のエヴァが誰かわからず、変身を解く羽目に。

「さて、満月の前で悪いが……今夜ここで決着をつけ。坊やの血を存分に吸わしてもらおうよ」

「……わかりました。でもそうはさせません。僕が勝って悪いことをするのはやめてもらいます！」

「それはどうかな？ ……行け！」

「くっ！（関係のない生徒達を巻き込んでしまうなんて、佐々木さんの魔力の残り香からこうなることは気付けたかもしれないのに！）」

「ふ、卑怯と思うかな？」

「いえ、思いません。効果のある作戦だと思えますよ」

「ほう？ 見違えたよ、これなら少しは楽しませてくれそうだな」

（だけど、四人を無傷で戦闘不能にするのは大変なことには変わらない。呪文を唱える前に組み伏せられたらどうしようもない）

かさばる装備、余計な杖などを置いてきたのでそれなりに動ける自信はあるが、半吸血鬼化した相手には気休めにもならない。

（こつなつたら先手必勝！！）

すっ、とロープの中の触媒に手を伸ばした瞬間、四人とネギの間に何か撃ち込まれた

「誰だ！」

「え？ え……あ、あなたは！」

そこにいたのは……

~~~~~

戦いは最終局面へ。

ネギの奮闘によりあらかじめ設置しておいた捕縛結界にエヴァを誘導することに成功したが、茶々丸の力によりあっさりと結界を解除

されてしまっ。

さらに杖を奪われ追い詰められたネギ、だがそこへ乱入してきた明日菜のおかげで何とか仕切りなおすことができた。

仮契約も終え、エヴァ、茶々丸主従と対峙するネギと明日菜。

「どうしたばーや？ お姉ちゃんが来てくれてホッと一息か？」

「うぐ」

「何言ってるのよ！ これで2対2の正々堂々の勝負でしょ！」

「確かにお互いパートナーも揃いようやく正当な決闘というわけだ。だが互角かな？ ばーやは杖なし、貴様も戦いについてはまったくの素人だろう」

「そ、それは……」

「ボソボソ（明日菜さん）」

「え？」

「（茶々丸さんの足止めをお願いします、そうすればエヴァさんに一矢報いることができます）」

「（あんた一人で大丈夫なの？ さっきだって負けそうだったじゃない）」

「（茶々丸さんが近くにいたからです、エヴァさんと1対1になれば勝機があります）」

「（わかったわ、無茶だけはするんじゃないわよ）」

「はい」

「さて、そちらも作戦会議は終わったようだな。行くぞ！今は私が生徒だということを忘れ本気で来るがいい。ネギ・スプリングフイールド」

「……はい！」

そして、ネギはリアからもらった杖を構えて強敵との戦いへ臨んだ。

・  
・  
・

明日菜と茶々丸が戦ってる間、ネギとエヴァの戦いは魔法の打ち合いとなっていた。

そして、ネギが使える魔法の中で一番強い魔法の詠唱に入った。

「ラス・テル マ・スキル マギステル

ウエニアント・スビトリトオスリアーレス・フルグリエンテース  
来たれ雷精 風の精！！」

「リク・ラク ラ・ラック ライラック

ウエニアント・スビトリトオスキアーレス・オブスクーランテース  
来たれ氷精 闇の精！！」

それに対しエヴァも属性は違うが同種の魔法を放とうとしている。

「雷を纏いて 吹きすさべ 南洋の風」

「闇を従え 吹雪け 常夜の氷雪」

「来るがいい、ぼーやー！！」

そして、二人の魔法がぶつかり合った。

「雷の暴風！！！」

「闇の吹雪！！！」

「ぐう……くくつ……（くつ、さすが親譲りのバカ魔力の乗った魔法だ。威力はある。だがそれだけではこの私には勝てん）」

「（スゴイ力だ！ このままじゃ押し……！！）」

いくら魔力量が多くとも魔法に乘せられる量が少ないネギに勝てる見込みはなかった。

ネギは、押し負けエヴァの魔法に飲まれた。エヴァの魔法が橋に当たり轟音が響く。

「ネギ！！！」

明日菜の悲痛な叫びが響く。

「ネギ先生！！！」

茶々丸も明日菜から目を離すほどだった

「ほづ………」

しかし、エヴァだけは感嘆の声を上げていた。煙が晴れると、そこには何とか紙一重でエヴァの魔法を躲したネギの姿があった。

「ネギ！」

「ネギ先生……」

「押し負けると分かった瞬間魔法を途中で止め何とか躲したか……さすがにそこまでの度胸があるとは思っていなかったぞ。だがもう戦える状態ではあるまい？」

「ぜえ、ぜえ」

エヴァの言う通り今のネギは立っているのがやっとの状態であった。

「まだ……まだです！」

すると、ネギは腰のベルトに唯一残ってあった試験管の中身を一気にあおった。

「む？ 魔法薬の類か？」

「けほつ、そうです兄さん印の特性魔法薬です。一回ほどの魔法を撃つための魔力と体力の回復ができるんです」

「ほづ、あと一回の魔法でこの私を倒せるとも思ってるのかい？」

「はい、やって見せます。」

「くくく、はーはっははは。いいだろう、そこまでの自信があるのならやって見せるがいい！ この闇の福音<sup>やみのふくいん</sup> エヴァンジェリン・A・K・マグダウエル！ 貴様の魔法を受けきって見せよう！」

「はい、胸を借りさせてもらいます！ エヴァンジェリンさん」

そして、ネギは魔法を発射するための体制に移る。

「（む？　なんだ、詠唱なしの魔法だと？　今のボーヤごときの無詠唱魔法などたかが知れているぞ）」

エヴァが失望していると、茶々丸から警告が発せられる。

「いけません、マスター！　その攻撃は危険です！　全力で防御してください！」

「何？」

エヴァが訝しんでいる間に、ネギの両手に電撃が走り続ける。

「いきます！　兄さんと一緒に開発した必殺最凶物理魔法！」

ネギがリアと一緒に開発したネタ魔法。だがあまりの威力に封印した最凶魔法。それがついに解き放たれる！！

「××××！！！」

「な！！！」

麻帆良の夜に超弩級の轟音が鳴り響いた。

ちなみにこの轟音は次の日の話題を飾ったのは言うまでもない。



## 吸血鬼編 最終決戦 PV風（後書き）

最近のマガジンのネタを使い原作開始までの話を一新、そして矛盾点がなくなるように原作編を書き直すのがリメイク編です！

今回は吸血鬼編のPV風ですが、修学旅行編や麻帆良武闘会編、超編、魔法世界編も要望があったなら書こうと思います。要するにリメイク編ができるまでの時間稼ぎですね。

作業は並行してやる予定ですが、マガジンの様子を見ながらなのでリメイク編はすぐに掲載は無理そうです。

アンケートみたいなものですが、よろしくお願いします。

十二話 最終決戦前 閑話（前書き）

時間が取れなくなかなか小説が書けませんでした。

そして遅れてほんとにすみません。

ただ、今後もこんな感じで亀更新になってしまつと思ひます。  
ホントにすみません。

## 十二話 最終決戦前 閑話

「はあく。授業が四時限目からしかなかったからこれたものの、無茶な注文してくれましたね。いきなり来いって一言だけのメールを見たときは眠気もうせましたよ」

「すみません。リア先生」

「いや、茶々丸さんを攻めてるわけではないからね？ 悪いのはこっちだからね？」

「ふん！ 小間使いが主人の世話をするのは当たり前だろう？ ごほごほっ」

「あれ？ いつの間にか俺のポジションが小間使いに？」

「すみません。リア先生」

「いやいや、だから茶々丸さんのせいじゃないからね？ 悪いのはこっちのわがまま吸血鬼ですから」

「ごほっごほっ、うるさいぞ下僕の分際で！」

「だれが下僕じゃあ！ ランクダウンなんてもんじゃねえよ！ 地面に叩きつけられてるじゃねえか！ 何があつたの？ 俺なんかした！？」

「いちいち叫ぶな……頭に響く」

「質問はスルーですか？ コノヤロー」

「いえ、あれはただの照れ隠しかと」

「あ、そうですね。それより茶々丸さんも大変ですね。紗代さんは学校へ行ってるみたいですがあなたはここでちんちくりんの看病とは……」

「誰がちんちくりんだ！ 誰が！」

なんだか背中をたたかれてる気がしますが、ステータスバットコンディションの貴様の拳など痛くもかゆくもないわ！

「紗代さんは普通の学園生活を送ってほしいというマスターからのご厚意で学校へ行ったのです。朝は自分も残るって言っていました。それと私はマスターの従者ですからマスターの看病をするのは当たり前です」

「ちゃ、茶々丸！ 余計なことは言つな！」

やはりエヴァさんはいい人ですな、茶々丸さんも優しいし。エヴァファミリーって身内には撃甘だよな。

カランコロン

ん？ ベルの音……誰か来たのか？

「誰でしょう？」

「うーん、茶々丸さんはエヴァさんの薬を用意してください、俺が

対応しますから」

「え？ いいのですか？」

「いや、言いも悪いもないよ？ 適材適所だよ」

「ではお任せします」

「あいさ〜」

階段を使わずそのまま柵を飛び越えショートカット！ ふっ決まっ  
t……

「兄さん！ なんで！」

Oh my god……

~~~~~

ネギの果たし状云々は俺の仲裁によりすぐに解散。

茶々丸さんは俺たちにエヴァさんを任せて大学へ薬を取りに。ついでに猫の餌やりへ。

なので俺たちはエヴァさんの看病中である。

「ハアハア……喉が……」

「喉が渴いたのですね、待っていてください！」

急いで下の階へ走っていくネギ。

「なんやかんや言ってこいつは優しいから頼られるとN.O.って言えないし、義理堅いからな。」

「まあ、そう育てたのは俺ですけどね（キラ！）」

「うざい……」

めこお

「辛いはずなのにしっかりと俺の顔面に蹴りを入れてくるエヴァさん、条件反射の域に達しているとしたか思えない！ 付き合いは短いはずなのに……」

「持ってきました！ って兄さん！」

「顔に足がめり込んだまんまだからね、驚くのも仕方ないさ。」

「あれ？ 水、飲んでくれないな？ じゃあお茶？ それともコーラ？」

「待てい」

頭に裏拳を乗せるようにネギに食らわしてやる。

「冷静になれ。さすがにコーラはない」

「うん……じゃあ何を飲ませれば……」

「ネギ、少し考えてみる。相手は一応（めりい）きゅつけふきはぞ」

「兄さん、顔が！ 顔が！ ……あれ？」

今度は拳だったことをここに語っておく。

「うえ〜ん、僕の血は少しだけにしてくださいよ〜」

それからエヴァの看病は続く……

「うっ、あつい……」

「ああ！ 直射日光が！ カーテン閉めますね」

「寒い……」

「あ、パジャマがびしょ濡れだ！ 着替えさせてあげないと」

「この場合は不可抗力ともいえるが……見るのか？」

「何言ってるの！ 兄さん！」

「冗談だよ？」

•
•
•

「ふう、ひとまず落ち着いたかな？」

「お疲れ、ネギ」

「……兄さん」

「ん？ どうした」

「さっき、エヴァンジェリンさんのこと吸血鬼って言ってたよね？」

はいピーンチ！ ネギが俺のことを訝しがってます。そりゃあエヴァさんは魔法関係については言っていないから完全に俺の自爆である。

「……そうだったけ？」

「うん、言った」

……やばい、もう駄目だ。隠しきれない。

こうなったら土下座してぼやかしながら真実を話すしか……

「やっぱりエヴァさんの、兄さんを襲って発言は嘘だったんだね」

「ん」

「すっごく心配したんだからね」

「……ん」

「けどエヴァンジェリンさんと仲が良かったってことは今回の騒動の真相全部しってるんだよね？」

「そうなるな」

「……………」

やばい……………罪悪感でめっちゃ泣きそう、心臓がめっちゃ痛い。ぎりぎり言ってる感じがする。

がばっ

……………あれ？

「危険なことほしないで欲しかったのに。なんで兄さんは危ないことに自分から首突っ込もうとするの!」

え？ あれ？ なんか勘違いされてる？

「今回もエヴァンジェリンさんを一人で説得していたんでしょ？
いつもみたいに僕を守るために」

うぐっ！ 半分正解なのがキツイ！ 罪悪感が！

「いや、その……………ホントに悪かった」

ぎゅっとネギを抱きしめてやる。ただネギがエヴァさんと戦い少しでも成長してほしい自分としては少し話し合いが必要な状態か？

「うん」

「うう…やめる。サウザンドマスター」

「え？ サウザンドマスター？」

ちっ！ これから色々話をしようと思ってたのにこのロリが！

「死ね、下僕」

寢言でしかも地の文に突込みって…

「なんか呟いたけど…サウザンドマスターの夢！」

「うう、人形使い」

やっぱりイグニスとやらもエヴァの呪いをかける場面に立ち会ったのか…

「兄さん」

むむ？ どうしたネギよ？ 杖なんか握って

「いけないのは分かってる、けど！ どうしても父さんのことが知りたいんだ！ だから…いいよ」「…へ？」

「エヴァさんの夢を見るつもりだろ？ 俺も確かめたいことがあるから責任は俺が持つ。だから許可する」

「ありがとう兄さん！」

「てめえ！ いきなり来いって連絡があつたから急いで来てみれば……ガキ相手に何してやがる！」

「いやちよつと待てイグニス！ そいつは……」

「問答無用！ 変態の言葉など聞く耳持たん！」

「ぶるぶるわああ」

殴られて吹っ飛ぶナギ。にしてもあいつがイグニスか……。怪しさ満点じゃないか。

布のようなもので両目を隠してるし、服もどこかゆったりしている……って長原君かよ！ 顔を隠したいのは分かるけどさあ。でも髪は黒だしいい……のか？

「おい、大丈夫か？」

「いや、すまない。たすかったよ」

紳士的にエヴァさんを助けているイグニス、悪いやつではないのか？ それともエヴァさんを籠絡しよう……それはないな。今のエヴァさんが惚れているのはナギみたいだし。しかしお姫様抱っこって……

「たく、ナギの野郎が、吸血鬼に絡まれて大変だから助けてくれなんて言われたから仕方なく来たものの。いねーじゃねえか」

ギクツとビクつくエヴァさん。そして……

「いや、そいつが吸血鬼なんだが」

フラフラと戻ってきたナギの一言が引き金だった。

ぼいつ「ちょよ！」　ぼちやーん！　「ギャー！　ニンニクが！
ネギが！」　「おう戻ってきたかご主人」

ひでえ！　悪魔のような所業だ！

「ところでナギ。さっき唱えようとしていた呪文ってなんだ？」

「麻帆良の爺が警備員欲しがってたから登校地獄インフェルヌス・スコラスティックスでもかけてやろうかなと……」

「なるほど。軽く術式いじってかけるか？　そのほうが術解くとき俺がお前、どっちかいれば大丈夫になるだろうし」

「おお！　そりゃあ名案だ！　俺も結構大変だから約束守れないかもしれないしな」

「貴様ら！　本人を目の前にして何を勝手に話を進めている！」

「ここをこつして、ここをこつ、んでこんな感じに」

「なるほど二人で一つの魔法をかけるのか！　やっぱりお前ってすげーな！」

「伊達に長生きはしてないぜ」

「やめろ！　やめてくれー！」

うわぁ……露骨ないじめ現場だよこれ。本人を目の前に呪いの術式
いじるって、鬼畜以外の何物でもないよ……

（あれが僕のお父さんあれが僕のお父さんあれが僕のお父さんあれ
が僕のお父さんあれが僕のお父さんあれが僕のお父さんあれが僕のお父さんあれが僕のお父さんあれが僕のお父さん……）

（ネギいいいいいい！！　しっかりしろ！　お前の父さんはいいと
ころがちやんとあるから！　今はそんな様子微塵もないけど英雄っ
て言われたくらいだし。だから気をしっかり持つんだ！）

と、ネギの介護をしているうちに二人はイグニスによって調整され
インフェルナス・スコラスティクス
た登校地獄をエヴァさんにかけてしまったのだった。

～エヴァ Side～

「うわぁー！」

くそ！　またこの夢か。毎度毎度腹の立つ奴らだ！　ナギの奴は私
の物にならなかつた拳句に呪いまでかけるなんて！　イグニスだ
ってそうだ、いきなり投げ捨てるか普通！

ん？　誰かの気配……

「な！　なんでボーヤがここにいる！」

しかも下僕は床で寝てる始末。これは主人として躰が必要だな

「しかし、敵の目の前で気持ち良く昼寝とは殺れと言ってるようなものだぞ。まったく」

まあ今回は私の看病をしてくれたようだし見逃して……ん？

「むにゃ？　は！　しまった寝てた！　大丈夫ですかエヴァンジェリンさん」

「ああ、大丈夫だよ。寝ていれば今日の夜には治ってるだろうさ。だからさっさと帰れ、今日の所は見逃してやる」

「あ、はい……あのエヴァンジェリンさん。兄さんは……」

「ああ、そのことか。もうこの状況じゃ色々ばれているだろうから言っておくが奴とは協力関係にある」

「ならもう僕のごとは襲わないのですか？」

「……残念だがそれはない」

「え？」

「これはそいつの頼みでもあるのさ。まあお前のごことを思っただけの行動らしいかな？」

チツ、なんで私が下僕ごときの擁護をしているのだ…

「……そうなんですか。えと、では僕はこれで。兄さんはどうすれ
ば？」

「ああそこに捨て置いてけ。少しばかりそいつに話があるのでな」

「あ、わかりました。お大事に」

さて、ボーヤもいなくなったことだし

「いつまで寝たふりをしている」

「ありゃ？ ばれてましたか」

「まあな、ところで何故ボーヤは杖を握りながら寝ていたのだろう
な」

「（びくッ）」

「どうやらお前も私の夢を見ていたようだな？ まったく仕方ない
下僕だな」

ああ、ビクビク震えるこいつが実に可愛らしく見える。もっといじ
めたくなるだろ？

「弟の不始末の責任を取るのも兄の役目。さて、覚悟はできてるだ
ろうな？」

「戦略的撤退！」

「逃すか！」

はっはっはっ、ネズミのように必死になって逃げるがよい！

「ギャアアアアアアアアアア！」

「はっはっはっはっはっはっはっはっ！」

くエヴァ Side Endく

~~~~~

く茶々丸 Sideく

「あ、ネギ先生」

「あ、茶々丸さんエヴァンジェリンさんが寝ていれば夜にはよくなるって言ってましたよ？」

「そうですか、マスターの看病を任せてしまいすみませんでした」

「いえ、教師として当然のことをしたまでです」

「そうですk……」

『ギャアアアアアアアアアア！』

『はっはっはっはっはっはっはっはっはっ！』

「ああ、マスターが元気になったようです」

「……兄さん(汗)」

十二話 最終決戦前 閑話（後書き）

マガジンがなんかすごい方向に進んでしまい、remakeがうまく書けないでいる状況。

もしかしたら、修学旅行編でフェイトの口から昔話をかたらせて、remake版の話をおじゃんにするかもしれない。

ホント見通しが甘くてすみません。

十三話 決着（前編）（前書き）

orz みませんでしたあああああああ！！

受験勉強の合間に書いたりしているのですがどうもほかの作者さんの作品に目が行ってしまい……すみませんすみません

自分もここまで遅れて読者の方々に申し訳ないと思ってます、若干お気に入り登録してくれていた方も減っていてやっちゃったと思ってます。

何とか忘れられない速度で更新できたらな、と思ってます。

あとあとがきにアンケートのような作者のお願いがあります。ご協力の方をお願いします。

### 十三話 決着（前編）

放課後の校庭の隅。そこにいるのは俺と四体のロボッツ。俺が今夜の警備について朝の魔法先生のための職員会議で決まったことをロボッツたちに報告しているところだ。

そう、今日は麻帆良学園恒例イベント、通称大停電の日。

ちなみに、メンテのためと言われてはいるが一体何のメンテなのかよくわからない作者であった。麻帆良が持つ発電所？

「メタ発言禁止!!!」

「いきなり叫ぶとはストレスでも溜まっていたか？ リトルマスタ  
ー」

「だめよ、ストレスは健康を害するのよ？」

「ストレスの要因になりそうなお前たちが言っても説得力は皆無だ  
……」

「すっ（まったくもって同感です）」

それぞれ、日替わりで麻帆良の警備を行っているこいつらも今日は全員で仕事をしてもらうことになっている。まあ主な理由は俺が警備に参加しないからなのだがな？

「んじゃ俺はネギの様子を見守っているからアークは俺の代わりに  
刹那達の所へ、古鉄とゴースト、アーヴェは伝えられたポイントで  
警備を頼む」

「了解（了解）」

疑問に思った人もいるだろうが感情表現がやけに発達してきたアークなのだが（いやほんと何故？）会話が成立しているのは何故なのかというと、エリ ベス式会話術を覚えたからなのだ！

え？ 大々的に発表することではない？ まあそうだけどさ、俺だって頑張ったんだよ？

プレートを転送するための簡易転送装置を作ったり、日常会話で使えそうな会話を考えてプレートに書いたりしたんだぜ？

……まあひとまずそーゆーのは置いておいて、ネギの所に行ってくださいか？

ちなみに俺とロボッツが一緒に居る所や、俺が指示を出しているところをよく生徒達に見られているようでいつの間にか俺に二つ名みたいなのがついてた。

『大佐』らしい。語呂が良く軍帽が似合いそうって理由でつけられたようだ。ちなみに朝倉から教えてもらうまでまったくもって認知してませんでした。

~~~~~

ネーギはどこにいるっとい。おっと警備が始まるまでに何とか接触

できたな。

「ネーギやーい」

「あれ？ 兄さん、どうしたの？ そろそろ警備の時間だから持ち場についてなきゃダメだよ」

「うむ、そうなのだな。実は渡したいものがあってだな」

「??？」

スーツの内ポケットをこそこそとあさりお目当ての物をネギに渡す。

「ほい、エヴァさんとの戦いときに持つおけや。お守り代わりにでもなるだろうしな？」

「え？ これって……」

「ヤバくなったらあの魔法を使ってもいいぜ？」

「でもあの魔法は禁止だって……」

「空の方向に打つならまあ被害はほぼないだろうし、それに弾がすぐ溶けるから問題ないさ。それにエヴァさんを本気で負かすならそれぐらい必要だぜ？」

「……わかったよ兄さん！ 僕、頑張るよ」

「その意気だぜ。わが弟よ」

ネギはリアからもらった銅製の小さな杖をギュツと握った。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

ただ今停電中の麻帆良学園女子中等部寮をうろうつろとしていいる俺。  
ぶつちやけエヴァさんが行動を開始するまで暇なんだよね？

流れでは停電が始まった後ネギの下にエヴァさんに操られた佐々木  
がやってきて宣戦布告、んで大浴場って流れだったよな……ん？誰  
かがこつちにやって来てる？

「うむむ（また原作から少し？ だけハズレそうな予感）」

・  
・  
・  
・  
・

ネギside

寮のパトロール中カモ君がなんだか異様な魔力を感じたって言うか



らどづいつことだろう？　って議論をしてたらエヴァンジェリンさんに操られたまき絵さんにいきなり宣戦布告されてしまった。いきなりの宣戦布告と半吸血鬼化した人の身体能力にビックリしたけど、今僕の心を支配しているのは、まき絵さんを巻き込んでしまったことへの罪悪感だった。

だけど罪悪感に浸っている暇なんてない。装備を整えすぐにもエヴァンジェリンさんのところへ行かなきゃ！

「無理だつて兄貴！　ここは明日菜の姉さんに頼んで仮契約だ！　出来ればリアの兄貴にも手伝ってもらうべきだ！」

あ、カモ君に兄さんが黒幕だつて言うのを忘れていた……でもそのほうが良かったかな？

僕とエヴァンジェリンさんが戦う舞台を用意したのが兄さんだつて言ったらなんだか面倒なことになってたかもしれない……それにカモ君にもう会えなくなってしまう気がする。

「それは駄目だよカモ君。明日菜さんにはもう迷惑はかけられない、兄さんにだつて」

「いやいや、リアの兄貴は魔法使いなんだし家族なんだから？　なら問題……いやダメか。リアの兄貴はエヴァンジェリンの奴に人質に取られてるんだつたな」

「うん盾にするなんて行為はしないだろうけど、エヴァンジェリンさんが兄さんに相談したら兄さんを襲うつて言ってたから今夜は兄さんに絶対監視がついてるはず。それに兄さんには危険な目にあつてほしくないから！」

「いやいやいや！　兄貴の方が十分危険な目にあつてるからな？」

「じゃあ僕はもう行くよ！」

「ちょっと待てよ兄貴！ なら明日菜の姉さんだけにでも話を！  
パートナーがいない兄貴じゃ敵いつこないって！」

「だから、それはもっと駄目だよ！ 明日菜さんは一般人なんだか  
ら！」

「だー！ 分かったよ。俺っちはもう知らねえよ！」

ネギは一人エヴァの下へと進む。

・  
・  
・

〜三人称〜

「エヴァンジェリンさん！ どこにいるんですか、まき絵さんを解  
放してください！」

「ふふ……ここだよ坊や」

何者かの声がした瞬間、声のした方向にあった証明が光り、その正  
体を現した。

「パートナーはどうした？ 貴様一人では無謀というものではないか？」

現れたのは茶々丸、操られた佐々木、大河内、明石、和泉。そして彼女らの中心にスタイルの良い金髪美人、言わずもがな大人Verのエヴァンジェリンがいた。

「あ、あなたは！」

威風堂々とした姿を見せることができ満足だったのか上機嫌になっていたエヴァンジェリン。しかし……

「誰ですか！？」

まさかのネギからの一言にその場でずっこけてしまうエヴァンジェリン。幻術を解き自分だとわざわざ説明する羽目に。

「さて、満月の前で悪いが……今夜ここで決着をつけ、坊やの血を存分に吸わしてもらおうよ」

「……わかりました。でもそうはさせません！ 僕が勝つて悪いことをするのはやめてもらいます！」

「それはどうかな？ お前ら行け」

「くっ！（生徒を操って僕に仕向けるなんて。攻撃なんでもつてのほか隙について眠らせるべき？ でもそんな隙なんて……）」

「ふ、卑怯と思うかな？」

「いえ、思いません。効果のある作戦だと思えますよ」

「ほう？ 見違えたよ、これなら少しは楽しませてくれそうだな」

（見栄を張っちゃったけど、四人を無傷で戦闘不能にするのはかなり骨の折れる作業だ。呪文を唱える前に組み伏せられたらどうしようもない……）

かさばる装備、余計な杖などを置いてきたのでそれなりに動ける自信はあるが相手は半吸血鬼化した相手には気休めにもならない。

（こうなったら先手必勝！！）

すっ、とロープの中の触媒に手を伸ばした瞬間、四人とネギの間に何本もの苦無が撃ち込まれた。

「誰だ！」

「え？ え……あ、あなたは！」

そこにいたのは……

「助太刀に参ったでござるよ、ネギ坊主」

「な、長瀬さん……！」

「な！ 貴様、なぜここに……！」

忍者装束をその身にまとい暗闇と同化するかのようにつむむ長瀬楓の

姿があった。

「リア先生の許可はとってあるでござるよ？ エヴァ殿」

「ちっ！ あいつのせいだ。まあいい予定は変わらずだ……お前たちその乱入者の相手をしておけ、私はぼーやと少しばかり戯れてくる」

「……りょーかいです」「」「」

「ふむふむ、さてネギ坊主、クラスメイト達は拙者に任せてお主はエヴァ殿と決着をつけるでござる。相手もそれを望んでいるようでござるし、ネギ坊主もそのつもりでござるっ？」

「……はい、ありがとうございます長瀬さん。でも無茶だけはしないでくださいね！」

「あいあい」

そして、エヴァンジェリンが放った魔法の矢が戦闘開始の合図となった。

回避に成功したネギはエヴァンジェリンの魔法の矢によって割れた窓から飛び出し、エヴァンジェリンと茶々丸はそれを追いかけて行った。

「ほ……。あれが魔法でござるか。ずいぶんと『ふあんたじー』からほど遠い魔法でござるな」

「よそ見はだめだよー」

そして、大浴場内では操られている四人と楓との戦いが始まった。

・  
・  
・

「「「「きゆう……」「」「」

半吸血鬼して身体能力が格段に上がっていたとは言え、戦闘に関しては所詮素人。それに相手は分身という対多の攻略法をも持っている忍者である。あつという間に後ろをとられ気絶させられてしまった。

「まあこんなもんでござろうな……さてリア先生、皆の治療をお願いしたいのでござるが？」

まるで、最初からいきましたと言った感じで普通に大浴場の入口から出てくるリア。

「いやはやお見事。あつという間でしたね。さてさて、さつさと吸血鬼化の治療を終わらせてすぐにでもネギを追いかけますかね？」

「ふふ、教師が言うセリフではござらぬぞ？」

「教師以前にネギの家族なもんで」

「そつでござったな。ならば拙者が部屋まで運んでおくでござる」  
「いや、すみませんね。ではちよちよいのチョイ！　っと。これで  
OKです」

薬を飲ませて回復魔法を手早く全員にかけてしまつりア。なかなか手早い作業である。

「適當すぎるのではござらんか？」

「大丈夫です！　人を治すときはいつも本気ですから、抜かりはありません」

「ならその言葉を信じさせてもらつでござる」

「ありがとうございます。ではこれにて」

ぱつとリアは身を翻すと一直線に割れた窓へと駆けて行つた。

「しかし、先ほどのリア先生はいつもと雰囲気違っていただけでござるな。大分緩くなつていたといったところではござらうか？」

むむむ、と唸りながら楓は四人を連れて寮のそれぞれの部屋へと戻つて行つた。





十三話 決着（前編）（後書き）

え、本当ならこのままエヴァさんとの決着まで行きたかったのですが、冗談抜きでスランプに陥ったのでここまですげました。

（更新が遅れた理由の二割に当たります）

実を言いますと、完全なる世界とネギパーティーの戦力差が少なくてきてしまっているのです、ここで一人だけオリ敵を投入しようとしたのですが……もの見事にいい案が浮かびません。

そこで皆さんのご助力を借りたいのですが……マジで助けてください（泣）

オリ敵募集のお知らせ（改訂版）（前書き）

なにとぞご協力の方をお願いしますorz

## オリ敵募集のお知らせ（改訂版）

h a k iさん、風来坊さんと色々な方から指摘を受け、ちゃんとめて募集キャラの特徴を書き直します。

実を言いますとみなさんに案を出していただくオリ敵は次の話、つまり決着（後編）でいきなり出ます。

そして作者の要望で、フラムと熱いバトルを演じていただきつもりなので戦士系キャラでお願いします。後ろで固定砲台、科学者系ではなく自分の肉体もしくは武器を使って戦うようなキャラのことで

そして、出てくる時期は吸血鬼編、修学旅行編、魔法世界墓守り人の宮殿編で出す予定です。ちなみに魔法世界墓守り人の宮殿編では簡単な理由で焔が相手をする事になるはずですよ。

ちなみに（大きさですが）ラカン式強さ表でいえば5000ぐらいです。ケツコー強いです。

以上のことをふまえて、名前、容姿、身長、年齢、性格、口調、使う武器等等、その他皆様のご要望、を極力メッセージでお願いします。感想でもいいですが……

ちなみに自分は最初、

中性的な顔、線の細め体、身長162cmほど、普段はニコニコしているが戦闘になると口調はさほど変わらないが殺人機械のような性格になる。武器は日本刀（75cm）。世界最強を目指して完全なる世界に与しているのは悪の組織を倒しに来る正義の味方を殺すため（正義の味方「強い」という妙なイメージを持つアホの子ともいえる）。

今、完全なる世界は潜伏期間なためフェイトガールズを相手しながら

ら暇をつぶしている（育ててる理由は強くなつたら死合をして自分の糧にするため）。

ちなみにフェイトがフラムに会いたい一心で早めに日本へ来たときに出会いバトル。その強さを認め仲間に引き入れた。いろいろ益になるだろうと思っただらしい。

といった感じでしたが、自分の発売を期待しているエロゲの登場キャラに似ていてこれはやばいと思いついて設定を白紙に戻したのですがその後案が全く思いつかない。という状態に……

どうかご助力の方をお願いします。

とりあえず八月の終りまで募集しております。

原作十三話 (中編) (前書き)

色々オリ敵を考えてくださりありがとうございました。 orz  
作者の独断の結果、曙大仙最果様の『エラスティス』に決まりました。

他の考えてくれた皆様本当にすみません。もしかしたら魔法世界編の剣闘士編辺りで使ったり、一発登場のオリ敵を募集するかもしれません。

それでは本編をどうぞ

原作十三話 (中編)

リアSide

ただ今森の中を疾走中。街道を走ってもよかつたんだけど近道して先に橋が見える場所に行きたかつたんだよね。まあうる覚えな原作知識だけど12時より早めに作業が終了するんだよね……だけど佐々木たちの相手をしなかつたわけだから次の展開に進む時間が短縮されている+ネギは俺の指導で強化済みだから攻めもできる。つまり作業終了まで戦いを引き延ばせる可能性が低いってのもあるんだよね。つまり原作で言う魔法の打ち合い競争が始まる時間が早まって第二ラウンドが始まってしまふってこと。

長々と話したけど、何が言いたいかを一言で言つと、

ネギオワタ \ /

というわけである。え？ AAやめる？ スミマセン。

「ヤバいな、まああの最凶魔法を使えばもしかしたらつてのがあ  
るんだろうけど……」

というよりもあの魔法を人に向けて撃てるのか？ ってところがネ  
ツクなんだよな。

簡単に人を木端微塵にできるし……冷静に考えるとその魔法を使え  
ば？ って感じで誘導した俺は最低だな。チクショウ……目先のこ  
とばかり考えていて後々のことをまた考えてなかつた。バカは死ん  
でも治らないってこういうことを言うのかな。



「学園長！ ネギとエヴァさんの所に怪しいやつが向かってませんか！」

「そのことなんじやが、やけに力を持った存在が出現したのはお主の管轄のロボットたちがおる所だけでネギ君達の所には怪しい影は見られんのじや」

……つまりネギを狙っているわけではない？ いや陽動って可能性もあるはず。だがロボット達の所だけ？

「学園長、龍宮たちの班から救難要請がきました」

「……お主が何を考えているのかもわかる。ネギ君の元へ向かいたいのじやろうが我慢してくれ。龍宮君達の元へ応援部隊を送ったのじやが瞬殺されてしまったのじや。他の区域で戦えるものはすべて目の前の召喚魔らしき敵と交戦中、高畑君も今交戦中で手が離せない。そんな中、龍宮君達の交戦区域にもっとも近いのが君なのじや」

「……くっ」

「本当に申し訳ないと思っておる。ネギ君の元へ怪しいものが近づいていくのを確認したら儂が直々にそやつと相手をしてやるわい」

「学園長が自ら参戦すると？」

「そうじや、ネギ君のことは儂の命に代えても守ると約束しよう」

「学園のトップが命かけるとか言わないでください。それと明日菜さん、エヴァさん茶々丸さん、あと淫獣のことも守ってくださいよ



「？」

「うむ、わかっておる……い、淫獣？」

「それじゃあ、ネギのことよろしくお願いします」

ぶつり、と学園長の返事を聞かずに電話を切る。今は一秒が大切な瞬間なんだ。

「生徒を守るのも先生の役目ってやつだな。さて、部分炎化、高速高機動モード！」

～リアSide End～

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

～刹那Side～

「……っ！ げほっげほっ！ つううう……」

どれくらい気絶していたかは分からない。ただ起きた瞬間に上手く呼吸ができなくなるほどの全身に走る痛みが自分の状況を雄弁に物

語っていると実感できる。

自分は負けたのだと、屈辱的なのは相手は手を抜いていたことだ。こちらに興味を持たずただ顔の近くで飛ぶうっとおしい羽虫を払う程度の力で私の相手をしたのだ。

「がはあー！」

「なっ……龍宮！」

グシャツ！ と近くの木が嫌な音を立てたと思っただけの回復しそこにはボロボロになった龍宮が横たわっていた。おそらく吹き飛ばされあの木にぶつかっただろう。

そしてようやく周りを見ることができただけの回復し周りを見回した自分はその悲惨な状況に目を疑った。いや、龍宮がやられた時点で予想はできた。

あいつは警備の時、遠距離からの狙撃を主体に活動していた、それが僕の近くで倒れている。つまり戦法を変えるほどの状況になっていたということだ。

「全滅……だと」

他の魔法使い達だけではなく私のことを庇ったせいで右腕、両足がもげているアークもエネルギー切れのせいも沈黙している。

アークは私を守るために残りのエネルギーを使い盾役になってくれたのだ、そこを付いて私の全力を込めた一撃を食らわせようとしたのだが……この折れた夕凧がその結果を語っている。失敗したのだ、そして反撃を食らい気絶してしまった。

きつと龍宮が接近戦を選んだのも私を含む前衛が全員やられてしまったからだろう。

「くすくすくす。残念でしたね、どうやら予想外の敵がいきなり現れてちゃんとした装備を整えられなかったみたいですね？ 残念ですあなたみたいな心が強い人は好きなんですけどね。でも強すぎるのはいけませんよ？ 金属と同じで硬すぎるとかえってもろくなっちゃいますから」

ダメージが残ってるせいかふらふらしながらも、呼び出したキーブレードを杖代わりにして立ち上がり、目の前の男とも女とも取れるラフな格好をした規格外を睨めつける。

「あれ？ もう起きたのですか？ すごいですね。けどあなたはお呼びじゃないのです」

「ふざ……けるな！」

「はあ、あなたのような豆腐メンタルな人は興味ないのですよ」

「豆腐？」

「ああ、心が弱い人って意味ですよ。あなたの目を見た瞬間すぐにわかりました。あなたはずっと悩みそして迷い続けている。そんなんじゃないずれ潰れてしまいますよ？」

「っ！ うるさい！ 私は、私はお嬢様を影から見守っているだけで十分なんだ！」

くっ、敵の指摘があまりにも的確過ぎてつい本音が出てしまった。

「ん〜、お嬢様を影から守っていればいい？ ……もしかしてあれですか？ 昔はそのお嬢様と仲が良かったけど今はとある理由で

その子を見て陰から見守っているってやつですか？」

「つつつ！」

「ありや、ビンゴみたいですね。それは駄目ですよ」

「貴様に何が分かる！」

距離を詰め剣を振り下ろすがこいつは微動だにしない。いや、そもそも刀身が当たる前に止まっているのだ、微動どころか意に介してすらない。

「昔は仲が良かったのに今は距離を置いている、これじゃあお嬢様って人がかわいそうですよ？ 何があつたかも、どういう理由があるかも僕は知りませんがあなたがその子との間に溝を作ってる限りお互い幸せになれませんよ？ さて僕の授業はここまでです、では」

「しまっ！」

密着状態から放たれる拳、僕にこれをよける術はない。そしてこの拳が、この体軀からはありえないほどの威力を誇っていることを僕は身をもって知っている。

「殺しはしません、ですが次に会うときはお嬢様との問題を解決しておいてくださいね？ その方が楽しめますから。くすくすくす」

そして、拳が放たれた。

.....

・
・
・
・
・

おかしい、自分は襲撃者の攻撃を食らったはず。なのにどうして衝撃が来ないのだろうか？ それどころか温かい何かに包まれているような感じだ……

「ふう、大丈夫ですか？ 刹那さん」

ふと聞き慣れた声をが聞こえたので瞑っていた目を開けるとそこには背中から炎の翼を生やしたリア先生がいた。しかも私をお姫様抱っこした状態で。

ただ私はその時思っていたことは、お姫様抱っこされていることへの恥ずかしさでもなく、なぜここにリア先生がいるのかという疑問でもなく、リア先生の生やしている炎の翼が綺麗で温かいとそんなことを考えていた。

刹那Side End

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

襲撃者らしき人物の攻撃から紙一重で刹那を搔かつ攫さらうかのように救ったリアは、彼女を龍宮の隣へひとまずおろした。

「大丈夫……には見えないっすね。ここで回復に専念しててくださいいな」

「いや、あの先生？ その翼は……」

恐る恐るといった感じで羽のことをリアに聞く刹那。何か思うところがあるのだろう。

「ん？ これ？ これは部分炎化のバリエーションその2ってやつだね。かっこいいっしょ」

自慢げにバサリと羽をはたかせるリア、その行為に何やら言い表せそうもない思いを抱いるような顔をする刹那。

「……まあ選手交代ってやつだ。そこでおとなしくしておけ。軽くだが回復魔法をかけておくからタツミーを連れて少し離れていてくれ」

「……はい。わかりました」

リアはぱつと手早く回復魔法を刹那にかけ、刹那が龍宮を背負ってその場を離れると襲撃者に向き合った。

「ここは、治療の時間を下さったお礼を言うべきですかね？ 襲撃

者さん？」

いつも通り飄々とした態度でリアは襲撃者に話しかける。

「いえいえ、僕がしたいようにしただけですから礼には及びません。もしお礼がしたいと思っっているのなら僕の質問に答えてくれませんか？」

こちらもニコニコと人懐っこい笑みを浮かべながら返答をする

「答えられる範囲なら」

「報告によると、子供を一睨みで泣かせることができる目つき、髪は……あれ？ 黒いですね？ それとフェイト君に似た顔立ち……」

「……」

まさかフェイトの名前が出てくると思わず露骨に反応してしまううりア。

「今の反応も加味して判断すると……あなたがフラム君？」

「……ここではリアと名乗っていますが、今この会話を聞いている人はいないでしょうかから白状しますけど、その質問にはYesと答えましょう」

「そうですね、なら僕も自己紹介しますね。はじめまして、僕は“エラスティス”っていいます。よろしくね、フラム君」

「はあ、これはどうも」丁寧」

お互いその場の雰囲気でお辞儀し合ってしまった。

「さて、なぜ僕が今日この場にいるのかを説明させていただきます。ぶつちやければあなたの様子を見に行くというフェイト君の個人的な頼みです。彼は今別の任務に就いていて手が離せないようなんですよ。なにやら京都の方に行かなくちゃいけないとかなんとか」

「おい、そういうことは言っちゃアカンやろ」

「おや、僕としたことがいけないいけない。ああ、それとですね僕自身も君に興味があったからというのもありますね。フェイト君があそこまで懇意にする存在、気にならないわけがありませんか？  
いえ、ありえませんが！」

(なぜ反語?)

「というわけで一つ手合せをお願いします」

「おい、何がというわけなんだ？ 説明を要求する！」

「それじゃあ、いきますよ！」

「人の話聞けや！」

エラスティスの跳躍からの拳の振り下ろし。その動きはリアから見ればあまりにも遅すぎた、だが

ズドオオオオン!!!



その細く力を加えれば折れてしまいそうな腕による拳撃は地面を砕いた。

「な!?!」

目の前で起きたことに驚愕するリア。これはまずいとすぐさまお手製の転送符をとりだしいつもの紅いマントを転送し身に着ける。

正史では存在しなかった者同士による戦たたかいが今始まった。

~~~~~

場所は変わり麻帆良学園女子寮一室

「ええ!?! 今なんて言ったの、エロオコジヨ!?!」

カモから伝えられた情報に驚き天井に頭をぶつけてしまう明日菜。ルームメイトの木乃香が起きてしまおうと注意しつつ本題に移るカモ。

「(だからやっぱりエヴァンジェリンの奴あきらめてなかったんス!?)」

「(ちょっと! 放課後にもう大丈夫って言ったの嘘だったの!?)」

「（そうなんすよ！ しかも意地はっちゃって一人でいつちやったんス！）」

「（リアはどうしたのよ？）」

「（それが、さっきからリアの兄貴に念話を送ってるんですけどつながらないんス）」

「（なによそれ！ どういうこと！）」

「（分からないっす、念話に反応できないようなことに巻き込まれてるのか……考えたくないっすけどわざと無視してるって……）」

「そんなわけないでしょ！ っつ！」

大声を上げてしまい反射的に手で口をふさぐ明日菜

「（……そうっすよね、今は忘れてください。ですがリアの兄貴に頼ることはできない状況なんス、だから！）」

「（わかってるわよ！ あのお子ちゃまを助けに行くわよ！ リアは明日一発ぶん殴ってやる！）」

一人と一匹が小さな魔法使いの元へと走る、今宵の正史とは外れた戦いの役者がそろおうとしていた。

原作十三話 (中編) (後書き)

え、エラスティスは性別不明の方が面白ってことで一人称を僕にしました。

私でもいいかな？ って思ったのですが何となく作者の趣味とあえて性別をわかりにくくするなら僕だろうということでした。決めました。

そして、次の話でも言えることですが地の文は『リア』なのに会話では『フラム』といったふうにオリ主の名前が二つ同時に出てしまいます。

作者はネギパーティーにいるときは『リア』、フェイト側にいるときは『フラム』というふうに地の文は決めているのでその所ご理解ください。

(つまり今回のように会話文ではフラム、地の文がリア。会話文ではリア、地の文ではフラムということもあり得ます)

次回、ネギとリア、二人の主人公の戦いが決着！ そしてリアの新たなネタ技、ネギの凶悪魔法も出ますのでお楽しみに！

原作十三話 (終編) (前書き)

これで今月分の投稿は終わりかな？ と思います、ちまちま何とか作った時間を使って続きを書きあげていこうと思います

勝手に削除してしまい申し訳ございませんでした。

原作十三話 (終編)

～三人称Side～

大抵の転生者が持っている原作知識、使い方を間違えれば気持ち悪い、もしくは頭のオカシイ人間としてレベルを張られてしまうが、使い方さえ間違わなければこれ以上素晴らしいものがないアドバンテージになる。

しかし、リアが交戦中のこの人物には原作知識など通用しない。そりゃあ原作に登場していないのだから仕方がない。だからリアがまず行ったことは情報収集である。どんな攻撃を好むのか、どんな戦法で戦うのが得意なのか、そういったことを知るのが戦いに勝つための条件だろう。

(しっかし、ここまで分かりやすい戦い方する奴はそう相いらないだろうな)

「最初は楽しかったのに、さっきから逃げてばかり。それじゃあつまらないよ！ 主に私が！」

「ふざけんな！ そんな一撃が致命傷な攻撃に真っ向から対峙できるか！ それと最後のはいらねえだろ！ 突っ込みいれちまうだろうが！」

大体彼？ 彼女？ の戦闘スタイルは分かりやすすぎる。どんな攻撃も通さない盾。あらゆるものを砕く矛。その両方を兼ね備えているのが(性別が分からないのでここは奴と表記させてもらおう)

奴のタイプである。

ただ欠点があるとすれば“遅い”ことだ。攻撃、回避両方とも遅くリアはすべての攻撃を見て躲し、こちらの攻撃をすべて当てることができている。

だが相手にダメージまったくと言っていいほど与えられていないのだ。

(だがそれもおかしい話だ。どんなに障壁を張っても衝撃までは殺せないはず。まあデュナミスさんみたいな一応、本ツツツツ当に一応魔法使いよりな存在ならば衝撃だつて殺せるほどの障壁を張ることはできる。だがこいつが張ってる障壁は俺やフェイトより枚数も密度も低いお粗末な物。なのに何故こいつはここまで平然していられる?)

「もう、本当は使いたくないけど、フラム君がまじめに相手してくれないから奥の手その一を使わせてもらうよ」

(奥の手?)

エラスティスは指をピストルの形に折りその銃口をリアへと向ける。

「私ね射撃が大の苦手なんだ。それに精霊さんに嫌われてるのか魔法も詠唱魔法も使えないんだ。だからその弱点を克服するために考えた私のネタ技見せてあげる」

リア(この世界での命名者)やフェイトが使う、漫画やアニメに出てくる技を模倣した攻撃、それがネタ技である。フェイトからその言い回しを教えてもらったのだから別に反応することではない。しかし自分でネタ技と言ったということは利便性に富んでいる、

もしくは無茶苦茶な技であるということ。そして今から何かしでかそうとしている奴はどう考えたも思考は後者より……つまり

「いくよ、これが私の魔砲」

まともな技ではないことは明白である。

「まさか……」

「『デイバイーン・バスタアアアアアア』！」

指先近くにチャージされていた魔力がただ真っ直ぐリアを飲み込もうと迫ってくる。

「うそおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おお……！！！」

どんどんと迫ってくるごんぶとビーム。色はピンクではなく魔力を固めて放出しただけなので白っぽく見方によれば銀色にも見える、誰もが逃げ出したくなる管理局の白い悪魔の十八番（おはちばん）であった。しかもこの世界には非殺傷などという設定は存在しないのもわずれずに

（俺にこれを相殺できるような魔法やネタ技を使ったらこの辺一帯が火の海になる……なら！）

「『炎上網』！！！」

目の前に自分の姿がすっぽりと隠れるほどの炎の壁を出現させガードする。

しかし、魔力の塊である砲撃にあっさりと破られ地面に着弾し大

爆発をおこす。が……

「いない？」

煙が晴れたのだがそこにリアはいなのだ。跡形もなく消し飛んだのならまだわかるがエラストイスはそうは思っていない。リアならこれぐらい躲しているはずだと信じている。

パリン！ パリン！ パリン！ パリン！

「な！」

突然のことだった、いきなりエラストイスの張っていた障壁が何の前触れもなく割れたのだ。

「くっ！ ……そこ！」

ほぼ勘による一撃、エラストイスが右裏拳を放った場所には部分炎化し背中から羽を生やしたリアが存在していた。しかし難なく裏拳は躲されてしまうが、裏拳を放った勢いを殺さずそのまま半回転自分の死角に左ハイキックを繰り出す。

しかし空振りに終わった。別にエラストイスのハイキックは見当違いの箇所に分れたのではない。リアが早すぎたのだ。

リアの特殊技能炎化、バリエーションその2。高速高機動モード原理は簡単である。背中から生やした羽を燃やし推進力を得、角度を調節し羽を爆発させ向きを変える普通の人間ならGで中身飛び出してしまうような、無茶苦茶な高速移動方法である。

「これで終わりだ！ 『必殺！ バーニング・フィンガアあああ

ああああ！！！」

炎の指が完璧な形で腹部に突き刺さる。

「くっくっくっくっくっくっ！！」

エラスティスも防御に専念しているのか、戦闘中に上げたこともない必死な声を出していた。

「ヒート・エンド！」

そしてエラスティスを起点に爆発が起こる。『バーニング・フィンガー』による残りの魔力障壁の全破壊、『ヒート・エンド』による爆発の追撃これがリアの考えた力技であるが相手を沈黙させるのにちょうどいい技だった。

「ゼイゼイゼイ……へっ、これでさすがのあいつも無事ではすまないだろ」

ふっ、と一息つくリア。

ガシッ！

「へ？」

いきなり何が起きたのか分からず間抜けな声を上げてしまう。

「なかなかやりますね、フラム君。けど魔法障壁のせいで威力が落ちてたのがネックだったみたいだね。もし障壁がなかったら君の勝ちだったかもしれないのに」

煙の中から延びリアの左腕をつかんでいる白く細い腕。煙の中から聞こえてくる相も変わらず楽しそうな色をもつ声。

「うそ……だろ……」

リアは相手を強敵だと認識した。だから全力で魔力を込め必殺技を放った。しかし相手ははびんぴんしている。いや少しばかり服が焦けてるのが救いかもしれない……

「くすくす、捕まえた？ さてフラム君が本気を出してくれたから僕も本気出しちゃうよ？」

炎化しているのにもかかわらず彼女はリアを捕まえている時点ですごいのだが、彼女のすごさはそこだけではない。

普通密着、この場合のように相手の腕をつかんで殴る蹴ると言った行為はまず威力が半減する。位置エネルギーと運動エネルギーの関係でパンチを例に例えると、後ろに腕を引き静止させるこの時点で位置エネルギーがMax状態になる。そして放つ。そうすることによって位置エネルギーが運動エネルギーへと変換され威力がどんどん上がっていく。つまりある程度距離がないと全力パンチは撃てないのである。

とまあ、中学生レベルの物理の話であるがつまりはそういうこと。エラスティスがリアへぶつけられる衝撃は全力とはいえない。しかし彼女の拳はそんな物理学を何ともばからしい方法で克服している。それは全力時の威力を上げれば中途半端な拳でも相手を潰すことができる、という無茶苦茶理論である。

彼女は魔力を身体強化と防御につき込んでいるのだが、身体強化の仕方がパワー特化しているのである。しかもこの中途半端な拳はあのジャック・ラカンの全力ストレートを超えている。

「『デウス・エクス・マキナ幕引きの一撃』って言われている僕の拳、耐えられるかな？」

「づぐおっ！！！！」

顔へと放たれた拳。とつさに腕と魔法障壁でガードしたのだが、ガードなど意味がないと言えるような衝撃が頭に走る。

そしてリアは地面を何度もバウンドしながら真っ暗な森の中を吹き飛んで行った。

~~~~~

魔法の矢は魔法銃の二丁乱れ撃ちで落とす。威力の高い魔法は触媒を使った足止め魔法で相殺。と多種多様、魔法具をぜいたくに使った戦法を問いなからネギはひたすら逃げていた。

「どうしたどうした、坊や！ 逃げてばかりじゃ勝てないぞ！」

「言われなくても……っ！」

次々と襲い掛かってくる魔法を何とか捌きながらネギはある場所へと急いでいた。

「しかし、戦闘は素人かと思ったが、逃げ方だけはなかなかのものだな」

「兄さんと訓練と称した魔法の使用ありの鬼ごっこをよくしてましたからこれぐらいできて当然です！」

その言葉を聞いたエヴァは泣きながら全力で逃げつつ後ろに魔法をばら撒いているネギ、笑いながら魔法で足止めをしつつ笑いなから追いかけるリアを想像してしまった。

「くくっ」

思わず苦笑してしまう。そして気持ちを切り替え魔法を放つ

「ならば逃げ切って見せるがいい！」

・  
・  
・

なんとか、目的地である橋の近くまで逃げ切ることができたネギ、しかしエヴァの猛攻は緩むことなく今なお続いている。

「ウエニアン&ピリトウ&タズラキダツ&ト&カル・アーエーリ  
トウンドラーム・エトリック・ラク・ラ・ラック・ライラック 来れ氷精 大気に満ちよ  
グラキエーム・ロキチイス・アキバユスタリザティオー・テルストリス白夜の国の 凍土と氷河を こおる大地！！」

「うわあああ！！」

すでに触媒は使い切り魔法銃も打ち止め。他の魔法具も武装解除で弾き飛ばされ、障壁を張ったのだが衝撃で吹き飛ばされてしまう。

「ふ……なるほどな。この橋は学園都市の端だ、私は呪いにより外に出られん。ピンチになれば学園外へ逃げればいい、か……意外にせこい作戦じゃないか。え？ 先生」

今まで逃げに徹していたのは自分に有利な状況を作り出すためかと一人エヴァは推測した。

「だが、貴様が学園の外へ逃げる前に捕まえることなど私にとってはたやすいことだ、学園の外にでたとしても呪いの枷のない茶々丸

「がいるしな」

「くっっ！」

「さて、これで決着だ。クツクツクツ」

一歩一歩とエヴァはネギへと迫っていく、先ほどのこおる大地の余波のせいか立ち上がることでできないネギ。

そして……

パシィイーン！

エヴァの足元にもともと設置されてた魔法陣が展開された。

「な！ これは捕縛結界！」

驚きを隠せないでいるエヴァ。いつの間にかこんなものを仕込んでいたのもあるが、自分がここまで誘導されていたことに気付かせないほどのネギの逃げるときの演技力にもびっくりしていた。

「かかりましたね、エヴァンジェリンさん。全力で逃げて、逃げ切れた僕の勝ちです！」

訂正、どうやらネギ少年はエヴァをここに誘導しているのを気付かせないために全力で逃げているふりをしているのではなく、本当に全力で逃げていたようだ。

「ふっ、最初から私に真っ向から戦おうなどとは考えていなかった

のか」

「当たり前です！今の僕じゃどう頑張ってもエヴァンジェリンさんに真つ向からぶつかって勝てるわけがありませんからね」

見事なネギの頭脳プレーである。エヴァも腕が動かせたら拍手していたところだ。

「素晴らしいよ坊や。だがツメが甘いぞ。やれ茶々丸」

「ハイ、マスター。結界解除プログラム始動。すみません、ネギ先生」

「な、そんな！」

「私も詳しくは知らないが、科学の力ってやるさ」

まさかこんな方法で破られるとは思ってもいなかったネギはただただ驚愕するしかない。

魔法でできた結界を科学の力で破壊するなど、誰が考えよう？

パキヤアアン！と甲高い音を立て破壊されてしまうネギの捕縛結界。

すぐさま体制を立て直し魔法を放とうと詠唱を始めるが茶々丸に杖を取り上げられてしまう。

「なるほどな、確かに奴の杖だ……」

茶々丸から手渡された杖をしげしげと眺めた後エヴァはネギから遠ざけるように杖を投げ捨てる。すぐさま取り返そうとネギがエヴ

アに突っ込むが得意の合気で逆に投げ飛ばされてしまう。

「がふう」

受け身をとることができず体を地面に強く打ちつけてしまったネギは何とか立ち上がろうと、橋の手すりにつかまって立ち上がろうとするが上手く立てないでいる。

「ふふふ、最後まであきらめようとしなさいその心意気はよし。だがこの勝負坊やの負けだ。杖もなし、仮に杖を取り返したとしてもパートナーもいない状況で私に勝てるなど思っているわけあるまい」

「くう」

ネギもそのことは十分理解している。パートナーがいない、つまり詠唱の邪魔をされそれを実行することができない。その事實は既にエヴァとの初交戦時に体験済みである。つまり捕縛結界を破られた時点でネギの価値はほぼ0なのだ。

「手加減していたとはいえ私の猛攻を耐え凌ぎここまで逃げ、罠にまではめたのだ。それも十歳の子供がだ、負けてしまったが誇るがいい。この『闇の福音』に認められたのだからな。さて、正直これ以上どうこうするつもりはないのだが……そうだな少しだけ貴様の血を味見させてもらおうとしよう」

「えええ！」

「貴様は私に負けたのだ、おとなしくしててもらおう」

「あの、マスター？ 少々意地汚いのでは？」



「う、うるさい！ 勝ったものの特権だ！ しかもあの下僕の策略に乗ってやったのだ、これぐらいいいだろうが」

そしてエヴァがネギの血を少し飲もうとしたとき

「コラーツ、待ちなさいーっ！！」

「ふん、来たか神楽坂明日菜。茶々丸」

「はいマスター」

茶々丸に迎撃させようと命令を下すエヴァ。それを見た明日菜はカモを掴むと

「カモ！！」

「合点、姐さん。俺たちの力を見せてやるぜ！ オコジョフラーツ シュー！！」

茶々丸へと向かい投げた。そしてカモが持っていたマグネシウムに火をつけて輝かせ茶々丸の眼をくらませた。

茶々丸に謝りながらも明日菜はエヴァの元へと走る。狙いがこつちだと分かったエヴァは冷静に障壁を張り余裕の笑みを浮かべるが

ボグッ！

と嫌な音を立てて明日菜の飛び蹴りが顔に見事なまでに決まる。しかも全力ダツシュからの飛び蹴りである、これはかなり痛い。

「あぶるばあつ」

奇声をあげながら何故？ どうしてと？ 混乱するエヴァ。自分の張った障壁を物ともせず突破できる人物などまづいない。さらにさっきの魔法障壁を破られた感触は破られた、ではなく消されたと言った方が正しいのも彼女の混乱を加速させる。

「バ、バカな！ 貴様いつたい……て、あれ？ ちょっと待て、やつらはどこに行った！」

「申し訳ありません、マスター」

どこに行った、と連呼するエヴァ。エヴァの身を案じエヴァに鼻血をふくことを提案する茶々丸。いまいち会話が成り立っていない二人だった。

ひとまず、鼻血をふき高い所から二人を探そうとしたエヴァが空を飛び辺りを見回すと、柱の陰から光の奔流が湧き上がった。

「む、そこか！」

そして柱の陰から出てきたのは、どうやってエヴァに勝つか考えているのか難しい顔をしたネギと、飛んでいるエヴァをみて自分が非現実的な世界に足を踏み込んだのだと実感し顔をひきつらせている明日菜だった。

「どつしたばーや？ お姉ちゃんが来てくれてホッと一息か？」

「うぐ」

安い挑発だが、明日菜が来てくれなかったら負けていたのは確実、ネギは挑発を別の意味にとらえ顔を真っ赤に染めた。

「何言ってるのよ！ これで2対2の正々堂々の勝負でしょ！」

「確かにお互いパートナーも揃いようやく正当な決闘というわけだが互角かな？ ぼーやは杖なし、貴様も戦いについてはまったくの素人だろう」

「そ、それは……」

エヴァの発言に一言も返せずどもってしまつ明日菜。

「ボソボソ（明日菜さん）」

「え？」

「（茶々丸さんの足止めをお願いします、そうすればエヴァさんに一矢報いることができます）」

「（あんた一人で大丈夫なの？ さっきだって負けそうだったじゃない）」

「（茶々丸さんが近くにいたからです、エヴァさんと1対1になれば勝機があります）」

「（わかったわ、無茶だけはするんじゃないわよ）」

「はい」

「さて、そちらも作戦会議は終わったようだな。行くぞ！ 今は私が生徒だということを忘れ本気で来るがいい。ネギ・スプリングフィールド」

「……はい！」

そして、ネギはリアからもらった銅製の杖を構えて強敵との戦いへ臨んだ。

・  
・  
・

明日菜と茶々丸が戦ってる間、ネギとエヴァの戦いは魔法の打ち合いとなっていた。

そして、ネギが使える魔法の中で一番強い魔法の詠唱に入った。

「ラス・テル マ・スキル マギステル 来たれ雷精 風の精！！」

「リク・ラク ラ・ラック ライラック 来たれ氷精 闇の精！！」

（あ、ありや今の兄貴のいつちゃん強い魔法じゃねーか！ しかもエヴァンジェリンも同種の魔法！？ 打ち合う気かよ！）

カモの解説通りエヴァも属性は違うが同種の魔法を放とうとしている。

「クム・フルケラティオーニフレット・テンペスタースアウストリーナ雷を纏いて 吹きすさべ 南洋の風」

クム・オブスクランテヲセセ・テンベスタウズーリス  
「闇を従え 吹雪け 常夜の氷雪」

「来るがいい、ぼーや!!」

そして、二人の魔法がぶつかり合った。

「雷の暴風!!!!」

「闇の吹雪!!!!」

「ぐう……くくつ……（くつ、さすが親譲りのバカ魔力の乗った魔法だ。威力はある。だがそれだけではこの私には勝てん）」

「くうう（スゴイ力だ！ このままじゃ押し負け……!!!!）」

いくら魔力が多くとも魔法に乘せられる量が少ないネギに勝てる見込みはなかった。

ネギは、押し負けエヴァの魔法に飲まれた。エヴァの魔法が橋に当たり轟音が響く。

「ネギ!!!!」

「兄貴!!!!」

明日菜とカモの悲痛な叫びが響く。

「ネギ先生!!」

茶々丸も明日菜から目を離すほどだった

「ほつ……」

しかし、エヴァだけは感嘆の声を上げていた。  
煙が晴れると、そこには何とか紙一重でエヴァの魔法を躲したネギの姿があつた。

「ネギ！」

「兄貴！」

「ネギ先生……」

「押し負けると分かつた瞬間魔法を途中で止め何とか躲したか……さすがにそこまでの度胸があるとは思っていなかったぞ。だがもう戦える状態ではあるまい」

「ぜえ、ぜえ」

エヴァの言う通り今のネギは立っているのがやっとの状態であつた。

「まだ……まだです！」

すると、ネギは腰のベルトに唯一残つてあつた試験管の中身を一気にあおつた。

「む？ 魔法薬の類か？」

「けほつ、そうです兄さん印の特性魔法薬です。一回ほどの魔法を撃つための魔力と体力の回復ができるんです」

「ほつ、あと一回の魔法でこの私を倒せるとでも思ってるのかい？」

「はい、やって見せます。」

「くくく、はーはっははは。いいだろう、そこまでの自信があるのならやって見せるがいい！ この闇の福音やみのぶくいん エヴァンジェリン・A・K・マグダウエル！ 貴様の魔法を受けきって見せよう！」

「はい、胸を借りさせてもらいます！ エヴァンジェリンさん」

そして、ネギは魔法を発射するための体制に移る。

「（む？ なんだ、詠唱なしの魔法だと？ 今のボーヤごときの無詠唱魔法などたかが知れているぞ）」

エヴァが失望していると、茶々丸から警告が発せられる。

「いけません！ マスター！ その攻撃は危険です！ 全力で防御してください！」

「何？」

エヴァが訝しんでる間に、ネギの両手に電撃が走り続ける。

「いきます！ 兄さんと一緒に開発した必殺最凶魔法！」

ネギがリアと一緒に開発したネタ魔法。だがあまりの威力に封印した最凶魔法。それがついに解き放たれる！！

「『レールガン電磁擲杖』！！！」

「な！！！」





「心配するな茶々丸。私は真祖の吸血鬼、この程度ではくたばりはないさ」

「ちょっとあんた、まだやるうって言うの!」

ネギの元へ行こうとしたエヴァを明日菜はまだ戦闘を続けるものだと思いネギを庇うように前へ出る。

「ふ、なるほどなるほど。やはりさっきの魔法はわざと外した（・・）のか。さすがにあの魔法を直接打ち込む勇氣はなかったようだ。まあ私もひき肉になどなりたくないし、貴様も童貞卒業するにはまだはやかるう」

「ちょっと、なに物騒なこと言ってるのよ!」

「状況を把握できていないのかお前は……まあいい、坊や今回は未熟ながらも私に傷を負わせることができたことを評価して貴様に勝利を譲ってやるう、お前の大好きなお兄ちゃんに聞かせてやるとういさ。そして明日私の家に来るがいい。はっはっはっ」

「エヴァ……ンジェリ……ンさん」

気絶したネギを一瞥すると、エヴァは茶々丸をひきつれささと帰ろうとし空を飛んだ瞬間

「あ、マスター」

「どろした茶々……」

カツ！ と麻帆良に光が戻った。

「な！ もうそんな時間… キャン！ …… げふう！！」

それと同時にエヴァの魔力を抑える結界も復活し、飛んでいた彼女はべしやりと地面に叩きつけられた。あまり高度が高くなかったのが救いだろう。

「アスター、予定より七分二十七秒早く停電が復旧したようです」

「ええいつ！ いい加減な仕事をしよって！！ というか茶々丸、そういうことは先に言え！」

その後エヴァは茶々丸に抱えられながら帰宅したそうなの。

「ちょっと！ どういうことよ！ それにお兄ちゃんってリアのことでしょ！ なんであいつの名前が出てくるのよ、もおー！！」

ネギは気絶してしまい、その場に取り残され周りの事情に付いて行けずがーがーと叫ぶ明日菜が取り残された。

正史とは違ったが、一応決着がついたネギとエヴァの戦い。

だが、この一戦はネギに何をもたらしたのか、それは本人しかわからない。

ただいえることは一つ、我を通すことは他者を傷つけるということとをネギ少年は身を持って知ったということである。

~~~~~

～リアSide～

ぼーっと空を見上げていた。なんで自分はこんな状況になっているのだろうな？ まあぶん殴られたからなんだけどね？

「しかし、俺も焼きが回っていたって言うかなんて言うか……」

自分の顔に折れていない右腕を持っていく。そしてポロポロになった眼鏡を外す。

「こんなもんつけたまま戦闘とか、普通しないだろ？ あれか？ 平和ボケってやつか？」

くはっ！ 誰に話しかけてるんだろうな、まったく。

「あ、やっと見つめましたよ。フラム君」

ふう、ちょうどいいわ。一発度疲れたおかげで頭がすつきりしたし、おかげでなんでこいつにダメージが通らないかやっとわかったしな。第一ラウンドはこっちの負けやけど、第二ラウンドは勝たせ

てもらおうか。よっこらせつと、眼鏡は……捨てとくか

「へいへい、わざわざ探してくれてありがとうね」

「あれ？ なんだかさつきと雰囲気が違うね？」

「あゝあゝ気にスンナや、昔の自分を思い出したただけさね」

そう、フェイトたちとバカやってた時よりも前、まだ俺がこつちの世界で秋月 未来として修行に明け暮れてたころだったころをな？

「そうですか、その様子だとまだまだ楽しめそうですね？」

「まゝな。月並みなセリフだけと言わせてもらうぜい？ さつきまでの俺とは思うなよ」

くはつ。久しぶりに冷たい声色ってやつを出した気がするは。

「はつっ、今のセリフキョンと来ちゃったよ？ 期待してもいいんだよね？」

「ああ、期待でもなんでもしとけ」

そう言いながら俺は折れた左腕に治療魔法をかけ無理やり骨をくっ付ける。ぶつちやけ粉碎骨折だったから少し時間がかかっちゃまったがな。それでもほんの数秒、あの時の俺と同じぐらいか……

「来いよ、今度は手前と真っ向から向き合ってやる」

「嬉しいなあ、僕にそんなこと言ってくれる人なんてまったく言

「つていいほどいなかった……よ！」

会話中にも関わらず飛び上がり、俺のいた地点に拳を振り下ろすエラスティス。まあ今回は障壁這って勢い殺して……

「遅せんだよお！」

すつと回避して思いっきり横っ面をぶん殴ってやる。

「きゃあ！」

見事なまでに吹っ飛びやがったな。けどやっぱ変な手ごたえだが、少しは通ったな。

「あいたたたた、確かにさっきより重い一撃だったね」

「ちげーよ、少し戦い方を変えたただけだ」

忘れがちかと思うが、俺も中国拳法を知識として身に着けている、んでその中の通しつてやつを使ったのだが、まあ成功しちまったわけよ。魔法の壁にも通しつて効くんだな。だが今のは奇跡みたいなもんだし、あとはごり押ししかないかね。

「あれ？　もしかして僕が何やってるかばれちゃった？」

「まあな、お前障壁のほかに体の周りを魔力でコーティングしてるだろ？　しかも結構どぎついのをさ、さしずめ魔力の鎧ってか？」

「正解だよ。僕は『Panzergeist』パンツァーガイストって呼んでいるんだ」

なるほどなるほど、こいつライトオタクか？

「リリカル、好きなのか？」

「ん〜？ まあ僕も人並みにはアニメとか漫画とかたしなむからね、フェイト君にも進めてあげたんだ。なかなか興味深そうにしてたよ？」

……あいつがアニメ見てる姿とか想像できないんですけど。

「そうかい、まああいつもボキャブラリーが増えてよかったかね？」

そう言いながら俺は昔と同じ前羽の構えで相對する。

「ん？ それって防御の構えでしょ？ 僕と打ち合ってくれるんじゃないの？」

「残念ながら俺の本気は防御主体戦法なんでね、かかってこいや！
ってわけ」

「む〜、残念だけどそれなら遠慮なくやらせてもらおうよ」

接近しての右ストレート。しっかし俺もアホだわな、こいつの攻撃は遅いんだからこうやって見て最低限の動きと両手で軌道をずらせば……

「うわああああ」

相手はずしゅーっと滑るわけですよ。まあこればっかりだと相手がかわいそうなので別の捌き方もしますがね。

「くっ！ このおー！」

すぐに体制を立て直して突っ込んでくるのはすごいけど、突っ込むだけなのはね〜

「っ！」

相手の拳を上へと逸らし、自分は体制を低くする、んで肘を置いておけばこの通り簡単にひじ打ちが成功。けど感触的にあんまりダメージは入らなかったな。

「このおー！」

迫る膝蹴り、少し下がって空振りさせ、膝に跳び乗ってサマーソルト。やっぱり顎は聞くのか？ 少しふらついたみたいだな。

はあ、この淡々と作業するように人殴ったのいつ以来だ？

「はあ、そろそろ終わりにさせてもらいますわ」

「つれないな〜、せつかく楽しくなってきたのにもうやめちゃうの？ そんなのもったいないよ」

「知ったことか、こっちはテメエの相手なんかしてる暇なんて本当はないんだ……よ！」

首筋に鋭いケリを一発。

「くっ！ こねぐらいー！」

しまっ！ 掴まれた！

「うおおー！！」

脇腹にキツイの一発、だが障壁全力で張ったから肋骨が逝っただけだ！

「『ディアブルジャンプ ウネゾン 悪魔風脚 野獣肉シユート』！！」

「くっくっくっくっ」

けっこう鎧の方も削れてるはずなのにまだ感触が変だ、こうなったら！

「な！ いつの間に剣なんて出したの！」

「解説ありがとさん！ 『紫電一閃』！！」

ちっ、魔力こめすぎたせいで剣が砕けちまったか、だがそれぐらいしなきゃこいつは……！！

「がはあ！」

今だ！ ここで地面に叩きつける！

「『ディアブルジャンプ フランパーシュ 悪魔風脚 画竜点睛シヨツ』！！」

手ごたえありだああああああああああああ！！！！

〜三人称Side〜

「ひつさしぶりに結構魔力使ったな……やべ、ふらつ……」じぼお

ふらふらと立っているのもおぼつかないだけでなく、脇腹の一撃が聞いたのか吐血中のリアの後ろには、最後に腹にでかいのを食らったせいで口から血を吐きながら気絶しているエラスティスがいた。

「あゝ、ネギのとこ行きたいのに、こいつどうしよう?」

はあとため息をつくりア、しかし何かを感じたのか後ろを振り向きながらバックステップで距離をとる。するとそこには

「くふ…くふふ、くはははははははははは」

倒れていたはずのエラスティスが立ち上がっていた。たださっきの戦いのせいで服はボロボロ、体のいたるところから出血、さらに吐血とかなりB級ホラーな状態になっている。

「おいおいおい、まだ立ち上がるのかよ」

うんざりした口調だが、リアは内心冷や汗をかいていた。さっきまでとエラスティスの纏ってる空気が違うのだ。普通の空気からこ

う粘着質が増えどろどろした感じになっている。

「あはははは、久しぶりですよ。痛いって感じるのも血を流すのも！ ああ、やっぱりこの瞬間が“私”は生きてるって実感できま
す！ けどまだ足りません、もっとももっとも！ “私”と愛
し合ろしあいいましょう！」

「なんか、ヤバいスイッチ入れちまったな……」

第三ラウンド突入か？ と思った瞬間

「なに一人で勝手に楽しみタイムに入ってんだよ、ちったあ自重
しやがれ」

戦闘態勢に入ったときに張りなおしたであろうエラスティスの魔法障壁を突然乱入してきた人物が右手に持っていた得物で障壁を切り裂き、左手の得物で腹を殴り気絶させた。

「かふう！」

「な……っ！！！」

突然の乱入者にビククリしながらもとっさにリアはその場から飛びのいた。するとエラスティスを気絶させた人物とは異なる乱入者が巨大な剣と思われる塊をリアが先ほどいた場所に振り下ろし、地面をえぐっていた。

「ほう、今の攻撃を避けるとはさすがとだけ言っておこう」

突然の乱入者達によってリアは混乱していた隙を突かれ、巨大な

剣を持ったシルエットから女性であろう存在が懐から出した符を使われた。

「これは、転送魔法か！」

「はっ、近いうちにまた会おうじゃねえか。フラム・アーウェルンクス」

「次会う時を楽しみにしているぞ」

そして、はどこかへ瞬間移動していった。

「何だったんだ、あいつら……いづう！」

戦闘の間だけくっついていればいい程度の治療だったため左腕の骨にひびが入ったようだ。

「こりゃあ、救護班呼ぼうかね」

遠くを見ればすでに明かりが戻っている。停電が復旧しているという事はネギとエヴァの戦いは既に終わっているということである。

「帰るか……」

とぼとぼと帰りながら転送させた携帯で学園長に連絡を入れながらフラフラとリアは帰って行った。

・・・

ちなみにリアはそのあと腕を固定してもらいそのままで過ごした。魔力が少なかったから自動回復を使わず体力回復に専念するそうだ。ちなみにちなみに学園長への報告は明日でいいと本人に言われ現在寮長室にいるリア。

「明日は学園長への報告、超への修理依頼、んでエヴァさんのところに集合……やること山積みなんですけどお」

蝙蝠が持つてきてくれた招待状を見ながらぼやくしかないリアだった。

原作十三話 (終編) (後書き)

後書き 解説のないネタ技解説

『悪魔風脚 野獣肉シユート』

黒足さんの必殺技。空中で回転しつつ相手に連続でけりを入れる攻撃。とどめにかかと落としを決めるのだが今回はしていません。

『紫電一閃』

剣に炎をまとわせて相手を切りつける技。シンプルだが威力はかなりのもの。さすがおっぱい侍さん！

『悪魔風脚 画竜点睛シヨット』

黒足さんの必殺技。とどめの一撃で使われる模様。リアは相手を踏みつけるパターンでよく使う。

レールガン
電磁擲杖

言わずもがな、某学園都市の第三位を参照。当て漢字は別の作品より

えんじょうせう
『炎上網』

自分の目の前に炎の壁を作るわざ、本家火拳のお方は攻撃にも使っている。

『デイバイン・バスター』

リリカルな魔砲少女（最近は二十歳を超えた模様）のお得意収束魔法、ゴン太ビーム。彼女（管理局の白い悪魔）からしてみればこれはほんの軽いストレートの様な物。

どうも、やっとエヴァンジェリン編を書き終えることができ、ほっ
としていきます。ossannです。最後に出てきた二人は次回説明を
入れていきたいと思えます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9001p/>

魔法人形フォーマ！ ～ 4 番目の人形劇～

2011年9月27日01時58分発行